

○嵐吹く―あらずにかく。○如月―陰曆二月。○木の下露の玉川―木の下露の玉が落ちて流れる玉川。○玉川―弘法大師の風雅集に、「忘れてもくみやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水」の歌あり、此玉川の水、一の橋を渡りて奥の院に至る路の左方あり、俗に毒水なりと傳ふ。それ故毒の雫も降らばそれをのんで、身に疵をつけず死なるといつた。○なりけらし―なりけるらし。過去の助動詞と、推測のらしとのつまつたものにて、なつたことであらう意。

【譯】「一切萬象は幻であつて、死が定業の限りであるとは、如何に何といふべき娑婆であらう」お梅は即ち「此娑婆の世は何に譬ふべきであらうか、二人は逢ひそめて三歳を重ねながら、般若經にある如夢幻泡影の語の例にもれずまことに果敢ない契りをして、而も夫は野中にある一つ井戸の如く、只一人かけはなれて、共に間もなく死んでしまつて名ばかりは形見として後の世に残ることであらうが、これさへ久しからずして消えることであらう。私はお前の前髪の長い姿を來世でも見たり、またわしが此娘姿を直さない儘の額をお前に見せたりして、六道の辻のちまたは澤山あるが、お互に若衆姿娘姿を目印に、見はぐれぬやうにしようぞといふ中に、夕月ははやり果て、しまつて、夜も更け渡り、まだ二月ながら八重霞がたなびいて、身を隠れ忍ぶにはよいが、顔がよく見えぬ臘夜である。即ち顔は見えるやうに、隠れ忍ぶにはよいやうになどいふ二つとも善いことはないものである。云ひ傳の如く、嵐の吹く木の下露の毒の雫でも玉川に降るのであるならばその水を汲みて飲んで、身に疵をつけず死にたや」といつて二人が顔をすりよせて、こぼす涙は、互の口の中に傳はりこんで、末期の水となつたことであらう。

梅「双を急ぐ我命、末短夜の春の霜、美しやな朝まで、消へ残るか」と白栲に、里の夜業も時過て、干すも神谷の宿はづれ、生れ在所の名残さへ、親より殿を思ふぞや」久「我はそもじの親御の恩、戀と思ひに縛られて、情の羈絆縛の繩、不動坂にも差懸り、死出の山路を越ゆるかと、歌「心細しや卒塔婆谷、この塚はと引留問へば、爰は古の刈萱殿の、しるし繁りし春の草。クドキ問ふて語つて味氣なや。彼の

刈萱は弓取の、猛き心や梓弓、彌生の空の月の前、櫻が下の盃に、開いた花は散りもせて、花の苔に身を捨てし、無情の夜語身の上に、十九十八一盛り、今宵散り行く初櫻、兒が瀧」とぞ涙ぐむ。

【註】○双を急ぐ我命―我が命は死をいそぐ、末の短い夜であるに。○春の霜―春の霜はうらやましや、我が命より長らへて、朝までも消えないで残るのかと思ふて見ると。○白栲―白妙と書いてあるのは悪い。栲は栲のことで、紙のこと即ち紙に費す；紙の業にの意。○里の夜業も時過て―神谷宿で夜なべに紙すきをやる時間も過ぎて。○干すや神谷―紙を干してゐる神谷宿と、神谷は紙屋にかく、神谷は古くから紙を製造してゐる地である。○名残さへ―生れ在所を別れる時でさへ。○縛の繩―不動尊の持つてゐる繩を縛の繩といふ。情にしばられるといふことを、不動の繩、不動坂にかけていつたのだ。○心細しや卒塔婆谷―卒塔婆谷は刈萱堂附近にある墓地にて卒塔婆が澤山たつてゐるからいふ。不動坂にさしかゝつて、死出の山路を越えるのかと思ふて卒塔婆谷を通るのは心細いことである。有朋堂本に外は谷とあるはとんだ誤であらう。○この塚は―卒塔婆谷にて、この塚はどうしたのかと問ふと。有朋堂本に此語をこゝ夏川とあるも、これもいい頃に字をあてたに過ぎぬ誤だらう。○刈萱―崇徳帝の時、筑紫の守護職に、加藤左工門繁氏といふ武士がゐた。慈悲心深く文學も好んでゐたが、仁平三年の春、酒宴を開いた折、庭前の花の蕾が盃に散り込むを見るなり、老少不定、無常の理をさと、出家して高野に上つた。其後妻の千里と子石童丸がたづね來り、妻は途に死に石童丸は山に入りて父と覺ゆる僧に遇ひながら、父子名のらずして佛道に精進した。刈萱殿は堂のことである。○しるし繁りし―しるしは墓のこと、白樂天の春草生ふ云々といふ詩からとつたものだ。墓のあたりに茂つた春草の意。○クドキ―くどき歌、そゝり節ともいふ。その節で歌ふといふ歌ひ方のしるし。○問ふて語つて―さうときいては問ふて語られとも味氣ないことである。○弓取の猛き心や―刈萱は弓矢をとる勇猛心の男である。猛きといふから、梓弓と云ひ、彌生の春（張）といつた。梓弓は春の枕詞に用ひた。○花の蕾に身をすて―花の蕾が散つたに無常を感じて刈萱は身をすてた、その無常の夜の物語を、身の上にあてはめて。○十九十八―十九は久米之介、十八はお梅の年齢をさす。實際が中の巻の處から見ると、お梅は十七とあり久米之介は十一の時から八年寺にゐたといふと十八歳になるが、人生の花ともいふべき十九十八歳を一盛りとして、今宵初櫻が散る、若き二人が死ぬと漠然といつたもので語呂から勢で用ひたのだ。○兒が瀧―花折坂の下にあつて、昔兒が投身して此名ありと。初櫻は稚兒櫻ともいふ。その關係で語呂で出したまでだ。



【譯】お梅「我が命は今刃をいそいで死なんとして、末の短い夜であるが、その短い春の霜は、羨しや吾よりも後まで残つて、朝でも消えないでゐるのかと思はれ、紙をこしらへる里の夜業の時間もたつて、神谷の宿はづれに紙を干してゐる。それを見るに生れ故郷の名残に親を思ふべきだが、在所の名残にさへ親よりも殿御のお前を思ふぞや」久米「私はまたお前の親御の恩と戀の思ひとに縛られ、情の絆にほだされ、不動に縁ある縛の繩に結へられ、不動坂に差しかゝつて、今死出の山路を越えるのかと思ふと、心細いことである。卒塔婆谷にて、こゝの塚はどうしたのだと引留めて問ふて見ると、此處は昔の刈萱堂のあつたところで、そのしるしに春の草が繁つてゐるときいては問うて語られても味氣ないことである。彼の刈萱は、弓を取り心の猛き男で、或年彌生の春の空に月のある夜、櫻の下に宴を張つてゐる折しも、盃の中に、開いた花は散らないで、蕾の花が散つたので、即ち老少不の理をさとり、直ちに身をすてたといふ無常の夜の物語を、今吾等は身の上にあてはめて、十九十八の人生の花を一盛りとして、今宵初櫻稚兒櫻として散りゆく兒が瀧を思ふのである」といつて涙ぐむ。

梅「彼れへ越ゆれば天野口、去年母様と連立ちて、拜みし事の忘れられず。哀れ佛の御母も、女の罪の捻岩や、それさへあるに我身の科は、歌『五月雨よ、ほど戀慕はれて終にな、秋田のよ落し水』。山は眠りて物いはず、谷の流れよ聲立てて、人に語るな此姿、私が心を此方様に、隠す事として持たね共、頼む佛の御名問へば、我をば外の不動様、二親よりも捨難き、嘸や若木の花の兒、歎き恨みの數々も、二人が上に罰受くる、天竺山の山嵐、締た肌にしみぐぐと、サア悲しむ。いとしいふも今の間の冥途の苦患覺束な、此世からさへ嫌はれて、深く心を奥の院、渡らぬ先に渡られぬ、みめうの橋の危さも、後世のみせしめ蛇柳や、鬼が千疋責ふぞ、責られつ、さいなまるゝと離れまい、放すまいぞ」と取

かはす、袂は涙、手には數珠、頼めや頼め一筋に、一心頂禮萬徳圓滿、釋迦如來信心舍利、舍利々々佛に成とも、又は三途に迷ふ共、一ツ回向の水汲めや、手向の梅の花折坂、辿り超ればあか月の、五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ三重着にける。

【註】○天野口―高野山頂から、西の大門を下りて、天野神社にゆく道。○佛の御母―弘法大師の母。○女の罪の捻岩―大師の母が五障の罪により女人の登山を禁ぜられてるを怒り、此岩をねぢまげたと傳ふ。此は女の心の執念深きを云つたのだ。○それさへあるに……女としての五障の罪さへあるに、我科は戀の罪によつて重くされ。○五月雨よほど……松の落葉五にある歌、此歌は烈しく戀慕はれて、今はすてられた意。よ、な、よは皆拍子の詞。○山は眠りて……山は静だが谷は流れて音がする、谷よ二人のことを人に語るな。○我をば外の不動様―吾を外にしてゐるといふ意を、實際にその不動といふ不動堂があるにかけた。○二親より……は花の返の形容詞だ。花の返は親よりもお梅二人の情事をよく知つてゐるから、かく親より捨てがたいといつたのだ。○嘸や若木の花の兒―兄はお梅の兄、花の返をさす。捨がたい若木である兄の花の返は、嘸や嘆き恨み悲しんでゐることであらう。○天竺山―大師廟の西にある。恨の數々も二人の上に罪として現はれたか天竺山に山嵐が吹いてゐる。○締めた肌に……山嵐は、抱きしめた肌にしみぐぐとしみ渡つて悲しさを覺えしめる。ゑは拍子詞。○冥途の苦患覺束なし―苦患をどこまで受けるであらう、それが堪えられるだらうかと覺束なく感ずるのだ。○心を奥の院―心をおくにかく。思案にくれてゐる意。奥の院、承和二年三月二十一日大師此處に入定す。○渡らぬ先に渡られぬ―奥の院へ行かぬ先に渡ることは出来ぬ。罪障あるものは渡ることを許されぬ故いふ。○みめうの橋―他の本にある如く微妙でなく、御座、即御廟の方がよい。大師廟の正面にかけた小橋で、此橋三十七枚の板からなり、板は金剛界三十七尊に配す。故に罪あるものは渡ることを得ずと傳ふ。○蛇柳や―奥の院道の右、溪流の畔にありて、大師が化度して、蛇が柳になつたと傳へる。大師は遠方から見ると蛇の如く見えるので名づけたと。又、ある前妻と後妻が争ふて、髪が蛇となつたのも、此御處だと傳へられ、此髪が蛇となつた額は高野には二ヶ所もある。此れ皆女を執心邪惡なものとし、柳には重きをおかず、後世の見せしめに、蛇や鬼がせめよう、然しそれに責め苛まれても二人が手を放すまい意。○一心頂禮……禪宗の回向文中の句にて、頂禮は最敬禮の意、一心に敬禮して萬徳圓滿なる如來を信心する意。○釋迦如來……舍利は佛骨をさすが、此處では誓の詞、釋迦如來を信する意。○舍利々々佛になる―舍利とは、人間の脊推第二



骨にある櫓枝の如きものをいひ、此骨が佛の坐禪の姿に似てる故、尊重し、人間を焼けば、此骨を拾はんことをあせる。而も此骨極めて碎け易く容易に完全なるものを得がたし、佛の舍利はもと之をいつたのだが、それから佛骨をも舍利と稱し、舍利佛になるは骨になる意。○三途に迷ふ―地獄即ち火途、餓鬼即ち刀途、畜生、即ち血途の三惡道。○回向―讀經冥福を祈ること。○水汲めや手向の梅―汲めに久米とかけ梅と二人の名を入れた。○花折坂―不動坂口の女人堂の下にある。此處で花を折つて大師に手向けから起つた名。○あか月―曉と垢つきにかく。○五障の雲―月をかくす雲にたとへて、女には五つの障あり、梵天王、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身の五つになれぬとされてゐる。○女人堂―參詣した女人の投宿所にて高野登山の七口に何れも女人堂あり、不動坂口のは最も大きい。女人禁制の山ゆえ、參詣の女人は此から奥へ入ることをゆるされず。

【譯】 お梅、あれへ越えろと。天野口である。その天野神社へは去年母様と一所に參詣して拜んだことは今も覚えてゐる。あはれや大師の御母も、女の罪障の故に自由に高野に上ることが出来ず、憤つて捻ぢたといふ捨岩はあれよ。かうして女には、五障の罪があるのに我身の科は戀慕の罪まであり、而も五月雨ほど戀慕はれてゐながら、終には秋田の落し水の如く飽きられてしまふのだ。今し山は眠りて靜かであり、音するものは谷の流れだけであるが、谷の流よ、聲をたて、此姿を人に語るなよ。私しが心を良人のお前に偽りて、隠すことといつては何もないが、頼みかける佛の名を問うて見ると、我を外にするといふのかそとの不動様といふのぢや。またむしろ兩親よりも捨てがたい、若い兄の花の承は、すて、逃げた私達に對して歎き恨の數々を訴へることであらう、即ち二人が上に受ける罰といふのか、今天竺山に山嵐が吹く。その嵐は二人が相抱き合せた肌にしみ／＼としみ渡りて悲しみを覺えしめる。いとしくといふも今の間のことで、冥途の苦患もどれほどであらうか、思へばそれが堪へられるか覺束ない。此世にゐる中からさへ嫌はれて、深く思案にくれながら心をおいて心配し、奥の院に行かぬ中に、罪あるものゝ渡るを得ぬといふ御廟の橋も、罪ある我等は容易に渡ることの出来ぬ危さも思はれ、後世の見せしめにと、恐ろしい傳説のある蛇柳のあたりでは蛇や鬼が千疋も出て來て責めるであらうが、責められつ、さいなまれつしても、二人は互に離れまい放すまいぞ」といつて、互に取り交はす袂は涙にぬれ、手には數珠をとつて、頼めや頼めと一筋

に心をこめてたのみ、一心に最敬禮をして萬徳圓滿に具備せる釋迦如來を信心し、よしや舍利になりても又は不幸にして三途に迷ふことがあつても、同じ回向の水を汲み、手向の梅の花を折つて、花折坂をたどり越えろと、時は曉で、雲にうもるゝ月の如く、垢のついた障の雲にうもるゝ女人の宿るべき、女人堂にいたのであつた。

若い心の一向に、死んで來世で／＼と、思ふ心のがつくりと、サア著ました嬉しや」と、勇むは跡の歎きなり。堂の内には我より先、泊りし女中の眼をさまし、「申々」と呼かくる。「あい」といふのも怖氣立、身を抱合いて居たりしが、さつ「イヤお氣遣な者ではなし。私は播磨の飾磨にて、成田武右衛門娘さつと申す者、南谷の吉祥院に、久米之介と申す弟を尋ねて、今日の暮方、下人共を登ぼせ訪はせても、有共無しとも知れ難く、坂の麓神谷の宿を尋ねよといふ人も有。皆様土地のお衆か、若し御存じも有るまいか」と、他人に見做す姉弟、後世の關路も知られたり。弟は骨肉恩愛の、涙にくれて應へもなく、暫し躊躇ひ居たりしが、久「ム、久米之介とは聞たる人、昨日の晝より俄に大病引受て、今宵限りの命なりと申せしが、夜明けなば、生死の定説かくれ有まじ」と、涙をかくす聲付を、姉はそれ共猶知らず、「さればこそ思ひ當つたれ。此お山の萬年草は、人の命の生死を示し給ふと申故、餘りの事の訝しさ、守に入れし萬年草を、あの谷川の水に漬け、久米之介と心ざし、半時計り浸しても、次第に枯れて萎みしが、弟が命有るまいとの大師様の御告か。遙々と尋ね來て、昨日にも著くならば、せめて死目に逢ふもの。男の身ならば一山を駈廻つても逢ふもの、女と生れし惡業は、淺ましや悲しや



と、聲を上げてぞ泣きければ、

【註】〇一向にひたすらに。〇死んで來世で—未來で思ふまゝに暮さうと。〇がつくりがつかりして安心するをいふ。〇跡の歎—未來を思ふ時に心は勇むが、後で再び現實にかへるとそれは歎である。〇下人共きのほせ—女人の上ることを許されぬ故に下僕をして尋ねしめたのだ。〇他人に見なす姉弟—實の姉と弟の間柄なるを、他人と見てゐるをいふ。〇後世の闇路—側にゐる姉にさへ見られぬ位だから、佛にはなほと見られないで、従つて未來の間はいふまでもなからう。〇生死の定説—生きてゐるか死んでるか、はつきり分るだらうと、自分の心中の決心をほの見せてゐるのだ。〇萬年草—高野山の深谷、石上に生ずる苔の類で、長二寸許り、枝なくして梢に葉あり松の葉に似てる。旅にある人の安否を知らんとせば、葉を鹽水に入れ、葉開けば其人無事で、測れば凶と云ひ傳ふるを引用したのである。〇惡業—惡業によりて女と生れし故、それも出來ぬが悲しい意。

【譯】若い心のお梅久米之介は、ひたすらに、死んでから來世で思ひのまゝの楽しい生活をしようと、思ふ心にはやつて女人堂にいそいで、そこにつくなり安心してがつかりして、お梅は「さあつきました嬉しい」と勇みはするものゝ、靜にあとから考へて見るとそれは悲の歎きである。堂の中には、我より先に泊つてゐる女中がゐて、それが眼をさまして、申し／＼と叫ぶ。お梅は聲に應じて「あい」といふものゝ怖しくて、二人は身を抱き合つてゐたが女は「いや御心配のものではありませんね。私は播磨の飾磨のもので、成田武右衛門の娘さつと申します。南谷の吉祥院に久米之介といふ弟を尋ねて來て、今日の暮方下僕を上らせて訪ねさせか、さういふ者がゐるとも否とも分らず、坂の麓、紙屋の宿を尋ねて見よといふ人も有ります。皆様は土地のお方か、もしか御存じはありませぬか」といつて、姉が弟を他人に見なしてゐる。こんな風に健にゐる姉に見られぬやうでは、佛にはなほと見られず、したがつて來世の路は闇であるは明だ。弟は兄弟恩愛の涙に目がくらくなつて應へも出來ず、暫くためらつてゐたが、やがて久米之介は「久米之介とは、聞いたことのある人、昨日の晝から俄に大病を患つて今夜限りの命しかないときいてゐたが、兎に角夜があげたら、生か死か、はつきりしたことが明かになるであらう」と、涙を隠したやうな聲つきでいつてゐるのだが、姉の方ではそれとも氣がつかないで、「それでこそ思ひ當つた。此お山の萬年草は人が死んでるか生んでるかを示すものといふことなので、餘りに疑はしいことであるので、守り袋に入れた萬年草を

あの谷川の水につけ久米之介と申して、半時ばかり浸しておいたが、葉が開くどころか、次第に枯れて萎んでしまつた。あれは弟が命がないとの大師様のお告げであるのか、遙々と尋ねて來て、昨日着きでもしたら、せめて死に目に逢ふことが出來たであらうもの。男の身であらば、一山を馳けめぐつても逢はうものを、女と生れた惡因縁でそれも出來ぬ淺ましき悲しさ」といつて、聲をあげて泣いたので、

夫婦も共に伏沈み、お梅涙の隙よりも、「親御をもお誘ひか、但し姉様計りか」さつ／＼なふ其事よ。父様が去年の冬から煩ひで、此二月の朔日に、六十九にて御臨終、明るる二日に煙となし、今日七日の弔ひを兄弟一所に拜まんと、此お骨を持つて上りしに、弟も同じ骨となし、すゞ／＼歸つて母様に、何と申さん定めなの浮世や」と、又さめ／＼と泣きければ、久米之介は我親の、骨と聞くより氣も亂れ、お梅は一目も見ぬ舅、縁といはふか、因果といはふか、心に含み目に漏るゝ、涙を袖にせきかねて、わつと絶入る計なり。側に臥したる供の下女、「あれ申七ツの鐘が鳴ります。善か悪か、夜が明けたら知れませふ。ア、此方は草臥れて、何が善やらあく／＼びやら、ふら／＼眠る心なき。さつ／＼ア、それもそふ、御用あるも存ぜず、引留めて長物語、是も他生の御縁でこそ。若し久米が事お聞付なされなば、お知らせを頼みます。何れもに別るゝも、殊更名殘惜うて、久米之介が臨終の暇請をする様で、心細ふて悲しや」と、物が知らずる血の目縁、涙すゝむる計りにて、いはず知らせず別れしは、本意なくも三重又哀れなり。



【註】○心にふくみ一情にあふれて目に出て来る涙を袖で堰き止めることが出来ず。○七ツ午前四時。○あくびやらあくびのあくを悪にかく。そのあくまでが下女の言葉としたがよい。○他生の縁—前世の縁であらう。○物が知らずる血の由縁—蟲が知らずる血族の縁で、○涙すゝむる計りにて—蟲の知らせる縁で、更に涙を促すばかりで。すゝむるは促す意。

【譯】夫婦も共に泣き沈んで、涙の流れる隙に、お梅は「親御をも誘うておいでなされたか、但しは姉様ばかりでおいでなのか」姉は「なう、その事でごさんす、父様は去年の冬から患つて、此二月の朔日に六十九で死なれまして。翌くる二日に火葬にして、今日丁度七日の弔をして姉弟一緒に拜まう爲に、此遺骨をもつて登山したに、弟が死んだとあつてはそれも骨にして、すこゝと歸つて行かねばならぬのか、そんなことをして母様は何と申されよう、無常の浮世ではある」とさめくと泣くと、久米之介は自分の親の骨と聞くより氣も亂れ、どうしてよいか分らず。お梅はまた一目も見たことのない舅の骨だと思ふと、どうして今此處でそれに相逢ふのか、それをしも縁といふべきか、因果といふべきか、思へば心情に溢れて目に漏れ出で、来る涙を袖によりて堰き止めかねて、わつと聲をあげて、氣も絶え入るばかりに泣くのである。側に臥しゐた供の下女は「あれ申し、七ツ時の鐘が鳴ります。もうぢきに夜があげませう。夜があげたら善か悪か知れませう。あゝこちはくたびれて何が善やら悪やら」といつて、あくびをして、ふら／＼と睡る無情さ、無心さ。おさつは「あゝそれもさうぢや、御用のあるも知らないで、引とめて長物語をしました。これも前世の御縁でこそありませう。若し久米之介が事を聞かれたらば、お知らせを頼みます。皆さんに別れるのも、殊更に名残惜しくて、久米之介の臨終に暇乞をするやうな氣がして、心細くて悲しいことぢや」といひながら、虫が知らせる血の縁で、更に一層涙を促すばかりで、内實を言ひもせず互に別れたのは本意ないことでもありまたあはれであつた。

堂の小蔭に身を潜め、久「片時も婆婆に居る内は見ると聞くも皆罪障、夜明も近づく此上に、いか成る苦しみ恥をか見ん。いざ死なう」と囁けば、梅「早ふ死に度ふござんする。去ながら此方様は、餘所な

がらも姉御に逢ひ、親御の御骨の側にて、羨しい最期じやが、わしは父様母様の、悲しい中にも不孝者と、叱られふかと氣にかゝり、是が迷ひと成ります」と、又泣出せば、久「是々、宵に母御の下されし盃は爰にあり。手に觸れられし物といひ、志の籠つた形見は是ぞ」と取出す、梅「ア、有難い。背丈の伸びた私を、親の心で何時も童と思ふて、抱て寝て下さした其心で死にましょ」と、盃肌を手を合せ、刃を待つたる其顔、久「ヲ、奇麗なく、そなたは母の形見を持ち、我は父の骨の側、夫婦親子一蓮の、示しの時刻延されず、只今ぞ」と脇差抜き、胸に押當ておんあぼぎや、べいろしやのまかもだら、まにはんどまじんばらはらはりたや、呟と突込む切尖の、膽にあたれば反返り、はりたやうんとくり通す、阿呟の息も消へくと、反つゝ返しつ苦しむ聲、姉主従は驚きて、走り寄つて南無三寶「人殺し人殺しよ」と呼はれ共、山中夜中聞く人も、泣いて籠へ走りけり。久米之介身を隠し、立歸れば骨桶に、櫛を添へて残したり。押戴き三拜し、分て賜はる骨肉を、一ツに返す阿字本不生、阿字の一刀是なりと、咽にぐつと突立て、死骸の上に注の花、梅と枕を並べける。地水火風の風は山、水は谷水土は又、土砂の功德の眞言秘密、善男子善女人堂、心中斯くとぞ聞こへける。

【註】○悲しい中にも不孝者—父母が心では悲しみながら、口では不孝者といつて叱るだらうことが氣になる。○物といひ—手にふれられた物といふ上に、○その心で—肌近づけて寝てくれたと同じ氣持で、母の手にした盃を肌につけて。○夫婦親子一蓮の—皆一緒に一蓮の上に生れ更らう。○奇麗なく—奇麗さつぱりした心掛だ。○おんあぼぎや………阿暮伽、癡魯者那摩訶訖捺羅、



腰尺鉢頭縛人縛羅跋羅羅野。これは眞言の呪文だ。○阿の息―出入りの息、又阿は生の相、呬は死の相。○分けて賜る骨肉……親から分けてもらつた骨肉即ち自分の身を、もとの一つのものにすべく返す。死んでもとへもどす意。○阿字本不生―阿は有ゆる聲音の本源にして、又教法の本。即ち一切の諸法その本源は只空にして、空なるが故に畢竟事物は生ずることもなく、從つてまた滅することもないと説く。之を本來不生の理といふ。即ち不生不滅なる阿字の一刀、即ち覺りの一刀これぞと。○阿字の一刀―阿は字の根源、又一切教法の本とし、阿字の一刀とは、煩惱を絶ちさとりを開く一刀の意、此等は皆眞言の句。○阿字花―佛法の覺を開く意。法はお梅の死體の上に乗りとかく。○地水火風―之を昔は万象の四元素といつた。所謂四大にて、之に空を加へて五大ともいふ。○風は山―風は山に吹き。○水は谷水―水は谷水となりて流れて歸らず。○土砂の功德―光明眞言法にて加持せられた砂を死骸に撒げば、その功德によつて極樂に往生するといふ。土砂は護摩即ち火をたいて、その火の下にぬくもつた土砂は、眞言宗では極めて大切なものとされ、其功德は甚だ著しいもので、死んで剛ばつた骸も、之を振りかけると、ぐにや／＼になるとされてゐる。つまり土はまた眞言秘密の法によりて眞言の功德を現はす土砂となる。此四大に歸する女人堂の心中だと善男善女達が傳へた意。

【釋】 女人堂の小蔭に身をかくして、久米之介、「片時でも娑婆にゐる間は、見るもの聞くもの皆成佛の罪障である。もう夜明も近づく。此上に如何なる苦みを苦しみ、恥を見ようか、それよりもいざ早く死なうと叫く」とお梅は、「早く死に度う御座んする。けれどもあなたは、餘所ながらも姉御に逢はれ、親御の遺骨の側にて、羨ましい最期を遂げられるが、わたしは兩親に、心では悲みながら不孝者と叱られかかも知れぬことが氣になつて、これが成佛の迷となりませう」といつて又泣出すと、久米之介は「これ／＼宵に母御の下された盃はこゝにある。手に觸られたものであるといふ上に、母御の志のこもつた形見といへばこれぢや」といつて盃を取出す。お梅は「あゝ有り難い、背丈のびた私を、親の心では何時までも小供だと思ふて、抱いて寝て下されたその氣持で、此盃を肌に入れて死にませう」といつて懐に入れ、手を合せて、盃を待つてゐる其顔を見ると、久米之介は「おゝさつぱりした奇麗な心よ、お前は母の形見をもつてゐる。我は父の骨の側にゐる、これでは今死なば夫婦親子一連托生の喜が得られるであらう。その爲に示された時刻は只今である、延すことは出来ぬ」といつて脇差をぬいて、胸に押しあて

おんあほぎや……と眞言の呪文をとなへ、呬とつき込んで、刀の切尖が膽にあたると、女はそりかへるのを、又はりたや呬とゑぐり通す。出しつ入れつする息も消え／＼になつて、のりつ返へしつ苦しむ聲をきいて、姉主従は驚いて走りよつて、「南無三寶しまつた、人殺し／＼よ」と呼ぶが、山中のことではある、夜のことではある、聞く人もなくて彼等は麓の方へ走り下つた。その聲に暫く身を隠した久米之介は、やがて立歸つて見ると、骨桶に櫛を添へて残し置いてゐる。即ち押戴いて三拜し、「此骨から、もと／＼分けて下されたわが骨肉をもとの一つに返す不生不滅なる阿字の一刀、一切の煩惱をたつ覺りの一刀はこれだ」といつて、咽にぐつとつきたて お梅の死骸の上に乗つて、覺りを開いてお梅と枕を並べて死んだのであつた。地水火風の風は山に吹き、水は谷水となつて流れて歸らず、土はまた眞言秘密の功德を有する土砂となるのであるが、その四大に歸する女人堂の心中はかうであると善男善女が傳へた。



丹波與作待夜のこむろぶし



## 丹波與作待夜のこむろぶし

### 解題

これは例の有名な「滋野井子別れ」の原作で、外題年鑑では寶永六年六月廿四日を初日として演ぜられたものとされてゐるが、寶永五年の作とするが正しいといはれる。

丹波與作と關の小萬との實説は審かではないが、多分諸國盆踊歌として知られた「與作思へば照る日も曇る關の小萬が涙雨」や「與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀さし」などから思ひついて書いたものにちがひないといはれてゐる。

丹波のある城主、由留木家の女しらべ姫といふのは、十歳ばかりで關東のある高家、入間氏へ養女として興入することになつたが、さていよく出發といふ時になつて、關東へは行かぬといつてむつかり出す。お乳の人滋野井は、殊の外こまつてゐる折柄、行列に加つてゐる少年の馬子三吉が、道中双六を見せて姫の機嫌はなほることゝなる。お乳の人は三吉に褒美菓子を興へて、いろくくと物語る中に、三吉は其以前自分が、伊達與作との間に生んだ一子與之介なることを知りはするものゝ、明らさまに、自分が彼の母であることを名乗ることは出來ず、一旦悲しい別れを告げることゝなる。これが上の巻滋野井子別れの場であつて、焉馬の「先代萩」は此から思ひついたのであらうといはれてゐる。

與作は重なる失策によつて殺さるべき所を、殿の慈悲によつて由留木家を放逐され、零落して馬方となり下り、關の宿の由女、小萬に馴染をかさね、小萬の父親が租税滞納の罪によりて水牢に入れられ、を救ふべく、折柄姫の一行が關の宿にとまつた夜、少年三吉をそゝのかして姫の一行の金袋をぬすませたが、三吉はすぐに捕はれて殺され



ることゝなる。處が三吉が小萬にあづけた守袋によりて、與作は三吉が我子なることを知ると、慚愧悔恨の情交いたつて生くこと能はず、小萬を誘つて宿外れの千貫松に於て心中せんとする折しも、滋野井の努力によりて、三吉も助かり、與作も小萬も心中を思ひとまらされ、凡てがめでたし／＼に終る。終りの邊りは如何にも不自然な感のつきまとふものだが、其前半の技巧は可成り讚美の辭を吝むを許さぬものがある。

此作は近松の作中最も人口に膾炙したものゝ一つで、歌舞伎にても演ぜられ、或は單に「丹波與作」とも改題されたことあり、或は伊達染手綱と呼ばれなどし、或は他の作者によりて、滋野井子別れの場などは借用されたり、一中節、豊後節、室蘭節、長唄などにも、色々の題として作られてゐる。

丹波與作侍夜のこむろぶし

上の巻

大名に生るゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人、腹の中からうやまひて、持囃したる舌つゞみ、丹波の國の一城主、由留木殿のお湯殿子、しらべの姫はお國腹、金水引の初元結まだ十歳の柄襦もすらりとしたる生れ付。東の高家入間殿より御養子分の約束にて、蕾からとる花嫁子御迎ひの諸侍 五千石を頭に、騎馬が廿騎稚兒醫者は御輿つき、さて大上臈小上臈、おさし抱き乳母御乳の人、中臈下臈の供乗物、またもの駕はいろは付、以上四百八十挺金銀瑪瑙枝さごじゆ、研出し蒔繪の長柄の笠、長刀袋傘袋、時代の金欄、鶴ひし、たすき花うさぎ、窠に霰大内ざり、覆ひかけたる挾箱、濃紅の大紐を高々と結びしは盛の牡丹に異らず。臺所荷は次傳馬、おつゞら荷物は通し馬、三十駄の馬方の小歌がなつて小奇麗な、聲のよいのをすぐられしも金にあかせし吟味なり。

【註】○大名に生るゝ種の一粒—人の世に生るゝ人間の数は限りなきなかに、特に大名と生れる身は一粒種である。○何萬石ぞ幾萬人—それが受くる知行は何萬石ぞ、その領土の民は幾萬人ぞ。○舌鼓—甘いものを食つて舌打をするを舌鼓といふ。即ちも



て嘩すといつたのを舌鼓と受け、その鼓の音のたん／＼を丹波に引かけた。○由留木―鼓の調のゆるきといふやうな意から姓とつけた。○お湯殿―大名などの浴室給仕。女をいふ、それに生ませた子の意。○しらべ―鼓の縁で、女の子の名を調とした。○お國腹―殿が郷里在國中に出来た子の意。即ち丹波で生れた子。○金水引―金色の水引にて髪を結ぶのだ。○初元結―元來元服の時に髪を結ぶ紐のこと。紫の組紐が普通だったが、姫が江戸へ下るといふので、髪を金水引で結んだのだ。○十歳のうちかけ……十歳の内がかけるといふ意を柄襦にかけた。うちかけ姿がすなりとしてゐるといつて、容姿の氣高きを示したのである。

○お奥つき―奥はかつぐ棒から上に出た乗物で、姫がこれに乗り、醫は別に駕籠にてそれについてゐるのだ。○高家―江戸時代に、朝廷と武家とに對する事務を掌る家柄。○御養子分―幼少の故に與入といはず、養子分といつた。○上臈―こゝでは身分高き女のことをいつたので、更に高下によつて大小といつたのだ。○おさし―さし乳の略にて、乳をのませるだけの女、乳母。○抱き乳母―乳ものませ抱きかゝへもする女。○お乳の人―乳はのませずとも、養育にあたるものをいふ。○中臈―老女の次。上臈に對しいつたもの。下臈はその下につくものをさす。○供乗物―供人の乗物、つまり駕籠。○またもの―陪臣。即ち上中臈のまた召使ふ女の意。本來朝廷より諸侯の臣をさす語なれども、こゝは只家臣の意。○いろは付―混雜せぬ爲に、いろはのしるしがいつてゐるのだ。○枝さごじゆ―枝になつた珊瑚。これも金銀も皆土産物だ。○研出し蒔繪―金銀の粉をまき、その上に漆をぬつて下から色を現はしたるをいふ。これが傘の柄だ。○金欄饅頭……大内桐まで、皆袋のきれの模様の名にて、此等の立派な布片を蔽ひかけた挾箱に眞赤な大紐をかけたのだ。○挾箱―衣裳など入れる箱。柄にてかつぐ。○臺所荷は次傳馬―食器、寢具などの臺所道具は驛々にて交代する宿次の傳馬でくる。○通し馬―つゞらに入れた荷の衣服などは、大切な物故、馬をかへず、ずつと通して同じ馬で送る。○小歌がなつて―小歌をつくらせたのが出来て。

【譯】人の世に生るゝ人間の數は限りなきが中に、大名と生まるゝ身は全く一粒種であつて、それが受くる知行の高は何萬石ぞ。その領土の民幾万人が、其大名のまだ生れぬ先からうやまひてもてはやし、舌鼓をたん／＼と打つて大事にしてゐる丹波の國の一城生由留木殿の、浴室附の召使に生れた子の調姫といふは、お國の丹波で生れたもので、金水引の元結で初めて髪を結うて、まだ十歳のうちを少しかけた年ながら、柄襦を着てすなりとした生れ付である。それが今東の高家入間殿から、養子分として引受ける約束にて、蕾の花嫁子としてとるといふので、御迎

の諸侍は五千石を頭に、騎馬が二十騎従ひ、兒醫者は姫のお奥につき添ひ、大上臈、小上臈の女達おさし抱き乳母、御乳の人、中臈、下臈のお供の駕籠、上中臈の女達が召使ふものゝ駕籠はいろは附即ち順番附になつてゐて、全體で駕籠が四百八十挺あり、それに金銀瑪瑙や、枝珊瑚などの土産や、研出し蒔繪の長柄をつけた笠や、長刀袋や傘袋などもすばらしいもので、古い時代の金欄、鶴菱、たすき、花鬼、窠に霞、大内桐など色々の模様の布を覆ひかけた挾箱には、濃紅色の大紐を高々と結んで、宛然盛りの牡丹でも見るやうだ。臺所向の荷物は、宿場々々で傳馬で次き立てにし、つゞら入りの大切な荷物は通し馬で送り、それを送る三十駄の馬の爲め小歌が出来て、馬方には小奇麗な聲のいゝのを選ばれたのも、つまりは金にあかせた吟味からのことである。

刻限は巳の上刻との定にて、御迎ひの奥家老本田彌三左衛門、數獻の盃足元はよろ／＼と、猩々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり、きんか頭に顔色も、しゆちんの裁著りしげに、「何と／＼、御供廻りが揃つたら、お先手から乗出めされ。是さ文左源五左、身はおさへを乗申す。萬事夜前申渡す通りだ。若黨中間あらしこ小者に至るまで、大酒を致さぬ様に、馬次舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば曲事でおじやんべい。又とさ、とまりとまりの赤前垂にじやらくら致さない様に、第一お乗物の先で見苦しい。去ながらとさ、永の道中下々が退屈致すべし。若し濡などを企つるとも、目だぬ様に物蔭へよつて、ちよこ／＼ちよこ／＼濡れたがよくおんじやる。目出度い折からと申、殊に女中のお供だ。少々の事は見逃しにして置召されつちや。」

【註】○巳の上刻―晝の四つ時。今の午前十時頃。昔は今の二時間を一時といひ、之を三分して上中下とす。○足元はよろ／＼



と一語曲狸々に、「足元はよろ／＼と多ひに臥したる枕の夢」とあるからとる。○狸々緋……赤色の羅紗をいつたのだ。○きんか頭―光る頭。○顔色もしゆちん―顔色も朱の色で、しゆちんの袴とつゞく。○裁着―半袴にて、裾を紐にて膝にく／＼りつけ、下に脚絆をはく姿にて、伊賀袴ともいはる。○お手先―供の先頭。○又左源五左―文左衛門、源五左衛門の略、目下又は年少を呼ぶに用ふる略し方をしたるもの。○おさへ―しんがり。最後の總取締役。○あらしこ―いやしい人足。雑兵。○馬次―馬繼、道中にて馬をかへる所。○がうきがさつ―佛語、傲議。かうぎは無理我儘をはること。がさつは粗暴。○曲筆―罪になること。○おじやんべい―ありませう、あらう。○又とさ―とさは助辭。○とまり―泊、宿。○赤前垂―宿屋の飯盛女などをさす。赤き前垂をした。が一般の風だつた故。○しやらくら―しやはじやれる、くらはのらくらのくら即ち、じやら／＼てれ／＼すること。○乗物のお先で……姫の駕籠の前で。○去りながらとさ―このときも助辭。○濡れ―色戀、艶つばいことを廣くいつたのだ。赤前垂などに戀をしかけても、○おんじやる―おじやる。ござる。○女中のお供―女中はこゝでは姫君をさす。「室町千疊敷」の中にも義昭公の御臺を只女中といつてる。女の意に用ひたので、女の方のお供をしてゆくのだからの意。

【譯】 中發の時刻は巳の上刻即ち午前十時頃との定めにて、御迎ひの奥家老、本田彌三左工門は、敷獻の盃を傾けた爲に、足先はよろ／＼として、狸々緋の道中羽織をつけ、白い所といへば髪ばかりといふ風で、きんか頭はてか／＼と光り、酒に酔うた顔色も朱のやうになつて、それが緋の裁着袴姿り／＼しげにて、「どうぢや／＼御供廻りがそろつたら、先頭から乗出しなされ。これさ、文左工門、源五左工門、私は殿りを乗り申す。萬事は前夜申渡した通りだ。若黨中間人足小者に至るまで、大酒を飲まぬ様にせよ。馬繼場や、渡船場などにて、我儘粗暴を致したらば罪であるぞ。又泊り／＼の飯盛女どもにじやら／＼でれ／＼せぬやうに、そのやうなことがあつては、第一お乗物の先のことゆる見苦しい。さりながら、永の道中のこと故、下々のものが退屈するであらう。若し艶つばいことを女などに對して企てるやうなことがあつても、目だ／＼ぬやうに、蔭へかくれて、ちよこ／＼と濡れ事をしたがよいことであらう。何しろお目出度い折のことであると申し、殊にはお姫様のお供をするのぢや、少々事は見遁しにしておき召されや」

「あつ」と答へて幸領ども、「サア御立」と催す所に奥より女中聲々に、「ア、待たつしやれ／＼。氣の毒やお姫様、關東へ往く事は、いやぢや／＼とやんちやばかり御意なされ、お袋様も殿様もたらしつ叱つゝ遊ばせ共、どふでもいやぢやとおむつかり、お乳の人の滋野井殿色々と申されても、夫程江戸へ往きたくは乳母ばかり往きをれと、お乳の人の背中をとん／＼と打しやんして、御機嫌が損ねました」と云ふ所へ、眉泣きはがし姫君は、「江戸も東もこちやいやぢや、己は往かぬ」と泣く／＼走り出給へば、侍衆も下々も御門に駈出、家老の外男ぎれこそなかりけれ。

【註】 ○あつ―此言をいはたのは幸領外の侍で、それが幸領をうながすのだ。○幸領―人足頭。此等をうながすのだ。○催す―うながしたてる。○氣の毒や―こゝは氣持の毒になる、即ち煩悶し、こまる意。あゝこまつた。○やんちや―小供の我儘をいふをやんちやをいふといふ、殊に關西に多く用ふ。○お袋―人の母をお袋といふは室町時代からのこと「王勝間」にあり。小兒を懐に入れるからふところの轉化だといふ。こゝは生母のことをいふ。○たらしつ―だましつ。○おむつがり―子供に怒つて我を通すをいふ。○眉泣きはがし―つくつてあつた眉が涙ではげるのだ。○男ぎれ……侍も下々も皆座を立つて逃げ出し白髮頭の家老だけしかあなくなつたのだ。即ち男ぎれ、男のきればしもをらぬといふ。

【譯】 侍は即ち「あつ」と答へて、幸領どもを、「さあお立ちだ」といつて促がすところへ、奥から女中どもが聲々をたて「あゝ、皆待たつしやれ／＼、こまつたことぢや、お姫様が、關東へゆくことはいや／＼と仰せられ、お袋様も、殿様もだましつ叱りつなさるが、どうしてもいやぢやと御腹立ちなされ、お乳の人滋野井殿もいろ／＼と申されても、それほど江戸へ往きたいなら、乳母ばかり勝手に往きをれ、といつて、お乳の人の背中をとん／＼と打たしやつて、御機嫌がそこねました」といふ處へ、眉を泣きはがした姫君は、「江戸も東もおれはいやぢや、行かぬ」といつて、泣く／＼走り出られると、侍衆も下々のものも御門にかけ出して、後に残つたのは、家老丈けで、ほかには男のきればしもあなかつた。



お乳の人色を變へ、「是申し御姫様、下々の子供さへ九ツ十では物の聞分御座ります。あれ見さんせ、百里彼方の山川越て白髪かづいた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに參つて、江戸へ御座れば人間殿の惣領嫁御と、かしづかれるお身じやぞや。お乳の育ての難になれば、女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬ。サアよいお子じや、お輿に召せ」と、威してもそやしても、姫「いや〜、皆の欺しじや、何の東が好い所、腰元共が謠ふを聞きや。サアみんな此所へ出て、いつもの歌を謠へ〜」とせめ給へば、お伽小姓の頑是なし十二三なが手を揃へ、歌「山も見へざるかりそめに江戸三がいへ往んして、いつ戻らんす事じややら。殺して置いて往かんせの。放ちは遣じと泣きければ」滋「アおきや〜、お大名の宮仕へ、琴のくみでも謠はひで、誰に習ふてはでな歌姫様などに教やんな。必おいてもらはふ」とお乳の人の不機嫌さ。

【註】○かづいた〜かぶつたやうに見えるからいふ。○迎ひませに〜お迎ひ申しの意を敬語的に表白した。○お乳の育ての難〜お乳即ち私の育て方の悪いといふ批難を受けることになれば、女でも自分は腹を切らねばならぬと、自分の子なら怒りでもするところを、君の子故に自ら責を感じていつたのだ。○そやす〜おだてる、そよのかす。○小姓〜元來少年の事なるが、後には貴人に近侍する男女をいふ。○山も見へざる〜泣きければ「心中江戸三界」といふ、此頃流行の小唄、近松は「曾根崎心中」にも引いた。唄の文句は少し前後してゐる。：江戸三界へゆかんして、いつもどらんす事ぢややら、山も見えざるかりそめについなれなじみわしをさて、どうせ女房にやもちやさんすまい：やりや〜せんぞ手にかけて、殺しておいて行かんせな、はなちはやらじと泣きければ……。原文では、かりそめに「かりそめに馴れそめた」意なれど、此處、文だけでは、「かりそめに行つて」の意である。つまり作者が、此處で子供に適するやうに書直したのである。また三界はまどもとか、くんだりなどいふ意で、關西に

は今もよく用ふ。此頃松の落葉五巻に出てゐる。○琴の組〜組歌とて、味の異つた歌を幾つも續けたもの。

【譯】お乳の人滋野井はこの有様に色をかへて驚きて「これ申し、お姫様、下々の子供でさへ、九つや十位になると、物の聞分けがござります。あれを御らんなされませ。百里も遠方の山川を越えて、白髪の頭をした家老殿や、その他皆歴々、侍衆達がお迎へ申しにまゐつてをりまして、江戸へおいでになると、入間殿の惣領嫁としておかしづかれたさるお身でござりますぞ。それをいやぢやと仰せられ、それが、私の御養育の悪いが爲といふことになれば、よし女であつても、私は腹を切らねばなりません。さ、よいお子ぢや、お輿に召しませ」といつて、威しても、そよのかしても、姫は「いや〜皆が欺すのぢや、何の東がよい所であるものか、腰元達の謠ふの聞くがよい、さあ皆此處へ来て、いつもの歌を謠へ〜」と攻めると、お伽役の小姓達は頑是のないもので、十二三なが手をそろへて、「山も見えない江戸三界へ、かりそめに往かんして、いつ戻らんすことぢやら、どうしてもゆくとあらば、私しを殺しておいて行きやれ、放して行かせはせぬと泣けば」といつて江戸三界の小唄もじりを歌ふのである。お乳の人は即ち「あ、おけ、〜お大名の宮仕をする小姓の身分でありながら、琴の組歌でも謠ひもせんで、誰に習うて、こんな派手な歌を歌ふたり姫様に教へたりするのぢや、屹度そんなことはやめておくれ、といつて非常に不機嫌である。

本田も餘り詮方なく、「申お姫様、あれは人の口てんがう。花のお江戸は京優り、淺草上野の花盛、又堺町木挽町の、てんつく〜でこのばう、辨慶や金平が、ゑいやつととゑいななどと切合を見せませふ。道中の面白い事富士の山と申、天までとゞく山を御目にかけます。サアお輿に召しませい」と、力一ばい賺しても、姫「いや〜江戸へは往きはせぬ。どうでもいやぢや」と泣給へば、お乳も今はあぐみはて、どうしてよからふ御家老も、あきれてこそは居られけれ。



【註】 ○口でんがうー口いたづら、戯れごと。○塚町木挽町ーともに江戸の練芝居のあつた町。○てんつくー芝居の太鼓の音。○てこのぼうー人形、木偶の坊、即ち人形芝居をさす。○金平ー勇ましい金平淨瑠璃に描かれた、坂田金時の子で武者者。○どつてもーどうしても。○よからう御家老ーからうと家老を重ねた小さな技巧。作者も得意、讀者も感心するだるが、こんなことは眞實感に足らぬことだ。

○【譯】 お迎ひの本田家老もあんまり仕方のないので、「申し御姫様、あの歌などは、人の口いたづらでござります。花のお江戸は京都にまさりて、淺草や上野の花盛りといへば大變な見もので、又塚町や木挽町には、てんつくーと人形芝居をやつてをりますから、辨慶や金平などの勇ましい男が、ゑいやつととゑななど、掛聲で斬合をするのを見せませう。又道中の面白いことゝいへば、富士の山と申して、天まで届く山があります、これもおめにかけます、さお興に召されませ」といつて、力いつばいすかして見るが、武者や富士の山の話は子供の而も女の子にとつては何の興味ではない、姫は「いやー江戸へは往かぬ、どうしてもいやぢや」といつて泣くので、お乳の人も今はもてあまして、どうしてよからうやら、家老もあきれてゐた。

お仲居の若菜は旅立に、菅笠持て門外より走り入り、「なふお乳の人様、面白い事が御座ります。十計の剃下のちつぽけな馬方が、道中双六とやら、東海道の繪をひろげ、あぢな事して遊びます。御機嫌なほしにお目になさされませ」 滋「ヲ、くよふぞ氣がついた。夫は聞きおよふだ道中の繪を見せまし、お心も移るため馬子でも子供は大事な、お許しじやその丁稚に、持つて參れと呼んでおじや」 若「心得ました」と御門に出て、連立來たる馬方が、片肌ぬいでさばきがみ、御前近くも無遠慮に、縁先にあげ足して、「やれーあり様達は、あつたぼこしゆもない。朋輩共とかげどくに道

中双六打ちて、沓の錢程してこませふと思ふたに、人呼廻つてなんでやる。はれやれーきり、乗らつしやれ、馬やろい」とどつかふど成る。

【註】 ○お仲居ーお次の間勤めの女中。○剃下げー月代を大きく剃つて、鬢を狭く残した姿をいふ。糸鬢と同じだ。○ちつぽけな馬方ー小さい馬方。○圃およふだー圃及んだ。○丁稚ー小僧、徒兒達の略。丁稚はあて字。○呼ぶておじやー呼んで來れ○さばきがみーほどこ散らした髪。○あげ足ー一方の足を曲げて他方にのせること。○有り様達ーお前様達。○あつたぼこしゆもないーあつたはあたにて、嫌な心持の意として發する辭。ほこしゆもないは香ばしくない面白くない。○かけどくにー賭祿のなまり、賭博の利得。昔祿をかけて双六を争つた事をいふ。○してこませうーとらう。○何でやるー何である、何の用ぢや。○野郎ー當時の語では若者の意。○はれやれー馬方の語の語尾に用ふるもので、さて位より別に意味なし。○きりー乗らつしやれーちやんと速く、さ乗りやれ。○馬やろいー馬を進めよう。○つかふどなるーつきことなるにて、ぶつきらばうな、無あいそな意。

○【譯】 お次の間勤めの女中の若菜といふは、旅の装束に菅笠をもつて門の外からかけて入つて、「なうお乳の人様、面白いことがござります。十歳許りの剃下げの、小さい子供の馬方が、道中双六といつて東海道の繪をひろげ、面白いことをして遊んでをります。御機嫌直しに姫様にお目になさされませ」といふと滋野井は「およく氣がついた。それは、きいたことのある道中の繪をお見せ申し、お氣をかへる爲には、馬子だつて、子供なら差支はない、お許じやから、その小僧に双六をもつて參れといつて呼んで來やれ。」若菜「心得ました」といつて、御門に出て、連れて來ると、馬方は片肌ぬいで、ほどこ散らした髪で、御前近く進み、無遠慮に縁先であぐらをかいて、片足を片足にのせて「やれーお前様達は面白くもないことぢや。私は同輩どもと一緒に、賭博の利得に、道中双六をやつて、沓の錢程とつてやろと思ふたに、人を呼び廻つて、何の用がある。はれやれ、さつさと乗らしやれ、馬を進めよう」といつてぶつきらばうに云つた。

滋「扱々利口な野郎じやな。船頭馬方お乳の人、此方もそちらとおなじこと。して年は幾つ、名は何



と云ふぞ」馬「年は今年十一、五つの歳から馬追ふて一代若衆にならずに、はへぬきの念者じや。所で名はじねんじよの三吉」滋「扱もよい名じや。聞けば道中双六が有るげな、腰元衆もうつて見や、姫様も遊ばせ。サア三吉も此所へ来い、苦しうない」と呼びければ、三「あい」と云ふより慮外をも、かへりみじかき煙管の煙り立交りたる女中の側、そくはぬ様にも見へざるは、さすが童の一徳と、繪を取出し双六を皆打交り遊ばるゝ。

【註】○船頭馬方お乳の人―諺、いづれも人の悪いものといふ意。○こちもそちらと……おちの人のおちとこちそちと調子をふんだ。○一代若衆……男色の道の弟分を若衆。○はへぬきの念者―生れるとからの念者。男色道の兄分を念者といふ。蓋し昔は先づ前髪をたて、若衆鬚をいひ、その後元服して前髪をそつ一男となるのであるが、三吉は始から前髪をたてず、すぐと剃下げて、糸鬚頭となつたから一代若衆にならずといつた。彼は念者の意は充分知らず、同じ子供の中にて人の手下にならず、兄分と誇つていつたのだ。○じねんじよ―はへぬきといふことに縁をとりて自然生といつた。即ち山いもは自然にはへぬきのものであるから然生といふ意。○慮外をもかへりみじかき……無禮をもかへりみず、みじかき煙管の。○そくはぬ―釣合はぬ。

【譯】滋野井は「さてく、精巧な子供ぢやが船頭馬方お乳の人といふ諺の如く、こちらもそちらと同じく人の悪いものぢや、そして年は幾つぢや、名は何といふのか」ときくと、馬方は「年は今年十一歳で、五つの時から馬追ひとなり、始めから剃り下げで前髪をたてず、即ち一生若衆にはならず、生れるとからの念者ぢや、ところで名は自然生の三吉といひます」といふ。滋野井は、「さてく善い名ぢや。聞けば道中双六をもつてゐるさうな。腰元達も打つて見やれ、姫様も遊ばせ。苦しうないから、三吉も此處へ来い」と呼べば、三吉は「あい」といふなり無禮をもかへり見ず、短き煙管の煙の立まよつてゐる女中の傍へ行つたが、それでゐて女中にまさりて釣合はぬやうに見えぬのは、さすがに子供の徳であるといふべく、即ち繪を取り出して皆まぢつて遊びをやつた。

道中双六

これく御覽ぜうたしやんせ。是こそ五十三次を、居ながら歩むひざ、膝くりげ馬。はるしの道中双六南無諸佛分身、と書いた六字を六角の、毬は櫻木花の都をまん中に、思ひくゝのしるしを置いて、さらば此方から打出の濱、大津へ三里こゝで矢橋の舟賃が、出舟召せく旅人の、乗おくれじとどさ草津、お姫様より先姥が餅、一口二口みな口鱒、踊り子へ、坂へ越すのも骰子次第。骰子をふれく、ふるや鈴鹿を跡に下れば負まいと、せきに關より龜山に、煙草火うちの石薬師、おつと桑名の舟渡し、宮へ上れば池鯉鮒へ四里の、宿にころりは、歌岡崎女郎しゆく、岡崎女郎しゆと、もつれ寝よやれ藤川に、思ひくゝの君待受けて、解く前垂の赤坂や、吉田二川、歌白須賀ちよいと越えて、手はん御座るか振袖に、ヤ此この新居今ざれ、舟に召せく、蛤召せの蛤々、濱松まで舞坂三里ナ、馴染見附の泊りと聞けば、誰も惜まぬ島の財布の袋井や、のり掛川を飛ちりて、機嫌笑顔やサアにつ坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川。

【註】○五十三次―本文に数字で示したが、草津の次に(三)石部、(五)土山。(六)坂の下、(九)庄野。(十一)四日市、(十四)鳴海(十九)御油、(四一)原、これだけが此處に洩れてゐる。又大津附近の里程を國史辭典について見ると、京から大津三里、大津草津三里二十四丁、草津石部二里二十五丁、石部水口三里十二丁、水口土山二里二十五丁。土山より鈴鹿山へ上り、更に下りて坂の下へ二里半、坂の下關間が一里二十四丁、關龜山が一里半、少し飛んで桑名四日市が三里八丁。海上七里を加へ、宮即ち熱田へ九里、宮と鳴海が一里半、鳴海池鯉鮒が二里三十丁、池鯉鮒岡崎が三里三十丁。此等の宿驛の茶屋々々へ馬方は客を寄せたものだが、どこに泊るか各勝手て、色々あつたものだ。○はいしい道中双六一馬追の詞、はいしいどうんくに道中をかく。○南無



諸佛分身―此頃道中双六はまだ珍らしく、普通に行はれた双六は、浄土双六といつて、人間から、天人又は阿修羅又は三十六大地獄畜生道などを經めぐりて、極樂に往生するを上りとした。骰子といつても木を削りて六角の獨樂とし、それに一二三の數字の代りに、南無諸佛分身と書いてゐた。道中双六も浄土双六にならつて此六字を書いてゐたのだと見るのが普通の解釋であるが、さう見ると、普通の道中双六は、江戸を中心にして日本橋から出發し、京都につくのが順序であるから、此場合には逆に用ひたものと見ねばならぬことになるけれど、樋口氏によると骰子を見ても明に南無諸佛分身と書いてあつたとあるのだから、此處に道中双六といふのは、實際まだ浄土双六を用ひたのだ、浄土雙六は、極樂が眞中であつて、そこであがることになつてるといふのだ、私には此説が穩當のやうに思へる。○櫻木花の都―骰子は櫻でつくり、花の都の江戸が眞中にあるやうに出來てゐる。○思ひのしるし―銘々の目じるしをおくのだ。○打出の濱―大津にある地名。此所を骰子の振出しに用ひた意といふ説は、大津へ三里の語から見ても無理である。打出の濱は大津の中の地名と見てもよく、三里は京都からの里程にて、京から打出の濱即ち大津へ三里と解すべきだ。○矢橋の舟賃―矢橋は矢走とも書く。八景の一にて、草津の西一里。大津より湖上一里。此處で舟賃といふ語のあるのは、骰子の振り出し具合で、罰金でもとりしものと見ゆ。○出舟召せ―矢橋の舟賃が出る舟に召せといふ呼聲に應じて。○どぞ眞津―どぞと混雜して船に乗つて草津につき。○姥が餅―草津の名物。○みな口齧…齧は水口の名物。三口とく。齧はをどるもので、齧汁のことを齧子汁ともいふから、かくつゞけた。踊り子へと越へとかく。○坂へ越す―京からは、土山から鈴鹿山の坂を越して坂の下へ至るので、土山から鈴鹿山の頂上、「澤の山中」までは、峠とは名ばかりのだら／＼上りで、下りは上りとは反對に、十八曲りの險を下りて、上下合計二里半にして坂の下の宿に達するのである。○火うち石薬師―火打石と石薬師とをかける。只石といひたい爲に、煙草の火を打つといつた。○おつと桑名―おつと桑名の焼蛤の語にかけていふ。○宮―熱田のこと、陸二里海上七里で、桑名より熱田に達する。○四里―熱田より鳴海の宿を経て、四里十丁餘にて池鯉鮒に達する。池鯉鮒より岡崎へは三里三十丁。○ころり―骰子のころりところがるのと、女郎のねることにかく。○岡崎女郎衆―岡崎女郎衆―岡崎女郎衆はよい女郎衆―の唄に引かけた。○もつれ腰よ―藤川の藤にかけてもつれるといつた。○前垂の赤坂―前にもあつたやうに、赤前垂とは賣女のことをいつたので、赤坂に賣女があるから此語を出した。○手判―箱根の關及新居の關所を通る時には、其地の名主五人組の手判を貰つて、此通行券を見せるが掟になつてゐた。殊に新居にては吉田城より勤番を出して、女武具を改めた。○新居―新居と風の荒いのをかけ、此地にて殊に女武具を改め、手判をとつたといへ

ば、振袖の中に手判があるか、此荒い風には袖も切れると、今切に引かけたのだ。新居より舞坂へ海上一里。○今切れ―明應八年湖と海との堺が大地震にて切れた。即ち新居より舞坂までの間の海渡しの間を今切れといふ。○蛤召せ―今切れは蛤を名物とする故蛤めせといつた。○舞坂三里―舞坂から濱松間二里三十丁凡そ三里の距離あり。○馴染見附のとまり―濱松より四里七丁京より下る人、此處にて始めて富士を見るので見つけといふ。馴染を見つけてとまる意にかく。○日坂―につと笑ふ意にかく。蘇餅は葛にて作れるを、最初間違つて旅人が蘇餅と云ひ出した。○日本一の大井川―昔話の「桃太郎」に「腰なは何、日本一の黍團子」といふを、すぐに腰なは日本一の大井川といつたまで一種の惡じやれともいふべきもの。

【譯】これ／＼御覽なされ、道中双六を打ちなされ、これこそ五十三次を本當に歩むのでなくて、居ながらにして歩む膝くり毛、いや膝くり毛馬である。はいしどう／＼と馬に乗つて、道中双六の、南無諸佛分身の六字を書いた六角の骰子は、櫻の木でつくられ、それを今花の都を眞中にして、手ん手に思ひ／＼のしるしを置いて、さらば此方の京から振出して、三里で打出の濱の大津へ着き、此處で矢橋への舟賃を出して、出船召せ／＼と云はるゝにまかせて、乗りをくれまいと、どぞと乗つて、草津につけば、お姫様から先づ名物姥が餅を一口二口三口とめしあがり、水口名物の齧と同じく踊つてはねて、鈴鹿山の麓の坂の下へ通するのも骰子次第ぢや。さ、骰子をふれ／＼骰子をふつて、鈴鹿をあとにして下ると、負けまいとせいで、鈴鹿の關の宿から龜山へ行き、それから煙草の火を打つ石の石薬師から、桑名の船渡しを越えて、熱田へ上ると、やがて地鯉鮒へは四里の路を通つて、岡崎につき、そこで宿にころりと岡崎女郎衆ともつれて寝て、藤川にて思ひ／＼の遊女をまち受けて、赤坂で前垂をとかせ、吉田、二川、白須賀などいふ驛をちよいと越えて、新居では、殊には女武具を調べる新居の宿では、名主五人組の判のすわつた旅行券が振袖の中にあるかときかれ、や、この荒い荒い風では振袖が切れる、さ今切れぢや、舟に乗れ／＼、蛤召せ／＼と、海上一里を経て舞に着き、それから大凡三里の濱松へつき、やがて馴染を見つけ、富士山を見付の泊と聞くと、誰しも島の財布の空になるも惜まぬのであるが、それから袋井や、掛川などを飛下りて、機嫌よく笑顔よく、につと笑ふて日坂の蘇餅を食ひ、腰のは何ぞといはれたら、日本一の黍團子ではない日本一の大井川



と答へるのだ。

骰子に無の字を打出せば、水の出ばなの八十川の、(三)島田金谷に二日のよどみ、仕合よしの旅すご六里  
 七里八里もたゞ一足に、さきへくと咲きかゝりたる藤枝岡部瀬戸のそめ飯、うつの山邊のとうだん  
 ごと、所々の名物買ふて、おあしつくつく手鞠子に、ひいふうみいよ、ふちう江尻にすつとんく  
 とんと打たる興津なみ、松原はる、膏薬買ふて、月をすひ出せ清見寺、由井蒲原や吉原の、花の蒲焼  
 名物の、鰻のはだへぬまづの宿、三島こゆれば箱根へ三里、骰子目次第に關こゆる。悪い目うてば手  
 はんをとり、元の京へ立歸る。がつてんか、ヲ、のみこんだ。小田原ういらう大磯平塚藤澤の、さ  
 はりもなしに双六の、さいさきもよし門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川へ川崎  
 をこへ品川へ、まつ先駈のお姫様、一番勝に勝色の花のお江戸に著き給ふ。一のうらは双六の幸あ  
 り喜あり、慰み有りける道中と、どつと、興にぞ入り給ふ。

【註】○骰子に無の字―前述の如く骰子に南無諸佛分身と書いてあつて、その中の無の字の出た時の意。○水の出ばなの八十川  
 の―水が出たばかりの、澤山の川のある島田金谷では、八十川は澤山の川の意。○二日のよどみ―大井川に水が出ると、川止とな  
 つて、島田か金谷にて、上下の客が逗留するが如く、無の字を振出すと、二回ほど骰子をふることを休む意、よどみは即ち停滞  
 逗留の意。○仕合よしの…それかと思ふと、仕合のよい双六の旅では六七八里も一足にとんで、先へくと進み。○咲きか  
 りたる―藤枝の藤にかゝる句。○岡部―瀬戸の次にある五十三次の一。○瀬戸のそめ飯―瀬戸は藤枝と岡部の間にあり。そめ飯は  
 此地の名産にて、小判位な小さい薄い乾飯に、口なしをぬりて色をそめたもの。○宇津の山邊の十圍子―宇津の山の坂の上り口に

て賣つた圍子にて、赤小豆大の小圍子十個づゝを麻の緒につないだもの。○おあしつくつく―錢をつきて出しつゝ。○手鞠子―  
 つくつくといつたから手鞠をつくにかけ、手鞠と地名の鞠子を結んだ。○ひいふうみいよ―手鞠唄の口調からいつた。○府中江尻  
 に…すつとんく―とん、とんと打つたまで、皆手鞠唄、調子にて書いたのだ。○興津なみ…興津の波の打つ際の松原、即  
 ち三保の松原をさす。○松原はる…樋口氏の説によると、清見寺に藤の丸の吸出し膏薬といふがある。そこで、張る膏薬を  
 皆買ふと云ひ、病毒を吸ひ出せといふのと、松原が晴れて、月を吸ひ出せといふのとをかけたたのである。蓋し清見寺は江尻と三  
 保の松原との中間にありて、松原をのぞみ高きにありて月の名所なるが故にいつたのだ。○花の蒲焼―鰻は腹を開いて焼く、花  
 も開くもの故花の蒲焼といつた。○鰻の膚沼津の宿―鰻のはだぬめ、するにかく。吉原と原との間の新田や、吉原沼津な  
 ど此邊鰻、蒲焼を以て名高い。○箱根へ三里―沼津三島一里半、三島箱根三里二十八丁。○さい目次第に關越ゆる―骰の目次第  
 で、うまく箱根の關を越える。○悪い目うてば―骰子の目の打ち方悪いと。○手判をとり―歸る―下手をやると、即ち骰子の目  
 の出、たが悪くて、此處でとまると、こゝから又逆もどりして手判をとりて京へ立歸るのだ。○小田原外郎―北條氏綱の時、京  
 都に居つた支那人にて官名を外郎といふもの、透頂香と稱する薬を氏綱に獻じた。これは外郎餅にあらず、爾來今日に至るまで小  
 田原には賣つてゐる。○さいさき―門出のこと、二重にくり返したのだ。○とつかはと―あはていそぐ形容、戸塚とかく。○勝  
 色の花のお江戸―かつ色は褐色、かちん色、即ち藍色のこと、藍は餅のごとくつくからかちん色といつた。五色の櫻の中の藍色  
 の花あるお江戸といつた。○一の裏は双六―双六、骰子の目の六にかける。蓋し南無諸佛分身とかゝない骰子では、一の裏が六  
 にあたつてゐて、六は澤山飛ぶことが出来るので幸ありといひ、一番勝に着いたことの裏には、善いことがある意。

【譯】 骰子に無の字のある處を振り出すと、大井川に水が出て二日休むと同じやうに水の出たての澤山の川のあ  
 る、島田と金谷で二回の休みをして、仕合のよい双六旅になると、六七八里もたゞ一足にとんで、さきへくと進  
 み、さきかゝつた藤ではない藤枝岡部を経て、瀬戸では染飯を、宇津の山邊では十圍子をと、所々の名物を買つて  
 手鞠ではなくて、おあしをつきながら、一二三四と數へ、府中江尻にて、すつとんく―とんと、興津の波の打ちよ  
 せ、三保の松原から、程遠からぬ清見寺にて、吸出し膏薬を買ふて毒を吸ひ出させるが如くに、松原が晴れて、月  
 の名所の清見寺の爲に月を吸ひ出せ。花の蒲焼で知られた由井蒲原吉原を経て、名物の鰻の肌ぬめり―した沼



津の宿や、三鳥を越えんと、そこからは箱根へ二里あり、骰子の目の現はれ次第では、難なく箱根の關も越えるのであるが、さいの目の打ち方が悪いと、例の新居の關と同じに、關所で手判を要求されるので、それをとり今一度、元の京へ逆もどりをするのである。そのことを合點か、おののみこんだ。など、いつてゐる中に、小田原にもつけば、そこでは名物の薬ういらうを買ひ、大磯平塚・藤澤と、さはりもなく、双六のさいさきもよく門出もよくて、道を速めて、あはて、戸塚を経て、急いで程が谷、神奈川を越え、川崎品川を越えて、お姫様は眞魁に一番勝になつて、藍色の櫻の咲く花のお江戸におつきなざる。ところで一の裏の骰子の目には六があり、數多い幸がある。吉がある慰みある道中であると、どつと笑つて興がりましたまふ。

お傍の衆に囃されて、幼心の姫君、「斯う面白い東とは、今迄おれは知らなんだ。サアサア往ふは往ふ。」「ヤア御座らふとおつしやるか、そりや目出度いは〜。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ〜と立騒ぐ。お乳の人け勇をなし、「左様ならま一度大殿様、お袋様とお盃。是も馬子殿おかけじや、出來いた〜。其方には禮いふ褒美やる。其處に待ちやや」とざゝめき渡り、奥に御供し入にけり。馬方は遂に見ぬ金の間を、うそ〜と覗き見廻れど、筵の外踏もならはぬ備後表、三、エ、此座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の内がけて御座る」と、獨言して居たりけり。

【註】 ○金の間―金襴の間。○うそ〜―うす〜。ちよこ〜の意。○ぎやうに〜ひどく、佃山、大仰などの略。

【譯】 お傍の衆に囃したてられると、幼心の姫君は、「さう〜面白い東とは、私は今迄知らなんだ。さあ〜行かう〜」といふ。お傍の衆は「やあ行かうと仰有るか、それは目出度い〜。又お氣の變らぬ中は、早く行列をそろへるがよい」といつて立騒いでゐる。お乳の人は更に勇み立つて「そんなら今一度、大殿様や御生母とお盃をなされませ。これも皆馬子殿のお蔭ぢや、出來した〜。馬子そちには禮をいふ褒美をやる。そこにまつてゐやれ」といつて、がや〜といつて、姫をつれて奥に入つた。馬方は今までついぞ見たことのない金襴の間をちよこ〜と、のぞきながら見廻つたが、筵の外には踏んだこともない備後表のことであるので「ゑ、此座敷はひどく〜つて歩かれぬ。大名の家よりか、自分の家の方がけつかうぢや」と獨言をいつてゐた。

お乳の人は大高にお菓子さま〜ぶんかうに盛入れ、「どれ〜三吉其處にか。まあ〜其方はけな者じや。道中双六お目にかけ、夫故に姫君様お江戸へ御座ると御意なざる〜。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子難有ふいたゞきや。お錢三筋かいたい物買やや。殊に其方は通しじやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はふといや。見れば見る程よい子じやに、馬方させる親の身は、よく〜で有ふ」といと念比の詞の末、三吉つく〜聞すまし、「由留木殿の御内お乳の人の滋野井様とはお前か。そんなら己が母様」と抱きつけば、滋「ア、こは慮外な。おのれが母様とは、馬方の子は持たぬこと、もぎ放せばむしやぶり付き引のくれば縄り付き、

【註】 ○大高―備中松山の産大高檀紙。○ぶんかう―ぶんこ、文函にて、その蓋に大高をしいて、菓子をもつたのだ。○けな者―殊勝者。○錢三筋―錢三百文。ふなは一筋〜つないだのが百文故、筋で三百文になる。千文で金一分の勘定。○通し―通して江戸まで行く意。○道中すがら―道すがら。○慮外な―無禮な。○母様とは―母様とは何といふことぢや、私は馬子をするやうな子もたぬ。○むしやぶりつく―食ほりつづくの轉化。

【譯】 お乳の人はお菓子をいろ〜、文函の蓋に大高檀紙を敷いて、盛り上げ、「どれ〜三吉は其處にゐるか、ま



あゝそちは殊勝者ぢや、道中双六をお眼にかけたお蔭で姫君様は(江)江へゆかうと仰せられる。その上おかみにも御機嫌よく私も安堵した。これは御前よりのお菓子ぢや、ありがたく頂くがよい、おあしも三百文進ぜる、買ひたい物を買ふがよい。殊にそちは江戸まで通して行くさうな。道中にて用事もあらば、お乳の人滋野井に逢ひたいといやれ、見れば見るほどよい子であるに、馬方をさせる親の身はよくよくのことであらう」と、甚だ親切な言葉をかけた末に、つくづくと聞きすましてゐた三吉は、「由留木殿の御内で、お乳の人滋野井殿と呼ばれるのはお前様か、それでは私しの母様ぢや、」といつて抱きつくつと滋野井は「あゝこれは無禮な、おのが母様とは何の事ぢや。私は馬方をさせる子はおつてはぬぬ」といつてもぎはなすと、今度はやたらにつきまとうて来る、更に引のけると縋りつきていふ――

三「なんの無い事申ませふ。わしが親はお前の昔の連合、此御家中にて番頭伊達の與作、其子は私此方様の腹から出た、與之介はわしじやはいの。父様は殿様のお氣に違ふて、國をお出なされたは三ツの時である覺へ。杳掛の姥が話しには、母様も離別とやらで殿様に御奉公、此方を姥が養育し、父様に逢はせたふ思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋野井様と尋ねよと、念比に教へて、姥はおれが五ツの年、久しう痰を煩らふて、あげくに鳥羽の祭に往て、餅が咽につまつて、つゐ死んでのけました。在所の衆がやしなひて、漸馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。是守袋を見さしやんせ、何の嘘を申ませふ。お前の子に紛れはない。外に望みは何にもない、父様を尋ね出し、一日成共三人一所に居て下され。みごと杳も打ちます。此

草鞋も私が作つた。晝は馬を追ふて夜は杳打ち草鞋作り、父様母様養ひませふ。父様と一つに居て下され、拜みまする母様」と取付抱付泣居たり。

【註】 ○番頭―隊長。 ○おろ覺へ―うる覺え、らすおぼえ。 ○馬借―馬をかして暮すもの。 ○杳を打つ―馬の杳をつくる。此邊武士の子らしくも、また馬子らしくも、さまざまの言葉つきを用ひたところさすがに名文とさる。

【譯】 三吉は「何うして無い事を申しませう。わしが父親はお前の昔の連れ合ひで、此御家中で、番頭の伊達の與作といつた。その子は即ち私しで、お前の腹から出た與之介といふのはわたしであるはいのう。父様は殿様のお氣にたがうて、國から出なされたのは、私の三ツの時だつたので、うる覺えにしか覺えてをらぬ。杳掛の姥が話によると、母様も離別されたとかで、殿様に御奉公してをられる。お前を姥の私しが養育して、父様にあはせたいが、其甲斐もない。だから母様の細工の守袋を證據にして、由留木殿のお乳の人滋野井様といつて尋ねるがよい、といつて懇ろに教へてくれて、姥は私が五ツの年に、久しく痰の病氣をして、その果に鳥羽のお祭に行つて、咽に餅を引かけて、つゐ死んでしまひました。そのあとで郷里の人が私を養うてくれて、やつと馬を追ふことを習ひ、今では近江の石部の馬借をしてゐる處に奉公してゐます。此守袋を見て下され、どうして嘘などを申しませう。お前の子に紛れはない。外に何も望はないから、父様を尋ね出して、一日でも三人一つ所にゐて下され。私は馬の杳も上手につくりませう。此草鞋も私がつくつた。晝は馬追ひをし、夜は杳をつくつたり、草鞋をこしらへたりして、父様や母様を養ひませう。だからどうか父様と一つ所にゐて下され。母様拜んで御願ひします」といつて、取りついたり抱きついたりして泣いてゐた。

お乳ははつと氣も亂れ 見れば見る程我子の與之介、守袋も覺へ有り。飛付いて懷に抱き入れたく氣はせけ共、「アッア大事の御奉公、養ひ君のお名の疵。詐つて叱らふか。イヤ可愛げにさうも成るまい。



まあちよつと抱きたい。ア、どふせふ」と百千色の憂涙二つの眼にはたまちかね、咽び沈みて居たりしか。「いや／＼我子ながらも賢しい者、詐つて誠とせず。母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥しめて歸さん物」と涙のごふて氣をしづめ、「此所へ來い與之介」と、引寄せて兩手を取り、「扱も大きうなりやつたの。逆も成人せふならば、侍らしう何故じんじやうにも育たぬぞ。顔の道具手足迄、母は斯うは産付けぬ。美しい黒髪を、此やうに剃下げて、手足は山のこけ猿じや。ほんに氏より育ちぞ」と、又さめ／＼と泣けるが、

【註】○逆も一とてもゑらい人などのとてもの意で、強める意を有つ。○あゝあ大事の奉公一情に於ては直ぐにも抱きつきたければ、如何にせん、御奉公が大事であるから、名乗りあへば養ひ君即ち我が養育し奉る君即ち姫の名に疵がつくとてひかへるのである。○こけ猿一やせこけなどのこけにて、こけは慥の字にあたる。例、類がこけた○氏より育一筋目によらず育ち様にて、人の尊卑は見えるといふ諺から來たもので、育ちか悪いとそのやうにもなる意。

【譯】お乳の人は、はつとして氣も亂れ、見れば見るほど我子の與之介であり、守袋も覺えがあるので、あてもたつてもたまらず、飛びついて懐にだき入れたく、氣はせくが、又思ひ返して「あゝ大事の御奉公する身が、そのやうなことをしては、わが養ひ奉る姫君の名に疵がつく、嘘をついて叱つて歸さうか、いや、可愛さうに、さうも成るまい。それにしてもまあ一寸だいて見たいが、誰か見はすまいか、あゝどうせう」と思ひ患ふてゐると、色々の色合の悲の涙が、双眼にはさ／＼へ切れずこぼれて、咽びなきに沈んでゐたが、又思ひ返して「いや／＼我子ながらも賢しい者ぢや、嘘をついたとて誠とは信じまい。そんなことをして、心のきたない母親であると、侮蔑されるのもなさない。よく譯を話して合點させて、自分の身から恥しい氣を起させて歸さうもの」と考へて、涙を拭うて氣

をしづめ、「與之介此處へ來い」といつて、引寄せて兩手をとつて、「さても大きくなりをつたのう、それにしてもまあ立派に成人するならば、侍らしく何故普通には育たぬのぢや。顔の道具から手足まで、母はかうは産みつけはせぬ。美しい黒髪を、此のやうに剃り下げて、足はまるで山のやせこけ猿みたいぢや。かうなると、ほんに人は筋目にはよらず、尊卑は育ち様にて知られたものぢや、育の悪いのはあさましい」といつて、又さめ／＼と泣いたが――

「これ物をがてんしや。腹から産んだはうんだれ共、今では子でも母でもない。淺ましう成りさがつたを嫌ふて云ふてはさら／＼ない。この譯をよふ聞きやや。かゝはもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、たがひに若氣の戀風に、すれつもつれつ一夜が二夜と度重なり、通はせ女をお次に落し、小姓目附に拾はれ、武家の作法と云ふ内に、殊におは御は度きびしく、御家老衆の評定、父も母も御成敗と極りしを、御前様のお身にかへお命かけての御訴訟。殿様の御慈悲にて科を許され、其上に表だつて夫婦になされ、與作殿は段々に、奏者役番頭千三百石迄お取立、追腹程の御恩の家、其間にそなたを設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、かゝが乳を上げまし、首尾さへよければ、其方も今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。情なや父様が江戸詰の三谷通ひ、大事の所を仕損ない、又切腹に極つた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の啗離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其儘残さふため、父様の命助かり、奉公構ひの御改易。其時母も一



所に退けば、尤も夫婦の道はたつ。お姫様の乳離れ、お苦みをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれと、父様のことはりゆへ、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼ふても御勘氣の末氣遣ひな。與作が子とばし云やんなや。サア早ふ御門へ出や。ア、いかなる因果な生れ性、現在我子に馬追ひさせ、男の行衛も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿にのつたとて、是が何に成事」と、聲を忍びに泣く計。

【註】 ○淺ましく成さがつたーあされるほど下品になつた。○御前様ー奥様、大名の夫人を侍女より呼ぶ語。○奥小姓ー夫人づとめの小姓。○お次ーお次の間。○小姓日附ー小姓など若者の行儀を監督の役人。○御成敗ー死刑にすること。○御訴訟ー御歎願。○奏者役ー禮式作法の役。もと朝廷の奏聞役。○番頭ー警衛役のその頭。○追腹ー主が死んだ時は殉死をする身柄。與作は死刑にもなるべきを助けられた程の恩あるよりいふ。○御恩の家ーお恩を受けたわが家柄。○御内證のよしみー奥方に仕へて御氣に入りしことをいふ。奥方の好意。○三谷通ー吉原通のこと、山谷に吉原遊廓がある故いふ。○御病氣もー乳が變つたが爲に、乳兒が病氣になることあるをいふ。○奉公構の御改易一構といふは當時の罪名にて、追放の意。改易は士籍をのぞいて家祿を没收すること。即ち他家へも仕へることならずといつて家をつぶすのである。○父様のことはりー父様の理解。○男の子は……男は子供でも、勘當を受けた父親の子孫なる故、どんなことになるかも知れぬと氣づかひな。○子とばしー子とは。ばしははを強くきかせる爲に、しの曲辭を用ひたもの。○玉の輿……女は氏なくして玉の輿といふ諺から來て、立身出世しても意。

【譯】 滋野井はまた「これ私のいふことを合點しや。私しが本當に腹から生んだ眞の子なれど、今では母でもなければ子でもない。あきれるほどお前の身分が低くなつたのを嫌うていふのでは、決してくはない。此處のところをよく聞き分けるがよい。かゝはもと奥方様の奉公人であり、與作殿は奥方附きの小姓であつたが、互に若い時の戀風

にこそはれ、すれつもつれして、一夜が二夜と重りて、その中に二人の間に取りやりした御手紙をお次の間に落しそれを小姓目附の役に拾はれ、武家の作法では、かうした戀を許さぬ中にも、お家には殊の外御法度がきびしく、御家老の評定となり、父も母も共に討首にあふことにきまつたが、奥方様が、御身にかへ、命にかけての御歎願があり、殿様のお慈悲で罪を許され、まだその上に表だつての夫婦にまでせられ、與作殿は段々に立身して、奏者役や番頭まで進み、千三百石の祿にまでお取立を忝ふし、殿死去となれば殉死もせねばならぬといふ御恩の深い家となり、其の間にお前を生み、上には姫様が御誕生なされ、奥方様の好意にて、かゝが乳を姫様におあげ申し、萬事の都合さへよくば、お前も今は家老衆の子同然に幅がきいて、二番とは座敷も下らぬ地位にある人ぢや」ところが情なや、父様が江戸詰の當時に、吉原通の遊女狂ひをし、大事の處を仕損なうて、又切腹を申付けられるにきまつたのぢや。けれども腹を切らせたとすると、女房の私はお家にはお置きになることが出来ぬことになる、さうなつた時には、大事のお姫様が乳に離れられねばならぬ。そのやうなことがあつて、第一お姫様の御病氣でも出ては如何あらうとあつて、母の私をその儘に残し置かう爲に、父様の命を助られることになり、御奉公をとめられ、家祿没收除籍といふことになつたのぢや。その時母の私も一緒にお家から立退けば、それでも夫婦の道だけは立派に立つたのだ。けれどもお姫様の乳離れを引起し、お難儀をおかけ申すことゝなつては、身に餘つたお家の御恩を如何にして、誰か何時の世に報ひることが出来よう、お前あとに残つてお家へ御恩を報じてくれ、と父様の理解故に、第一は父様の爲、夫婦の義理を守るべき點を忠義と取りかへて、飽きもせぬ別れを二人はしたはいの。ところで男の子は幼くても御勘當を受けた父の子故、どんなことになるか分らず心配である。だから、與作が子であるとはいやるな。さあ早く御門へ出やれ、あゝ、どうした因果の生れであるか、現に自分の子に馬追をさせて、男の行衛も知らぬ身が、着物を着飾つて、お乳の人よお局よと呼ばれ、玉の輿にのつたやうに大切にされたとして、これが何になることか」といつて、聲をさけて忍び泣きをするばかりであつた。

子は生れ付賢くて聞分有る程猶泣入り、三「悲しい話を聞きました。去ながら常に姥が申たは、姫君様



と私とは乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢ふたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかしと、いへばちやつと口を押へ、滋「ア、く、勿體ない、その乳兄弟云はぬ事、姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いもひくいも姫御前は大事のもの。先は他人の世間てい。三吉と云ふ馬追が乳兄弟に有るなどどどふ妨にならふやら。蟻の穴から堤も崩れる。軽い様で重い事。ひそく云ふて人も聞く。先早ふ出てくれ」と泣くく云へば三吉、「ア、母様あんまり遠慮過ました。先云ふて見て下され」滋「まだ云ひ居るか聞分ない。夫の事我子の事、母に如才が有る物か。合點の悪い聞分ない」と制する内に奥よりも、「お乳の人はどこにぞ、御前から召します」と呼ばれば、滋「あれ聞さや、人が人來る。出てたも」と手を取て引出す。不便や三吉しくく涙、頬冠して目をかくし、杳見まつべて腰に付け、見すぼらしげな後影、滋「こりや、ま一度こちららむさや。山川で怪我しやんな。雨風雪ふり夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで煩はぬ様にしてたも。毒な物喰ずに腹や癩疹の用心しや、可愛のなりやいたくしや。千三百石の代收が何の罰ぞ咎ぞ」と、式臺の段ばこに身を投伏して歎さしが、懐中の有合壹歩十三服紗につゝみ、「是たしなみに持て居や」と、涙ながらに渡さるゝ。

【註】○乳兄弟—同じ乳をのんだ、而も血の續かぬ兄弟。○高いも低いも：嫁入時の若い女は身分の高下に係らず大切の意。姫御前は若い女に對する敬稱として、一般的に用びたもの。○先は他人の世間體：先方は全くの他人であり、他人としての世間體を思はばやならぬ。樋口氏説。○蟻の穴から：小さいことから大事が起る。○如才があるものか：こゝはぬかりがあるかの意。

○見まつべ—そこらにおいた馬の脊を見てまとめ。○いたくし—あはれつばい。○代收—嫡子。○式臺—玄關口に設けた板敷。そこが箱で出来てゐる、その上り段の箱をだんばこといつたのだ。○一步十三—一分を十三個。一分は金一兩の四分一。○たしなみ—用意。まさかの時に出すものゝ意。○渡さるゝ—馬子に對しての釣合から敬語的表白をしたのだ。

【譯】與之介は生れつき賢く、聞き分けのある子なる故、なほと泣き入つて、「悲しい話をききました。けれどもいつも姥が申したところによると、姫君様と私とは乳兄弟のことだから、母様にさへ出逢ふたら、父様も出世なさるさうぢや。お願なされて下され」といふと、滋野井は、ちやつと子供の口をとめて、「あゝ勿體ない、その乳兄弟といふことは云はぬことぢや。姫君様はこれから關東へ養女として嫁御にお下りなさるのぢや。凡そ姫御前といへば身分も高下に係らず大事なもので、先方は他人であり、他人としての世間體を思はばやならぬものを、今三吉といふ馬追が乳兄弟にあるなどいふことが分つては、縁組の上で、どんな妨げにならうやら。蟻の穴から堤も崩れるといふ諺もある。軽い事のやうでも實は重いことぢやから、黙つておくれ。ひそかに物いふても人も聞くことがある。先づ早く出ておくれ」と泣くくいへば、三吉は「あゝかゝ様、あまりに遠慮が過ぎました。先づ願つて見て下され」といふ。滋野井は「まだぐづぐづ云ひをるか、聞分ない、夫のことや我子のことについて、この母に何のぬかりがあるものか、合點の悪い、聞分けのない子ぢや」といつてひかへさせてゐる中に、奥からも、「お乳の人はどこにぢや、御前のお召しぢや」といつて呼ぶので、滋野井は、「あれお聞き、人が來る、出ておくれ」といつて手をとつて引出す。可哀想に三吉は、しくしくと涙を流しながらも、さすがに頬冠りして目をかくし、馬の脊など見まはしまとめて腰につけ、出てゆかうとする見すぼらしげな後影を見ると、滋野井は「これ今一度こちへ向きやれ、山や川で怪我をしやるな、雨風の時や雪降りの日や、夜道などは、腹がいたいといつて作り病をして、二日も三日も休んでするけるやうにしやれ、そして無理に働いて患はぬやうにしておくれ。毒になる物はたべず、腹をいためず、癩疹にもかゝらぬやうに用心しやれ、可愛い姿よ、いたましい、あはれほいことよ。世が世なら、千三百石取りの世嗣であるべきものが、何の罰で、何の咎で、このやうなあはれな姿になつたのぢや」といつて、式臺口の



段箱に身を投げかけて歎いたが、懷中に有り合せの一分金十三個を服紗についで「これを用心にもつてをりや」と泣いて泣く／＼渡したのであつた。

三吉見返り恨めしげに、「母でも子でもないならば、病ふと死ふといらぬあかまひ。其一步もいらぬ。馬方こそすれ伊達の與作が惣領じや。母様でもない人に金貫はふ管がない。エ、胴慾な母様覺へて居さつしやれ」と、わつと泣出す其有様。母は魂消入りて、「養ひ君お家の御恩思はずば、扱一人子を手放して、なんの遣ふぞ。奉公の身の淺ましや」と、悶へてがれて歎きける。時に奥口さゝめいて「早御立」と姫君の、御輿昇あげ行列立て、お乳の人の乗物をひら付にこそ昇寄せけれ。お乳はさあらぬ顔つきして、「姫君のお伽に最前の馬方を此乗物に引付、お慰みに謠はしや」「畏つた」と宰領ども「こりや、其處なじねんじよめ、謠ひ居らふ」とぎごつなく、「ヤア此奴はほへをるか、何じやこりや忌々し」と、握り拳を二ツ三ツ、いたゞきながら泣聲に、三「坂はてる／＼鈴鹿はくもる、土山あひの、あひの、土山雨がふる」ふる雨よりも親子の涙中にしぐる、三重雨やどり

【註】 ○おかまひ―おせつかい。○奥ロー家の奥に通ずる入口。○ひら付け―びたつけ。ぢかにびたりとつけること。○ぎごつなく―無愛想に、荒々しく。○坂はてる／＼―此歌松の落葉卷四にある。○あひの土山―土山は丁度甲賀山(大岡山ともいふ)と、鈴鹿山の間になつて見えるから、間の土山といふのだ。○中にしぐる、―涙の中にも空はしぐるる。

【譯】 三吉は呼び返されて、母を見かへり、恨めしげに「母でも子でもない、といふなら、私しが病氣になら

うと、死なうと、いらぬおせつかいぢや。今貰た一分もいらぬ。私は馬方こそすれ、伊達の與作が惣領息子ぢや。母親でもない他人に何で金など貰ふ管があるか。え、胴慾な、母様覺えてわやれ」といつて、わつと聲をあげて泣き出す有様を見ると、母は塊が消えて、「養育してゐる姫君と、お家の御恩とを思はなければ、さても一人子を手放して、どうして遣りなどするものか、思へば奉公の身のなさけないことや」と悶へてがれて泣いた。その時奥口の方が騒がしくなつて、「はや御立ち」といふ聲がして、姫の輿をかき上げ、行列をたて、お乳の人の乗物の輿をびたりとぢかにかきよせた。それを見るとお乳の人は何事もなかつたやうな顔附をして「姫君のお伽にさきほどの馬方を此お輿に引つけて、お慰に歌はせよ」といふ。宰領どもは即ち「畏りました。これそこにある自然生奴歌へく」と無愛想にいつて、「や、此奴は、泣いてるか、何ぢやこりや、忌々しい」といつて、握り拳を二ツ三ツ食はせると三吉はそれを貰ひながら泣聲で、「坂はてる／＼鈴鹿はくもる、間の土山雨がふる」といふ歌を歌ふ。その土山にふる雨よりも、親子の涙の中に空はしぐるるので雨やどりをする。

中之卷

留女「これ泊りじやないかゑ、泊りなら泊らんせ。泊らんせく、旅籠安ふてとめませふ。上旅籠中旅籠、お望み次第すき次第、椀家具も奇麗な、座敷 此夏表がへ、寢道具よふて、酒よふて、お茶は上々木賃で成りと。据風呂もしゃん／＼、かゝり湯取つてかげん見て、旅の汚れのあかつきは、七つ立か八つ立か、枕のお伽が御用ならば、振袖成とつめ成と足さすつて腰打つて、吸付煙草のさせるのがんくび、首筋からぞつと庄野の六藏でないか。よい女郎衆乗しやつて、足元がかかるいの」



【註】 ○これ泊りじやないか―宿屋の客引女即ち留め女の言葉にて、前段の、雨やどりを受けて、その縁で頭からかき出すたのである。○椀家具―食器全部の意。○木賃―薪の料金。昔は食物をもち来り、薪代を拂ひ、自炊してとまつたものだ。即ち極く安くてもこの意。○しやんく―ちやんと湯が沸いてゐる。○汚れのあかつき―汚れの垢のついたのは洗濯もしませう、曉は何時のお立ちか。○七つ立ち八つ立ち―八つは今の二時七時は四時。○枕の伽―一夜妻の意。○振袖―若い娘姿の女。○つめ―袖脇をつめた年増女。○吹付煙草―吹付煙草をやらす女の顔が、首筋からぞつとせうほどな意と、庄野をかく。がん首は顔の意に俗に用ひるから、きせるのがんくびと、煙草からもち出し、首といふから首筋もといつた。○ぞつと庄野の六藏―ぞつとせうほど優れたたのがあるといつて、ぞつとしよう野の六藏と馬子に呼かけるのである。馬子は宿屋と縁をもつて勢力があつたので機嫌をとるのである。庄野の六藏、草津の三介、石部金吉、丹波與作など皆生國や所の名で、以前雲助や馬子は呼ばれてゐたのだ。○女郎衆―これは一般の女をさしていふので、遊女の意ではない。

【譯】 客引の女はいふ「これお泊りぢやないかえ、泊りならとまらんせ。旅宿代が安くて、泊めますぞ、上中お望次第で、食器も凡て綺麗で、座敷は此夏表かへをし、寝具もよく、酒もよく、お茶は上々だ。安値の木賃でなりと泊りやんせ。据風呂もちやんと沸いてゐる。かゝり湯をとつて、湯加減を見てあげましょ。そして旅の汚れの垢のついたのを綺麗になされ。曉は七つ時のお立ちか八つ時のお立ちか。また枕のお伽をするものが御用とあらば振袖姿の若いなりと、袖をつめた年増女なりとお望通りにて、それが足をさすつて、腰をたゝいて、吸付煙草もやらうが、その顔は、首筋元からぞつとせうほどだらう。おつと庄野の六藏さんぢやないか、よい女衆を馬にのせて、足元が軽いだろの」といふ。

六「をいたたもア、しやら」留女「くさつ」の三介三藏、石部金吉泊りならとめてたも。なんぼ先へ行んしても旅籠屋は皆ひとつ、同じねを啼く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか、目元にしほがこぼれる。此所へ見へる坊様は、此暖なに紙子著て仙臺の坊様か。あの旅人は京の八幡の生れやら、足にござの

毛がむくくじや。向ひ通る菅笠様、足元腰元身のまはり、すつきり奇麗にはいた様なは、伯耆の國の人と見た。是々此所な若衆様、越後衆か明石か鬢がちつくりちぢんだ。あれへ大名一かしら、瓜ざね顔の旦那殿、東寺から出た人そふな。跡から御座る角まへ髪、吉野の衆かはなが見事。これへ見へた飛脚の足元のねばいは、三河者に極つたぞ、常陸の衆はおびで知る。是此所な奴殿、越中の國の人と見た。なんぞ見たれば此下紐を、といて一夜は泊らんせ。夕暮は急ぎの人も呼びとむる、色こそ道の關の地藏、白子屋の左次が内、小まん小女郎小よしとて百廿里の名取ども、人よぶかた手の袖の下、おごけの掛子そこゐには、戀に心をひねり芋の、麻棒みだいた胸の中、何とならそのうき身ぞや。

【註】 ○あゝしやら―しやらくさいと、くさ津とをかく。しやらくさいおきやがれ、と馬子が怒なつたのである。○三介―藏金吉―皆馬子である。石部は驛の一つ。○同じねをなく鬢―何處へ行つても宿賃は同じ値といふ意にねを音と値にかよはせ、鶯を引出したから春はござれと流行唄を引いたのだ。○春はござれの伊勢衆―春は伊勢參宮しやれといつて客を呼ぶ伊勢衆ではないかの意。春は伊勢參宮するものが多い故、今此處を通る客を見ていはせたのである。○目もとにしほ―しほは潮即ち愛嬌。「あ」の君さまは伊勢の濱にたち目元にしほがこぼるゝ」の唄からとる。藤井博士説。○紙子―仙臺の産物故にいふ。○ごんぼ―牛蒡は八幡の名産。○向ひ通る菅笠様―向ひ通るは清十郎ぢやないか笠がよう似た菅笠の歌からとる。○伯耆―帯にかく、それではいた様なとしやれていつた。○越後か明石か―越後縮と明石縮にかけたので、鬢がちぢんだといふ。○お大名一かしら―大名を敬へるには一かしら二かしらといふ。瓜も同様にかぞへたと。○東寺―京都の瓜の名産地、故に瓜ざね顔の人を東寺の人といつた。旦那も大名も、出た人も皆一人をさす。○角前髪―若衆の髪を結び振りにて額の隅を角にそつた。○はなが見事―勿論鼻を花にかく。○三河者―三河を膠にもちる、それ故ねばつたといつた。○常陸―帯の名産地。○越中の國の人―越中禪にちなみていつたのだ。○下紐―禪。○色こそ道の關の地藏―女色こそ人をとどめる關である。關の地藏は一休和尚開眼と傳へ、關の



地蔵は親よりましや、親も定めぬ妻をもつよの」といふ歌がある。それから女色が人を引とめる關といたつたにつれて、五十三次の一つにて、東海道と伊勢路への別れ道として殊に賑ふ所の鈴鹿の關を引出し、ついでに關の地蔵を出して來たのだ。○左次が内一先程から客をよばせてゐるのは、左次といふ男の宿屋なのだ。此の宿に小萬、小女郎、小よしの三人のとめ女があるのだ。此種の女を出女又はおじやれといつた。即ち遊女である。○百二十里一品川と京との間の里程。○片手の袖の下、右の手で人を呼び、左手の袖の下には麻桶をおいて内職をしてゐるのだ、そのつましい内職も戀故といふのだ。○おごけの掛子―おごけは芋を續んで入れる桶、掛子はその桶の中蓋。○そこぬには―底には。○ひねり芋―それは麻である、芋である。○麻棒―をがせはつむいでよりをかけた麻をまきつけるかせのことだが、時によるとかせから外した麻をもをがせといふ。麻を亂したやうな胸中の意。○何とならそ―何とならうぞにかく。奈良そは奈良麻、奈良も芋の名産地。そは麻にて、木層の層も麻衣を生産するから來た。

【譯】よい女客をのせて、元氣が出て足が軽いといはれると、庄野の六藏は怒つて「おいてくれ、しやらくさい」といふ。留女達はまた「草津の三介さんや三藏さん、又石部の金吉さん、泊り客なら泊めておくれ。なんぼ先の方へ行かしてやつても、旅籠屋は皆同じことで、同じ啼く音の鶯ではないが同じ泊り値段ぢや。鶯といへば、春はござれといつて客を呼ぶ伊勢衆ではないか、目元に愛嬌がこぼれてゐる。こゝへ見へる坊様は、此暖いに紙子を着てゐるところを見ると、仙臺の坊様だろか。あの旅人は、京の八幡の生れでもあるか、足に午勞の毛のやうな毛がむくく」とはへてるわ。向ひを通る菅笠を着た人は、足元から腰元から身のまはり、すつきりとして綺麗にはいた様なのは、伯耆の國の人と見たが。これ―この若衆様、これは越後の人か、明石の人か、鬢がちつくりちんである。あれへ大名が一人見える。あれは瓜ざね顔の旦那殿であるところから見ると、東寺から來た人らしい。跡からおいでの方前髪の方は吉野生れの衆か、はなが見事ぢや。これへ見えた飛脚の足元のねばつこいのは、三河者にきまつた。それから又堂陸の衆は帯で分る。これ、こゝな奴殿は越中の國の人と見た。何で見たかといふと、此下紐で見たのだ、どうか此下紐といつて一夜はお泊りなされや。夕暮には急ぎの人も呼びとめるものだが、まことに女色は人をとめる關所である。その人をとめる關所である鈴鹿の關の地蔵は、親よりもまして、親も定めぬ女房をもたせて呉れるといはれるが、此關の白子屋の左次の内の、小萬、小女郎、小よしといつて、百二十里の東海道に隠れなく名をとつた女ども、人を呼ぶ右手の反對の、片手の袖の下には芋桶をおきて内職しながら、中蓋の底には、戀に心をひねつて、芋がせを亂したやうな胸の中が、何とならうぞ、何とせうといふ憂い身である。

小萬「なふ小よし小女郎、かふした勤めさま―あれ共、君傾城と云ふ者は此るいで王さま。それから段々有る内に、をじゃれの身には何が成る。朝の夜から見世ざらし、晝休みから泊りまで、吉原雀のなく様に、息の有たけしやべつて、それも泊りどあることか。如何した事やら此頃は、一ぜん盛の客さへない。隣にはあの様に大名のお姫様、今日で三日の逗留、宵朝百六十人、どつばさつばと忙がしい。これの内はいかな事。下宿さへ泊りがない晩にはみんな覺悟しや。旦那殿のにが顔、日頃はへた角にまたが咲ふぞ。なふこはや。常にひいきな馬子衆も、こんな時に客ひいて呉れそな物ではないかいの。ヤそれについて小女郎、そなたのおてき松坂の七二は何として見へぬぞ。口舌でもしやつたか。梯子の下のごそ―が過ぎて氣色でも悪いか。餘りごそ―ごそついて、馬は追はひでおとがひで、蠅ちやろぞや」と云ひければ、

【註】○君傾城―遊君、傾城共に女郎遊女をさす。此語が重つて又省略されたものだ。○おしやれ―おいでやれの意、出女のこと。○朝の夜―未明の朝のことにて、夜二時三時頃の出立者から起されるからいふ。○泊りまで―客の泊りあるまで。○吉原雀―吉原雀、即よし切りとか行々子とかいふ、水邊でやかましくさへづる小鳥。○泊りど―泊り人、どはひとの略。○一ぜん盛の



客—安晝食をとる客。○宵朝百六十人—朝夕の泊り人。○どつばざつば—混雑喧騒の様子。○下宿—此頃の宿は今日と異り、どんな宿でも、きまつた價でなくて、とまる方が上等下等の宿代を希望して、木賃などでとまりを求めるものさへある。即ち下等の泊料でも泊り入でない時はの意。○日頃はえた角に股—日頃ある角にまたが出来る、杖が出来る。○おてき—相方、お敵即ち馴染客のこと。○七二—二つの數を合せると九になる、即ち九郎助のあだ名としたのだ。○燻子の下のごそ—ごそ—は密會。○おとがひて蠅おやる—腎虚した氣力のない様といふに用ふる語。おやるは追ひなされるだろ。

【譯】小萬「なう、小よしさん、小女郎さん、かうしな勤はいろ／＼あるが、遊女といふ者は、此類での一番の上位ぢや。それから下には段々ある中におじやれ即ち出女の身には何が成るのぢや。まだ／＼朝といつても暗い夜の中から見世ざらしになり、晝の休みの時から客の泊りのあるまで、葎原に鳴く、よし切の様に息のある丈けをしやべりつくして、それでも泊り人のあることかありはせぬ。如何したことか、此節は、一膳盛の安晝飯食ひの客さへない。隣にはあの大名のお泊が、今日で三日の逗留、朝晩百六十人の泊客で、ごた／＼騒々しくていそがしい。それなのにこの内はどうしたことぢや。下等の泊り代を出す泊り人でもない晚には、みんな覺悟するがよい。旦那の若い顔へ、日頃はへた角の枝がさくだろ。なう、こはいことぢや。いつもひいきな馬子衆も、こんな時に客を引いてくれそなものではないかいのう。や、それについて小女郎、そなたの相方の松坂の七二どんは何として見えぬのぢや。喧嘩でもしやつたか、それとも梯子の下の密會が過ぎて氣分でも悪いのか。餘りにごそ／＼とごそついて、馬は追ひもせんで、腎虚して氣力でもぬけたのぢやろ」といへば—

小女「ム、其七二とは九郎助のことか。それは未生以前で今は挨拶ざり／＼す、しいと云ふ馬追聲も聞かぬはいの、始はたんと可愛ふて、元結の脚絆の鬢付買ふの帯買ふの、沓の錢までつゞけた、其わしが目をぬいて、一人か二人かみな口の火なは屋のおげん、まだ土山のくし屋後家、庄野のふとのおよ

ねが、たはら腰にくひ付て、馴染のおれをすほんぬきに逢はせた。それも云ふたら止むにもせい、ほでてんごうの貧乏神、何もかもほつきあげ、今は布子と襦袢と、たつた二枚の四九をやつて、親方の駄賃の算用も立たぬげな。さけば小まんの知音の與作も博奕の友じゃげな。與作がいとしか異見しや。小よしも取沙汰さゝやらふ」と云へば、小よし小聲に成、「さればうちの旦那が龜山の問屋で聞いて来て、これの小まんが念比する馬方の與作めは、博奕打の大將じや。あれから盗みの下地じや。重ねて来たともあしらふな。餘程彼奴は懸も有、丸裸にして成共、懸を取つてそれからは、門詰も踏せまいと夫婦さゝやさうなづきて、寄合にいかんした」と語りもあへぬに。

【註】○未生以前—佛語で、生れぬ前の意、それをずつと前の意に用ひる。○挨拶ざり／＼す—挨拶は縁、關係の意、きりたの意にきり／＼すと出した。○馬追聲—きり／＼すの一種、馬追聲にかけ馬を追ふ聲といつた。○沓の錢まで續けた—馬の沓を買ふ錢まで出しつゞけてやつた。○みな口の火なは屋—みな口は水口にて、驛の一つ。又みな口は一人二人三とかく。火繩といふのは、煙草の火をつける繩の意にて、水口に煙管を名産とする縁で出した。○ふとのお米—ふとつたお米、庄野の名物焼米に縁をとつてお米といつた。握拳位の大きな俵に焼米を入れて軒毎に賣つた。○依腰—俵のやうな大きな腰。○すほんぬき—すほぬけ、出しぬくこと。すほんぬけることすつほぬかすといふ。○いふたら已むにもせい—意見をしてやつたら、止めるかも知れないが。○ほでてんごう—ほでは腕、てんごうはいたづら、腕のいたづら、即ちばくち。桶口氏説。ばくちの貧乏神がとりついて。○ほつきあげ—すつかり入れあげる。はたきあげること。○四九—藤井博士も水谷氏も、只博奕の名なるべしと云ひ、水谷氏は説明を與へてゐないが、桶口氏は之について、四九は十三になる。十五以下を負とする「うんすんかるた」のことであらう。このカルタは和蘭より來れるものにて、延寶四年前に用ひられてゐる。此以上まだ分らぬといつてゐられる。まけ賭博をやつての意とすべし。○親方の駄賃の—親方から馬をかりた賃錢の勘定も出來ぬ。○知音—仲よしの意。○問屋—宿つぎの人馬をつぎたてる家。



荷物はついたかなど、いつて問ふ所が、それがだん／＼に今日の如く變つた。○念比する一情交至つて親しく深密にするをいふ。  
○懸け一賣買の貸し金。○門詰もふませまい一門詰は門口、敷居もふませまい、出入もさせまい。○寄合一會合。

【譯】小女郎は答へて「む、その七二とは九郎助のことか。それはすつと昔のことで、今では關係もきれてしまつて、しい／＼といふ馬を追ふ聲もきゝはせぬはいのう。始のうちは非常に可愛くて、元結買ふの、脚絆を買ふの、鬘付買ふの、帯買ふのといつて、沓の錢まで出しつゞけてやつた、そのわしが目をぬいて、一人か二人か水口の火繩屋のおげんと、まだ、その上に、土山のくしやの後家、庄野の肥つちよのお米の依のやうにふとつた腰にも食ひついて、馴染のおれをすつぽぬかしの目に逢はせてしまつた。それも意見をしたら止めるかも知れぬが、賭博の貧乏神にとりつかれて、何もかもはたき上げて、今は布子と褌袴とたつた二枚をかけた負け賭博をやつて、親方から馬を借りた賃錢の勘定も出来ぬげな。聞けば小萬の仲よしの與作も博奕の友人ぢやさうな。與作が可愛くば意見するがよい。小よしも何か噂を聞きやるだらう」といふと、小よしは小聲になつて、「されば、うちの旦那が龜山の問屋で聞いて来て、此家の小萬が懇にしてゐる馬方の與作奴は、博奕打の大將ぢや。あれから盗の下地をやり出すのぢや。今度来てあしらふな。彼奴には餘程賃もある、素裸にしてなりと懸の金をとつて、敷居もまたがせまいといつて、夫婦さゝやきうなづき合つて、寄合に出てゆかんした」と語りも終らぬに――

小まんはら／＼涙にて、「勤めの身にもおじやれの身は、下の下といふはこゝのこと。傍輩衆へもいはなんだ、横田村の父様二石二斗の未進につまり、六十六で水牢。男にも娘にも、子としては此身計なり。しよざいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小まんが父親を、水牢では殺されず、參宮するとして隙もらひ、女子の身で代官所を秋納め迄請合ふて、牢を出しは出したれ共、何をあだてに何とせう。まへの様に客は勤めず、私仕事に賃芋うみ、女中とまりの袖の下、小まんといふ名でほつ／＼と、

鶴のあはれや淺ましや、請合の日は近付く、氣がいさまねば身もやせて、辛苦するものあの人、身をもくろめて遣りたいの念力一つで立る身が、世間でわるふ謠はれて、まめしげもなき浮世や」と、おごけ ひれふし歎きしが、「あれ／＼あそこへ謠ふて來る本小むろのひんぬきは、與作／＼と小手まねさ、歌扱も見事なソソレハおつゞら馬や。七つ蒲團にソソレハ曲録据へて」我もむかしは乗りし身を、人は夫とも白子屋の見世さきに馬引付け、與こりや小まん、此旦那殿馳走してとめましや。お供かけて三人ぢや。サア下さつしやれ」と荷物とく。小女郎小よし取々に「それお足の湯、先奥へ。合宿もござりませぬ、ひろ／＼と御休なされませ」と、奥にもなひ入にけり。

【註】○未進一年貢即ち田租を納めぬことをいふ。かうした百姓を水牢へ入れて、他への見せしめとすること此頃行はれた。  
○出女一驛々の私娼にて、おじやれや飯盛などいふと同じものである。○水牢一牢の中に水をたゝへて、その中に立たしめるをいふ。租税滞納者に對する刑であつた。○しよざい一所在、仕事の意。地位身分、職業のことにも用ふ。○秋納めまで請合つて一自分が保証して秋の納め時まで納めることにし。○あだて一あてどの轉目的。○客はつとめず一客にはつとめず、即ち與作になじみて後彼女はおじやれの勤はせぬのである。○私事一内職。○賃芋うみ一麻うみを賃仕事にして。○女中とまりの袖の下一心付、即ち女客のあつた時に、自分の知られてゐる名を賣物にして、憐みを乞つて祝儀心付を貰ふのである。○鶴のあはれや一鶴が粟をひらふ如くにほつ／＼との意からとる。あはれや粟にかく。○身をもくろめてやりたい一くるめるは、くらます、悪いことをかくす。○まめしげもなき一眞實氣もなき、たのもしげもなき。○ひれふす一平伏する。○本小室のひんぬき一純粹の本當の小室節の生粹。ひんぬきは拔群。元の唄は「小室出て見よ淺間の山は今朝も思の煙立つ」にて、信州小室が本だらうといはる。之を追分節ともいふ。○おつゞら馬や一「さても見事なおつゞら馬よ、上にやせん敷き、唐編の蒲團、蒲團はりして小姓を乗せて」此は松の落葉に出てをり、此歌も「曲録据へて」の歌も共に小室節。○七つ蒲團一馬で道中するに、馬上に蒲團七枚も布いたとい



ふ贅澤な風をいふ。○おつゞら馬―旅入用の衣類調度などを入れたつゞらを運ぶ馬。○曲家―臂をよりかゝるもの。○我も昔は…自分も以前は、かうした馬子ではなくて、馬に乗った身だが。○白子屋―人はそれともしらずにかく。○合宿―同宿人。

【譯】小萬ははら／＼涙を流し、「勤の身の中にも、おじやれの身は下の下であるといふのは此處のことぢや。朋輩衆へもいはなんだが、横田村の父様二石二斗の租税未納にこまり、六十五歳で水牢に入れられた、男の子も娘の子も子といへば私一人であるし、身分こそは出女であるとはいへ、お大名にまで名を知られた關の小萬が、父親を水牢の中で殺すわけにはゆかず、伊勢參宮するといつて暇をもらつて、女の身で代官所へ行つて、秋納までには屹度始末するからといつて請合つて、父親を牢から出しはしたが、何を目的に何うしよう。以前のやうにおじやれの身でないから、客をとつてはをらず、内職に賃仕事をして芋をうみ、女客のとまりがあつた時など、心付をもらつて、それも小萬といふ、知られた名でぼつ／＼と鶴が粟を拾ふ如くかせいでも、かせいでもあはれ浅ましくも抄らず、請合の日はもう近づいて来る、氣が勇まぬと身もやせて、苦勞はするが、これもあの人の身の悪い所をかくしてやりたい念力一つで立てゝるを、世間から悪く誹ひそやされるなんて、何といふ頼母しくもない浮世であらう。」といつて、芋桶に平たく伏せて歎いたが、また顔をあげて「あれ／＼あそこへ諺つて来る純小室節の生粹な歌は、あれは與作ぢや／＼」と手招きをする。「さても見事なおつゞらをつんだ馬や、七枚もの蒲團に曲录据えて」といふ歌がきこゑて、やがて與作も昔は千三百石をほんで、馬に乗つた身であるのを、人はそれとも知らぬをたのみに、白子屋の見世先に馬を引つけて「こりや、小萬、此且那馳走しておとめ申しやれ、お供の方と共に三人連ぢや、さあ下りさつしやれ」といつて荷物をとく。小女郎と小よしとはそれ／＼に「それお足洗の湯、先づ奥へおいでなされませ。同宿人もござりませぬ。ひろ／＼と室をとりてお休みなされませ」といつて奥につれて入つた。

與作は荷物も跡付もそこ／＼に投おろし、「小まん此中途はなんだ無事で嬉しい、やがて逢はふ」と、馬の口取り駈出す、手綱に絶つて、萬「これなんだ。語る事がたんとある、此方も云ふ事有筈ぢや。

そは／＼せずと待んせ」と引戻せば、與「エ、じやまな、其話はいつでもなる。急な事じや遣つてくれ」と、振りされば抱とめて、萬「是どふぞいの、何がそれ程忙がしい。どふで心に一物有る、譯を聞かねば遣りはせぬ」と、見世にとんと抱きすへられ、

【註】○後付―この頃、武士が旅するには、刀箱を馬の尻につけたものだ、それを後付とも又後荷といつた。跡は後で近松西鶴皆此字を用ひた。○此中―此節 ○これ何ぞ―これどうしたことぢや。○そは／＼せず―落つかぬ形容をそは／＼するといふ。

【譯】與作は荷物も刀箱もそこ／＼に、投げるやうに下ろし、「小萬此頃逢はなんだが無事で嬉しい、やがて又逢はうといつて、馬の口をとつて駈出さうとする、小萬は即ち手綱にすがつて、「これ、どうしたことぢや話すことが澤山ある。お前にもいふ事が澤山ある筈ぢや。そは／＼せずと、少し落ついて待たつしやれ」といつて引戻すと與作は「え、邪魔な、其話ならいつでもなる。急な事ぢやからやつてくれ」と振切るのを抱きとめて、小萬はいふ、「これはどうしたことぢやいの、何がそれ程忙がしいのぢや。どうせ心に一物があるのである。有るならいふて見やれ、譯をきかぬ中はやりはせぬ」といつて與作を抱いて、見世に据へた――

與「ハテ荷物さへおろしたに。一もつが有るものか。氣道ひそふなに短ふ話して聞かせふ。此不仕合を聞いてたも。傍輩共がけんねじつて錢儲する美ましさ、勢多の久三がどうの時、百切はつて見たれば、勝程に／＼いきに七百。こりや門出が面白いと腰にひつ付、しやんぐ／＼と鈴鹿で皆ついて居る。こゝへもちよつと出かけて、又六百してやつた。是でおけばよい物を、慾には見へぬ目川村の、馬



子共よせて我らがどうを取つたの。當らぬか、晝さがりから七つ迄、一文と六文の錢のかほを見ぬ程に、前の勝をぶちこんで五百余りのしすごし。どつこいどこぞで此損を梅の木のぜさいの辻で、身を粉にはたいてやつて見た。和中散でもきくにこそ、金になをいて一步二朱の借錢おほて、肩の重たい石部の八藏に請合てもらふた。是をいくさの始として、大津八町で八百まける。小野の宿の小町塚で九十九文してやらるゝ。すりはり峠の氣が細ふては勝たれぬと、へそ村の上で分別しかへ、守山の觀音堂で卅三匁が質をいて、心は鬼神と出たれども、土山の田村堂で、つい平げてのけらるゝ。

【註】 ○荷物さへ：荷物は一もつに對して、二もつにかく。○氣遣そうなに：心配さうだから。○けんねじついで：錢を手中に握り、其數を云ひあて、勝負をする博奕をいふのだが、拳をねぢつて、つき出すから此名ありとは樋口氏説。一説に「けんねんじかるた」のことだとは高野博士説。○どうの時：博奕にどう親といふ語がある。即ち博奕の筒をとつて催主となるをどうをとるといふ。○百切はる：百文文け、百文限りかけて見る。但錢千文が一貫文にて、四分の一兩にあたる。○いききに七百七百文儲けた。○しやんぐくと鈴鹿：腰につけた鈴を、しやんぐとならして鈴鹿へゆくと。○ついてある：鈴鹿へ来て見ると、又皆がやつてる。けんねじをついてるのだ。○六百してやつた：六百文もつけた、勝つた。○目川村：怨には目が見えぬの諺をよりて、怨には見えぬ目といった。此村に菜飯田樂の名物あり、草津驛の東方。○胸をとる：親をやる。○當らぬか、當らぬことか、こまりはてた意。○午下りから七つまで：午過ぎから四時まで。○一文と六文の錢の顔：上に七つまでといったから、此七を二分して、賽の目の一と其裏の六とにかけたのだ。即ち此處は思ふやうにならぬ意、樋口氏説。○しすごし：缺損○梅の木：ぜさいの辻。梅は損をうめるにかく。梅の木といふのは六地藏村のことをさし、此地に和中散といふ賣藥を賣る家三軒あり、其中の定齋の家が本家にて、元和の頃、梅の木あり、其木蔭にて和中散をつくり、旅人に賣つたと。始めぜさいと讀み後にはじよさいといふと。○和中散でもきくにこそ：例の反語的表白で、和中散を賣つてる家の路傍でやつて見たが藥のきゝめ

があらばこそありはせぬ。○肩の重たい：金持の意。重といふから石部といった。○請合ふ：請人になる、保証人になる。○小野の宿：今日の鳥居本村に屬するもので、小町塚といつて、小野の小町に引かけ、九十九文やられたといふのは、例の深草少將が小野小町をしたふて九十九夜通つたことにかける。○すりはり峠：摺針峠にて、針のやうな細いといふことを、氣が細くてはとかく。○へそ村：総村にて隣にかく。此村は守山驛と草津の間にあり。へその上で、腹の中で考へての意。○三十三匁：觀音は衆生濟度の爲に三十三の化身となつて姿を現はしたといひ、その數にかたとりて、三十三所の札所をおく習があるが、三十三匁は此數に縁をとつた。銀六十匁が一兩の割、謠曲「田村の故事」とつたものだ。○心は鬼神：田村磨は鈴鹿山にて鬼神を退治して名がある。○田村堂：鈴鹿山峠の茶屋の左方にあり、坂上田村磨をまつる。

【譯】 與作は抱きすゑられて語り出した「はてに物さへ下ろしたに、一物などがあるものか、心配らしいから短く話して聞せうが、此不仕合をきいておくれ。朋輩どもが、拳ねじをついて錢儲するが羨ましくて、勢多の久三がどう親の時百文限り賭けて見ると、勝つたは、かうして勝つほどに、一息に七百文勝つた。これは門出が面白いと腰につけて、しやんぐと鈴をならして鈴鹿へ来て見ると、こゝでも皆けんねじをやつてゐる。此處へも一寸出かけて行つて、又六百文勝つてやつた。これでおけばよいものを、怨には目が見えぬもので、目川村の男子どもを寄せ集めて、自分が胴をとり親を取つたわい。ところが當らぬこと、こまりはて、午下りから四時頃まで思ふやうにゆかず、殆んど錢の顔を見ぬので、前の勝をぶち込んで五百文餘りの缺損さ。どつこいこの損をどこまでも埋めてやれと、梅の木のある六地藏の藥種屋是齋の家の路傍で、藥をこしらへるのではないが、身を粉にして打かけてやつて見た。ところが是齋の家の製藥和中散でもどうして、きくどころか、金に直して一分二朱の貸金を背負ひこんで、仕方なく金持の石部の八藏に保證人になつてもらつた。之を戦さの手始めとして、大津八町で八百まける。小野の宿の小町塚で、深草少將ではないが九十九文まかされた。これは針のやうに氣が小さくては勝てぬとへ、その上で分別をしかへて、守山の觀音で觀音の化身の數ほど卅三匁の質をおいて、心は鬼神の如く勇猛で出たが上山の田村堂で、鬼神を退じた田村磨とは反對に平けて退けられてしまつた。



伊勢へ通しにいつた時、宵からあかつきの明星が茶屋で、飲み干す様な大ぐさり。借錢の利を一月に二月おどる松坂こへて、雲津の渡して算用したれば、貳貫づゝ四つ合せて、二四が八藏めに八貫のしやく錢、是はならぬと思ふ所へ、向ふから馬追ふてうせをる。じたい八めはぶら／＼なり、己が胸倉しつかと取つて、「こりや貸した錢はどふする。見忘れたか八じゃ／＼」と刺す様に云ひをる。くどく／＼と見苦しう詫言もして居られず、「錢と云ふて今はない。正味でかつた錢ではなし。數計の勝負づく、一ばん切について見て、八貫を濟すか十六貫おふ物か。サア來い」と云ふたれば、八めは數年の通りもの「こちは八貫出して置く、負ければそれで取り遣りなし。勝てばむして十六貫、なんで濟す台點じゃ。抵當もなふてはいやじゃ」と云ふ、此方も引かれぬ云ひが／＼、「是れ此馬を知つたか、地鯉鮒の市で九兩一分。親方の物なれど十六貫のかはりに、五百目の馬なら。してこい」と、木蔭へよつて錢にぎり、「サアどうじゃ」といふたれば「三まいせい七つじゃ」と二文張りおつた。まつかせとつて程に、手の内に残つたはたしか七文、南無三寶しおつた。一文はねて六文にして、當てとらふと思ふて一文しやんとくろめて、ついで見たればかなしやの八文で有つた物。一文はねて七つにして、彼奴が壺へあてがふたは、どうした因果のかたまり。此方げんなりと成程、八めはいきつて「馬を取つた」としがみ付く。今日の乗手は氏神、やくそくの馬次迄、やれ／＼とせがまる。八めも武士をのせ

たれば、なぜ馬を追はぬと目のぬける程しかられて、「窪田で旦那をおろして、追付け馬を取りに行く」と早おひ程に追うて來る。親方の馬をとられては、此海道は云ふに及ばず、木曾海道中仙道、たゝずみが叶はぬ。八藏めが來ぬうちに、早ふ内へ往にたい」と溜息ついて語りける。

【註】 ○通し―打通して、約束の處まで行き、途中で替らぬをいふ。○あかつきの明星が茶屋―曉の明星の出る頃まで明星が茶屋で。○飲み干す様な大ぐさり―飲み干すは、あるものは皆飲み干す意にて、全體の意は、非常に失敗し氣をくさした。くさるとは氣をくさらす、即ち失敗する意。○一月に二月をどる―をどるは、利に利が加はる意にて、一月に二ヶ月の利をとるをいふ。それと伊勢音頭の文句、「これはどこ踊、松坂越えて伊勢踊」にかく。○うせをる―來をる。○八めは―蜂にかく。○ぶら／＼―怒り易い意と、蜂の鳴き聲にかく。○一癖切りについて―一回限りの勝負をして見て、與作が勝てば八貫の借りをすまして、一消し、負けると十六貫の負債としよう。○八貫―八貫文。一貫文は千文即一分。四貫文で一兩。故に八貫文は二兩。文は凡て青銅の孔あき錢。○通り者―その道に通じてゐるもの。老巧な人物。○八貫出しておく―八貫文のとりやりなることの意味を確めるため、八貫を目の前に出すといつたのである。事實出したのではなく、既に貸してゐるのをそれにあてゝいつてるのだ。○むして―蒸し返して、増しての意。○何で濟す合點ぢや―どうして辨償する料簡ぢや。○池鯉鮒―有名な馬市あり。○十六貫のかはりに五百目―錢即ち穴ぬけ錢の一貫即ち千文が一分なる故、十六貫文は四兩。その代りに五百目は銀の目方故銀六十匁を一兩とすると、ざつと八兩餘りになる。四兩の代りに八兩の品なら不足はあるまい。して來い即ち、さあ來いといつたのだ。此處の貫を銀計算の貫、即ち刃の上の八貫と見ることとはあまり大き過ぎて、十六貫が二百六十六兩になる故、青銅錢の貫、即一貫文即一分即ち四分の一兩と見るが穩當だ。藤井博士本はこゝがごたつてゐるやうだ。又五百目の方は當時は大抵銀計算で凡六十匁を一兩としてゐたことを眼中におくべきだ。○三まいせい―三枚せいとは、近松作「大職冠」にも三枚がるといふものがある。即ち博奕をやることの意だ。樋口氏説。○七つじや―相手の手の中の錢を加へると七文ぢやといつたのだ。これはけんねぢをやつてのだ。○二ぢはりまつた―八はもつてゐたの意。與作は思つた。相手は相手のを合計すると七文ぢやといふからには、自分の手に六文あるから、八の手に一文あるのだな。これはいけない、合計六文にして相手をまかしてやらうと、自分の手の中を五文に



して見た。と却つて敵のいふ通りに（敵は一文なくて、二文だった故、自分の五文と合せて七文になつて）全く敵の思ふ通の術中に陥つてしまつた。五文にせず、最初の通り六文もつてゐたら、合計七文でなくて八文になつたものを。二文はりをつたは、後で結果が分つてからの數を文章の勢で書いたので、最初云つた時には勿論分らなかつたのだ。○まつかせ：おつとまかせ、よじきた。○南無三寶：こちらでやられたと思ふての語。○しおつた：やりやがつた、うまくやらかした。○ころめて：ごま化して○一文はねて—自分の六文を一文とつて。○げんなり—ぐんにやり、力なく、げつそりとなる。○いきる—元氣よく。○乗手は氏神—今日の乗つた人は氏神様だ、助け舟だの意。つまり乗手が仲裁者になつて、馬の次ぎ場まで、馬をやれ—とせがんだのである。それで有難く仕合せたといふのだ。「挨拶は時の氏神」といふ諺の意をとつた。○目のぬけるほど—目の飛出るほど。○八めも武士—八の奴も武士をのせてゐて、その武士が叱つたのだ。つまりかうして休んでる間に賭突などした、のんきな旅だつたのだ。○馬を取りに行く—自分は窪田で旦那を下ろして、あとからその馬をとりに行くといつてをつたから。○早追—時間をきられてゐて、夜も泊らず、晝夜兼行で走る急使。こゝはいそぎの早馬。○たゞずみかなはぬ—たゞずんでをれぬ。○溜息ついて—息をついて。

【譯】伊勢へ通しの馬子として行つた時のこと、宵からあかつきの明星が出るまで、明星が茶屋で飲干すほどの大失敗をやらかす。借錢の利は一月に二分とられ、伊勢音頭に知られた松坂を越えて、雲津の渡しで算用して見ると貳貫づゝ四つ合せて、二四が八貫を八藏奴に借錢してる。これはならぬぞと思つてるところへ向ふから八藏奴が馬追うて來る。一體八藏奴は怒りつぽい、ぶう／＼いふ奴で、私しの胸倉をしつかりとつて、「これ借した金はどうする、見忘れたか八藏ぢや／＼」と、蜂がさすやうに云ひをる。くど／＼と見苦しく詮言もしてをられず、「錢といつたとて今はもつてをらぬ、正味の金をかりたのではなし、數の上の勝負づくの借金ぢや、此處で一番限り勝負をして見て、私が勝つたら八貫文を帳消しにするか、それとも負けたら、十六貫文を脊負ふか、よつて見よう來い」といふと、八の奴めは、數年の間の老巧者で、「こちは八貫文出しておる、負けたら、それをそちにやるから、やり取りなし。若し勝つたら前の貸しを倍にして十六貫貫ふことになるが、それさうして始末する積ぢや、それに抵當もなくちやいやぢや」といふので、此方でも後へは退かれぬ云ひが／＼になつて、「これ此馬を知つてをる

か、池鯉鮒の馬市で九兩一分の品ぢや。親方の品ぢやが、十六貫文即四兩の代りに五百目即ち九兩の馬なら文句はなからう。さあ、やつて來い」と木陰へよつて錢をにぎつて「さ、どうぢや」といへば、八の奴は、「さあ、やつて來い七つぢや」といつて手を出した。あとで見るとその手の中には二文張つてゐたのだ。おつとまかせで拳ねじをつく中に、二人の手の内に残つたのは確かに七文。しまつた、うまくやりやがつた。自分の手の中のを一文はねて六文にして、うまく當て取らうと思ふて、一文丈けしやんとごま化して、ついで見ると、悲しや合計八文であつたものを。一文はねて七つにして、丁度彼奴が思ふ壺にあてがつてやつたといふのは、どうした因果の塊りで、おれはあゝのだらう。此方がぐんにやりとなるほど、八の奴はいきほひ立つて、「馬をとつた」といつてかみつくだ。ところが今日の乗り手の方は氏神で、助けの神、約束の馬次場まで、馬をやれ／＼とせがまれる。八の奴も武士を乗せてゐたので、なぜ馬を追はぬと、目の飛出るほど叱られる。かうして互に馬を進めたが、彼奴は窪田で旦那を下ろして追付け馬を取りに行くといつてゐたから、急使程に追うて來るであらう。親方の馬をとられては東海道は云ふまでもなく、木曾中山道に、たゞずんではをれぬ。八藏奴が來ぬ中に、早く内へ歸りたい」と溜息をついて語つた。

小まん心もくらやみにて、「人の沙汰に違ひはない。世につれるとは云ひながら、さもししい心にならなした。古はおれさ／＼、私等ふぜいは下司にもお使ひなされまい。縁なれば、そ膚ふれて、抱つしめつのわりないこと、嬉しいやら悲しいやら、一ばいとしさ増す物を、わるい病がつきました。そりや雲介の身持ぢや。友達仲間の交際で、引かれぬ事が有るにもせい、私が親の未進米此六日の吉書に立てねばもとの水牢、此世から八かんの地獄へおとす私が心、苦にかけふではなけれども、案じてもくだんせず、しこり博奕のわる遊び、扱もつれない氣と思へば、あついで涙がこぼ／＼」とせき上げ



泣ければ、與作「わつ」と泣出し、「そりやきよくがないく、慰みにも慾にもせぬ、其方の親の未進米、二石二斗は何程じゃ、むかし與作が草履取馬取の切米。是で可愛いひそなたが親を殺させはせまいと、瘦我をはつての出来心。千三百石から馬追まで成下るぼんのくぼ、よい事はない筈と、思はなんだは身が不覺。是は主の天罰とあきらめて済すが、しこり博奕の榮耀とは、去りとは小まんむごいぞや。皆是そなたの親のため、胸に書付有るならば、こゝが裁わり見せたい」と、打ちたゝいたる胸當も、しぼる計の恨み泣き。

【註】○人の沙汰一噂さ。○世につれる一人の心はその境遇につれて變るものと云ひながら。○下司一こゝは下婢などの意。○割らないこと一隔てないこと。○それや雲助：さういふ身の持方は、雲助仲間のすることぢや。落ぶれてもそなたは武士ではないか。○六日の吉書一十月六日年貢を怠らぬやうにと出す令文。○八寒地獄一寒水で苦める八種の地獄、八熱地獄の隣にありと説く。水牢をたとへたのだ。○しこり一皮下の肉の固まる病。博奕にこり固る病といふ意。まけ博奕のしこり打ちといふ諺がある。○曲がない一情ない。○馬取一馬の口取。○切米一扶持米の代りに渡される命錢。草履取りや馬の口取時代の給料位のものぢやの意。○瘦我一やせ我慢。○ぼんのくぼ一頸の後方中央へこんだ所で、之により運を占うた。即ち運の意。○主の天罰一主があてる天よりの罰。○むごい一殘酷。○胸當一馬子の必ずもつてゐる服裝の一種。

【譯】與作の話をおきくと小萬は心も暗闇の如くなつていふ、「人の噂に違ひはない。人間の心は其境遇につれこまれるとは云ひながら、よくもまあそれほど卑しい心になりやんした。古はお歴々の身分で、私等を下部にもお使ひはなされまいものを。縁なればこそ膚もふれあふて隔てのない中となつたが、思へば嬉しいやら悲しいやら、いよゝ可愛さの増すものを、わるい病氣にかゝりやんした。そのやうな身持は、雲介の身持ちぢや。決して武士などのする身持ちぢやない。友達仲間の交際で、引くに引かれぬ事があるせよ、私が親の年貢米の未納、此六日の吉書の出

る日に差出さぬと、親はもとの水牢に入らねばならぬ。これぞ此世からの八寒地獄へ落すに異らぬと、私の苦しむ心を心配。せよといふのではないが、案じても下さらず、負け博奕のしこり打ちをやるといふ悪る遊びにかたまつて、さても無情な氣よと思ふと熱い涙がこぼれます」とせき上げて泣けば、與作はわつと泣出して「それは情ないく、私は慰みにも慾にもやりはせぬ。そなたの親の未納米の二石二斗は何科ぢや。むかし此與作が草履取りや馬の口取りをやつた時の扶持米代りの錢ぢや。これで可愛いそなたが親を殺させはすまいと、瘦我慢をはつて出来心にやつたのぢや。千三百石から馬追ひまで成り下る運が、とてもろくな事はない筈と思ははかつたが身の不覺であつた。それにしてもこれはお主の天罰とあきらめてすますが、榮耀にやるしこり博奕といふのは、それは小萬あまり殘酷ぢやぞや。皆これはお前の親のためにしたことで、胸に書付があるなら、此處を裁ち割つて見せたい」といつて、打たゝく胸當も、涙をしぼれる許りに恨み泣したのであつた。

小まん是はと手を合せ、「忝けなうござんする。とふに云ふてくだんせば、恨むまい物堪忍して下さんせ。父様の出入も、夏の物共人手に渡し傍輩にも、無心云ひ百三十匁と、のへ、まちつとの所は賃芋もよつぽどうみためた。これ見さんせ」と芋桶より金取出し、「父様の命代、落付いてくださんせ。日が暮て間が有る、よもや八も來をるまい。泊りどはなし私も隙、馬は向ひに繋いで中の間に寝ていなんせ。互の愛を散ぜふ」と草鞋の紐とく所へ、石部の八藏さよるく目し。來りしが、入「ヤア與作か人の馬をことはりなしに。美濃路まで隠れもないひぬかの八藏、目のあらい男知らぬかい。十六貫をたゞせふや、どうずりめ」と、馬をとく手を飛かゝり、ねぢ上げて、與「こりややい、我がひぬかの八藏なれば己は丹波與作ぢや。二百めのかたに五百目の馬をほしいか。遣たら機嫌がよからうな、三百



目のつりを持つて来い。五十三次に汁かけて、かみこなす興作じゃ。すないやい／＼ほてつばらめ」と振ちぎる。

【註】○出入一四凸、こたく、即訴訟事の費用などをさす。○夏の物一夏の着物、人手に渡すは賣ること。○ことほりなしに下へ、どうするのだ、どこへつれてゆくといれて見る。○ひぬか一麥糖、米糠よりあらひ意、あとに目が荒いといふからいつたのだ。○目の荒い一見たら許さぬといふやうに、ひどく亂暴する意。○たせうや一たじやるか。○どうすりめ一掏盜奴、どうといふは罵を強める意の頭辭。○二百目のかた一二百日は金三兩二分。錢十六貫に二分ばかりかける位だから、二百目のかたといつた。かたは抵當の意。○五十三次に汁かけて、誇張した云ひ方をしたので。○すないやい一するないやい。○ほてつばら一馬方の常用語にて、太い腹の意。どてつばらともいふ。

【譯】小萬はこれは恐れ入つたと手を合せて、「忝けなうござんする。それと疾くにいふて下んしたら、恨みもすまいものを、堪忍して下さんせ。父様の訴訟事の費用も、私の夏の着物などを賣拂つて、朋輩にも無心を云ひかけ百三十匁即ち二兩餘りと、今少しの處は、賃學でもと思つて、それもよほどどうみためた、これを見て下され」と芋桶から金を取り出して、「これは父様の命の代金ぢや、落ついて下され、日が暮れてから、大分間がある、よもや、八藏も來はずまい。泊り人はなし、私も暇ぢや、馬は向ひにつないで中の間に寝て歸りやんせ。互の憂を散じやう」といふ聲に應じて草鞋の紐をとく所へ、石部の八藏目をきよ／＼させて來たが、「やあ興作か、人の馬をことほりなしにどこへつれて行つた。美濃路までも知られてゐるひぬかの八藏ぢやぞ。見たら許しはせぬ程目の荒い男であることを知らぬかい。十六貫をどうして只でやつてたまるか、どう掏摸奴」といつて八藏が馬を解く手に飛びかゝつて、ねぢ上げて、興作は「こりや、やい、汝がひぬかの八藏なら、已は丹波興作ぢや。二百目の抵當に五百目の馬がほしいといふのか、やつたら機嫌がよからうな。だがさうはゆかぬから、欲しくは三百目の釣錢をもつて來い。するないやい、よせいやい、太つ腹の畜生奴」とふりちぎつて放す。

八「ヤイ男達はおいでくれ、錢濟いでしたかせい。腕づくならサア來い」とぶつてかゝれば、小まん取付き「なふ八藏殿、こなたは粹の様にない。其方も此方も親方持、馬をやつて好からふか、取つてこなたを褒ふか。聲高に云はず共、了簡づくがよいわいの。情けなや」と泣きければ、八「ヤイこゝな引さかれ、其涙は興作になけ、こちや忝ふないわいやい。取るべき錢はとらずに馬を取るが了簡ぢや」萬「いやそりや成らぬ。此門に繫いだ馬は此小まんがやらぬ、關の小まんがやらぬぞ」八「イヤ死ぬらうのふりばりめ、竹のぶちをくらふなよ」萬「ヲ、女子を相手にならばしや」八「ヤア仕かねふか」と鞭を持つてはたとぶつ。興作小まんを押退けて、「あれは餘所の奉公人なぞくはした」八「ヲ、我女房じや所でくらはした」興「ム、よふくらはした、女房共の返禮」と、拳をかためて目鼻の間、缺けてのけと打たりけり。八「來い、する氣なら仕て見せふ」と、互にこづかを取つては投げつ投げられつ、ぶつつぶたれつ掴み合ふ、誠に馬子の喧嘩とて馬のふみあふごとくなり。

【註】○したかせい一したくばしろ。ヤリたくばやれ。○粹の様にない一粹人のやうであつて、さうでもない。○取つてこなたを……又親方から借りてる馬をお前がとつたとして、人がお前をほめるだろか。○了簡づく一了簡しあふ、即ち堪忍をしあふがよい。○こゝな引さかれ一こゝなは此處の、この。引さかれは興作に引さかれてる奴、即このあまつちよ奴ともいふやうな罵る語。○死にめらう一死ぬべき奴などの罵の語。○ふりばりめ一ふんばりの強い意で、人にをくせぬ、強い奴といふ意の一説あれど、樋口氏によれば、養たれ奴の語義をもつたもの。要すに女を罵りていふ語。○竹の鞭一馬追のもつもの。○ならばしや一たゝるならして見や。○仕かねふか一女を相手にだつて、打ちかねようか、打ちかねはせぬぞ。○くはした一鞭をくはした、打つな。



○我女房ちや所で—我はわれ即ち汝。汝の女房なるが故に。○こづか—鬘。

【譯】八藏は「やい男達はおいでくれ。したければ残の拂をすましてからしろ。腕づくなら、さあ来い」と打つてかゝると、小萬はとりついて、「なう八藏殿、お前さんは粹人のやうにもない、お前もこつちの人も親方持。どつちだつて馬をやつてよいものか、馬は親方のものぢや。その親方の馬を、お前だつて取つて誰が褒めるか、聲高々とはいすと、堪忍づくがよいわい。情ないことよ。」といつて泣けば、八藏は「やい、引さかれ女奴、その涙は與作に對して出すがよい、こりや、そんな涙なんか忝くないわい。此方は取るべき管の錢をとらないで、代りに馬を取つて堪忍してやるわ」。小萬、いやそれはならぬ。此門に繫いだ馬は、此小萬がやらぬ。關の小萬がやらぬぞ。「八藏」死に女郎の、糞たれ奴、竹の鞭を食ふな「萬、お女を相手にするならばせよ」八藏「女だつて相手にしかねはせぬぞ」といつて、鞭をもつてはたと打つ。與作は即ち小萬を押しつけて、「あれは餘所の奉公人ぢや、それを何故打つた」八藏「汝が女房ちや故に打つた」。與作「む、よく打つた。では女房どもの返禮せよ」といつて拳をかためて、目鼻の間を、缺けて落ちろとばかりに打つた。八藏「来い、汝がやる氣なら、こちだつたやつて見せう」といつて、互に鬘を取り合つては投げたり投げられたり、打ちつ打たれつ掴み合ふた。まことの馬子の喧嘩のことゝて、馬のふみ合ふ如くであつた。

八藏は力ばかり、與作は取手柔術取、すりちがひに小腕を取、こぶらを蹴かへし、與「こりやあ」とつて投つくる。門柱に腰骨うち、よろつきながら睨みつけ、八「どうずり奴覺えてけつかれ。問屋馬さし親方へことはつて、海道筋の五器の實をぶちあげ、菰かづかせて見せふぞ」と、身を捻振つて立歸る。小まん追付き「是八藏殿、公用勤める馬方が、馬かし問屋へことはられ何處で身が立つ物ぞ。此

小まんが手を合せる、男は當つてくだけいじや、堪忍して下され」とる詫る程なほつき上り、八「十六貫と云ふ錢貸して、其上に投られて堪忍したら、其方はよかる己がわるい。與作めの博奕うちぬす人と、此門からわめいて往く」萬「なう是々こゝに百卅匁、命がはりの金なれども、男のためじや惜しうない。是で濟して下され」と、取出す。引つたくり、八「必跡もすませよ。錢の直段はどうせふぞ」萬「ハアテそこらは構はぬ。そなたの勝手にしてたも」八「そんなら是で拾貫分、相場は十三もん」めん巾著、捻こんでこそ歸りける。

【註】○取手—相手を取つて押へる術に巧なるをいふ。○やはら取り—柔術使ひ。○小ぶら—膳。○こりやあ—こりや何しやがるといった意のこりや。此奴の意。○けつかれ—ひやがれ、をれの意。○馬さし—問屋からの命によりて、馬の割當をする者。馬の差配入。○ことはつて—挨拶して。○五器の實を打ちあげ—五器とは、椀や皿などをいふ。五器の實とは中に入れるもの即ち飯をいふ。それをぶちあげるとは空にする、取上るをいふ。即ち全體で飯の食ひ上げをさせる、又は飯の種をあげる意。○菰かづがせる—かづは着せる。菰をかぶらせる。即ち乞食をさせて生活の出来ぬやうにする意。○男は當つて砕けい—道理に出遇つては剛情を通さず、さつぱりしたがい。樋口氏説。○つき上り—つけあがる、乗する。○引たくり—烈しく引とる。○跡もすませよ—不足の分も、ちゃんと出して始末せしむ。○錢の直段—普通には銀六十匁が金一兩、錢一千文が一貫文即ち金四分の一兩、錢一貫文が銀十三匁と計算すれど、時々の変動によつて標準がちがつた故喧嘩にいそがしい時にも、此語をつかはせ如何にも勘定高い男なることを見せたのだ。○拾貫分—百三十匁を十貫分と見ようとするのである。ところで銀十三匁を一貫文と見ると銀百三十匁は丁度十貫となる。又四貫文が一兩故、十貫文は二兩二分。銀六十匁を金一兩の割で計算すると、百三十匁は二兩二分に近い。○十三もんめん巾着—十三匁と木綿とをかく。錢一貫文は千文、銀十三匁にあたる。

【譯】八藏が方は力ばかりで腕の冴えはないが、與作の方はさすがに、敵を取つて押へる術も、柔術の技も心得て



ゐるので、すれちがひに小腕をとつて、躡を蹴かへし、此奴めといつて、とつて投げつける。七藏は即ち門柱にあつて骨を打ち、よろ／＼としたが睨みつけて、「この拘摸奴、覺えてやがれ、問屋や馬の差配や親方へあいさつして、海道筋での飯の食ひあげをさせ、菰をきさせて乞食にして見せうぞ」といつて、身をねぢふつて立歸つた。小萬は即ち追かけて行つて、「これ八藏殿、公用を勤める馬方の身が、馬の差配や問屋へ告口されて、どこで身が立つものか。この私が手を合せる。男は理に出遇つては、さつぱりしたがよい。堪忍して下され」といつて詫びするが、詫びれば八藏はなほ一層つけ上つて、「十六貫といふ錢を貸して、其上投げつけられて堪忍までしたら、其方はよからうが、おれが悪い。與作の博突打は盗人ぢやと、此門からわめきたてゝ行つてやるわ」といふ。小萬は堪らなくなつて、「此處に百三十匁ある。これは命に代へる金ぢやが、可愛い男の爲とあつては仕方がない。これで濟まして下され」といつて金を取り出すのを引たくつて取り、「屹度後の金も始末しろよ。ところが金の相場はどうしやうか」小萬は、そこらにかまはぬから、お前の勝手のよいやうにして下され」八藏「それでは相場は銀十三匁が錢一貫文とし、百三十匁で十貫の分とする」といつて、金を入れた木綿の中着を懐にねぢこんで歸つた。

小まんは小首傾ふけ溜息ついて立歸り、「さきの金を渡してやう／＼と去せた。彼等との交際重ねておいてもらひたい」と、つぶやけば與作肝をつぶし、「其金渡してよい物か。取かやそう」と立あがる。小萬「是れ待たしやんせ。人の物おひながら、返さいでよいかいの。昔とちがふて當代は、道中筋も吟味つよく、馬借問屋へことはられ、悪名が立つてはほとんどすたつて出入の門もふさがれば、おのづから逢ふ事も成らぬ様に成はて、萬一お國へ聞へての恥辱は二度返らぬ。父様の未進も云ひ延べる丈云ひのべて、叶はずは水牢へ、代りに私が入覺悟。差當つた男の難儀、すくへば私が本望」と、云へど

も與作聞入ず、「馬方風情になんの恥辱。うき身やつすは親のため。其金をやる物か」と、駈出しが「南無三寶こりやならぬ。是の旦那の左次殿が、何事が出来たやら、問屋組中つれだちそれ其處へ戻らるゝ。何の彼のがやかましい、一寸かくれて逢ひともない。馬も何處ぞへ引いてくれ」と、隣の見世の幕のかけ、乗物あるを幸に、戸を明け片足ふみこめば、内より「あいたあいたしこ。横腹をふみくさる何者ぢや」と、小丁稚が大欠伸してによつと出る。

【註】 ○おひながら―負ひながら、借りながら。○二度返らぬ―返返しがつかぬ。○うき身やつすは親の爲―お前が浮き身を装ふて、色を賣るのも皆親の爲。○これの旦那―此家の主人。○組中―近所五人組などの一組をさす。○隣の見世の幕の隣の見世には姫様のお泊りとて幕がはつてあるのだ。○乗物―駕籠。○あいたしこ―こは一種の接尾語にて、お痛しの意。

【譯】 小萬は小首を傾け、溜息をついて立歸り「さきの親を救ふ金を渡して、やつと歸らした。あの人達とのつき合は、やめて貰ひたい」とつぶやきいふと、與作は肝をつぶして「この金を渡してよいものか、取返さう」といつて立ちあがる。小萬「これ待たしやんせ。人の物を借りながら、返さないでよいものかいなう。以前とちがつて、今の世は海道筋にもお調べが嚴重であるから、馬貸所や問屋へ告げられて、悪い評判が立てば、とんとすたり者となつて、出入の家も塞がれ、お前と私と遇ふことも、自然と出来ぬやうになつて来る。それが萬一にもお國へ聞へると、その恥は二度と取返しがつかなくなる。父様の年貢未納も云ひ延べられる丈け延べて、叶はなくなたら、水牢へは私が代りにはいる覺悟をしてるが、差し當りお前の難儀を救へば私の本望ぢや」といふが、與作はそれを聞き入れず、「馬方風情に何の恥も何もあるものか、お前が憂い身を粧ふて色を賣るのもつまり皆親の爲ではないか、誰がその金をやるのか、やつてなるものか」と駈出したが、直ぐに「南無三寶、しまつた、これはさうはならぬ、この家の旦那の左次殿、何事が出来たのか、問屋や組中つれ立つて、それそこへ戻つて來られる。出遇



ふと、何のかのといはれるのがやかましい。一寸隠れてゐて遇ひたくない。お前馬もどこかへ引いて行つて隠してくれ」といひ、隣の見世の幕の蔭に駕籠のあるを幸に、駕籠の戸をあけて片足をふみ込むと、中から「あいた、あいたしこ、横腹をふみをる、誰ぢや」といつて、小丁稚が大欠伸をしながらによつと出た。

與「ヤア石部のじねんじよか」三「與作殿か」與「そちはこのに何して居る」三「おりや江戸へ通しの馬追ふて本陣に泊るが、夕飯過から眠たふてこゝでぐつとやつた物。あり様はこりや何事じや」與「いや氣遣ひな事ではない。隣の旦那に逢ひともない、こゝへ隠してくれ」といへば、三吉邊りをすかして見て、「其處なほ小まんか、エ、くうまひなく。己やとふから知つて居る。外の人なりやならぬが、與作と云ふ名で愛しい。與作の事なら引はせぬ隠してやらふ、サアはひりや」と膝おし合ひし、心ざし知らねど親の孝行の通ずる念こそ哀なれ。

【註】 ○本陣―宿驛にて、大名などのとまる宿をいふ。○あり様―われ様、おのれ様、お前様。○何事ぢや―どうしたことぢや。○其所なほ―そこに居るのは。○引きはせぬ―進んでやる。○知らねど親の孝行―親といふことを知らねど、親への孝行の念の通ずる。三吉は父の名は知れど、これが父の與作と知らず、與作はまた與之介の名は知れど、じねん生がわが子と知らず。○あはれ―感深し。

【譯】 與作は「やあ誰かと思へば石部の自然生か」三吉は「與作殿か」「そちはこのに何をしてる」「おりや、江戸まで通しの馬追ひをして、今夜も本陣にとまつてをるが、夕飯過の頃から眠たくて、こゝでぐつと一寝入りをしたのぢや、お前様はこれや、どうしたことぢや。」「いや、心配なことではない、隣りの宿の旦那に逢ひたくないのぢや、こゝへ隠してくれ」といへば、三吉はあたりをすかして見て、「其所にゐるのは小萬か、え、くうまいことやらかす

な。おれは疾くから事情を知つてる。他の人ならお前の望をかなへることはならぬが、與作といふ名前が可愛い、與作のことゝいへば進んでやる、後へ引きはせぬ、隠してやる、さあはいるがゑ」といつて、膝を押し合ふやうにして隠れもし隠しもした心は、親とは知つての上ではないが、親への孝行の思ひが自然と通ずるのは、感深いことである。

程なく亭主門口から、「内外の者共皆あきよ。問屋殿庄屋殿組中残らず御座つた。かゝも起きて出やく」と、わめく聲に出女共、いわずじ諸共表に出る。庄屋問屋口をそろへ、「おかたお聞やれ。今日の寄合は、是の小まんに付て代官所のお差紙、小まんが父親横田の彦兵衛、四年此かた二石二斗の御未進にて、水牢に入れられたを、小まんが願ひ請負ゆへ、出籠仰付けられた。宿中としてきつと取立納めませいと、則ち小まんをお預けじや。よふお聞きやれ」と云ひ渡す。小まんうつむき涙ぐむ。

【註】 ○内外のもの―外は極めて意味弱く用ひられてある。○出女―宿の旅客にて、店先へ出て旅客を呼ぶから此名が起つた。○いわずじ―家あるじ、おかみ、女房。○おかた―おかみさん。○お差紙―召喚状。○願ひ請負ゆへ―願つて保証になつたゆゑ。○出籠―出獄。○宿中―此宿驛のものが皆。

【譯】 程なくして亭主が門口から、「内の者共よ起きよ。問屋殿、庄屋殿、組中の人々残らず來られた。鼻も起きて出やれ」とわめきたてる聲に應じて、女中達、女房と一處に表へ出る。即ち庄屋と問屋は口を揃へて「おかみさんお聞きあれ、今日の寄合は、此内の小萬について代官所の召喚状があつた爲で、小萬の父、横田の彦兵衛、四年以來二石二斗の年貢未納にて、水牢に入れられたのを、小萬が願うて保証した故に、出獄を仰せつけられたのぢや。未納年貢は宿中の者が、ちやんと取立て、納め申せとあつて、それで小萬をお預けなされたのぢや。よく聞きやれ



よ」と云ひ渡した。と小萬はうつむいて涙ぐんでゐた。

女房も驚きて、「おとましい事仕出しやつて、主に厄介かけやるか」といへば亭主とがり聲、「なんの  
主の厄介、一文もこちや知らぬ。上り下りの旅人衆も關の小まんといふ名にはぢて、百やる人も二百  
やる。一匁の貫ひもかもめじりに取る。百目や二兩は半年にもたまれども、與作といふ博奕打のぬ  
す人めに、有たけこたけ仕揚げて、夏の物は半がいに、襦袢が一枚なさそふな。與作が懸がよつほど  
有る、皆をのれが請合じや。帳面は忘れぬ旅籠が六かたけ、酒が四升五合、十文もりが七十杯、芋とく  
ぢらの煮賣が八十五杯、くらひも食ふた蒟蒻の田樂を百五十串、蒟蒻の錢じやとて砂にして吸はせふか  
盗人におひなれば、此出入はこちや知らぬ。與作めが身の皮はいでも二石二斗が物はない。馬を質に  
あさへて彼奴にきつと濟ませせ、小まんを内へ入れておきや。皆御太儀でござる」と、辭儀もそこ／＼戸  
を立てて錠さす音こそきびしけれ。

【註】 ○おどましいこと―疎ましいこと、いやなこと。○名に恥ぢて―名に對して氣がねをして。○かもめじり―秤の尻のびんと  
はねたるをいふ。即ち目方たつぷりの意。かもめの尻がびんとはね上つて来るから来る。これは樋口氏も藤井博士も同説で、有朋  
堂本の如く、まんべんなくとか、順々とか、端からなどいふ意ではない。○有たけこたけ―こたけは同音を重ねたに過ぎず、あり  
たけの意を強めたまでのもの。○仕揚げる―入れあげる、うちこむ。○半がい―兩掛蒟蒻の片方、即ち長持の小さなものにて、  
衣類入れ。○懸が餘程―懸賣の貸しが澤山ある。○おのれが―おのれは小萬をさす、汝が保証ぢや。○旅籠―宿泊料のこと。

○かたげ―朝食か、夕食か、一方にて、兩方でないをいふ。○十文もり―一皿が錢十文の副食物。○煮賣―何でも煮て賣るもの  
○蒟蒻の錢―蒟蒻を食ふと罌丸の中の（一説には腹の中の）砂がとれるといふ迷信がある。之を直ぐに、借金を拂はぬことを砂  
にするといふことにつづけたのだ。吸はせうかは、砂は水を吸ひ込む意をいつたのだ。即ち蒟蒻の代だとして、ふいにさせるかの意。  
○盗人におひなれば―盗人に追ひ錢から来る。悪いことをしては、金を出してはたまらぬ意。○此出入―こんどのごた／＼。  
○屹度すませ―借金をちやんと返させよう、それについては、横から口でも出さぬやうに小萬を内へ入れておけ。○じぎ―挨拶儀

【譯】 女房も驚いて「いやな事を仕出しやつて、主人に厄介をかけたさるか」といへば亭主はとげ／＼しい聲で、「何  
の主人の厄介なものか、こちらは一文も知らぬ。上り下りの旅の人々も關の小萬といふ名前に對して氣兼ねをし心配  
して、百文やる人も二百やる。一匁のもらひにも、目方をたつぷりととりをる。だから百匁や二兩位は半年もた  
ぬ中にたまるが、與作といふ博奕打の盗人奴に、有りたけの金をつき込んで、夏物といへば半蓋蒟蒻に襦袢が一枚  
もなささうな。そのくせ與作への懸賣代は餘程あり、それも皆汝が保証ぢや。帳面は忘れはせぬ、旅籠代で一回づ  
つ六回分、酒が四升五合、十文盛りの副食物が七十杯、芋と鯨の煮賣が八十五杯、それから食ひも食つたり、蒟蒻  
の田樂が百五十串である。いくら蒟蒻の錢ぢやからとて、砂にして吸はせせるか。ふいにさせなどするか。既にい  
ろ／＼な懸錢を拂はずにゐるのだから、此上錢など出しては、それは盗人に追ひ錢といふものぢや、このごた／＼  
はこちは知らぬ。與作が身の皮まで剥いだとして、二石二斗の品はありはせぬ。だから馬を質に押へて、彼奴にきち  
んと勘定の支拂をさせ、小萬は家の中へ入れておきやれ。皆様太儀でござりました」といふ丈で、辭儀挨拶もそ  
こ／＼にして戸をしめて厳しく錠を下ろさせた。

庄屋問屋組がしら、扱々與作と云ふ奴は存の外の大食、旅籠から盛切から、蒟蒻 ぶて煮賣食て、  
其間に小まんと云ふお山を夜食に食をる」と、めん／＼宿にぞ歸りける。與作は肌冷汗ながし、漸



這い出でくるゝの節穴、しとみの隙間のぞけくど見へばこそ。竹櫛子の出格子に首を伸して取付けば、内より顔がによつと出る。ちやつとひけば、「ア、大事ない〜」。コレ私じや」與「小まんか」萬「與作様か、今のを聞いてくだんせ。悲しいことに成はて、籠の鳥に成りました。私がかう成る上は父様へ難義はもうかゝらぬ。こな様にあふ事はならうやら成るまいやら、是が別れに成るやら、下から上ははかられぬ」と、手に取付いて泣きければ、

【註】 ○旅籠から盛切から―旅籠飯から盛切の副食物から。盛切は十文盛のこと。○お山―遊女。○夜食に食ひまゐる―これまで何を食ふ〜といったから、續けていつた。○宿―自分の家。○くるゝの節穴―戸のさんの穴。○のぞけくど―どのぞけど〜  
○竹れんじ―窓に設けた格子。○出格子―飛出てる格子。○父様の難儀―誰かが何とかなして始末をつけるだらうからである。  
○下から上は量られぬ―下として上をはからうことは出来ぬ。

【譯】 庄屋、問屋及組頭達は手ん手に「さて〜與作といふ奴は存外の大食家だ、旅籠飯から盛切り菜、菟蕪、煮賣と、いろ〜食うてまだ足りないで、小萬といふお山を夜食にたべたりする」といつて、各々家に歸つた。之をきくと與作は肌を冷汗を流し、やつと駕籠をはひ出し、くるゝの節穴から、しとみの隙間をのぞき〜するが見えればこそ。竹れんじの出ばつた格子に、首を延ばして取つくと、内から顔がによつと出た。驚いて首をちやつと引くと、「あゝ、大事な、これ私しぢや」といふ。與作は「小萬か」。小萬は「與作様か、今の話をきいて下んせ。悲しいことゝなつてしまつて、私しや籠の鳥のやうに家の中へしめこまれてしまつた。私がかう成るからは、もう父様へは難儀はかゝりはせぬ。だがお前に逢ふことが出来るやら出来ぬやら、これが別になるやら、下の者から、上を押はかることは出来ぬ。」と手に取つて泣けば――

與「イヤ是雲に汗が出来てきた。どうした縁やら三吉めが、與作といふ名にほれて、常に己を大事にする。乗物の内でたらしこみ、隣にとまつた大名の、金を盗んでくれまいか、男と見こんで頼むと、のぼせば此奴がのぼされて成程盗んでくれふといふ。なれば上々ならねば元々」云ひもあへぬに萬「いや〜、人迄罪におとす事止しにして下さんせ」與「ハテ氣の細い、あらはれて彼奴が打るゝ分。三吉彌たのんだ、ひか はせぬ」といひければ、三「はれやれやれやれ〜しちくどい。盗んでいらずば捨やいの。此じねんじよが頼まれて引きはせぬ。ハテ親はなし一門なし、げんこ取より小さい首意氣づくなら取ていけ。盗みして現はれ首さらるゝが不思議か」と、義を立ぬきし侍氣、盗む黄金も朽せざる筋目恥かし哀なり。

【註】 ○雲に汁―青雲に白い汁のやうなのがかゝると風となるといふ。即ちそれから天氣が變る、調子が變る意。○大名の金―隣にとまつてるのは、大名の娘ではあるが、ざつと殿様の金といつたのだ。○たらしこみ―だましすかし。○のぼせば―おだてれば。○三吉いよ〜頼んだ―これから前は小萬に、此語からは三吉にいふのだ。○げんこ取―一つが五文の餅、馬子などの間に五をげんこといふ習あり。○意氣づくなら取つていけ―意氣を張り合ふなら此首もとつてゆけ。○朽ちせざる筋目恥かし―侍と黄金は朽ちても朽ちぬといふ諺をとる。こゝは盗む黄金も朽ちず、三吉の侍の筋目もくちぬが、彼が義理をたて通す態度は、朽ちない筋目も黄金も恥しい程で、感深いことである。

【譯】 與作は「いや、これ調子が變つて來た。どうした縁であるのか、三吉が與作といふ名にほれこんで、始終おれを大事にする。そこで駕籠の中でごま化しこんで、隣にとまつた大名の金を盗んではくれまいか、男と見込んで



頼む、と煽てあげると、此奴のほせ上つて、成程盗んで進ぜようといふ。うまくゆけば上々、成らぬにしたところが元々ぢや」と云ひも終らぬ中に小萬は、「いや〜他人まで罪におとすことなどよして下され」與作「はて氣の小さい。露現したとて、彼奴が打たれる丈ぢや 三吉いよ〜頼んだ、後へ引かせはせぬぞ」といふと、三吉は「はれやれ〜、しちくどい、盗んでからいらなければ捨てやるがよい、此自然生の三吉は、人から頼まれて、後へ引くやうな男ではない。はて、親はなし、一族はなし、五文餅より小さい首ぢや。意氣を張合ふのならとつて行くがよい。盗みをして、首を切られるのがどうして不思議があるのぢや」といつて義理をたて通す侍氣は、朽ちぬ黄金や、筋目に比べても、それ等が恥かしい程立派な態度で感深いことである。

與「ヲ、頼母しい、命掛けて頼んだ」ありたけそやされ、三「ハテイ味方があれば氣がぢくれる、何處ぞへとつと退いて居や。ヤア小まん女郎此守が預けたい」萬「ハテ守はかけて居やいの」三「いや〜是には私が本名が書いて有る。若しあらはれて捕まへられ、人に見せれば恥辱じや」と、といつて預けし神妙さ。裾ねぢからげて忍び入る。與「坂の下の彌六が方へ退いてゐて、夜中時分に戻らう。小まんもはいりや」萬「私やあぶなふてきや〜する。南無地藏様〜」與「エ、今願立がきく物か。聲が高いひそかに〜」ひそひそと、胸はだ〜〜だ〜ぼくの坂の下へと別れける。

【註】 ○有りたけそやされ〜精いつばいそよのかされ。○氣がぢくれる〜味方があると思ふと氣をくれがする。○きや〜する〜ひや〜する。○南無地藏〜例の有名な關の地藏をいふ。○だ〜ぼく〜てこぼこ。

【譯】 與作は「お、頼母しい命懸けで頼んだ」と精一杯そよのかされると三吉は「はてい、味方があると氣をくれが

する。何處かへ、さつさと退いてゐやれ。やあ小まん女郎此守が預けたい。小萬「はて守はもつて居やれいの」三吉「いや〜是には私の本名が書いてある。若しか露顯して捕まつて、人に見せると恥ぢや」といつて解いて預けたことは神妙である。やがて三吉は裾をねぢからげて忍び込んだ。與作は即ち「坂の下の孫六の家へ引下つてゐて、夜中頃に歸つて來ふ。小萬もはいつてゐやれ」小萬「私や危なくてひや〜する。南無地藏様お助け下され」與作「え、今願立がきくものか、聲が高い、密かに〜」といつて、ひそ〜と物語りだ〜〜とする胸をか〜へて、でこぼこの坂の下へと別れた。

武家は道中おきてにて、半時がはりの拍子木の、數も九つ十に餘るやあまらずの、子供心の愚かさは、盗みおぼせし嬉しさに、拍子木をよけもせず、金襴の財布さげながら、門口へずつと出る。夜廻りちらりと氣を付て、慕ひ寄ればうろたへて、乗物に逃入つて、内より戸をぞさいたりける。夜廻りつゝいて飛付き、乗物の戸をしつかと押へ、すだれを揚げて「ヤアラぬめか。是は御前のお金袋。サア馬方の三吉めがお金袋を盗んだ、出あ〜〜」と呼はらし。是ぞ此世の地獄おとし、かゝる鼠の如くなり。本陣の上下残りなく、下宿の諸侍、隣町隣家の旅籠屋ども棒ちぎり木にて駈付、海道の真中に乗物かきすへ高提灯、あたりさびしく取巻たり。

【註】 ○半時替り〜二時間が一時故、半時替り即ち一時間交代。○數も九つ〜眞夜中、十二時頃。數も九つは丁度九つ程、即ち時の數ほど打つて時を知らせるのだ。今日でも所によると夜廻りは、時間の數ほど拍子木を打つてゐる。○慕ひ寄つて〜慕ふが如く寄りそうて見ると三吉はうろたへて。○出合〜〜皆出て來れ。○地獄落〜鼠捕り器。○下宿〜足輕中間など、安泊り料で宿泊してゐる宿をいふのだ。○かきす〜身据え。○棒ちぎり木〜棒とちぎり木にて、ちぎり木は兩端がふくれ、中が〜こんで



乳の高さまである一種の棒。

【譯】 武家では道中の掟として、半時毎に替る拍子木の音がして、數も九つを打つて、十二時を知らせる頃、九つや十歳になるやならずの三吉は、子供心の愚かさに、盗み遂げたうれしさに、拍子木の男をよけもせず、金欄の財布をさげながら、門口へすつと出る。夜廻りの者は、ちらりと氣をつけて、慕ひ寄つて行くと、三吉はうろたへて、駕籠の中へ逃げ込んで、中から戸をしめてしまつた。夜廻りは續いて飛付いて、駕籠の戸をしかと押へ、簾をあけて、「やあ、已れ奴だつたか、これは御前のお金袋ぢや、さあ馬子の三吉がお金袋を盗んだ、皆出て来い〜」と呼んだ。これぞ此世の地獄である捕鼠器にかゝた鼠の如くである。本陣内の上の人々下のもの残りなく出て、下宿に泊まつた中間などの諸侍も、隣町隣家の旅籠屋からも、皆棒やちぎり木をもつて駈けつけ、街道の眞中に駕籠をかいてすゑて、高提灯をたて、あたりを嚴重に取まいたのであつた。

當番下知して、「丁稚づれに仰山なそれ引出せ」「畏まつた」とあらしこ共戸を明けて、「サテ出ませい」と小腕取て引出す。三「是且那殿ぬすんだ金ば返します」と、きよろりとしてぞ居たりける。當「いか様にも幼少な。彼奴計ではあるまい、同類を穿鑿せん。馬さしは居らぬか、當宿に泊つたる馬子共残らず召よせよ」「あい」といふより觸れまはり、皆々一所に相つむる。八藏も大酒して宵より關に泊りしが、「盗みかは何奴ぢやい。ヤアませのじねんじよめか。おのれなら尤ろくで果てまい奴ぢやと、常にいふたが違ふたか。馬方仲間の恥さらし。エ、はつゝけ柱め」と、脊骨をどうど踏みければ俯向にかつばと伏し、額を石にすり破り血は紅と流れたり。三「無念な己れ踏んだ 枝骨

もいでくれふ」と、立上ればひつすへ〜、當「そこな馬子めも慮外者、武士の前にて脛三昧」とさんく〜に叱らるゝ。

【註】 ○丁稚づれに—丁稚風情に。○それ—掛聲だ。○出ませい—武士なる故皆上品な言葉をつかつてるのだ。此は近松がもと武士なりし故、決して「出る」などいはず、品のよい言葉をつかつて、巧に武士を描き出してゐるのだ。○あらしこ—荒子。雜兵、傭人夫など。○馬さし—驛の馬つぎの差配人。○いふより—いふなりす。○相つむる—つめる。出て来る。○盗みか—かはくは、好んでする、はしやぐ意 即ち盗みかがる意。○ませ—年齢より大人びた。○尤—やりさうなことの意。○ろくで—ろくは平の意。今でも大工達は水平の如何を見ることをろくを見ること云ふ。ろくで果てまいは、平で死ぬまい、無事に死ぬまい、あたり前の死に方をすまい。○はつゝけ柱奴—はりつけにかけろべき奴め。○技骨—手足。○ひつすへ—引きすえ。○慮外者—無禮者。○脛三昧—脛は足のこと、足で蹴ちらすとは何だの意。

【譯】 當番の士が命令して「丁稚風情に對して、何といふ仰山な態度だ。ソレ引出せ」といふと、雜兵どもが「畏りました」といつて、戸をあけて、「さあ出る」といつて小腕をとつて引出す。と三吉は「これ且那殿、ぬすんだ金は返します」といつて、きよろりとしてゐた。それを見た當番の士は「いかにも幼少な馬子ぢや、よも彼奴ばかりではあるまい、同類があるに相違ない、穿鑿しよう。馬さしはをらぬか、此宿に泊つた馬子ども残らず呼よせよ」「あい」と答へてすぐさま觸れまはり、皆々出て来て一所に詰めた。八藏も大酒を飲んで關の驛に泊つたが、「盗みかがるのは何奴ぢや。やあ、大人じみた自然生奴か、おのれならやりさうなことぢや、無事で死ぬまい奴ぢやといふもいふたが、違はぬだ。馬方仲間の恥をさらす奴め、え、磔にかけろべき奴め」といつて脊骨をどうど踏んだところが、うつふせにがはと伏せて、額を石にてすり疵し、眞赤な血が流れた。三吉「無念や、己れ踏みをつたな。手足を引もいでやらう」といつて立上ると、引すえ〜した、士は即ち「そこなる馬子奴も無禮者ぢやな、武士の前で足で蹴つたりするとは何事ぢや」と散々に叱つた。



三「エ、彼奴にふまれたか。下々の刀でさへ切られまいと思ふに、脛にかけて此様に、顔に疵を付けたなあ。首がとんだらをのれが面へ喰付いてくれふぞ」と、はつたと睨む目の中に無念涙をはらくと、思ひこんだる腹立の、おさな心の念力は、ぞつと身の毛も立ちにけり。母お乳の人聞付けて、駆出見れば大勢に取圍まれし我子の體、あつと計に腰もぬけ、あきれて泣くより外はなし。人々に悟られては、今まで包みし甲斐もなく、お姫様の乳兄弟、馬方して盗みしてといはれんも口惜く、不便さ憎さ腹立さ。

【註】 ○脛にかけて此様に：おのれの脛にかけて即ち足にかけて、こんなに人の顔へ怪我させたな。○目の中に一目の中に、無念の涙をもつてにらんでる。○念力は一念力は人をして：○身の毛も立ちにけり一人をしてぞつと身の毛もよだてしめた。

【譯】 三吉は「え、彼奴に踏まれたか、下々の奴の刀でさへ切られまいと思ふに、汝は脚にかけて踏んで、此様におれの顔に疵を付けたな。首が飛びでもしたら、汝の顔に喰いついてやるぞ」といつて、はたと睨む目の中に無念の涙をたゝへ、その涙をはらくと流し、幼な心に思ひ込んだ腹立ちの念力は人をしてぞつと身の毛もよだてしめたのであつた。母親お乳の人は聞きつけて、駆出して見ると、大勢に取圍まれた我子の有様のあはれさ。それを見ると、あつと計りに腰もぬけ、あきれて泣くより外はなかつたが、人に悟られては、今まで包み隠して來た甲斐もなく、お姫様の乳兄弟が、馬方をして盗みをして處罰をされたといはれんことも口惜しく、ふびんさ憎さ腹立たしさは何といつてよからう。

滋「ヤイそちは國から目をかけて、情を加へた甲斐もない、さもしい事を仕出したな。筋目も有りそ

者なれ共、さすが育が恥しい。其心ゆへ親々も知つても知らぬ見ぬ顔して、其馬方とは成つらめ。此方も子を持ち覚えが有る、皆親心は同じこと。若し母などが聞付けても、我子の命を助けたため、火水の底へは沈まふが、此場へ助けに出らるゝ物か。見殺しにする様なれど、心の中では神佛に命ごひしてももがくぞや。年にもたらぬ心から、恐ろしい事する筈もない、父親が貧しうて、云付けて盗ましたか、但しは人に頼まれたか、云譯あらば仕てくれよ。母の心を推量し、此比の馴染も有り、兎に角命が助けたい。姫様のお名を思はずば此のお乳がうんだ子で、姫様の乳兄弟と云ふて成とも助けたいどふ成りとかうなりと云譯あらば仕てくれと、魂のそこ心のそこ、肝より出るうき涙、當番吟味の人々に推量もしてくれかしの、心遣ひ目遣ひをそれ共知らぬぞ是非もなき。

【註】 ○さもしい一卑しい。○筋目一立派な血筋。○親心は皆同じこと一三千世界に子をもつた親の心は皆一つと同じ。○首ちが恥かしい一育ちの悪いのが恥かしい悲しい。○年にも足らぬ心から一年もゆかぬものが、腹の中から。○姫様のお名：姫様のお名に疵のつくことを心配せずば。○肝より出るうき涙一魂の底や、心の底や、又肝からも出て來る憂き苦の涙。

【譯】 お乳の人は「ヤイ、そちは國を出る前から目をかけて、情を加へてやつたに、その甲斐もなく、卑しいことを仕出したな。立派な筋目のものでも有るらしいものながら、さすがに育の悪いのが恥かしい。其様な心故、親達も知つても知らぬ顔し、見ても見ぬ顔し、自然とその様な馬方とは成つたのであらう。私しも子を持つて覚えがある。親の心は皆同じことぞや。もしか、母親などが聞きつけたにしても我子の命を助けよう爲に、火の中へ入り、水の底へ沈みもせうが、此場へどうして助けに出られるものか、見殺しにする様だが、心の中では神佛に願をかけ、命乞をしてゐることであらう。まだ年もたらぬ身であるからには、心から恐ろしい事をする筈もある



まい。父親が貧しくて、云ひつけて盗ませでもしたのか、但しは人に頼まれて盗みでもしたか、云ひわけがあらばしてくれ。そちに母親があるとすればその母親たる人の心を推し量つて、此頃の馴染もあることぢやし、兎に角命が助けたい。姫様のお名の汚れを思ひさへせねば、この私が生んだ子で、姫様の乳兄弟といつてなりともして助けてやりたい、何とか彼とか云ひ譯があるならしてくれ」といつて、魂の底や心の底や、更に肝の中から出る悲の涙を、當番である取調の人々に推量もしてくれよといふ心遣ひ目遣をするが、相手はそれとも知らぬのは是非もないことである。

三吉も母の顔、見上見おろし涙にむせび居たりしが、「申しお乳様さもしい盗みいたしても、馬方のことなれば誰恥かしとは存ぜね共、お前一人に恥かしい。父様のためかとは恨めしの仰やな。父様が有程なれば馬追は致さね共、あり所知らねば顔も見ず。又母様も持つたれ共、女字の身の腑甲斐なさ、奉公人のはかなさは今では他人も同じ事。たとへ云譯立つてから、盗人の名を取り見苦しいめにあふては父様に顔はむけられぬ。はやふ殺してもらひたい。其様におつしやれて、可愛がつてくださる程、どふやら心がうろたへて、死ともなふ成りそふな。奥へ入つて下され、もふ顔見せて下さるな」と、兩袖を目にあて、泣しづみたる利發さに、母はなほしも心くれ、「命はお乳が貰ふた、助けて下され侍衆」と、わつとひれ伏し聲を上げ、人の推量思はくも忘れはて、ぞ泣居たり。

【註】 ○誰恥かし—誰に對しても恥かしい ○云譯立つてから—云ひわけが立つてからとて。○なほしも心くれ—しは助辭。なほと心が暗くなつて。

【譯】 三吉も母の顔を見上げつ見下ろしつして、涙に咽んでゐたが、「申しお乳の人様、卑しい盗をしても、馬方の事であるからには、誰に對しても恥かしいとは思はぬが、お前一人に對しては恥しい。父様の爲に盗んだかとは恨めしい仰せであるわ。父様があるほどなら、馬追はしないのだが、居り所も分らず、顔も見ず、又母様もあれども、女の身の腑甲斐なさ、奉公人のはかなさには、今では他人も同じことである。だから例へ云ひ譯がたつたにしろ、女の名を貰ひ、見苦しい目にあつては、父様に顔は向けられぬ。一層早く殺して貰ひたい。其様に仰有てから、盗人の名を貰ひ、見苦しい目にあつては、父様に顔は向けられぬ。一層早く殺して貰ひたい。其様に仰有られて、可愛がつて下さるほど、何だか心がうろたへて、死にたくなくなりさうな。奥へはいつて下され。もう顔を見せて下さるな」といつて、兩袖を目にあて、泣沈む賢い態度に、母はなほしも心が暗くなつて、「お前の命は私が貰ふた。助けてやつて下され、侍衆」といつて、わつと聲をあげ平伏して、人の何と思はんことも忘れて泣いてゐた。

家老の本田奥より出で、「様子つぶさに承る。盗み物出ると云ひ、殊に道中他領の者、是式の事評議に及ばず、お助けなさるゝ立歸れ」と、引立てれば三吉、「此恥かいて助けられ、何と生きてゐられふ。慈悲なら切つて貰はふ」と、猶座をしめて立ざりし。本「エ、小しやく者軽い科を成敗とは、古今の掟にない事。立て失せふ」と怒らるゝ。三「ム、此分ではどふでも命助かるの。ヲヲ聞えた」とつゝと立ち「こりや八藏め、おのれは己をよふ踏んで面に疵を付たな。元來我は武士の子じや。人に踏まれて生きては居ぬ、覺えたか」と云ふ詞のうち、中間が脇差ひらりとぬき、飛びかゝつて八藏が首打落せし早業は、めたく間の稻妻なり。「すは人殺し」と取つて伏せ、「もう此うへは了簡なし」と、本繩に縛りあげ、「宿の庄屋へ預けをく。此方よりも人を付け代官所へ渡すべし。立あがれ」と引立つる。



【註】○是式—これ位。○成敗—死罪。○了簡なし—勘忍ならぬ。○めたゝく—またゝく。○本繩—公に罪人を縛る繩の法式。首すぢ三寸の處まで後手にしぱり下げるので、これならとけぬと。○宿—關の宿。

【譯】家老の本田は奥から出て、「様子はつまびらかに承つた。盗まれた物が出たといひ、殊に道中のことではあり、他領の者のこと故、これ位のことには評議をするに及ばず。お助けなされるから歸れ」といつて引立ると、三吉は「此恥をかいて助けられ、何うして生きてゐられう、お慈悲なら切つて貰はう」と坐つたまゝで立たうとはせぬ。本田「えゝ小しやくな奴、軽い罪を死罪にしるとは、古今を通じて掟にないことぢや。立つて失せろ」といつて怒る。三吉は「此分ではどうしても命が助かるの、おゝ分つた」とつと立つて「これ八藏奴、おのれはよくもおれを踏んで、顔に疵をつけたな。元來がおれは武士の子ぢや、人に踏みつけられては生きてをれぬ、覺えたか」といふ詞の中に、中間の脇差をひらりと引ぬいて、飛んで行つて八藏の首を打落した早業は、またゝく間の稻妻そつくりであつた。と「すわ人殺だ」といつて士が手を取つて押へつけ、「もう此上は了簡は出來ぬ」と本式の繩打をして、「宿の庄屋へ預け置く、此方からも人をつけて代官所へ渡すであらう、立上れ」といつたので、侍どもが引立てた。

母は性根も泣入つて、前後もわかずみだるれど、「此お目出度道中に繩付などは見ぬ物」と、人にさそはれ力なく見返り／＼奥に入る。子は又母を見送りに顔をうなだれ目をふさぎ、聲をも立てず歎きしが、三「ム、是ぞ本望／＼」。悪名取つて人には踏まれ、助けられても生きて居ぬ。一人死のより人斬れば往がけの駄賃じや。父様も母様も誰も一度は死ねる物、來世でゆるりと逢はふ迄。あの世から來てあの世へ歸る。戻り馬やろいほてつばらめ」とわるびれぬ、所存は侍まさりかな。本「惜しい奴じや」と涙ぐみ、引いて歸れば本陣は火の用心の聲ばかり、物しづかにぞ成にける。

【註】○泣入つて—性根もなく泣き入つて。○繩付—繩で縛られる罪人。○往がけの駄賃じや—往きかけの駄賃ともいふ。問屋へでも往きかけに物を頼まれた駄賃は、馬子の利益の意、蓋し空荷にて行く所を儲けるからである。○逢はうまで—までは古ひ表自法で意味なし。○戻り馬やろい—歸り馬やろの意で、馬子の平生使ふ語。ほてつばらは、前にもあつたやうに太腹奴、即馬にいふのだ。今死ぬといふから、死んでゆくぞ畜生の意。

【譯】母のお乳の人は性體もなく泣き入つて、前後もなく亂れるが、「此お目出度い道中に、罪人などは見ぬもの」といつて人からさそはれて、力もなく、見送りながら奥に入つた。三吉の方ではまた、母でありながら母と呼ぶことの出來ぬ母を見送つて、顔を下げ、目をとぢ、聲をたてず偲ひ泣きをしたが、やかて「むゝこれこそ本望々々、悪名を得て人には踏つけられたのだから、助けられたとも生きては居ないのぢや。一人で死ぬよりか、人を斬れば、往きかけの駄賃になる。父様も母様も、誰だとして一度は死ぬものを、どうせ此世でしみ／＼と遇ふことが出來ぬとあらば、來世にゆるりと逢はう。あの世から生れて來てあの世へ歸つてゆくのだぢや。死んでゆくぞ、畜生奴」といつて少しも悪びれない考の程は、侍にもまさつたものである。之を見た本田は「惜しい奴ぢや」といつて、涙を流しながら去り、侍どもが三吉を引つぱつて歸ると、跡の本陣は火の用心の聲がするのみで、物靜になつた。

與作は取沙汰聞くとひとしく、科を我身に引うけんと、駈つけ見れども早落著してひそかなり。本陣も門しまり、四邊もひつそと靜まつたり。小まん待かね格子たゝけば走りより、奥「どぶじや／＼仕損ふたげなのふ」萬「ア、仕損ふただんかいの。私やこゝから覗いた、八藏まで殺いたはありや皆我等が身替り。明日の日に中に切るゝげな可愛ひ事をします」と泣きさゝやけば、奥「南無阿彌陀／＼そりや皆こちが殺すは。こちとはいかい業人」と顔を見あはせ泣居たり。



【註】○格子たゞけば―與作らしいと認めて、内から格子をたゞくと、與作は走りよつて。○仕損ふたけなのふ―仕損ふたさうだなま。げなは今も關西にて一般にさうな又はらしいなどの意に用ふ。○だんかいの―仕損なつたなどいふことですむものか、その上のこと。とんでもない失敗以上の失策。○身替―我等の身代りに替を討つてくれたのぢや。○可愛いこと―可哀さうなこと。○こちと―こちら、私、私達、こちのととは關西通有の音で、私等は又私は知らぬといふやうな時、こちとら又はこちとは知らぬなどいふ。○罪人―罪つくり、宿世の業の悪い者の意。

【譯】與作は噂を聞くと同時に、罪を自分の身に引受けふと思つて、駈けつけて見たが、最早事落着して、ひつそりとしてゐる。本陣の門もしまり、四邊もひそりと静まつてゐる。小萬はまちかねてゐたが、物音をきくと與作がきたのに相違ないと、格子をたゞいて見ると、與作は走りよつて、「どうぢや／＼仕損なつたさうだのう」小萬は「あ、仕損つたなんていふ段かいの、大變ぢや、私はこゝから覗いて見たが、八藏まで殺したのは、あれは皆私等の身代りになつてくれたのぢや。明日の日に斬られるさうな。可哀さうなことをします」と泣きながら、呷きいふと、與作は、南無阿彌陀佛／＼、それや二人とも皆此方が殺すのぢや、此方はゑらい宿業の悪い人間ぢや、罪つくりぢや」といつて二人で顔を見合せて泣いてゐた。

萬「なふ三吉より一時も跡に下つて、成まいがこなさんどふ思ふてぞ」與「ム、其覺悟さはまればもふ茫付いた満足した。宵からそふは思ふたが親父の難義を見捨てては、死なぬ氣で有ふかと胸に計り持つて居た。心が／＼は残らぬの」萬「ハテかふ左なはに成るからは父様の事も埒あかぬもじや／＼云へば氣がもどる。餘のことおいてサア早ふこゝが出たふござんする」與「ヲ、嬉しい／＼。裏の木にないだ、馬を人手へ渡しては主たる人への無調法、死場へ馬も引くまいか。其間に身の出る程、此竹

格子をはなして見や」萬「いやこゝも小よしの悪性で、つい推せばはなれる」與「ア、アア小よしは逢ふ夜の通ひまど、最期近付く二人には冥土に通ふ鐵の門」と、くどき／＼馬引出し、「預けて置いた脇差は」萬「そこらはぬからぬ私が腰にさいて居る」與「できた。夫なら此馬の鞍をふまへてそつと下や。ア、あぶないぞ怪我すな」と、かばはるゝ身もかばふ身も、はつる廿日の月毛の駒の尾髪亂れて置露に袖の涙をあらそひし。

【註】○跡に下つて―一時も後れて死んではなるまい。先に死ぬべきではないか。○親仁の難儀―お前の親仁の水牢に入る難儀○胸にばかりもつて―考へたばかりで口へ出さぬ。○礎らぬの―のはなあ。○左繩―左前と同じく、つまり普通とは反對になることで、不運の意。○もしや／＼―色々なことをいつてると死にたくなくなる。○無調法―疎忽、すまぬ。○死に場へ馬―死に場へつれて行つておけば、主人の手に歸るべしの意をふくむ。○惡性―悪い行、いたづら、わるさ。○くどき／＼―くどいひながら。○預けて置いた―其以前預けておいたもので、武士の昔を忘れぬ心を見せた。○出来た―でかした、うまい。○二十日の月毛の駒―身もはてる二十日の月に、月毛の駒の月毛は茶色の赤じみたもの、後のくり毛と殆んど同じ。○袖の涙を争ふ―男の袖におく露と、袖をしぼる涙とが、どちらが多いかを争ふほど涙を流した。

【譯】小萬は與作に「なう、私達は三吉よりも一時も後におくれてはなるまいが、どうであらう。お前はどう思うてぢや」與作「む、お前に其覺悟がきまれば、もう落ついた、満足ぢや、宵から自分はさうは思ふてゐたが、お前は横田村の親父の身にかゝつてゐる難儀を見すてゝは、とても死ぬ氣にはならぬだろ、と考へてばかりゐた。心掛りの残ることはないかな」小萬「はてかう不運になるからは、とても父様の事も埒はあかぬ。といつてゐるんなことをいふと死ぬ氣があとんどりして死にたくなくなる。他の事なんかおいて、早く此處が出たうござんす。」「お、うれしい／＼裏の軒に繫いだ馬を他人の手へ渡しては主人の貸主へすまぬことになる。一層死に場へ馬も引つ



ばつて行くことにすまいか、さうする爲に馬をつれて來う。その間にお萬は體が出られるほど竹の格子をはなして見やれ。」「いやこれも小よしのいだづらで、つい推せればはづれるやうになつてをる。」與作「あゝ小よしは逢ふ夜の通ひ路につかふ窓を、最期の近づく二人は冥土に通ずる鐵の門と思はねばならぬか」と、くどくど云ひながら馬を引出し、「以前預けておいた脇差はどうした」といふ。小萬「そんなことはぬかりはせぬ。私の腰に差してをる」でかした。それなら、此馬の鞍をふまへて、そつとおりがいゝ、あゝあぶないぞ怪我するな」といつて、かばふ身も、かば果るゝ身も、間もなく果つる二十日の月夜に、月毛の駒の尾や髪はみだれて、それにおく露と袖の涙は相競ふほどであつた。

ひらりと飛ちり一町計り足ばやに立退き、與「海道は往還、伊勢路の方で死ぬまいか」萬「ア、それに付けて待たしやんせ。三吉が預けし守袋、いかなる神の御札やら、私が懷にも太神宮の守お祓ひ、穢すは後生のさはりなり、地藏堂へ納めませふ」與「ヲ、氣が付いた」と取出すふせんりやうに紅梅裏の袋を開き、月影に讀んで見れば、與「正一位ちばら太神宮、丹波の國の住人伊達の與作が一子與之介息災延命、南無三寶、扱は三つで別れたる我子の與之介なりけるか、我を親とは知らね共、與作と云名を大切に、慕ひし物を氣もつかず盜をさせておきめにあふ。手を出して我子の首を切つたと同じ事よ」とて、とんと座して足ずりし、聲を上げてぞ歎けさる。

【註】○海道は往還—海道筋は往還の人通りが多くて死ぬに具合が悪い意をもつ。○お祓ひ—六月の大祓のお札のこと。○お、氣がついた—よい所に氣がついた。○ふせんりやう—浮線綾。もんがらを浮き織にした綾。○おばら太神宮—丹波天田郡にあり

○息災延命—此語までがお守にあるので、無事延命のお守だの意。○おきめ—處刑、刑罰。○手を出して—手づから。

【譯】小萬はひらりと飛下り、二人は一丁ばかり足早に立ちのき、與作は「海道筋は往還で人通りが多い處故、伊勢路の方で死ぬことにすまいか」といへば小萬は「あゝそれについて待たしやんせ。三吉が預けた守袋、どのやうな神のお札がはいつてるのか、私の懷中にも太神宮のお守や、太祓のお札がある、それを穢すのは、後生に對してさばりになる。汚さぬやうに地藏堂へ納めませう」といふ。與作は「おゝよい處へ氣がついた」といつて、女の取出す浮線綾に紅梅色の裏のついた袋をあけて、月影に照して讀んで見ると、「正一位小原太神宮、丹波の國の住人伊達の與作の一子、與之介息災延命」とある。「はてしまつた、さては三歳で分れた我子の與之介であつたか、我を親とは知らぬが、與作といふ名を大切に、慕ふてゐたものを、自分の子とは氣もつかないで、盜みをさせて刑罰にあはせる。全く手づから我子の首を切つたも同じ事だ」といつて、とんと坐つて、足をすりながら聲をあげて歎いた。

女も共に涙にくれ、「因果人共ごう人ともよふも—罪業を、重ねたは二人が身、死なふと云ふ氣の付いたこそまだも冥加に叶ふたれ。何のかのと暫でも、此世に居る程罪あもし。サアござれ」與「ヲ、そふじや」と、立んとすれど腰立たず「口惜や腰ぬけた」萬「エ、氣のよはい」と引立れ共膝あるゝ。抱上げて腰をれの三十一期の浮思ひ、最期は伊勢路育は近江、生れは丹波くりげ馬、夫を抱さかさ乗せて、妻は口取りはいどうく、今六道の次傳馬、三途の川を打またぎ、昔の小歌引かへて、あひの土山死出の山、冥途の旅路通し馬、たどるや夢の 三重



【註】○涙にくれ―涙の爲に心がくもり。○因果人、業人―どちらも罪作りの意。○冥加に叶ふ―神佛のお助け加護にかなふ。○腰折―まづい歌の三十一字にちなみて、腰のぬけた三十一歳の與作といつた。○三十一期―三十一歳を一期としての意。腰抜に腰折を通はせ三十一文字の歌の意から引かけた。○丹波くり毛馬―丹波は父打栗とて有名な栗を産す、それと栗毛色の馬とかく。前に月毛の馬といつたのは、茶色の赤ばみたので、栗色と大差ないものである。○今六道の次傳馬―今は東海道でなくて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道をたどる次傳馬に乗りての意。次傳馬は宿々てつき―とつぎたてる馬。○昔の小歌引かへて―昔は小歌を歌つて、のんきに海道を通つたに引きかへて。○あいの土山死出の山―あひの土山が歌の土山でなくて今は死出の山として。○通し馬―出發點から到着地まで、馬をかへずに通してゆく意。即ち今は冥途の旅故、あとへ歸ることなく最後まで通してたどる意。○夢の―「夢の世の中」とか、「夢の世のあはれ」といふやうな語の來べきを、次の「與作丹波」に付けて略してしまつたのだ。

【譯】女も共に涙をながして氣もくらくなり、「因果なものとも罪作りとも、よく―罪業を重ねた二人が身であることぞ。それでもまだ死んでしまはふことに氣のついただけでも、此の上の罪業を重ねぬために、まだしも、佛の加護に叶ふものぢや。何のかのといつて、少しでも此世にゐるほど罪は重い。さあおいでなされ」與作は「お、さうぢや」と答へて立たうとするが、腰が立たないで、「口惜しや腰がぬけた」といふ。小萬は「ゑゝ氣の弱い、その様なことで」と引立てるが膝が折れる。抱上げても腰折れの三十一歳を一期の悲しい思ひで、最期は伊勢路にて果てるべく、育ちは近江、生れは丹波栗の産地の丹波の與作を、抱きかへて栗毛の馬に乗せて、妻は馬の口をとつてはいどう―と、今六道の次傳馬に乗りて、三途の川をまたぎ、昔の間の土山雨がふるの小歌に引きかへて、今は間の土山を死出の山として、冥途の旅路を通し馬でたどる夢のあはれなることよ。

與作小まん夢路の駒 下之卷

歌「與作丹波の馬追なれど、今は野すへの放れ駒じや。しやんとさせ與作。與作思へば照る日も曇る、關の小まんが。涙雨かしやんとさせ與作」よさく―と、呼びよばれつる、いなおほせ鳥も音をいれて、野邊のかるかや軒ばの萩、馬のまぐさにかひ残す、草も我身も此あか月は、ともに枯野のくつはむし、人を乗せたが乗せられて、かぎりの旅の坂の下、なふあれ、夜ぶかに急ぐのりかけも、泊りは知れて四日市、我は泊りもな、七日、中有の旅の馬ひつじ、歩めしゐく、ア、しぶとい口を、引けどしやくれど行きかぬる。畜類ながら性あれば、最期を惜む綱すくみかや。

【註】○與作丹波の馬追：與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀さし」の盆踊歌を近松がつへりかへたものだ。○與作思へば―此は諸國盆踊唱歌の但馬の部にそのまゝ出てゐる。○しやんとさせ―させはせよとか扱へなどの意。こゝは馬を追への意にて雛子の詞。○呼びつ呼ばれつる―自らも呼び人からも呼ばれつるし。○いなおほせ鳥―古今集三鳥の一といはれ、せきれい、雀、雁、馬など、色々の説があるが、こゝは近松が此語を馬と見て使つたものと解するがよい。○音を入れて―鳴いて、即ち馬も鳴いて。○かひ残す―馬の秣として、刈つたものを馬にやり残す。○くつはむし―馬にやり残す草も、我身も、共に此曉を限りであるが、枯野のくつはむしの鳴く音の細いが如く心細いものである。○轡蟲は、馬の縁として出す。○人を乗せたが：昔は人をのせて旅をした身が今は自ら馬にのせられて。○限りの旅の坂の下―今日を限りの命の旅に出て坂の下へと坂を下り。○乗りかけ―此頃一匹の馬に三十六貫目背負はずを本馬と云ひ、荷物を二十貫とし人間を一人乗せるを乗掛といつた。○な、七日―四十九日。四日市に對していふ。又泊りもなくにかく。○中有の旅―人死して四十九日は魂が現世と冥途の中間の暗界にまよう、之を中有に迷ふといふ。○馬草―屠所の羊の語にかけて、歩みといつた。○しゐく―馬子がしつゝといつて馬を進める詞。○しぶと



い口馬の口をとつて進ましめんとすれど進むをしぶる意。○引けどしやくる引つばつても、しやくつても。○綱すくみ綱を引いてもすくみて動かぬをいふ。動物などは怪異をさとりて、ちみみてすまぬことあり。

【譯】歌「與作は丹波の馬追ひだが身は野末の放れ駒の如く、浮世を離れての旅である。しやんと追へ與作。關の小萬が與作を思ふと、照る日もくもりて、涙雨が降る。しやんと追へ與作」  
○我も呼び人にも呼ばれつするし、馬もいなないて野邊の刈萱や軒端近くの萩などを、馬の秣にと遣り残すが、その馬草も我身も此曉がともに最期であるのか、枯野に鳴く響蟲の音のあはれなるが如く心細いものである。其昔人を馬に乗せた身が、今は自ら馬に乗せられて、今日を限りの命の旅をしながら、坂の下へと坂を下れば、なう、あれ、夜更にいそぎながら、荷物の上に乗つてゐるものもあるが、その泊は知れ切つて四日市である。けれども我は泊りもなくて、七七、四十九日の中有の旅であるからには、屠所にひかる、羊でなくて馬を歩ましめてしやくと追ふもの、馬は進むをしぶる。しぶる口をいよく引つばれど、しやくれど、馬は進みかねる。畜生といひながらも、性のあるからには、最期を惜んでの手綱にすくむのであらうか。

歌「私は十二で人よび初めて、今年廿一まる九年、とめし旅人何萬人ぞ。關一宿はせばけれど、男女に幾人か、友のよしみも時の花、無常のかぜにらりはて、馬より外にとふ人も、泣いてくれるか優しや」と、鞍にひれ伏しはらくと、袖には涙梢には、このみこぼる、椋本や。

【註】○人呼びをめて一店先に出て客を呼ぶのをさす。全九年までは小室節である。○關一宿一關の一町、宿は宿場。○友のよしみ一友達のよしみも多いが、それも一時の花の如く消えて、後をとってくれるものもなからん。○泣いてくれる一無くなく。馬より外へ泣いてくれるものなく、泣いてくれる馬優しやと。○椋本一椋の木と、津から鈴鹿の關に通ずる路なる伊勢海道の宿の名椋本にかく。

【譯】歌「私しや十二の歳から、客を呼び始めて今年は二十一。その間まる九年の間に、宿にとめた旅人は何萬人あるだろ。關の宿だけは狭いものだが、それでもそこにゐる男や女に幾人かの友のよしみをもつたものがをるだろ。然もその友のよしみも一時の花の如く、無常の風には消え果て散りはて、わが死んだ後に馬より外に誰一人が泣いてくれるであらう。でも一匹の馬丈けは泣いてくれるか優しや」といつて鞍にひれ伏して泣けば、涙はらくと流れて袖をうるほし、椋の梢からは木の實がばらくとこぼれる椋本や。

與「契り初しはさをと、し、拔參宮の道づれに、歌そなた櫛田の真中ほどで、深き思ひをやれ紫ぼうし、ほんに口説いた其眞實が、關の地藏を誓にかけて、戀の重荷の馬追ふ迎も、足もかるく心もひろき、豊國野とこそ樂しよし、あかれぬ中を秋の霜、今宵切りぞと氣もへりて、窪田に浮名うづむかや」

【註】○さをととし一昨々年、此作か寶永六年の作なる故、三年をさす。○拔參宮一親や良人の許しを得ないで參宮するをいふ。寶永三年之が大に流行した。○そなた櫛田の松の落葉卷七の「伊勢の櫛田」の文句をとつた。一「伊勢の櫛田のまん中ほどで、深き思のやれ紫帽子、ほんにくどくかそりや眞實か、五智の如來の恵もあると、戀の重荷をのりかけ馬に、はなれがたなき我が思ひ」を少しかへたもの。そなたと櫛田の真中ほどで、深き思をもつて縁を結んだの意。○櫛田一伊勢飯南郡に在り。○紫ぼうし一紫の縁りといふから、紫色の野郎ぼろしにかけ、つまり縁を結んだ意。○誓ひかけて一口説いた二人の眞實が、色の道にかけて粹な關の地藏にかけて誓ひ。○戀の重荷の馬一戀といふ重荷をつけて馬を追ふとも是はかるい。○豊國野とこそ樂しよし一豊かだと樂しみにしたにかく。豊國野は窪田より椋本に至る間の平野、錢掛松といふのがある、太神宮の遙拜所。○秋の霜一霜のおく今夜限りぞと思へば氣もめいりて。○窪田一地名だが、くぼいといつたから、浮名を埋むと出した。

【譯】與作は「契りそめたは一昨々年のこと、拔參宮の道づれになつて、そなたと櫛田の真中ほどで、深き思ひをこめて縁を結び、ほんに口説いた二人の眞實は、色の道にかけて粹な關の地藏にかけて誓ひ、戀の重荷をのせて



馬を追ふとも、足もかるく、心もひろく、豊かだと楽しみにした、あかれもせぬ仲を、秋の霜のおく今宵限りぞと思へば氣もめいりて、窪田に浮名をうめるのであるかや」

サイモン小まんなく／＼ヨイ 申す様、「縁は異な物其時に、起請一枚書かね共、雲津のかはせ二世三世、指切しての云ひかはせ、枕定めぬ參宮に、寝て居て胸をやかふより、手を引あふてゆる／＼と、歩みなぐさむ ヨイ夕暮は、一わの火繩に火を付けて、相合させる思ひ草、思ひし甲斐も夏のせみ、春秋知らぬ世のたとへ、與作小まんが身の上と、昔忍ぶの露涙、今を恨のうき歎き、このもかものにあの、もの、あの、松原時雨行く。阿漕の海士の、あこぎにも、過ぎにし方を思ひ出て、二見の浦の二つ石、清めし肌引かへて、刃に穢し死する身の、かたみとなれや石塔の、標の石を思ひ出す。いがき越へしも戀のつみ、末社／＼の宮めぐり、地獄めぐりを思ひ出す。返らぬ昔思ふまい。泣くなく／＼と鳴く鳥、人の末期を知らすとは、音にさ／＼しが今ぞ知る、あさぐまの嶽淺ましや。彼のさいぐらの忌詞、いまはしや逆道もせに、暴す體を道者にも、嫌ひ憎まれ人々の、よもや回向もなさけなや、歌過去もエイ未來も現世で知る」と、男見る目は泣く目もと。ヤツサありや、そりやはや明がたの、お八つの太鼓の聲は高田の寺、泊り／＼は多く共、十萬億土馬次なしの、西は百味の旅籠屋に、観音せいし手を取つて、蓮の臺に泊らんせ。夫婦の外はあひ宿も南無阿彌陀佛彌陀佛と、この阿彌陀の影たのむ、其

誓願の詞の縁、千貫松にぞ 三重著にける。

【註】 ○サイモン―祭文節にてやる記し。○小まん泣く／＼：八百屋お七の祭文「音曲色酒盛一の文句」お七泣々申すやう、いづぞや類火にあひし時：あふて語らん嬉しやと、思ひ定めて夕ぐれに、一把の藁に火をつゝみ、ほり上げたる計りにて、もゆる仔細は候はず：」からとつた。○雲津の川瀬―南北伊勢の境をなす川、此川瀬にての意。○枕定めぬ參宮に―一つ枕に定めぬ即ち枕を交はさぬ。○寝て居て胸を焼かうより―他の人の抜け参りするを羨みて見てゐるよりは、自分達もと、抜参りした樂しさと思ひ出していふのだ。○火繩―芝居などでは火繩の火で煙草を吸ふからいふ。○相合煙管―「冥途」の飛脚にもある比翼煙管と同じもの。頭が一つで吸口二つあり、元祿頃に流行す。○思ひ草―煙草の異名。煙草を吹ふて。○甲斐も夏―甲斐もなくにかく。○夏の蟬―莊子に「けいこ春秋を知らず」とあり、徒然草に「かげるふの夕をまち、夏の蟬の春秋を知らぬも：」からとる。此はかなき蟬のたとへは正に二人の身の上だと。○露涙―昔をしのぶ露の涙をながし、又今を恨む悲の歎をして。○このもかもの―此方彼方に。○あのもの―かれこれ、兎や角。○時雨れゆく―時雨の如く涙を流して松原をゆく。○阿漕―伊勢國阿濃津郡の東方なる殺生禁斷の地。「阿漕の海士」は次の「あこぎにも」の説明にも見る如き意から、度々網を引く如きの意。○あこぎにも―伊勢の海阿漕が浦に曳く網も度重なれば人もこそ知れ」の歌は度を重ねるとあらはれる意から、厚かましく、執念深きの意。○二見浦の二つ石：二つ石の處で、其昔肌を清めて拜んだに引かへて。○かたみとなれや―紀念となれと。○石塔の―二つ石を思ひ出し自分達の二つの墓石を思ふのである。○いがき越えしも―いがきは瑞垣、玉石。伊勢物語の「千草振る神のいがきも越えぬべし、大宮人の見まくほしきに」からとる。密會をして瑞垣を越えた。○戀の罪―戀の罪で死なねばならぬ事となり。○末社／＼の宮巡り―太神宮の末社をめぐりても地獄めぐりを思ひ出すといふのだ。○鳴鳥―いまなく鳥をきいていふのだ。○朝熊獄―伊勢の南にあり。朝まで生きぬと思へばとかく。○淺ましき―今ぞ知る身となつたのが淺ましい。○齋宮―昔は天皇の即位毎に伊勢太神宮奉仕の爲、差遣される未婚の皇女や女王をいつきのみこ(齋王)といひ、其居所を齋宮といふ。加茂神社に對するのは齋院といふ。○忌詞―齋宮で用ひる忌詞のことにて、經を染紙、佛を中子、寺を瓦葺、僧を髮長などいふ。こゝは死ぬを忌む故にいま／＼しやといつたのだ。○道もせに―道もせまいほどに、道一ぱい。もを面ととる説明は誤だ。○道者―巡禮、參拜者こゝは太神宮參拜者。○回向もなさけなや―回向は讀經冥福を祈ること、なさけなやは、回向する人もなくにかく。即ち回向し



てくれる人もなからんことがなさない。○過去も未來も—佛説に現世の夢を見て未來の果を知るといふことがあるをとる。  
○男見る目もと—小まんが與作を見る眼つきは泣いてゐる。○あけ方のお八つ—午前二時。○高田の寺—眞宗高田派の本山専修寺、のことに、一身田村にある。○泊り—宿場々々。これ等は皆馬次ぎの驛である。○十萬億土馬次なし—東海道や、伊勢海道などの宿場は、皆馬次の泊り場なれど、十萬億土の冥土の路は少しも馬次場はないのである。○百味のはたごや—百味は醍醐味即ち最上の味、百味旅籠屋とはつまり極樂をさす。○觀音勢至—念佛を怠らざるものにはその臨終に際して、二十五菩薩が來り迎へ、觀音勢至の二菩薩が手とりて引接するとせらる。○蓮の臺に泊る—冥途の旅に泊る處なく、即ち蓮の臺に泊れと、いつた。どこまでも最初の留女の宿泊をすゝめることに縁をもたせたのだ。○相宿もなし—同宿人は蓮の臺の泊にはない。○こ—國府、鈴鹿郡國府村。惠日山觀音寺といふのに、國府の阿彌陀がある。○影たのむ—おかけをたのむ、影向の語から、蔭の字でなく、影の字を用ひた。○誓願の詞の縁—願をかけるといふ詞、誓願の音の響の縁で、千貫松についた。

【譯】小萬泣く泣く申すやう「縁は不思議なもので、その時誓紙一枚も書きはせぬが、雲津の川瀬にて、指切りをして二三の云ひかはしをなし、枕を交はさない伊勢參宮の抜け参りに、寝て居つて胸を炎やすよりはと、互に手を引合ふて、ゆる／＼と歩みながら慰む夕暮には、一把の火繩に火をつけて相合せせるで、煙草を吸はうと思つた甲斐もなく、夏の蟬は春と秋とを知らぬほど果敢なきものであつたといふ例は、まさに與作小萬の身の上その儘である、昔を忍ぶ涙を流して、今を恨む憂き歎をしながら、彼方此方に兎や角と時雨の如く涙を流して、あの松原をゆく。

阿漕の浦に綱引く海士の如く、執念く過ぎ去つた方を思つて、二見の浦の二つ石の處では、其昔肌を清めて拜んだに引かへて、今は刃にて血を流し石をけがして死ぬる身の紀念となるのかと、二つの石塔の墓石を思ひ出す。又密會をなして瑞垣を越えたも戀の罪で、その罪で死なねばならぬ身は、太神宮の末社々々の宮めぐりにつけても地獄めぐりを思ひ出すのである。返らぬ昔を思ふことはすまい。泣くな／＼といつて、鳴く鳥は、人の死に際を知らずものだと音にきいてゐたが、今こそその眞なるを知る身となつたのか、朝まで生きぬことを思ふと、淺ましくてならぬ。彼の伊勢太神宮に奉仕の皇女の齋宮に於ける忌詞は、死を思むからにはいまはしいことであるとして、路もせまい程晒す身體を參宮の人々にも嫌ひにくまれて、人々がよも回向してくれぬだらうことがなさない、過去も未來の様子も現世の様子で知られることぢや」といつて男を見る目は泣く目もとをしてゐるのである。やつさ、ありやそりや「早や、明け方の二時の大鼓の音は高田派の専修寺からひゞくのである。此等の海道には宿場／＼は多くても、十萬億土の浄土への旅には馬次場はなく、西方極樂の旅籠屋に着くべく念佛を怠らねば、觀音勢至は手をとつて引接し、蓮の臺に泊らんとせと迎へられるのであつて、夫婦の外には誰一 相宿もなく、即ち南無阿彌陀佛と唱へながら、國府の阿彌陀のお蔭をたのみ、誓願をかけ、その詞の音の縁によりて千貫松に著いたのである。

與作も名有る弓取の、家に生れし氣質とて、きつと死に身に胸すはり、土手へ飛り馬を小松の根につなぎ、小笹の露を打拂ひ、「こゝへ／＼と小まんが手を取り顔を眺め、「廿一と卅一、二人合せて五十二才是でから長生と云ふ程の年でもなし。いとしい人を殺すよなふ。心にかゝりいひたいことはなにか／＼」といひければ、萬「ハテかはいひ男と死ぬる身が、浮世に心何残らふ。去ながら只一つ、いふて返らぬ事ながら」と、云はんとするを、與「ア、もう／＼それもいらぬ事、人間の念慮かぎりなく、息の通ふ間は六根の樂欲にひかれ、思ふ程云ふ科なほつきず、皆罪障の種となる。此念をはらふを、生死をはなれ涅槃門に入ると云 我とてもいひたいこと千萬無量を打捨たり。され共一つの粗相には、そなたに預けし箱枕に、先祖の由緒、所々の勳功知行付けの一卷有。死後に諸人にさみせられ家名をながさん此無念、よし夫はまゝにもせん。不便やかはいや與之介が、最期迄親共知らず、親戀し父親戀しと思ひ死に殺されん、其思ひは親のわざ、親ではなくて仇ぞ」と、かつばと伏して泣き



ければ、

【註】○死に身に觸ずはり死ぬる身であるからには、きつと腹がすはつて、覺悟が定まらぬ。今までは腰がぬけてゐたのが、いざ死ぬとなると、武士の出なれば心もすはり腰も立つのである。○これだから二人の年を合せた五十二才だから。○人間の念慮限りなく人間生きたる間は情慾盡きる時はない。○六根の樂欲一六根は眼耳鼻舌身意の知覺をいふ。樂欲はその欲望。○罪障一成佛のさはり。○生死を離れ生死の世界である現世を去つて成佛する意。○涅槃一梵語にて、安樂、寂滅の意。一切の煩惱迷妄を脱し功徳を圓成し不死不滅の法體。○所々の勳功…軍功を書いたものあり。○箱枕一引出つきの角い枕。○さみせられ一蔑せられ。○まゝにもせん一それはどうでも成るがまゝにまかすとして。○思ひは親のわざ一その思ひをさせるのも親のしわざ。

【譯】與作も有名な弓取の家に生れ武士氣質の男とて、いよ／＼最期場となると、腰のぬけたも立ち心もすはりて土手へ飛下り、馬を小松の根につなぎ、小笹の露を拂ふて、「こゝへ來やれ」といつて小萬の手をとり、顔を眺めて「お前の年の二十一と、自分の三十一歳と、合せて五十二歳、此五十二歳になつてからが、長命だといふ程の年ではない、それを今といし人殺すわよなあ。心にかゝつて言ひたいことはないか」といへば、小萬は「はて可愛い男と死ぬる身が浮世に何の心残りがあるらう。けれども只一つ、いつても返らぬことであるが」といつて、何かいはうとするのをとどめて、與作は「あゝ、それももういらぬ事ぢや、人間生きてゐる間は、情慾は限りもないもので、此六根の欲望にひかれて、思ふほどにいふほどにそれは盡きるものではない。それが皆成佛の罪障の種となるのである。此限りなき念慮妄執を拂ふのを、生死の境である現世を脱して涅槃の門に入ると云ふのだ。我とて云ひたい事は千萬無量にあるが皆それを打捨てた。けれども一つ丈粗相にも、お前に預けた箱枕に先祖の由緒、所々の軍功知行などを書いた一巻を入れておいた。あれを死後に於て見られて諸人から輕蔑され、悪い家名を流すだらう此無念をどうしよう。ようその無念は成るがまゝにもしたところで、不便や可愛や與之介が最期までも我を親とも知らず、親戀し父戀しと思ふて、思ひ死に死ぬだらうが、その思ひも誰がさせるかといふと皆この我のわざだ。

我は親ではなくて仇である」といつてがはと伏して泣くと――

萬「それ私には云ふなく／＼とてこな様いふて泣かしやんす。そんなら私も父様が、年よつて子をさきだて、途方があるまいとしぼや」與「ヲヲ念を残すが迷ひと成る。たとへ奈落に沈む共親の事と子の事が、思はず云はずに居られふか」萬「そふてござる」與「そふじや物」萬「いつそいふて罪作り、親のため子のために、地獄へ落ちてやりませふ」と、二人ひつしと抱き付き、聲の限りを豊國野の風も哀を添へにけり。

【註】○途方があるまい一途方にくれることだろ。○いとしぼや一いとほしの轉で、氣の毒、いたはしの意。○念を残す一思ひ残すが爲に、迷うて成佛の妨げとなる。○聲の限りをとよくの、一聲の限りどよむの意を豊國野にかく。どよぐはどよむ、喧しき意となる。○譯 小萬は「それ私にはいふなく／＼とて、こなさんは自分ではいふて泣きなさる。それなら私も、父様が年をよつてから、子の私を先だたせ、途方に暮れられることであらう。いとほしや。」與作「お、思ひを残すは成佛の迷ひとなる。たとへ奈落に沈んとて、親の事と子のことが、思ひもせず、云ひもせず、ゐられるだらうか」小萬「さうでござんす」與作「さうであるものを。」小萬「いつそいふて罪をつくり、親の爲に、子の爲めに、地獄へ落ちてやりませう」といつて、二人がひしと抱きついて聲の限りに泣き焦るゝのに、豊國野の風もさわぎて哀を添へるのであつた。

與「あれ／＼あれへ見へる早提灯 走り飛脚と覺へたり。道端はいか／＼なり、いざ最期場を換へまいかと、半町ばかり草わくる。飛脚共は汗水にて、「御乳の人の御立願あす四つ迄に命乞の太々神樂、御



願かなへば、御祝義の御褒美は知れたこと。急げ〜と走り行く。奥「あれ聞やつたか、何方のお乳の人、命乞の御願とは養君の煩か。いらぬ命が二つ有、ア、換へらるゝ物ならば」と、悔めば小まゝ涙ながら「夫が叶ふ程ならば、よその子よりもこつちの子、切られて死ぬる身換りに、とても死ぬる此體、髪頭より爪先まで、一分ためしに試されても替りたい助けたい」と、歎きしきづみし誠の心、百千萬のいのりより、なごか祈禱にならざらん。

【註】 ○早提灯―急ぎの提灯。○走り飛脚―駆ける急飛脚。○四つ―十時。○太々神樂―朝の十時までに太神宮に神樂をあげて命乞するのである。○養君の煩か―お乳の人が乳をのませてゐる子供の病氣なのか。○いらぬ命二つ―自分達二人が今死ぬるからいふ。○一分ためしに試され―一分切りにして試し切りにされる。

【譯】 與作は「あれ〜、あれへ見える急ぎの提灯は、急を要する飛脚であるらしい。道端にゐてはどうである、いざ死に場をかへようか」といつて半町ばかり草を分けてはいる。飛脚どもは汗水を流して急ぎながら、「お乳の人の御願立として、明朝十時までに命乞の太々神樂をあげられるのぢや。そして御願がかなへば御祝儀の御褒美は知れたことぢや。急げ〜」といつて走りゆく。與作は「あれ聞いたか、何方の御乳の人か知らぬが、命乞の御願立てとは養育してゐる子供の病氣でもあるのか、此處には不いな命が二つある。あゝ取かへられるものならば」といつて悔むと、小萬は涙ながらに「それが叶ふ程なら、餘所の子よりも、こつちの子の與之介が、斬られて死ぬる身代りとして、どうせ死ぬる此體を、頭の髪から爪先まで一分切りにしてためし切にされても、代つてやりたい助けてやりたい」と歎き沈んだ誠心こそは百千萬の祈りよりも、どうして祈禱にならぬことがあらう。

時に人足四五十人ひそめて來りしが、「ヤア主なき馬の夜中といひ、繫がれ有るは訝し、提灯立て

よと呼ばはつて、忍び提灯さやばげせば萬燈會のごとくなり。「遠くはあらず、一二町野をかれ」と大勢が、「與作小まん」と聲をかけ、漏る方なく取まきたる。奥「南無三寶見付られては二度の恥、いざ死な〜ん」とひらりと抜く、双物の光、「それやこそ」とお徒士衆、やにはに二人を絶りとめ兩方へ引わくる。奥「やれ侍ならば情を知れ。もとは伊達の與作ぞ、一生懸命の時節到來、死損なはせてくれるか。エ、口惜しい」と身をもがく。

【註】 ○忍び提灯鞘外せば―提灯に覆ひがしてあつて、體をかすやうになつてゐる。鞘は覆をいふ。○萬燈會―一萬の燈を點じて罪惡を懺悔する會。○一生懸命の時節―死なねばならぬ時が來たのだ。

【譯】 その時人足達四五十人がひそ〜とやつて來たが、「主人のゐない馬が、夜中である上に繫がれるのは怪しい、提灯をたて〜見ろ」と呼んで、忍び姿の提灯の覆をとると、萬燈會のやうである。「遠方ではあるまい、一二町の間を野狩をやれ」といつて、大勢が、「與作、小萬」といつて聲をかけながら、まるで水も洩らさぬ様に取まいた。與作は「これはしまつた、見付けら〜ては二度の恥ぢや、さ、死なう」といつてひらりと抜くと、双物の光が閃く。それを見ると、お徒士の衆は「それやこそ」といつて、やにはに絶りついで二人をとどめ、兩方へ引わける。與作は即ち「やれ、侍であるなら情を知れ、われこそはもと伊達の與作ぢや。死なねばならぬ時が來て死ぬのぢや。それを死損させてくれるのか、ゑ、口惜しい」といつて身をもがく。

遙か彼方に立てられたる乗物より御意を請け、若侍走りより、「ム、珍しい與作、故傍輩驚坂左内見知られつらん。こんど姫君關東御下向御悦びの時節。今夜の始終御れんみん淺からず、吟味仰付けら



れしに、小まんが箱より貴殿の實名あらはれ、三吉事も實子與之介にまぎれなく、殊に内室お乳の人神妙の心ざし、かれこれ感じ思し召し、三吉の命を助け母儀もおなじく御供にて、兩人を助けんため、忝けなくもあれ迄御乗物を出された。大殿の御前相濟む迄五十人扶持の御合力、小まんもお家へ引取、重ねてよろしく御了簡有るべしとの御意の趣有がたふ存じ、サア御乗物のお供して歸られよ」とぞ述べにける。

【註】 ○乗物―駕籠、これには姫が乗つて來てゐるのである。かうなると芝居だといふ氣があり／＼とする。○今夜の始終―今夜の出來事の一切に對して。○内室御乳の人―貴殿の細君なるお乳の人滋野井の；内室は内儀。○神妙の心ざし―感心な心を。○感じ思召し―姫御前が感心されて。○母儀―三吉から見ても母滋野井のこと。○おなじくお供―三吉もお乳の人も同様に姫のお供をして。○兩人―お前達二人。○お乗物―駕籠に乗つておいてになつた。○御前相濟むまで―お目通の終るまで。○扶持の御合力―扶持米五十人分を下されてのお助け。○重ねてよろしく御了簡―あらためてよろしくお許しの御挨拶。

【譯】 ずつと遠方に置かれた駕籠の中の人から御意を受けて、若い侍が走つて來て、「む、珍らしい興作殿、昔の同輩鶯坂左内なる私を見知つてをれるであらう。今度姫君が關東へお下りになるお悅の時に際し、今夜の事の次第に對して、姫君にはお憫れみの情淺からず、私に取調べを仰せつけられたが、小萬のもつてゐる手箱から貴殿の實名が顯はれ、自然生の三吉事も、貴殿の實子與之介であることにまぎれないことが分り、殊に貴殿の細君であるお乳の人の神妙な心掛を、姫君にはかれこれと感心なされ、三吉が命をお助けなされ、三吉も母親お乳の人も同じく一緒にお供をし、貴殿等二人を助けよう爲に、忝くも姫君にはあれまでお駕籠でおいでなされた。大殿へのお目通のすむまで、五十人扶持のお助けを下され、小萬もお屋敷へ引取つて、改めてよろしくお許しを下さるとの御心の次第を、有難く思つて、さあ、お乗物のお供をしてお歸りあれ」と述べた。

興作草むらに頭を付け、「大殿以來例なき御厚恩報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にてあらぬ體になりくんだり、親子も知らず恥辱の骸をさらすべき所、姫君の御愛憐生々世々に忘れ難し。去りながら女共も忝も、人の笑はぬ心ざしも立てたるに、拙者は何を面目におめ／＼と諸人に生顔があはされん。傍輩の情に死んだ跡と御披露あれ、最期のお暇申し請る。小まんが事はその替りに、頼み存ずる左内殿」と云ひもあへぬに、萬「是々々此小まんに残」とはお内儀様の思召、わたし計りに恥さらせか一人歎けか物思へか。口で云へば人そばへ、先立つて埒あけふ」と、取付く脇差おし止め、奥「そふじや／＼。恩も禮儀も忠孝も、死ぬる身にはへちまの皮。こゝへよれ南無阿彌陀」と、刺違へんとする所を、

【註】 ○不奉公―奉公せぬ罰で。○あらぬ體―落ぶれたあさましい體になり下り。○親子も知らず―親は子を子は親をと互に知らず。○生々世々―現世も未來もいつまでも。○女ども―女房、滋野井をさす。○人の笑はぬ心ざし―死によりて笑を避け、憫をうけるといふのだ。○お内儀様の思召―それがお内儀球即殿の夫人の思召も如何あらんとの意。○口でいへば人そばへ―人そばへは、腹ではさうでもないに、表面で調子づき、さも眞實らしく戯れていふことをいふ。即ち人がとめるだらうと思つて、戯れにこんなことを云ふと思はれてはいやだから先づ先に死んで埒をあけふといふのだ。○へちまの皮―何の役にもたぬ意。

【譯】 興作は草むらに頭をつけて、「大殿に仕へてより例のない程の御恩を受けながら、それを報ひることもしないので、奉公をせざる天罰を蒙りて、あさましい姿に落ぶれ、親子とも互に知り合はず、骸をさらして恥をかくべき筈の所を、姫君のお憐れみを蒙つたことは現世も未來も有りがたくて忘れられませぬ。だが女ども、忝も立派に人に笑はれぬやうにとの志も立てたのに、私は徒らに生きて、何の面目あつて、おめ／＼と世間に顔があはされやう。友達の情愛によりて、最早死んだあとで致し方がないとして、御披露下されい。最期の御暇乞を申しあげる。その代り



には小萬の事はお頼み申す。佐内殿といひも終らぬに、小萬はこれ／＼此私に生き残れとは何のことぢや。お内儀様の思召も如何あらん、私ばかりに恥をさらせといはれるのか、後で生きながらへて一人で泣けといふのか、物思ひをしるといふのか、こんなことを口でいつたのでは上への戯れである。先に立つて埒をあけてしまはうといつて脇差に取つくの押しとめて、興作は「さうぢや／＼、死ぬ身にとつては、恩も禮儀も忠孝も、何にもならぬへちまの皮ぢや、こゝへ寄れ、南無阿彌陀佛といつて、互に刺しちがへて死なんとする所を――」

左内飛入り脇差もぎ、二人を兩へ踏倒し、はつたと睨んで齒嚙をなし、「ヤイ道知らずの人外め。さすが以前、御家中の物主采配迄御ゆるされ、二つ道具をつかせし身が、心迄上々の馬方になつたよな。諸傍輩多けれども親左近右衛門がゑばし子、興作と云名を付けたれば、此左内と己と兄弟分が口惜しい。死なふ／＼とやかましい、死ぬるが左程珍らしいか。弓馬の家の死と云ふは、城責の一番乗、野合戦の一番鎗、好き敵の首取て討死するを侍の死悪い死とは云ふぞ覺えて置け。關の小萬と心中の討死を手柄とは、一切經にも無いこと。僅の恥を思はんより、主君の恩を報ぜぬは、侍たる身の大恥と知らざるか。扱淺ましや後指をさゝれふが、犬畜生といはれふが、我身の恥を振り捨て、厚恩の主君に忠節をはげむこそ、恥を知つたる侍、大丈夫の武士のきつすいといふ物ぞ。此道理合點なく、死んで勝手がよいならば、左内は止めぬ心任せ。去ながら侍ならぬ馬方を刃で死なすは勿體ない。舌をくふか身を投げるか、似合ふた様に在郷馬の口取綱で首／＼れ、情に見物してやらう。エ、侍でもない者に心を盡して氣がつきた」と、大あくびして居たりける。

【註】 ○兩一兩方へ。○道知らずの人外一物の道理の分からぬ、人でなし。○物主一物頭。即ち槍、弓、鐵砲、旗などの組頭。○采配一軍兵を指揮する、塵はたきのやうな具、つまり指揮者になつた意に、此處では用ひた。○二つ道具一二本の槍。武家に道具といへば必ず槍をさす。○つかせし／＼たてさせた。○上々の馬方一立派な馬方になり下つた意。○ゑばし子一昔男子が元服の時、親となるものが、自分の名の一字を新に與へて、烏帽子をかぶらせた。此の親をゑばし親、かぶされた者をゑばし子、名をゑばし名といつた。○興作といふ名…名附親だから、恥かしさを感じるのだ。○やがましい一何かいへば死ぬ／＼と八ヶ間しきいふ。○野合軍一野原にての戦争。○死に悪い死一己むを得ざる死。○一切經…佛典を總稱した語にて、經論律の三藏を併せていふのだ。例のない馬鹿者だといふ意で、一切經になしといつたのだ。○きつすい一生粹、粹のすい、最も立派なもの。○氣がつきた一氣がめいつた。

【譯】 左内は飛入つて脇差をもぎとり、二人を兩方へ踏倒し、はたと睨んで齒がみをして、「いや物の道理を知らぬ、人でなし奴、さすがに以前は御家中の組頭をし、采配をふり指揮までゆるされ、二本の槍を立てさせた身が、性根までが立派な馬方風情になり果て／＼しまつたな。いろ／＼の友達が多いが、親左近右衛門が名づけ親となつて元服させた。そして興作と名をつけてやつたのだから、此左内と汝と兄弟分だが、それが口惜しい。やかましい、何かいへば死なう／＼といふ。死ぬのがそれほど珍らしいのか。武人の家に生れたもの、死といへば、城攻の際一番乗りをして死ぬのか、野原の合戦にて、一番槍として進んで、よい敵の首をとつて討死するのを侍の己むを得ぬ死とはいふぞ。覺えておけ、それなのに、關の小萬と心中の討死をするのを手柄などゝは、馬鹿々々しい、一切經にだとしてありはせぬことぢや。僅かの恥を思ふよりは、主君への恩を報じないのは、侍の身としての大恥だと知らぬか。さてもあさましや、後指をさゝれうが、犬畜生と云はれうが、我身の恥をふりすて、厚恩のある主君に忠節を盡さんと勵むこそは、恥を知つた侍といふもので、大丈夫たる武士の生粹といふものぢやぞ。此道理を合點せず。死んで勝手がよいといふことなら、左内はもうとめはせぬ、心任せぢや。だ、侍でない馬方を、刀で死なせるは勿體な



いことぢや。舌をかみ切るか、身投げでもするか、馬方に似合つたやうに在郷馬の口取綱で首でもくゝるがよい。お情に見物してやらう。ゑゝ武士でもないものに心盡しをして氣かめいつた」といつて、大あくびをしてゐた。

與作わつと泣出し「誤たり左内殿、此仕合の上なれば、心も闇と罷成る。萬事貴殿に任せ置く」と、手を合すれば膝立直し、左「合點いつたか過分く、それでこそ與作なれ。御前は拙者が受取つた」と大音上げて、「與作は御意を重んじ生害思ひとゞまる由、御披露あれ女中衆」と、よばれば御乗物、さんざめかいて昇よする。お乳の人も與之介も、さすが武士の子武士の妻、御前なれば手をついて、四人目と目を見合せ「何事も姫君様、御慈悲ゆへ」と計りにて、嬉し涙に咽びける。姫君與の内ながら、「與作丹波の伊達男と、歌に謠ふはあの人か。關の小まんも草紙に有る繪で見たよりはよい女房、聞けば踊が上手じゃげな。明日は一日逗留せよ。踊を踊つて見せてたも。家老共に云付けて知行をたんとやらせよ」と、生れつゝいたる御詞、其一言に千石千兩、千貫松の千代に八千代に、よろづ與作がもろ果報、小まんが戀もとをり町、仕合よして今はお江戸の刀さしじや。しやんと一筆ふみ馬御免。踊子よする笛つゞみ、馬も太鼓をうつくしき、踊浴衣の上から下迄、いろめき悦び 三重賑はへり。

【註】 ○仕合—幸福。○過分—重疊。○受取つた—引受けた。○さんざめく—陽氣にさわいで。○四人—與作と小萬とお乳の人と與之介。○伊達—著しく目に立つ花やかな男の意。○女房—女の意。○生れつゝいた御詞—生れつゝの惻愴な詞。○千石千兩—千石千兩の價ありの意と更に千貫松につゞけた。○千代八千代—千代を壽ぐ松から千貫千代八千代とつゞけた。○よろづ與

作—萬世と與をかく。○諸果報—有ゆる幸福。○とをり町—戀もかたひの意にかく。通り町 住んでゐたのだ。○お江戸の刀さし—松の落葉、與作踊に、「與作丹波の仕合よしの踊御免のあづま入り、馬方なれど、今はお江戸の刀さし、しやんとさせ、よさ與作へ」からとる。○ふみ馬御免—人をふむ馬をつれて御免くといつて進む意に、一筆文をかくとかけた。即ち下知書を下された意をかけたのである。○馬も太鼓をうつくしき—馬が元氣を出して例の腹太鼓をうつのだ。打つと、うつくしきをかく。○賑—始めは此踊の所作を演じたものらしく、二度目の興行の時、此踊も古いとて「與作踊」の名にて「重井筒」のお房徳兵衛のことを唄として踊つたものと見ゆと、水谷氏はいつてゐる。

【譯】 與作はわつと泣出して「誤つた左内殿、此幸福の上のことであるから、心も暗闇となりました。萬事は貴殿におまかせ申す、よろしく」といつて手を合せると、膝を立直して左内は「合點がいつたか重疊々々、それでこそ與作ぢや。姫御前へのとりなしは拙者が引受けた」と大聲をあげて「與作は御意を重んじ、死ぬことを思ひとゞまる由、女中衆御披露あれ」とよぶと、駕籠輿をがや／＼と陽氣さうに昇きよせる。お乳の人も與之介もさすが武士の妻、武士の子である。姫の御前であるので手をついて四人が目と目を見合せて「何事も姫君様の御慈悲ゆゑにかくは目出度く」といふのみで、嬉し涙にむせんだ。姫君は與の中から、「與作は丹波の伊達男といつて歌に歌はれるのはあの男のことか。關の小萬も繪草紙の繪で見たよりは好い女ぢや。聞けば踊が上手ぢやさうな。明日は一日逗留しやう。踊を踊つて見せておくれ。家老達にいひつけて知行を澤山やらせることにしよう」と生れつゝいた惻愴な詞をかける。其一言に千石千兩の價あり。即ち千貫松の盛えるによせて、千代に八千代に萬代までもと與作のもろ／＼の幸福をことほぎ、小萬が戀も通り、評判が町に通り、仕合よくて與作は今江戸で刀さしの身である。人を踏む馬が御免々々といつて来て、しやんと一筆下知書を下された。かくして踊子を寄せる笛や鼓が鳴り、馬も元氣を出して腹鼓をうち、美しい踊り浴衣が上から下まですらりとそろつて、いろめき立つて悦び賑つた。



與作おどり

クドキゑい〜〜〜紺屋の徳兵衛、房にもとよりこいそあこみの、内の身代灰汁でも剝げず。口入  
 たのみて銀四百目を、かりにやとふて女房と名づけ、阿房三太を、らむうげん太で、やまけふづくる  
 内儀の心、男いとしし子もまた可愛。しはい隠居の手前をつつみ、宵寝する子を我夫ぞと、いひまげ  
 すます鬢かづら、徳兵衛不義じやとはやまるさほひ、顔は十めんぐめんもいらす、羽織ひらりとやッ  
 く〜此々この〜我子のこの〜、胸ぐら取つて引ずり出す。宵よりつものうき涙、理づめ義理づめ  
 情づめ、如才内儀の貞女にめでて、クドキ金も投げ出し房との中を、あすは神明こよひの月ぞ、思ひ  
 切つたと誓言すれど、こよひちぎりの戀風は、生薑酒でもふせがれず、氣もふは〜の玉子酒、まゝ  
 よ行つてのさよ、左様も成るまいか。どふせふか、かうせうが酒、辻にしよつつかばふて、思案中橋  
 こひしさまさる、胸かきまはす玉子酒、心ふたつに打ちわつて、君が方へと走り行く。

【註】 ○くどき〜くどき節又はやんれ節ともいふ一種の俚曲にて語る意。○紺屋の徳兵衛「重井筒」の主人公にて、お房にほれ  
 て心中した。此重井筒の大筋を、そのまゝに書まとめたのが、此「與作おどり」の文句である。○こひそめ込みの〜濃い染込にて  
 紺屋の徳兵衛故、染込の語を用ひた、又濃いに戀をかく。○内の身代灰汁でもはげず〜此始から、此句まで、「天の綱島」の最初  
 にふざけて用ひてある。放蕩して身代が灰汁でもはげぬといふのは非論理的だ。即ち身代ほどの灰汁でもはげぬほど濃くそめこ  
 んでゐる意だ。○口入〜くちいれとも讀まぬことないが、く〜の方がよい。主に金銭貸借の世話人をいふ。「重井筒」では人置と

いつてゐる。○かりにやとつて〜假りにと借りにとをかく。金四百目をかりる爲に、かりに女をやとつて来て、女房に見せかけ  
 て、女房の不在に乗じて、女房の保証あるが如く見せるのである。○四百目〜銀六十匁が一兩の勘定故に七兩ばかり。○阿房三  
 太〜丁稚小僧阿房の三太をだまして、らむうげんたといふお山を買ふ爲の金をやりて、他から女を借り來り、女房代りをさせた  
 ことをしやべらせぬやうにするのである。らむうげんたのうむは意なし。○やまけふづくる〜やまは意なし、全體はふづくる、  
 ほぜくる、さぐる。心をさぐるの意。○内儀〜徳兵衛の女房をさす。○男いと〜内儀は自分の良人徳兵衛も可愛く、又子供も  
 可愛く、それで、子供の頭にかつらをかぶせて寝かしておいて、隠居の父が來て、徳兵衛を外出させたことをなじるに乘じ、子  
 供を徳兵衛らしく見せかけるをいふ。○しはい〜手ごはい。頑固な。○いひ曲げます〜鬢かづらを子供にかぶらせて、それを徳  
 兵衛だ、といひ曲げてごまかす。○不義じや〜そのびんかづらを見ると、徳兵衛はまた、女房が不義をしてゐるのだといつて、即斷す  
 るをいふ。○顔は十面工面もいらす〜徳兵衛は澁面をつくり、何の工面もせず。十面くめんと語呂を合せたのだ。○羽織ひらり〜  
 徳兵衛は家に歸るなり羽織をひらりと投げてから後、次のことをやつたと出てゐる。○我子のこの〜この〜は、すぐ前の  
 拍子や語呂である。○胸ぐらとつて〜問夫と思ひちがへて、自分の子の、かつらをかぶつたの胸倉とつて引ずり出すと出て  
 ゐる。○つものうき涙〜憂き苦の涙を徳兵衛の女房が流し、理づめ情づめて、徳兵衛を説法するのである。○如才内儀の貞女〜  
 如才のない内儀は理づめにして徳兵衛を説法する貞女である。それによりて、徳兵衛は一旦かりた金を投出して、一度本心に立  
 歸るが、やがて隠居の家へ詫びにゆく途中に、ふら〜とお房をたづねて行つて心中するのである。○明日は神明こよひの月ぞ  
 「重井筒」に明日は伊勢の御縁日、今宵の月に蹴殺され、三世の諸佛の御罰を受け、二人の親に冥途かららみ殺される法もあ  
 れ、ふつつと思ひ切つたとあるを引く。○こよひちぎり〜今宵思ひきると誓つた戀は。○生薑酒〜徳兵衛の女房が、生薑酒をこ  
 しらへてのませるといふをさす。○玉子酒〜「重井筒」に「可愛や女房が、どうぞ比銀の首尾なつて、玉子酒のむやうにしたこと  
 ちやと敷きしを」とあり又「胸かきまはす玉子酒二つに割つて君が方へと走りゆく」とあるをとる。○どうせうかかうせうが酒〜  
 どうせうか、かうせうか即ち徳兵衛、お房の處へゆかうか、隠居の處へ行かうかと、迷ふてゐる心をうつした處を引いたのだ。  
 ○しよつつかばふて〜はひつつかばう、しやがむの意。○思案中橋〜中橋は遊廓島の内、六軒町へゆく途中にある橋は。○君が方へ〜  
 君は遊廓の君にて、玉子の黄身にかく。



【譯】 ぬい／＼紺屋の徳兵衛は、もとより房に濃い染め込の身としてほれこんで、内の身代ほどの灰汁でもはげなくなつて、世話人をたのみて銀四百目をかる爲に、女をかりに傭入れて女房と偽り名づけ、阿房の三太に、お山のうげん太を買はせる爲の金をやりて心をさぐる。内儀の心では、男も可愛いので、手ごはい隠居の手前をうま／＼ごま化して、宵寝した子を我夫といひ偽り、巧に鬻かづらでごま化したのを見ると、徳兵衛は、女房が不義をしてるのであると早合點し、勢ひよく、澁面に何の工面もせず、羽織をひらりとぬぎやりて、この／＼我子のこの／＼胸倉をとつて引すり出した。徳兵衛の女房は、宵から積る憂き苦の涙を流しながら、理づめ義理づめ情づめで如才なく貞女をたてるので、それがために、徳兵衛は金も投出し、あすは伊勢太神宮の縁日、今宵の月に蹴ころされてもうそはつかぬ、お房との仲をふつりと思ひ切つたと誓をたてるが、如何にせん、今宵切れると契つた戀風は、生姜酒を飲んだとてな／＼防ぐことは出来ず、氣もふは／＼として、お房が、銀が首尾よく出来たら玉子酒でも飲みたいといつてゐたから、まよよ、房のところへ行かう、いやさうもなるまいか、どうせうかかうせうかと辻にしやつくばつて思案の最中に、中橋が戀しくなり、胸をかきまはす玉子酒ではない心二つに迷ふ玉子を二つに割つて、黄身のある方即遊君の方へ走つてゆく。

跡は内儀がナ獨寝てさ、房は日くれて人まつ隙の、火廻しすれば飛脚がせがむ。肥後屋の迎ひはやとく徳兵衛、兄の病氣を見廻顔で、來ても互の心の底は、云ふにいはいぬあしどりの、た／＼とすれば病者のくせの長話し、何とせんきのあら腹いたや、痛や痛やと空腹病めど、空寒き夜に是非に泊れとゆふ霜の、ちくの炬燵にふとんと轉けて、泣いて忍ぶは隣の二階、そろり／＼、そろり／＼、さし足は、徳「誰じや房か」房「徳様かいの」これは夢かと抱き付き縋り、憂をさ／＼やき辛さをくど

き、死なでかなはぬ身のさしづめと、なりゆく果ぞあはれなり。房を背中に大屋根傳ひ、足もよろ／＼夜は何時ぞ、七つ八つの芝居の仕組、浮名ばかりは残れども、残らぬものは命ぞと、いとゞ涙の樽屋町、ありて再び此娑婆へ、いつか高津の日親様で、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、蓮華ひとつと脇差を、胸におしあて只一刀、あつと叫びし一聲に、づんぶり染の紺屋の徳びやうゑ、お房が頓證菩提の回向、水を手向て再び盆を、重ね井筒と名のたつにさ。千歳樂萬歳樂、おどりよろこぶ御代ぞたのしき。

【註】○人まつ隙の—徳兵衛の銀をこしらへて來るといつたをまつてるのだ。○火廻しすれば—紙に火をつけて廻して遊んでゐるのだ。○飛脚がせがむ—京の父親の處へ銀と手紙をやる爲に飛脚をたのんでゐるので、飛脚は二度も來てまだか／＼といふのだ。○向ひの肥後屋—徳兵衛が房の家を訪れた折しも、お房の家の向、肥後屋から、お房に口がかゝて來るのである。實は徳兵衛がそれを頼んだのだが、二人の間はお房の家の人々によりて妨げられるのである。○はやとく—早く疾く。肥後屋の迎がはやく疾くお房をよこせといつて來る。○云ふに云はれぬおし鳥—お房と徳兵衛とは鴛鴦の仲ながら、心の底をお房の家にてはいふことが出来ぬのである。それだからおしと啞とかけたのだ。お房の家の主人は徳兵衛の兄で、兄夫婦が二人の間を妨げるのだ。○病者のくせ—徳兵衛は兄の病氣見舞にかこつけて、お房をたづねたのである。それを兄夫婦は二人の間をさかんとして、長話して徳兵衛を歸らせぬのだ。○せんきのあら腹いた—せんきが起つて徳兵衛は腹がいたくて歸つたとする、あらはおやの意。○空腹—うそ痛の腹。○ゆふ霜—夕霜のおくとつとく。いふとかく。○ふとんと—蒲團をかぶり、すんとと倒れとをかく。○泣いて忍ぶ—泣いてゐると、房が隣の二階から忍んで來るのだ。○死なでかなはぬ—死なんではをれぬ、身のつまり。○七つ八つの芝居の仕組—「重井筒」の道行の處に、「こゝは竹田か夜は何時ぞ。五つ六つ四つ千日寺の鐘も八つか七つの芝居、二人が噂は世話狂言の仕組となるならば」とあるからとる。○樽屋町—重井筒には、屋根傳ひに、二人は忍びにげて、樽屋町に下りるとある。樽は



涙がたるにかく。○いつか高津―何時か来うと高津にかく。高はかうとよむ。○日親様―高津正法寺の境内に日親堂あり。日親は法華宗の名僧。○蓮華ひとつ―ひとつの蓮華の臺の意。○づんぶり染―づぶりと血に染る意を、徳兵衛が紺屋であるので、ざぶりと藍つぼにつけたことに云ひかけた。○頓証菩提―好機に出遇つて頓にさとりを開くをいふ。○回向―さとりを開き成佛するやうにと讀經し祈ること。○再び盆を―此をどりを前のお房徳兵衛の時やつて、此芝居の時、又盆をどりでやるから、再び盆を重ねといった。○重ね井筒―井筒屋にて重ねて心中があつたといふ意から重ね井筒と評判がたつた。

【譯】徳兵衛がお房の處へ走り行つた後は、その女房は淋しく獨り寝をしたさ。房は日が暮れて、徳兵衛を待つ隙に火廻し遊をしてゐると、飛脚が来てしきりと何か用があるといふ話だつたがどうかといつて、用事を強請むのである。お房の家の向ひの肥後屋の迎ひは、早く疾くお房をよこせとせき立て、徳兵衛は、兄の病氣を見舞ふ顔附にてやつて來ても、お房と徳兵衛との二人は、互に心の底をいふことが出來ず、鴛鴦ではなくて啞の様に立とうとすると、徳兵衛の兄は病人のくせに長話をして、何とせうもしようなく、病氣の爲に、あら、腹がいたい、痛や／＼と、うそ胸が痛むが如くいへども、空の寒い夜のこと故是非にとまれといふて、夕霜のおく夜を炬燵にふとんをかけ、すところんで泣いてゐると、そろり／＼と、さし足で忍んで來る足音がきこゑる。徳は即ち「誰ぢや、房か」といふと、房は「徳様かいの、これは夢であらうか」といつて、抱きつき、すがりつき、憂いことをさゝやき合ひ、辛さをさゝやき合ひ、死なんではゐられぬ身の詰となりゆく果はあはれである。徳兵衛は即ち房を背に負うて大屋根傳ひに、足もよろ／＼とたどつてゆくと、夜は何時であらうか、あけ方の四時か二時頃で、その頃から木戸をあける芝居の仕組にされて、二人の浮き名は残るが、残らないで消えてゆくのはこの命であると、甚しく涙を垂れて、樽屋町にて屋根、即ち空中から再び娑婆へ下りて、いつか高津の日親様へ來て、南無妙法蓮華經をとなへ一蓮托生、一つの蓮臺にといつて脇差におしあて、只一刀でお房を刺し殺すと、女はあつと一聲叫んだばかりで眼をつぶり、徳兵衛は即ちその血汐につぶりと染つて、お房の頓證菩提を祈り、回向して水を手向けて、二度盆をどりを重ね、重ね井筒の名をたてた。その名のたつちなみて千歳樂萬歳樂を奏しながら踊り喜ぶ御代はたのしいことよ。

おなつ  
清十郎

## 五十年忌歌念佛



お夏の  
清十郎

## 五十年忌歌念佛

### 解 説

お夏清十郎といへば、少し物を讀んだ程のもので、せめてその名を知らぬものなき位に有名なものであるが、その事實は寛文の初頃にあつたものゝやうである。爾來此實説は色々の人々によつて題材にせられ、やがて近松西鶴によつても扱はれていよく有名なものとなり、その後にも馬琴種彦などの作家によつても取扱はれ、明治に至つては、坪内博士によつて「お夏狂亂」と題して新舞踊劇となつて現はれた。

此題材の取扱ひ方は各人々によつて異り、西鶴は「五人女」に於て、清十郎を室の津の酒屋和泉屋清右衛門の息子とし、彼は放蕩の爲に家を出て、姫路の但馬屋九左衛門の手代となつて實直に働く中、娘お夏と通じ、大阪に逃げんとして兎手に捕はれ、但馬屋にて七百兩紛失の嫌疑と主人の娘誘拐の罪によつて死刑に處せられ、お夏は尼になつてを弔ふといふのであるが、近松の取扱方は少しくそれと異つてゐる。

五十年忌歌念佛に於ては、清十郎は和泉の國の百姓佐治右衛門の息子にて、姫路の米問屋但馬屋九左衛門の娘お夏と契つてる中に、お夏の結婚話もち上る。清十郎は此時弱點につけこまれ、同輩手代勘十郎から七十兩の金を無



心されて、お夏から借りて與へんとする折、勘十郎は、お夏の嫁入道具の代を横領して、清十郎の父親をたらし、父親が、お夏の嫁入に故障を申し出たとして、誤魔化して嫁入道具の受取方を延引し、表面は清十郎父子の陰謀によるものとして、清十郎を但馬屋から逐ひ出させる。清十郎は憤然として勘十郎を殺さんとして、あやまつて下手代源十郎を殺す。かくて清十郎は逃廻つて遂に死刑ときまつて、煙管で自害をする。狂亂のお夏は一旦自害するが、やがて正氣にかへつて清十郎の後を弔ふといふのである。

清十郎は近松にも西鶴にも非常に好男子のやうに書いてあり、近松はお夏のことをそれほど美人など、いつてはゐないが、西鶴は彼女を大變な美人としてゐる。けれども巷間では彼女が可成な醜婦であつたとしての説もある。何れにしても當時有名な話であつたことは、色々の俗説となつて二人のことが残つてゐるのでも分り、西澤一風の「亂歴三本槍」によると、お夏は片上といふ地に茶店を出して七十餘歳まで生き、始めは、氣があつたが、やがて下地の悪女に寄る年波の皺の皺に誰も顔をそむけて通つたなどといつてゐる。

此外題に五十年忌とあるのは、二人の五十年忌追善一に此作を公にした意で、それから又清十郎の妹お俊と、その許嫁のおさんとの二人が歌比丘尼となつて、その頃念佛を歌にして歌つたといふ、歌念佛をやりながら、清十郎をさがしあるいたといふことにかけて、歌念佛と題したものである。

おなつ  
清十郎 五十年忌歌念佛

上之卷

序詞通ひ車は、小町が仇の情に乗せられ、閨の扇は、瓊女が親骨にせかれ、形身の烏帽子は、行平の云ひかぶり、柏木の鞠、さんろが笛、古今其品かはれ共、皆これ戀路の寄せ榎、根太も根強き門柱、其但馬屋の初色に、立つや浮名の濡草鞋、笠が能く似た菅笠の、雫積りて戀の淵、湧きて流るゝ和泉の國、水間の里の佐治右衛門、畠作りの田烏や、鳶が生んだる高給取の、手代は主の代りをも、清十郎といふ子を持つて、老の入まへ暮しよき、正月著物播磨瀉、延引ながら年頭に、娘はおしゆん嫁の名も、三人連の木賃宿。明日は出船の名残とて、道頓堀の芝居過ぎ、名所／＼は大坂の、娘子達に交りても、打てず押されず手入らずの、田舎生れのおぼこにも、父の乗りたる便船の、しるしは如何に鋪綱、手繰りついたぞ日は傾く、いざ急がんとちよこ／＼走り、とは川口にぞ著にける。



【註】 ○通じ草—深草の少將は小野小町を戀ひて九十九夜まで、車の榻に印をつけては通ひつゞけたが、小町は遂に遇はなかつたことをいふ。○仇の情—深草少將の心を遂にくんでやらなかつた小町の心をいつたので、仇の情即ち偽の情の意。此偽。情にのせられて少將は通つた。○閨の扇…漢の成帝の寵姫班女は趙飛燕の爲に寵を奪はれた。班女は即ち、閨の扇が秋になつてすてられるに自分の身をたとへ、それを詩に作つて悲んだ。謡曲「班女」には吉田少將と野上の遊女花子との物語として、同じ様な事が諷はれてゐるが、それには親の爲に二人が逢ふ瀬をせかれるとしてある。即ち閨の扇は班女が親骨にせかれるといつたのだ。

○形見の烏帽子—謡曲「松風」にあり。在原行平が、須磨浦にて松風村雨の二女に別れる時、形見として烏帽子狩衣を與へ、女はそれを見る度に思ひみだれたといふ。○言ひかぶり—いひが、り。○柏木の鞠—源氏物語「若菜」の巻に出づ。柏木右工門督が、六條院にて蹴鞠の遊の時、女三宮に近づき、遂に宮と浮名を流したをいふ。○さんろが笛—近松作の淨るり「用明天皇職人鑑」に出づ。用明天皇まだ花人親王と云ひし時、山路と名をかへ、牛飼に身をやつして笛を吹き、豊後眞野の長者の娘玉世姫に親まれしことをいふ。○寄せがまち—かまちは框にて、商家の入口の敷居のことで、晝ははづし、夜ははめて戸をしめるに用ふるをいふ。戀の合せ即ち戀に皆關係ありの意。これから、ねだ又は柱などを出した。○根太—床下のたるき。○但馬屋—お夏の家の屋號。○初色—美しき娘の意で、お夏をさす。○立つや浮名の濡草鞋—濡れ事の浮き名の立つ意。草鞋といつたのはあとの笠と共に、最初田舎から笠や草鞋で出て來た清十郎にかゝるのだ。○笠がよく似た菅笠の—「向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよく似た菅笠が」の歌にとる。即ち清十郎によく似た菅笠の。○湧きて流る、和泉—「みかの原湧きて流る、泉川いつみきとてか戀しかるらん」の歌を半分とりて和泉の國といふ。○水間の里—和泉の國にあり西鶴五人女には、清十郎の父は播州室津の酒造家和泉屋清左衛門とあり、近松は此屋號から、泉州水間の百姓とし欺き易き正直親父とした。○田島—田島と同じ意。○鷹が生んだる高給取—醜い親か美しい子を生んだ意、高をたかとよませ、鷹が鷹を生む諺からとる。○清十郎—手代となりて主人の代りをもせい十郎にかく。せいはするの意。○老の入前—老後の收入。○正月着物播磨湯—正月着物をきて、播磨湯を越える意。播は着物を張るにかく。○嫁の名も三人連—嫁の名もおさんと云ひ、娘と嫁、自分と三人連、三人に、さんをか。○芝居過ぎ—芝居見物もすまして、これが後の笠をかへることの伏線となるのだ。○名所—は大坂の—多くの名所名所の見物もやり、大坂の大に多い意をか。○打てず押されず—大坂の娘に交りても負けず、劣らずおされることもなく。○手入らずの…おぼこ—世なれぬ處女。○鋪綱—舟の旗印に、綱のついた錨をそめだしてゐるのだ。○とは川口—急ぐことをとはかは、

又はとつかはといふ、それと中國四國等への乗船場安治川口とをか。

【譯】 深草少將は、小野の小町が偽りの情に乗せられて、九十九夜も車によつて通ひ、班婕妤が趙飛燕の爲に漢の成帝の寵を奪はれ、捨扇として閨から追はれたが如く、謡曲「班女」の野上の遊女は、吉田の少將との逢瀬を親の爲にせかれ、謡曲「松風」の在原の行平が、須磨の浦にて形見として松風に、帽子狩衣をのこしたのは行平の云ひが、りであり、柏木右衛門の督が蹴鞠の縁によりて、女三宮になじみ、山路が笛を吹いて玉世姫と親しんだことなど、古から今に至るまで、品こそ變れ、皆これ戀に關係ある寄せ合せものである。同じ戀に關係ある家の、寄せ框も、根太も、根強き門柱もある但馬屋の美しき娘のお夏に、濡れ事の浮名が立つて、笠や草鞋で田舎から出て來た男の、菅笠の雫が積つて二人の間に戀の淵となり、その淵から湧き出して流れる泉ではない、和泉の國の、水間の里の島作の百姓に佐治右衛門といふがある。彼は清十郎といふ子をもつてゐるが、その子はまるで鳶の生んだ鷹ともいふべく、但馬屋の手代として高い給料をとり、主の代りをつとめることもあるといふ風で、佐治右衛門は老いのか身として収入は多く、暮しよき身分であるが、それが今正月着物を着て播磨湯を渡り、延ながら年頭の禮に出るべく、娘のお俊と嫁の名もおさんといふをつれ、三人連れで木賃宿にとまつた。

女達は明日は船が出るといふので、その名残にと、道頓堀の芝居も見しまひ、多くの名所／＼も見物し、大阪の娘達の中に交りても、まけず劣らず氣押されることもなく、田舎生れのおぼこ娘として、平氣で見物を終つて、綱のついた錨を旗印にそめ出し、父が乗り込んで待つてゐる便船に、手ぐりつくべく、日の暮れ方をいそいでちよこ／＼と走つて、忙がはしく安治川口に着いたのであつた。

親佐治衛門苦打上げて、「やあこりや／＼、此處じや／＼。はれやれ／＼大膽な、暮れる迄大坂の町をぶら／＼と、女の身にて何事ぞ。昨夜も東の横堀で、男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉



んづして居たを、いくはなか見て来た。扱ひになりしやら、錢をついたも慥たしかに見た。大坂の喧嘩は大  
方相場は極きまつて、十文では事が濟きむ。喧嘩は降物くだりもの、和御寮達わごりやうだち若しもの事があつたり共、いかに九文半  
文でも勘忍かんじんばしめさるな」と、眞顔まがはにいひしも殊勝しゆしやうなり。

【註】 昔一萱菅などで編んだもの、雨露をふせぐ舟の屋根。○濱納屋―濱は即ち川岸、其納屋は密淫賣の巢窟。○幾はな―幾組と同じ、はなは群の意。○扱ひなる―和談になる。○錢をついた―錢を一つ／＼物の上へ敷へてつき出すをいふ。○十文―密淫賣に惣嫁といふのがある。肉の價は十文で、老人は、私娼が客を引くのを喧嘩と見たのだ。○喧嘩は降り物―喧嘩はいつぶるかわからぬ。○和御寮達―お前達の意。御寮は敬稱。○もしものこと―萬一喧嘩をすることがあつても。○九文きなか……きなかとは半錢のこと、十文の中、半文でも負けてはならぬと解する説あるが、之に對して樋口氏曰、眞顔になつていふが殊勝とあるから見ても、十文なら勘忍するといふことを前提としてるのでなくて、九文でも半錢でも幾らでも、金では勘忍するなど、田舎者らしく眞剣にいつたのだと。○勘忍はしめさるな―ばしは強める辭で、勘忍しめさるな、するな。○殊勝―感心、神妙。

【譯】 親佐治衛門は船の苦をあげて、「や、こりや／＼此處ぢや／＼、はれ、やれ／＼、大膽なことをしたものでちや。日の暮れるまで大阪の町をぶら／＼と女の身であるくなんて何事ぢや。昨夜も東の横堀で、男と女とが喧嘩をして川岸の納屋の下で、組みつ轉びつしてゐたのを幾組か見て来た。和談になつたかしらぬが、錢を數へてゐるのもたしかに見た。大阪の喧嘩は大抵相場はきまつて、十文で事が濟むやうだ。喧嘩はいつどこで降るか分らぬもの故、お前達もしかのことで喧嘩をしかけられることがあつても、どうして、十文でも半文でも、金なんぞで勘忍するやうなことをするな」と眞面目になつて、いふたのも感心である

一人の娘打笑ひ、「さればいの、今日も一日芝居見て、それから此處の川口の八景とやら見物して、つい今になりし」とて、船に乗れば佐治右衛門、草履菅笠片付けて、「まづ／＼休めや」といふ處へ、

向ふの船の船頭來り、「和泉の國の佐治右衛門殿は此船にか。此方の船の乗手衆が、ちとお目に懸り度い。播州姫路但馬屋の勘十郎といへば、合點じやげな」とぞ申ける。佐治右衛門聞も敢へず、「ヲ、知つた／＼、但馬屋勘十郎殿、わしが息子の傍輩衆、參つてお目にかゝりませう」と、上らんとする處に、「是へ見えし」と勘十郎、「何んと／＼親仁殿」さても年も寄らぬは。不思議な處で逢ひました、先御無事にて一段清十郎も息災で、商ひの用事にて此の處へ上りしが、はや下つたも存せず。且那も折々噂うはさなり、何故に見へぬ」といひければ、佐、忍い勘十郎殿様お久しう御座ります。嫁子供が申すにも親仁ちと且那樣へ行かつしやれ。何かのお禮も申さつしやれと申します。ヲ、／＼とは申ながら、正眞の貧乏隙ひまなし。物作りの事なれば、いや大根時の綿時の、瓜を蒔くは、茄子を作るは牛蒡ごんぼう豆まめ粟あわ粟あわよ黍あやよ藍時よ、麥を蒔くぞ赤らむぞ、田を植へては草を取る、穂が出れば刈ります。粃あみになれば磨すります、米になれば炊たます、飯になれば食たます。何んじやし只居ただる間とてなく、御無沙汰」とこそ語りけれ。

【註】 ○合點じやげな―お分りになるさうな。○是へ見えしと勘十郎―之へ見えましたと船頭がいふや否や勘十郎は……○はや下つたも存せず―清十郎も息災で大坂へ來たが、もう歸つたかも知らぬ。○殿様―勘十郎に對して馬鹿丁寧ばかていじんにいつたのだ。○何ぢやし―何やかとて。しは只助字。

【譯】 二人の娘が笑つて「さればぢや、今日も一日芝居を見て、それから此處の川口の八景とやらいふのを見て、つ



いこんなになりました」といつて船に乗ると、佐治右衛門は、女の草履や菅笠などを片づけ、「まあまあ休むがよい」といつてる處へ、向ふにある船の船頭が来て、和泉の國の佐治右衛門殿は此船においでなされるか、此方の船に乗つて人が少しお目にかゝりたいと云はれる。此方は播州姫路但馬屋の勘十郎といへばお分りになるさうです」と云つた。佐治は聞きも終らず、「おゝ知つてゝ、息子の朋輩ぢや、行つてお目にかゝりませう」といつて上らうとする處へ、「いや之においでなされました」と船頭のいふ聲に應じて出て来た勘十郎、「いやどうぢや親仁殿、さても年の寄らぬことぢやな。不思議な處でお目にかゝる。先づ御無事で一段と結構なこと。清十郎も無事で商用で此大阪へ来たのだが、もう下つて歸つたかもしれぬ。旦那も時々お噂をしておいでぢや、どうしておいでないのぢや」といへば、佐治は「えい勘十郎殿、お久しりございます。嫁や子供が申すにも、親仁ちと旦那様の處へも顔を出すがよい、何かのお禮も申すがよいと、そこで私はさうぢや」とは申すものゝ、本當の貧乏際なしで、百姓の事ゆゑ、いや大根時が来たのだの、綿の時節が来たのだと、或は瓜を蒔く、だ茄子を作る時だ、牛蒡昌ぢや、豆昌ぢや、粟を蒔く時だ、黍まく時だ、藍の時節だ、やれ麥を蒔くといつてると、いつかそれが熟れて来る、田を植える草取をせねばならず、穂が出れば刈ります、親をとれば又これを白でひきます、米にする、炊く、食べる、と、何やかと、只ぼかんとしてゐる間とて少しもなく、御無沙汰ばかりしてをります」と語つた。

勘十郎打ち肯き、「尤々、何方も隙はなし。して此船に乗つて何くへの下りぞ」といへば、佐「先旦那へ春の御禮も申し、清十郎にも逢はんと存じ、これは妹お俊、彼は行へ〜清十郎が留守をもさせんと存じ、おさんと申す娘分、速て姫路く罷り下る。迎もの事に御同道致さん」と云ければ、勘「イヤコレ逢ひたいといふは其事よ。先下る事は入らぬもの。清十郎が沙汰を聞かれぬか、扱々氣の毒笑止な事。旦那の娘お夏様と密通して、お夏様のお腹は茶壺を抱いた様になる。それに立野の一門中へ祝言が極

つて、嫁入道具も出来揃ひ、身共が道具を請取つて、下り次第の嫁入。彼の腹の土産物、聲から詮議があるは定。否でも應でも清十郎は、片假名の木の空で此様に手を擴げ、引張風は知れた事。親兄弟も同罪なり。どうぞ嫁入の無い先に、身を引く思案がさせたさに、知らせます」とおどしける。

【註】○留守をもさせて一女房として家を守らせて。○迎ものこと一同じことなら、一層のことなどの意。○茶壺をだいたやう茶つぽはふくれてるが、それをだいて更に腹がふくれた意。○片假名の木の空……はりつけの柱がキの字に似てゐるからいつたので、その木の高い處へ引張風のやうにせられる。主人の娘と不義をして重罪に處せられる意。

【譯】勘十郎はうなづいて、「お前のいはれる通りぢや、どちらにも隙といふものはない。ところで此船に乗つてどちらへお下りぢや」といふと、佐治右は「先づ旦那へ新春のお禮も申し、清十郎にも逢はうと思ひ、その爲に、此妹のお俊と、あの娘は行くゆくは清十郎の妻として、家を守らせうと存ずるおさんと申すものぢやが、二人をつれて姫路へ下るのぢや。一同じことなら、御同道致ませう」といへば、勘十郎は、「いやさ、逢ひたいといふのはその事でぢや、先づ〜下りなされることはいらぬぞや。清十郎に關する風聞をきかれぬのか、さて〜氣の毒なこと、馬鹿げたことぢや。清十郎は旦那の娘お夏様と密通して、お夏様のお腹は茶壺をだいたやうにふくれる。その上に立野の一族の間へ祝言することにきまつて、嫁入道具も出来揃ひ、私が道具を請取つて、下り次第の嫁入といふことになつてゐる。ところであの腹の土産物は聲から詮議のあるのはきまつてゐる。さうなると、いやでも應でも、清十郎は片假名の木の字のやうな形の礎の木の上で、かういふ風に手をひろげて、引張風のやうにされるのは知れたことぢや。と同時に親も兄弟も同罪にされるのぢや。どうかして嫁入のない先に手を引く思案がさせたいと思つて知らせます」といつて脅した。

親は在所の律義者、何の企の有共知らず、ア、お前は如來様。内々如何やら承り、氣遣いたせし折



柄なり。傍輩のよしみとて御知せ有難し。年六十に餘つて、火屋へ片足踏込んで、一人の悴が木の空で、引張風になるのが、そもや見て居られふか。悴が命助かる様に、御思案頼み奉る。さりとは誰に似て下心の悪い悴め」と何處で聞いてかふことと、泣いて口説くぞ哀れなる。

【註】○在所―田舎の意に此處では用ひられてゐる。○律義者―正直者。○如來様―慈悲深い親切な人の意。○火屋―火葬場。○片足踏込む―そんな年になつて……。○下心―此頃の通用語で、只心と同意。○どこで聞いてかふこと―下心の悪い……といふ語は、淨るりにはいつも出て來る語だ。それを此田舎者の老人が、どこで聞いたものか、かゝる時にいふべきであると思得ていつたの意。

【譯】親佐治は田舎の正直者で、どんな企みがあるとも知らず、「あゝお前様は如來様のやうな慈悲深い方ぢや、内々何とかきいて心配してゐた折ではある。それを友達のよしみにお知らせ下されて有難い。私は年六十歳にもなり火葬場へ片足をふみ込むやうな年配になつて、一人息子が礎にあふのをどうして見てゐられるものか。悴の命が助かるやうに、御思案をお頼み申します。それにしても、一體誰に似て、そんな下心の悪い悴になつたものやら」と、淨るり通用の此下心の悪い悴めといふ語を、かうした時に使ふものだと、どうして何處で聞いたものか、ちやんと心得て、いひながら泣き口説いてゐるはあはれである。

時に船場に案内して、「姫路の本町但馬屋の勘十郎様のお船は是か。難波橋の蒔繪屋誂へのお道具、今宵船に積まんと存じ、銀子請取申さん爲、参りたり」とぞいひ入れける。勘「あれ親仁聞いてか。銀を渡せば道具が下る、道具が下れば嫁入が有、嫁入があれば清十郎が引張風。何んと此處が談合、身は國へ歸つて且那へは道具屋が出来さぬ分て濟して置く。彼の道具屋の手前は親仁から、百五十兩か八貫

目渡してさへ置いたれば、波風立たず嫁入が延びる。延びさへすれば清十郎隙を取らうと走らふと、此勘十郎が請取つた。此處は親仁太ながら、八貫目何んぞいの、田地賣つても子の爲じや、出したがよい」と、いひも果てぬに佐治右衛門、ぎよつとして、「エ、あり様は一口に八貫目、たとへ清十郎引張風にならふが、鹽鮭にならふが、世が泥の海に成るとても一文も錢は無い。エ、此方は皮か身か合點が往かぬ」と顔鬚め、立つて入るを引止め、勘「それは親仁廻氣な。然らば銀も入らぬ思案が有る。彼の蒔繪屋に向ふて、此娘には構ひあつて嫁入はさせぬ、道具は其方へ預けた。銀渡したら損で有ふと一言いへば濟むじやが、成るまいか」といひければ、佐「はハテ金さへいらぬ事ならば、我子の爲じや申さずしては」と、表の間にぞ出てにける。

【註】○案内して―自ら次の如く案内しての意。即ち此句の終の「とぞ云ひ入りける」は「と案内して入つた」とあると同しだ。○談合―相談ごとぢやの意。○百五十兩か八貫目―銀六十匁が一兩の勘定故、八貫目は百三十三兩即大凡百五十兩になる。○請取つた―請合つた、引受けた。○何んぞいの―どうぢやいの。○あり様―われ様、お前さま。○鹽鮭―引つぱりだこといふから鹽のさけといふ。清十郎がからゝの干鮭のやうにされてもの意。○皮か身か―皮につくのか、身につくのか、即ち味方か敵かどつちだ。○此娘―但馬屋の娘のこと。○構ひ―故障。自分の息子の關係から、他へは嫁入させぬといふのだ。○嫁入させぬ―嫁入承知ならぬ。○銀渡したら損で有らう―蒔繪屋が中に立つて、嫁入道具を引受けてゐるのだから、銀は蒔繪屋の方。ら道具屋の方へ拂ふ順になつてゐる。それで此蒔繪屋に銀を勘十郎が渡したら、損だらう道具はわしが押へるからと、いつてくれ、ばすむといふのだ。つまり勘十郎は銀を渡さないでよいやうに此場をつくらうて貰へばすむのだ。○なるまいか―一言いつてくれ



【譯】丁度此時船つき場に來た男が、自ら案内して「姫路の本町、但馬屋の勘十郎様のお船はこれか、難波橋の蒔繪屋へお詔へのお道具を、今夜船に積まうと思ふて、銀を受取り申す爲に來ました」といつて入つて來た。勘十郎は「親仁殿あれを聞きやつたか、銀を渡すと道具は姫路へ下つて行く、道具が下れば嫁入が有る。嫁入があれば清十郎は自然と引張風にされるのぢや。どうぢや此處が相談ぢや。自分は此から國へ歸つて、旦那へは道具屋が道具を出來さぬことにしておく。そして道具屋の方はお前さんから百五十兩か又は八貫目の金を渡してさへおけば、波風たゝず、自然と靜に嫁入が延びることになる。嫁入が延びさへすれば、清十郎は隙を貰はうと、出奔しようと思つた。勘十郎が引受けた。此處でお前さん大儀ながら、八貫目の銀を田地を賣つても、自分の子の爲ぢやが、出してはどうぢや、その方がよかる」といひも終らぬに、佐治は驚いて、「エ、お前様は一口に八貫目といやるが、たとへ清十郎が引張風にならうが、乾鮭にされやうが、世がつぶれて泥海にならうと、銀は一文も出せぬ、エ、お前は、一體味方なのか敵なのか」といつて顔をしかめ、立つてはいるのを引とめて、勘十郎は、「それは親仁さん、氣のし方が早い、それでは銀の入らぬ思案がある。蒔繪屋に向いて、此但馬屋の娘には故障があつて、嫁入はわしがさせぬ。道具はお前の方へ預けた。だから、勘十郎さん此蒔繪屋に金を渡しては損だらう道具はもらへぬのだからと一言いへばすむかどうぢや、一言いへまいか」といへば、「はて金さへいらぬ事なら、自分の子の爲ぢや、申さいでどうするものか」といつて表の間に出た。

佐「播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を、請取つた蒔繪屋は此方か。身共は和泉のどん百姓、土ほぜりでおじやれ共、但馬屋のお夏には、此方に先の構ひが有る。外の男を持たせぬからは、嫁入道具を押へた。勘十郎殿先刻にから切羽脛金する通り銀渡したら御損であらふ。ことはつて置いたぞ」と苦りさつてぞ申ける。蒔繪師の手代せゝら笑ひ、「ハテサテ悪い工面ななされ様、是娘に構ひ有るならばそれ

は先との詰開き、此方に構はぬ事。如何でも是は廻し者、近頃悪い仕方」といへば 佐「ヤア何んじやまはし者、ヲ、男じやものまはしをせいで好い物か。若い時は小相撲の一番も捻つたおれじや。男につがふ詞が有る。まはしかいたかか、ぬか、來い見せふ」と裾からげ、胸を叩いてりきみける。

【註】○土ほぜり―土をいぢるもの。○切羽脛金する―刀の鐔の両面、柄と鞘とにあたる處に於ける薄い金物が切羽。鐔元の刀身をかためる金具が脛金。つめ開きする意。○ことわつておく―あらかじめ、すじ道を話しておく。○せゝら笑ひ―冷笑すること。○悪い工面……悪い工夫をして斷はるものだ。○廻し者―間諜。禪とかく。○まはし―ふんどし。音の上から間諜と混同したのだ。○つがふ―番ふ、對して用ふる。つがふをつかふとして、只用ひる意と解する本もあり。

【譯】佐治右衛門はいふ「播州姫路但馬屋の嫁入道具を請取つた蒔繪屋はお前か、私は和泉國の土百姓、土いぢりをしてる者ぢやが、但馬屋のお夏には私の方で先づ故障を申すことがある。他の男をもたせぬからには、嫁入道具を押へた。勘十郎殿、先刻から詰開きをしてる通りに、金を蒔繪屋に渡したらお前御損であらう。あらかじめ筋道を申しあげておく」と苦り切つていつた。蒔繪師の手代は冷笑しながら、「はてさて、悪い工夫をして斷はるものぢや、これ娘に故障があるとすれば、それは先方と詰開をなさるがよい、こちらに構はぬことぢや」とどうもこれは間諜ぢや、近頃悪いやり方ぢや」といふと、佐治は、「ヤ、何ぢや廻し者ぢやと? お、男、やもの、まはしをせいでよいものか、若い時には小相撲の一番もとつたおれぢや、男に對して用ふる言葉がある。まはしをかけたか、かゝぬか、來い、見せう」といつて裾をからげて、胸を叩いてりきんだ。

蒔繪師も聞かぬもの、片肌脱けば二人の娘、船頭船方おり合せ、「先堪忍」と取付さける。勘十郎も分け入て、様々宥め押靜め、「塗師屋殿も悪い合點。道具は其方の銀は此方の、銀遣らずに此方へ請取



らふといふにこそ。其方と我とに彼の仁から一筆取て置くならば、我も且那の手前が立つ、其方も下細工へ手間遣らひでも大事なし。身に任せて黙つて居や。是親仁、何んと一筆召されふか」佐「ハテお前の御了簡ならば如何なり共。それおさん、お望み次第に書きや」といへば、勘十郎立寄つて、「但馬屋のお夏祝言に付、構ひ是有るにより、嫁入道具押留め申所件の如し。但馬屋勘十郎殿、蒔繪師權之丞殿、清十郎親佐治右衛門」と好む通りに書きければ、親は悦び巾着明け、墨黒々と捺したりし、因果の程ぞ不便成る。

【註】 ○聞かぬもの一まけてはをらぬ男。○悪い合點一悪い考。○道具はそつちの—そつちのもの。○請取らうといふにこそ—云ひはせぬの反語的表白法だ。○あの仁—あの人。○身にまかせて—身共即ち私にまかせて。

【譯】 蒔繪師もきかぬ氣の男で、喧嘩もやりかぬまじと片肌をぬぐと、二人の娘、船頭や船方が來合せ、「まあ〜勘忍なされ」てと取ついた。勘十郎も中へ入つて分け、さまざまに宥め、しづめて「塗師屋さんも悪い考ぢや道具はそつちのもの銀は此方のも、銀を拂はずに品を請取らうといふでもないに。お前さんと私と二人に對して、あの人から、一筆とつておけば、私の方も旦那への義理が立つし、お前も下職人へ手間賃をやらなくても心配はない私にまかせて黙つてをりやれ、是れ親仁さん、何うちや一筆してくださるか」佐治「ハテお前の考ならどうなりともしよう、それおさんや、勘十郎殿のお望の通りに書きや」といふと、勘十郎は立寄つて、「但馬屋のお夏祝言につき、故障があるにより、嫁入道具を押へとどめ申す事件の如し、但馬屋勘十郎殿、蒔繪師權之丞殿、清十郎親佐治右衛門」といふと、その通り勘十郎の好む通りにかくと、親は悦んで巾着をあけて墨肉でくろ〜と印を押した因果は不便である。

一札巻て勘十郎、懷中にしつかと收め、「サア埒は明いた塗師屋殿萬事は國より一左右せん。先づお歸り」といひければ、塗師屋は船中一禮し、辭儀のべてお歸りける。勘「なふ親仁殿、此勘郎が良い時に居合せて此方親子の仕合。道具さへ下らねば祝言は延引、其中には清十郎、隙を取らふが走らふが、氣遣ひな事はなし、勘十郎に任されよ。此船今宵出ると聞く、然らば是に」と乗移り、「方々此度下つては、清十郎が爲悪しし。良い時分に便せん、其時必ず待入ぞや。數年馴染の清十郎、悪い様には致すまじ、何れもさらば」と、いひければ、親子の者は船より上り、手を合せ涙を流して、佐「傍輩のよしみとて、有難し忝し。生みの親の我等より、清十郎奴が命の親、嫁も娘もやれ拜め。辨へもなき清十郎、弟共下人共思召して御意見なされ、美しく暇取り、再び在所へ來る様に、偏に頼み奉る」と、敵と知らぬ愚さの、親の情は子の爲に、藥といへど是は又、毒を合する佐治右衛門、心は律義一ばいに、煎じ詰たる水間の里、船は別れて三重下りけれ。

【註】 ○一左右—音信通知。○辭儀—あいさつ。○下つては—大坂から姫路へ行つては。○命の親—勘十郎が清十郎の命の親だと佐治は思ふのだ。○毒を合する佐治—毒を調合する匙にかく。○一ばいに煎じつめたる—何程かの水を一杯にせんじつめるといふ煎藥のつくり方にかく。

【譯】 一札を巻いて勘十郎は懷中にしかと收め「さあ埒はあいた塗師屋殿、萬事は國へ歸つてからたよりをする。先づお歸りあれ」といへば、塗師屋は船中の人々へ一禮して挨拶をして歸つた。さて勘十郎は「なう親仁殿、此勘十郎



がよい時に居合せて、お前親子の仕合であつた。道具さへ姫路へ下らねば祝言は延引にきまつた。その中に清十郎は隙をとらうが走らうが、心配な事はない、勘十郎にまかしておかれよ。此船は今夜出るといふことぢや、では此に乗らう」といつて乗移り、「お前さんがたが此度下つては、清十郎が爲にも悪い、善い時に便りをしよう、其時は必ずおいであれ。數年間馴染の清十郎のことぢやから、悪いやうにはしませぬ、皆の方々さらば」といへば、親子の者は船から上り、手を合せ涙を流して、佐治は「朋輩のよしみの事とて有り難い、忝い。生みの親の我等よりも、清十郎の爲には命の親ぢや、嫁も娘もやれ拜めよ。善悪の辨へもない清十郎を、弟ともまた召使とも思つて、御異見なされて、立派に暇をもらつて、二度と在所へ歸るやうに、おはからひ下され偏へに頼みます」と、敵であるとは知らぬ愚かさの至りで、親の情といふものは、子の爲には薬になるといふが、これは又、薬でなくて毒を調合してやる親の佐治右衛門、心は律儀一ぱいで、毒薬を一杯に煎じつめて水間の里へ歸るべく船は別れて下つた。

中之卷

所さへ、戀知り顔に姫路とは、何時名付しど但馬屋の、お夏が父は九左衛門、國一番の米問屋、有銀箱も十づゝに、六十近き月雪や、花も紅葉も算盤に、かゝる親には似ぬ娘、お夏は深き濡れ故に、菩提心と意地張りて、嫁入も丈も延々の、それも戀する氣の前か、二人の親の顔までも、飾磨のからち、播磨湯、國に浮名や立ぬらん。

【註】 ○所さへ戀知り顔―姫路といふ名が、如何にも若々しく艶つぽく、さも戀でも知つるらしいからいふ。○有銀箱も十づゝ―「壽の門松」におつと投出す三百兩などいつて百兩箱を投げることがあるから見ると、有銀箱は百兩箱と見てよく、それが十に

で千圓、百兩が六十で六万の財産がありと見る可く、それを親父の年六十にかく。○花も紅葉も算盤に―風流の事も凡て算盤ではちくといふ程慾深い意。○かゝる親―懸けると、斯るとかく。○深き濡れ―深き戀の意。○菩提心―世間的俗事をいやがる心、出世間的の心、佛門に入る心。○意地張りて―早く戀を知りて菩提心が起つたといつて、意地をはりて嫁入をのぼした。○飾磨のからち―飾磨郡の陸路に、飾磨染の褐色をかく、かちは褐色。しかまは顔をしかめるにかく。兩親も顔までしかめる意。

【譯】 場所さへも戀を知つてゞもゐるかのやうに、いきな姫路などいふ名をもつてゐるのは、いつ名づけたものだらう。其姫路の但馬屋のお夏の父は九左衛門と云ひ、國一番の米問屋で、有銀箱十づゝ六十即ち六萬兩も金をもつて、六十の年に近き年輩で、月雪花も紅葉も算盤に入れて勘定するといふ無風流な慾張もので、その親には似ないお夏は、深き戀故に、世間をいとふ心が起つたといつて意地をはりて、嫁入ものぼし、背丈ものびてずゝになつてゐるのも、全く思ひの儘の戀をした氣の有る故か、その爲に二人の親は顔までもしかめ、飾磨の那の陸地や播磨湯と、國中に浮名を立てることであらう。

今日は蚊帳の祝儀とて、萌黄の生絹六の七の、屋の内祝ひ賑へ共、お夏は更に氣に染まぬ、心の内の緞子の蚊屋、色香を外に漏さじと、夏ア、おれや風引いたそふな」とて、涕打かみて紛らかす、忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰元共、「お夏様と聲様と、此蚊屋でしげらしやんしたらば、いかた敷蚊もけなりかる。此方は蚊屋は及びもない、せめて嫁入の紙帳なりと、あやかり度い」と口々に、「申お夏様、新蚊屋の御祝儀、少浮き」となされませ。賑かに酒盛して、謠ひませふ」といひければ、夏ア、何をさばくしやるぞい。蚊帳が出来よふが、紙帳が出来よふが、此氣合で今やなど、嫁入



する氣は微塵もない。可惜手間で彼の蚊屋を、生絹の衣にして著たい。只無氣でおかしうない」と、後を見れば父親は、内手代の源十郎に、帳を讀ませて算盤の、父「つぶ／＼いやんな喧しい、先づ来て祝や」と赤飯の、怖い目付は我戀を、知つてそふなと百千に、碎き割りたる胸算は、いかな算者も及ばじな。

【註】○蚊帳の祝儀―嫁入の爲の蚊帳をこしらへたことを祝ふのだ。○生絹―生糸織にて練絹に、對していふ語で、すゝしと讀む。此蚊帳の外にまだもじの蚊帳も出来たのだ、でないと先に行つて二種ある表現と衝突する。○六の七の―のは布の幅を數へる時にいふ語で、蚊帳が横六のと縦が七のて出来てる意。○屋の内―八のにかく、然しこれは偶然で、六の七の蚊帳が更に八のあるといふのではない。○緞子の蚊帳―緞は目の荒き麻布、心の内のもつれてもぢ／＼するにかく、生絹の外に此の蚊帳も出来たのだと見ぬとあとで具合悪し。○しげる―むつみてしめやかに物語る意。○けなりかろ―羨しくねたましがる。○紙帳―紙製の蚊帳。○氣合―氣持。○今やなど―此ごろなど、今のところ。○只無常氣…俗事いやな心地がして、ちつともお前達のやうにをかしくない、をもしろくない。○内手代―内勤をしてる手代、外勤に對するもの。○つぶ／＼いやんな―算盤のつぶからかけ、ぐ／＼いふな。○赤飯の怖い目付―祝ふといふから、赤飯にかけ、赤飯をこは飯といふからこはい日とつゞけた。○百千に碎き割りたる胸算―胸算用でこまかく碎いて割つた即ちこまかく勘定して、思を千々に碎いた。

【譯】今日は嫁入の蚊帳の出来た祝儀といつて、萌黄の生絹の蚊帳の六の七のなるを出して、家の中が祝ひをして賑はふが、お夏は一向に氣にそまなくて、心の内はもじの蚊帳と同じく、もじ／＼してゐるもの、その色を他人に知られまいとして「あゝおれや風引いたらしい」といつて、涕を飲んで紛らし忍び泣いてゐるのも道理である。心を知らぬ腰元どもは、「お夏様と聲様と、此蚊帳でしめやかに物語でもしやんしたら、いかな蚊帳でも羨ましく妬ましがる。私達は蚊帳などは及びもつかぬ、せめて嫁入の紙帳なりと、つくるやうにあやかりたい」と口々に

いひ、更にまた「申しお夏様、新しい蚊帳の御祝儀ぢや、ちつと浮き／＼となされませ、賑かに酒盛でもして謠ひませ。」といへば、お夏は「あゝ何をさば／＼しやるぞ、蚊帳が出来ようが、紙帳が出来ようが、此氣持で、今のところ嫁入などする氣は少しもない。そんなことをいつてさば／＼と遊んでるあつたら時間に、あの蚊帳をすゞしの衣にでもしておくれ、私は只俗事がいやな氣がして、うれしくもかしくもない」といつて後ろを見ると、父親は内手代の源十郎に帳面をよませて算盤をおいて、「ぶつ／＼いふなやかましい、それより先づ来て祝へ」と、赤飯のこは飯ではないが、こはい目付をするのを見ると、我が戀を知つてゐるやうだと、千々に胸を碎いて、割り出した胸算用は、どんな算用上手も及ばぬところである。

斯る處へ清十郎、勘十郎同道してぞ戻りける。九左衛門悦び、「ヤア好い處へ戻つたは。今日はお夏が嫁入蚊屋の祝ひ。此拍子ならば、大坂の仕合もよかる」といへば、清十郎庭に立ながら、「且那の病になされた、中國北國残らず賣つて、爲換手形濟みました。利合は高で貳拾四五貫目」と目を合する二人が中、無事な顔見て嬉しいと、心に心をいはせたり。九左衛門上機嫌、「お手柄／＼。お夏か嫁入は只出来た。扱なんと勘十郎、蒔繪道具も出来つらん。跡から来るか如何ぞ」といへば、勘「お道具も出来致し、代銀残らず渡し、職人の手前は濟ながら」不落居な事にて、道具を止められ下りませぬ」と、云ひも果ぬに九左衛門立腹し、「それは如何じや。る程銀は遺餘る、但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具止められふ覺へは無い。惣じて此祝言、お夏が氣色に日限延び、漸々此度脇まで詰め、今日明日となつて、道具が出来ぬ何んのとて、此嫁入が延ばされよか。世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せん。」



それにかか／＼銀渡し、素手で戻るといふ様な、子供遣つたも同然」と、算盤の割れる程、疊を叩いて叱りける。

【註】○大坂の仕合……大坂に關係した事即ち米の事、嫁入道具の事、などに關しての都合よからん。○病になされた一苦にした氣にしてゐた○中國北國一中國米、北國米。○爲換手形すました一手形をもちつた。○高で一全額で、○二十四五貫目と目を合す一二十四五貫目と云ひながら、清一郎とお夏が、ちらりと二人が目を合せつゝ自ら心で物をいはせる。○只出來た一米の利益丈けて、別に金を出さず出來た意。○如何ぞ一どうぢや。○不落居なこゝろ落つかぬこと、片のつかぬこと。○銀はやる一銀をやつたに。○屬までつめる一娘から嫁になると、振袖を切り、脇の下のあきをつめて、袖を小さくするをいふ。

【譯】そこへ清一郎が勘十郎と同道して戻つた。九左衛門は喜び「やあ、よい處へ戻つた。今日はお夏が嫁入蚊帳の祝ひ日ぢや。此拍子なら、大坂方の都合も皆仕合せがよかつたであらう」といへば、清一郎は庭に立ちながら「旦那が心配なされた中國米も四國米も残らず賣つて、爲換手形もちやんと貰つて歸りました。利の割は總高で二十四五貫目でござります」といつて、ちらりと目と目とを合せて、清一郎とお夏とは、物はいはないが、互に無事な顔を見て、嬉しいと、心で心の中を語りあつた。九左衛門上機嫌で「お手柄／＼、それではお夏の嫁入はその利益丈けて出來た。つまり只で出來たも同じことぢや。所でどうぢや勘十郎、蒔繪道具も出來たであらう、あとから來るか、どうぢや」といふと、勘十郎は、「お道具も出來代銀も残らず渡し、職人の方はちやんとすんだことになりながら、片のつかぬことがあつて、道具をとめられて送つては參りませぬ」と云ひも終らぬに、九左衛門は立腹し、「それはどうしたことぢや、餘る程金は渡した。従つて但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具を送ることをとめられる覺えはない。一體此祝言はお夏が氣色の良くないために目限が延びたので、漸く此度脇までつめて袖まで直し、興入れも今日明日とばかりになつてゐて、道具が出來ぬの何のといつて、此嫁入が延されるか。そんなことだと、世間では道具屋へ金を渡さぬ爲に、道具が出來ぬのだと評判するである。それにうか／＼と銀を渡し、素手で戻るといふやう

な、子供を使にやつたも同然なことがあつてなるか」といつて、算盤の割れるほど疊をたゞいて叱つた。

勘十郎迷惑そうに、「御立腹御尤、拙者もぬかりは致しませぬ。證文をお目にかけ、ひそかな處で物語致し度い事御座る」といへば、九「ヲ、いひわけあらばサア聞こふ、源十郎も來て聞け。勘十郎此方へ來い」と、打連れ裏の小座敷へ、苦い顔して入りにつけり。清一郎奥を見て、「ハア、餘所には嫁入が有るそふな。此方や洗足でも致しませぬ。やあゑい」と沓脱に腰を懸ければ、お夏つか／＼走出で、「又ぬすりことばつかり。同なじ口で可愛やといふ事がならぬか。意地の悪い」と抱付き、戀には涙脆いぞや。

【註】○餘所には嫁入……お夏が嫁入するといふを、殆んど、あてつけに、人事のやうにいつたのである。○洗足一旅歸りの足を洗ふのだ。○ぬすりこと一あてこすり。○いふことがならぬか……そのあてこすりをいふ同じ口で、可愛いやといふことが出來ぬか。○涙もろいぞや一戀に涙もろく泣いた。

【譯】勘十郎は迷惑さうに、「旦那の御立腹は御尤もぢや。だが私もぬかりはしませぬ、それについては證文をお目にかけて、内々の所でお話をいたしたいことがござります」といへば、九左衛門は云ひ譯があらばさあきかう、源十郎も來てきけ、勘十郎此方へ來い」と打連れて、裏の小座敷へ苦々しい顔してはいつた。清一郎は奥を見ながら「はあ、餘所には嫁入があるさうな、こつちは足でも洗ひませう。やこりやさ」といつて沓脱ぎに足をかけると、お夏は之をきくなり、奥からつか／＼と走り出て「又あてつけことばかりをいやる。その同じ口で反對に可愛やといふことが出來ぬのか、意地の悪い人ぢや」といつて抱きついて、戀する人は涙もろくも泣いたことぢや。



清十郎は懐手、ふとこんで「ア、思へばあほうな者、身の正直な勝手して、人の詞をまん誠に。世間の奉公する者は、態々隙を貰ふては、春は親に逢ひに行く、此清十郎は親里の近所に、十日二十日逗留しても、親の所に許嫁の女房分が有故に、これに逢ふと思はれては、心中が立ぬと思ひ、親へ便りもせず歸る是に懲よどうさい坊、眞に孫子に傳へても、主の娘と念比など駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をエ、あほうな」と、舌打してぞかぶり掉る。

【註】○身の正直な勝手して—自分が正直な爲に、他人も正直だらうと、自分勝手に考へて、人の言葉を信じた。○まん誠に—眞正直などのまをまんとしたのだ、本當に信じた意。○是にこりよ……これに懲りるがよいといふ丈けの意、自分丈けが心中だてをしても相手は何とも思はぬといふ不平をいつたのである。さい棒は撮棒にて、なぐる棒のことだが、どうはともよく分らぬ、強める意味のどう懲、どうずりなどのどうかと思ふとは樋口氏説。○駿河—するにかく。○富士と一里塚—織田信長、三十六丁毎に一里塚をつき、それに標をうえた。富士と一里塚とは高低の差甚しく釣合はぬ意。

【譯】清十郎は懐手をして、「あゝ思へば自分は阿房者ぢや、自分が正直な爲に、自分勝手に人も正直だと考へて、人の言葉を眞實と思うた。世間の奉公人は、わざ／＼隙をもらうては、春には親元へゆくものぢや。ところが此清十郎は、親里の近所の大坂に、十日も二十日も滞在しても、親の所には、女房分の許嫁の女があるから、これに逢ひに親元へ行つたと思はれては、折角の心中づくしもたぬことになると思つて、親へはたよりもせんで歸つたに。あゝ、これに懲りることぢや。決して孫子に云ひ傳へても、主人の娘御と馴れ染めなどするものではない。富士と一里塚を見たいに、高低の隔りが甚しくて、及ばぬ戀になつてしまふことぢや、あほうなことをしたものでぢや」と舌打ちをして頭をふつたりした。

お夏涙を押拭ひ、「其方と我身は實事にて、口舌などする挨拶か。此度の祝言を好きこのんだる事でもなし、知つての通り、母様は室の女郎、今の内の母様に彼の弟が出来る迄は、我も室で育ちし故、母方が悪いの、傾城風が有るので、何處の嫁にも嫌はるゝ。これぞ好い事幸と、猶女郎の風を似せ人は隠せど我は只、母様は傾城と、一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨、縁には付かじと願ひしに、彼の立野の阿房面、敷銀に目が眩て、嫁に取らふと嫌らしい。此お夏ばつかりはいふた事を違へるか。恨みも辛みも後を見ていふたが好い。惣じてそなたもこんな時如何なされかうなされの主あしらひが聞へぬ。わしから詞直しませふ。なふ此方の人、此方向かんせ」と、袖口から手を入れて、ほと／＼叩いて抱しむる。

【註】○實事にて—眞面目な戀であるから。○口舌などする挨拶か—口舌は、女郎と客などが云ひがりをこしらへ、難題をもちかけるをいふ。挨拶は男女の關係、縁などの意、全體で二人の間は眞の戀仲なれば、口舌などする間ではない意。○今の内の母様—お夏の繼母にて、父の後妻である。○室—播州室の津には遊廓がさかへたことあり。○嫁にも……嫌はれて嫁にもなれぬ。○人は隠せど—人は云ひふらしはせぬが。○一季半季の者—一年半年の奉公人。○村時雨……時雨がふり廻るやうに、自分がふれまはつたので、縁づきは出来ぬことと思つたに。○敷金—持参金。○ほと／＼—靜にたゞく形容。

【譯】お夏は涙をぬぐうて「お前と私との仲は、まことの戀であるからには、口舌などする間柄か、さうではない。此度の祝言だとして、私が好きこのんだことではない。御存じの通り、母様は室の津の女郎で、今の内の母様即繼母にあの弟が出来る。では、私も室で育つたのだから、母方が悪いとか、傾城のやうな風があつていけぬといつて、



私は何處へもきらはれて に貫はれないでゐるのぢや。それを私はまた、よい事ぢや、幸ぢやとて、なほと女郎の風に似せ、人は云ひふらしもせぬに、私は只、自分の母親は傾城ぢやといつて、奉公人にまで、村時雨のやうにふれまはつて、縁にはつくまい、縁がないやうにと願ふてをつたに、あの立野の阿房面の男が、持參金に目がくらんで、嫁にとらうといふ、いやらしいことぢや。世間の女はとに角に、此私丈は、どうしていふた事をたがへるものか。お前と一緒になるといつたら、あくまで一緒になる、だから、恨み言をいふにしても辛みをいふにしても、後を考へ後を見てからいふがよい。一體でお前もこんな時、どうなされるの、かうなされるの、私を主人扱にするのが分らぬ。何故女房扱にはしやらぬのぢや。いやさういへば私から詞を直しませう。なうこちの人、こつちへ向きなされ」と袖口から手を入れて靜に叩くやうにして抱きしむる。

清十郎四邊を見廻し、「コレお前に聞へぬ事がある、此袖下は何事ぞ。若衆の前髪、女の脇詰、男が知らいで立つものか。出来ぬ仕方」といひければ、夏「なふそこらを忘れるも夏でなし、ま一度振袖見せ度さに、皆々お針が縫ふたれど、祝ふて我も縫はんとて、片袖ばかり縫ふ顔して。是が嘘か」と帯解て、上着を脱げば右左、振と詰とのかたちぐに、片枝は蕾み片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆、斯ぞ仕立て著せまほし。清十郎は身を擲ち手を合せ、「涙がこぼれて忝し。それほどに此男を不便に思召さるゝかや。冥加に盡ん勿體なや」と、取付き拜めば手に縋り、夏「女房を拜む事かいの。是程思ひ合ふた中、何故に女夫になられぬ」と、辛氣泣きにぞ泣き居たる。

【註】 ○此袖下は何事ぞ—前に脇をつめたといつた處に應ずるので、此袖の下のつめ方はどうぢや。嫁入にゆく時につめるのだ

○男が知らいで立つものか—脇をつめるのと、大人になつたしとして、前髪をとり去るのとは、相手に知らせんてすべきことではない、それを無斷で脇をつめたりして、男の顔が立つか。○出来ぬ仕方—云ひ交した男に、無斷で脇詰などをするやうな大膽なことは出来ぬ筈ぢや、不都合ぢや。○片袖ばかり…祝ふといつて、自分で片袖丈け縫ふ顔をして、片袖は縫はずにおいたのぢや。○右左…片ちぐ—下着の右袖は振袖の娘姿、左は詰の嫁姿で。片ちぐはちぐはぐ。○蕾、花衣—花にたとへると、蕾と開いた花ともいふ風に、枝が片々になつてゐる意。○二人前見る…娘姿と嫁入姿を二人前見るやうな仕立方は、面白いから、誰にも皆かういふ風に仕立てゝ着せたいことぢや。○冥加につきて—仕合につきる。○しんき泣き—じれたくて不満で泣いた。

【譯】 清十郎は四邊を見まはし「これお前に承知ならぬことがある。では此袖下はどうしたことぢや、若衆の前髪をとり去るのと、女の脇をつめるのとは、男が知らいでなるものか、それを知らぬと面目がたゝぬ。それだのにお前はその邊のことを忘れる私ではない、今一度振袖姿を見せたさに、皆お針女が袖をぬうたか、私も祝うて縫はうといつて、片袖ばかりを縫ふふりをして、片袖は縫はずにおいたのぢや、是が嘘か見て下され」と帯をといて上着をぬぐと、右は振袖姿、左は脇をつめた嫁姿といふ、ちぐはぐ姿で、いはゞ片枝は蕾み、片枝は咲きそめた花といふ風の衣で、二人前の姿を見るやうな、かういふ仕立方は面白いから、誰しも皆かういふ風に仕立てゝ着せたいものである。之を見ると、清十郎は身をなげ打ち、手を合せて、「涙がこぼれて忝い、それほど私を不便と思つて下さるか、冥加につきることであらう、勿體ない」といつて取りついて拜むと、手にすがりついて、お夏は「女房を拜むことがあるものか、これほど思ひ合つた仲が何故女夫になられぬのぢや」といつて不満の涙を流して泣いた。

清「ヤア申お夏様、いつぞやお前に借りました七十兩の小判の事、私が遣ふ金にてなし。傍輩の勘十郎、私商ひに損をして、平に頼むと申た故、取替へやらんと存せしが、思ひも寄らぬ仕合して、損を埋しと道すがらの話。最う要らぬ金子なれば、戻しませふ」といひければ、夏「ア、好いはいの。婆



々様の譲りの金、如何しても大事ない。人の來ぬ間に、彼の蚊屋の開眼をせまいかと、怖々慄ふ春風も、人目を忍ぶ緦子の蚊屋、蚊屋はお夏に縁深く、神の結ぶの釣手かと、戯れかはす手枕も、心せはしき契なり。

【註】 ○私し商—主人に内證でやる商賣。○七十兩—勘十郎が、清十郎とお夏の仲の弱點をしつて、無理に清十郎から借りたのだ。○取替やらん…一時立てかへて貸しておいてやらうと思つたが、不意に金が手にはいつて不用といふ故私もいらぬから返さうといふのだ。○開眼—大佛開眼などいつて、新しい佛を始めて供養することから來たもので、新しきものを始めて用ふる意に用ひ、此處は蚊帳のつり始めの意。○こはく—慄ふ春風—心もこはくとふるひ、春風もふるへて。春風は即ち春情にかけたのだ。○蚊帳はお夏に縁深く—蚊帳は夏つるもので、お夏の名と縁が深い。○結びの釣手—蚊帳を釣手に結ぶのは、つまり二人の間を結ぶの神が結ぶのか、といふことにかけて、されたのだ。○かはす手枕—二人の大膽な行動を露骨にかいたのである。

【譯】 清十郎は「やあ申し、お夏様、いつかお前に借りた七十兩の小判のことぢやが、あれは私が使ふ金ではないのぢや。朋輩の勘十郎が、且那に内々の商をして、損をしたので、その穴をうめる爲に入用だとあつて、切に頼むといつたので、立てかへてやらうと思つてゐたのだが、勘十郎は思ひよらぬ仕合で金が入つたから、それで損の穴をうめたと、道々の話をしたので、私も入らない金ですから戻しませう」といふと、お夏は「あ、よいはいの、あれは婆々様から、譲られた金ぢや、どうなつたつて大事はない。それより人の來ぬ間にあの蚊帳の釣り初めをしようではないか」といつて、こはくとふるひ、春情もふるへ、人目を忍ぶ緦子の蚊帳であるが、蚊帳はお夏には縁の深いもので、釣手を結びながら、縁を結ぶの神の釣手だなど、戯れつゝも、交はす手枕の契は心せはしいものであつた。

内手代の源十郎、「お夏様、且那の呼つしやる」と出けるが、はつと廣げし手も打れず、あきれて立

てば清十郎、お夏が襟を引被く。お夏騒がず袖にて隠し、是源十郎、其方も男じや、引かせはせぬ。忍んで逢ふは清十郎、見通しにして給らふか。沙汰をするなら爲るといや。幸刃物も此處に在る、すぐに二人が死ぬるまで。サア助けてたもるか殺しやるか、屹度した誓文で承らう」と、弱みをみせず責付られて源十郎、「沙汰して私徳もなし。商ひ冥利隠密なり。僞ならば各より私が先づさきに、清十郎が脇差にて止めを刺さるゝ法もあれ」と、云捨歸る其舌も引入れず、寄親の勘十郎に打明けて、斯くと語りし不實さよ。

【註】 ○廣げし手もうたれず—呆れた様をいつたのだ。○引かせはせぬ—そのまゝ後へひかせぬ、退がさぬ。○沙汰をする—表沙汰にする、父などに告げる意。○屹度した誓文—はつきりした誓の言葉で、○商冥利隠密—商ひの仕合は内證でやるにある意。商人の誓の語にて、武士が弓矢八幡といふのと同じやうな意である。○其舌も引入れず—今前のことをしやべつて、其舌も引込めぬ中にお告げをした。○寄親—保證人、身元の引受人。

【譯】 内手代の源十郎は此時「お夏様且那のお呼びです」といつて出て來たが、二人の様子を見ると、はつと驚いて廣げだ手を、合せて打つことも出來ぬほど、呆れて、ぼかんとして立つてゐると、清十郎はこれたまらぬと、お夏の襟を引かづいた。お夏は騒ぎもせず清十郎を袖で隠しながら「これ源十郎、お前も男ぢや、そのまゝ引下らせはせぬ、忍んで私と逢うてゐる清十郎を見のがしにしておくれか、それとも表沙汰にするならするといやれ、さすれば幸ひと刃物も此處にあるから、直ぐに二人が死ぬるまでぢや。さあ、二人を助けておくれか、殺しやるか、はつきりした確かな誓の言葉で、お前の腹を聞かう」と、弱身を見せず、堂々と責つけると、之に對して源十郎は、「お告げをしても、私には何の徳もありませぬ、商冥利隠密の誓の詞の如く、斷じてお告げはしませぬ。私が若し



偽りでもすれば、あなた方よりも私の方が先づさきに、清十郎の脇差で止めをさされる法もあることぢや」といひすて、歸つて、其の舌の根も引込まぬ中に、引受人の勘十郎に打明けて、かくく」と語つた不實はどうであらう。

二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息を、つきも敢ぬに親手代、ばらくと走り出、お夏が小腕引出し、清十郎もはひ出れば、九「其儘居れ、身動きせば男共打ちのめらせ」と取廻せば、蚊屋の内にすくくと、晝の螢の影消えて、籠に窺るゝ其風情。外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣盡し、思ひをくらぶる計なり。親は腹立ち涙にて、「やれ女郎奴、おのれが母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のたまかさこうとうさ、千人にも稀なりしぞ。何時習ふて其いたづら。遊女の腹とて、何方へも嫁に嫌ふは聞つらん。其袖下は何事ぞ。左様な事をせんよりも、己れが額に傾城の娘と、何故看板は打ちをらぬ」と、齒切をして泣きけるが、「やい丁稚奴、不義一通りは許しもあり、十一の年から子同然に育てし奴。事によらばお夏奴と一つにせまいものでもなし。在所の親奴と云ひ合せ、嫁入道具に邪魔を入れ、親方に恥搔せ、但馬屋の家を覆へそふと工んだな。口の明かれぬ事見せむ」と、證文出して、「これ見たか。おのれの請狀にある親奴が印判、妹とやら嫁とやらが文とも合せて吟味した、芥子程も違ひなし。覺へがあらふあらがふな。主の寢首を搔かんも知らず。エ、憎や」と蚊帳越に、額を三ツ四ツ喰はせて、涙をこぼして怒りける。

【註】○打のめらせ―男共よ二人を打のめらせてやれ。のめらせはのめす、即ち平たくする。○取廻せば―一同が取まくをいふそれが爲めに籠にやつるゝといつて、籠に入れられた如きを表はす。○晝の螢…紋帳の中にすくくと晝の螢の如く、身をかくし又籠の中の螢のやうにやつれて胸の思をつゝむ風は何ともいへぬ。○外にお夏は夏の蟬―蚊帳の外で、お夏は聲を限りに泣くことが、夏の蟬が聲を限り泣くと同じやうにて、二つが悲しい思ひを比べ競ふ様であつた。○流れの者―遊女。○空言に身はまぶれても―空言は嘘。まぶれは交はりしむこと、傾城に誠なしといふから来る。嘘でかためた廓住ひをして、いふことが皆出鱈目でも。○たまか―卵の如き、完全、眞實。○こうとう―質實、實着。○袖下―片袖をつめずして振袖の儘なるをさす。○不義一通は許しもあり―不義一通りだけなら許しやうもある。○請狀―引受の保證書。○あらがふ―反抗する。○寢首をかく―知らぬ間に人を苦めるをいふ。○喰らはす―なぐること。

【譯】お夏清十郎の二人は、五體に冷汗をかいて、露よりもはかない命も消えんばかりに思つて、すはり直して、溜息をついて、その息をつき終りもせぬ間に、親や手代どもがばらくと走り出で、お夏が小腕をとつて引出し、清十郎もいでんとすると、九左衛門は「その儘にをれ、身動きでもすると、男ども打のめしてやれ」といつて、取まくと、清十郎は蚊帳の中にすくくとかくれ、晝の螢の如く影を消して、籠にも似た蚊帳の中にて、やつれた風情は氣の毒であつた。蚊帳の外にゐるお夏は丁度夏の蟬のやうに聲の限りに泣きつくし、思の惱ましさを蟬と比ぶる様であつた。

親 腹を立て涙を流して「やれ、女郎奴、おのれの母は流れの身の遊女であつた。従つて嘘でかためた廓住ひをなし、偽に交はり染んだ身ながら、それにも係らず心が眞實で、質朴なる點は、千人の人々の中にも稀な程であつた。それにおのれは何日見ならつてそのいたづらをやり出したのだ。遊女の腹から生れた娘だといふので、何處からも嫁に貰ふことを嫌はれてゐるのを聞いてゐるであらう。その袖下のちぐはぐなは何としたことだ。そんなことをしないで、分の顔に、傾城の娘だと、どうして看板をかけてはおかぬのぢや」といつて齒切りをして泣いたが、更に語をついで清十郎に向つて、「やい丁稚奴、不義一通りならば許すことも出来るが、十一の歳から、自分の子も同様



に育てた奴で、事によつたらお夏と夫婦にせまいものでもないに、それが田舎の親父云ひ合せて、嫁人道具に邪魔をして、親方に恥をかゝせ、但馬屋の家を引くりかへさうと企てたな。口のあけられぬやうな証據を見せてやる」といつて證文を出し、「これを見る、おのれの引受証にあると、同じ親の印判ぢや、字は妹とやら、嫁とやらの手紙とも引合せて吟味して見たが、印も字も少しもちがひはない、覚えがあらう、反抗するな。これでは主人の寝首もかこうとするかも知れぬ、エ、憎い」といつて蚊帳越しに額を三四度打なぐつて涙をながして怒つた。

清十郎はつと驚き、「親の印判、妹の手跡とはいひながら、親にさへ逢はぬ身が、夢程も覺へなし。

在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ様。勘十郎奴何處に居る。いはせねば勘忍せぬ」と、蚊帳より出るをとつて押へ、「ヤレ勘十郎源十郎は、此九左衛門が兩の眼の代りをする。其手代が穿鑿して一札取つたに胡亂があるか。暇をくれた出て失せふ。こりや女子供、男共、彼奴がはいでに著て失せた布子があらふ。尋出し引剝いで、著せ換へ追出せ」とぞ喚きける。

【註】○片手打—片手落と同意。○いはせねば—白狀させねば。○一札とる—證文をとる。○うろんがあるか—疑ふべきことがあるか。○はいでに—這出にて、田舎から這ひ出して來た時に、初見參の時に。○失せた—來た。

【譯】清十郎は、はつと驚いて、親の印判や妹の手跡に間違はないといつても、親にさへ逢はない自分が、少しも覚えはない。田舎の親を呼よせて、おしらべもなされないで、片手落のなされ様をなさるのはきこるまじい。勘十郎奴何處に居る白狀させねば承知せぬ」と、蚊帳から出て來るのを取り押へて、九左衛門は「やれ、勘十郎や源十郎は、此九左衛門が二つの眼の代りをするものぢや。その二人の手代が調べて證文を取つたのに、疑ふべきことがあるか、暇をやるから出て行け。これ女ども、男ども、彼奴が最初來た時に、着て來た布子があるだろ、あれをさ

がし出して、今の着物を引はいで、着かへさせて追ひ出してしまへ」と怒鳴りたてた。

お夏は斯る有様を目も當てられず、涙にくれ、「いはゞ我身も通れぬ科。あまりといへば親ながら、無得心なるお心や。人の譏りも思召し、少しは有免あれかし」と、聲を上げてぞ泣居たる。九「ヲ、酷いも辛いも知つたれ共、をのれが母の遺言に、傾城の娘とて侮られふか淺ましや。未來の障りはこれのみと、返すくも歎きしに、氣遣ひするな。好い婿取つて名を揚させふと請合しを、嬉しそふに打笑ひ、それで成佛くとして、死んだ顔ばせ忘れかね、千兩附ける嫁入を止め、大事の娘をそゝのかし、惑者になしたる恨み、但馬屋の九左衛門は、胴慾者慘い者といはれねば、亡人の位牌に向ふて云譯なす。胴慾者には誰がなせし」と、わつと計りに堪へかね、咽せ返りてぞ歎かるゝ。

【註】○無得心—無理解、思ひやらない。○未來の障り—成佛の邪魔。○忘れかね—その時の顔をおれは忘れること出來ず。○千兩つける嫁入を止め—千兩つけておれがお前を嫁入させることにしたが、その邪魔をして。○惑者—きずもの意。分別をあまりやまつた者。○歎かるゝ—敬語的の表現である。それは主人に對し、雅より見ての云ひ方であるからだ。

【譯】お夏はこの有様に對しては目もあてることが出來ず、泣きくれて「これについては、いはゞ自分にも免れることの出來ぬ罪がある。いくら自分の親だといつて、考へて見ると、あまりに無理解なお心ぢや。人の譏譽も考へて、少しはお手やはらかにして、許してあげて下され」と、聲をあげて泣いてゐた。と九左衛門は、「おゝ我が仕方の殘酷といふことも、辛らいあたり様と、ふことも知つてはをるか、お前の母が臨終に遺言して、傾城の娘だといつて侮られるだらうが、考へて見ると淺ましい。未來成佛の妨げといへば、こればかりだといつて、歎いたので、心



配するな。よい婿をとつて名を揚げさせるからといつて請合つたところが、嬉しさうに笑つて、それで成佛しますといつて、死んだ時の顔は忘れられないので、おれはお前に千兩の持参金をつけてやる婿をさがして、嫁入させることになつたが、その嫁入を邪魔して、大事な娘をそのかして、無考な疵者にした恨は堪へがたく、それでおれは嗣慾者残酷者といはれてもいとほぬことをするのだが、實はさういはれる位でないと、亡妻の位牌に對して云ひ譯がないのぢや。ところがその嗣慾者には誰がしたのぢや」と、たまりかねて、わつと、むせかへつて泣いたのである。

其間に下部共、衣裳を剥いで振袖の、汚れし綿衣に著せ換ゆれば、さしも美形の清十郎、山田の案山子とうそ慄ひ、二目とは見られぬ容姿。お夏は「我も一所にと、飛付くを下女腰元、引分け宥め教訓し、常常の部屋にぞ伴ひける。父は彌々腹を立て、」勘十郎は何處に有る。何に恐れて引込むぞ、清十郎奴が入れ物吟味し、衣類諸道具押へ置き、追出せ〜」といひ付け奥に入りければ、「心得ました」と勘十郎、半櫃、箆筒昇出させ、くはらり〜と打明けて、衣類引出し取散らすは、三途川の奪衣婆の、呵責も斯くやと哀れなり。錠前を叩き破り、提物差換へ取出せば包みの小判七拾兩、勘「これは扱、此金子はお夏様へ婆々御よりの譲りの金、身が包ませて覺へ有、極つた大盗人、首の有るは且那の慈悲。叩き出して追拂へ」と、手足を取て引出す。

【註】○振袖―清十郎がまだ小供の頃の袖の長い着物をいふ。○綿衣―綿入れ、前にいった布子のこと。○うそぶるひ―うそは、うすにて、すこしの意。○半櫃―半分の大きさの櫃。○奪衣婆―亡者の衣を脱がせる婆にて、三途河にありと之に似てる意。

○提物―巾着、印籠、煙草入の類。○差換―差しかへ用の脇差。

【譯】其の間に下部どもは、今の着物をはぎとつて、小年時代の長い袖の汚れた、綿入れに着せかへると、さしも美しい清十郎も山田の案山子と見える姿となり、それが聊かふるへて、二目と見られぬ姿である。それを見たお夏は「自分も一緒に出て行く」といつて飛びつくの、下女や腰元どもが引放して宥め教へ、いつもの部屋につれて行つた。かうなると父親はいよ〜腹をたて「勘十郎は何處に行つた。何が恐ろしくて引込むのだ。清十郎奴が入れ物を取調べて、衣類諸道具は押へておいて、逐出せ〜」と、いひつけて奥に入つた。と勘十郎は「心得ました」といつて、半櫃や箆筒をかき出させ、がら〜と打あけて、衣類など引出し、取散らすところは、三途川で、奪衣婆が死人の着物を脱ぎとる苛責も、かうであらうかと思はれて哀れである。やがて錠前を叩きやぶつたり、腰にさげるものや、差しかへの脇差などと取出すと、包の小判七十兩も出て来る。勘十郎は即ち「これはさて、此金はお夏様へ、婆々様からのお譲りの金ぢや、おれが包ませた覺えがある。これは大盗人にきまつた。今まで首がついてゐるは且那のお慈悲のせいぢや、叩出して逐拂ふがよい」といつて手足をとつて引出す。

清十郎大聲上げ、「ヤイ勘十郎、盗人する男でなし。をのれが私商に赤穂鹽買ふて損をして、首縊らねばならぬ首尾、どふぞと談合したる故、お夏様へ申しておのれに貸す爲預つた。戀する者の因果で傍輩の機嫌取り、追従したが身の仇となつたるか、口惜や。をのれが損は入れ合せ、今は銀もいらぬといふ、察するに此度の嫁入道具の代銀を、遣らずに己れが引込んで、我親騙つて一札させ、人を損ふ工面とは、鏡にかけて知つたれ共、相讀なければ是非もなし。是を見よ、清十郎は破れ布子一枚で、非人の體にはなつたれ共、心の内は紗綾縮緬、錦より潔い。エ、辛いぞや、やれ恨めしいと、



齒嚙をなして泣きけるが、「且那にさらく恨みはなし。十一歳の彌生の花、いろはともちりぬるとも知らぬ者の、是程迄算勘商、讀書の、硯の海より山よりも優つたる御高恩、拳一ツあたらぬ身がいか成月日か、今日の今日主従の縁切るゝ。いか成神の咎めぞや。今一度且那の顔拜まん」と駈入るを、情なくも男共、手取足取大道へ追出し、門口はたと鎖しけるは、詮方もなき三重次第なり。

【註】○赤穂鹽―此時代から鹽を産してゐたのだ。○代銀―代金。○引込んで―着服して。○相談―勘定を読み合せする人。此處は即ち口を合せてくれる人の意。證人。○紗綾―もと舶來の織物、綾になつてゐる。(第一卷の繪參照)。○彌生の花―春の花として。○いろはともちりぬるとも……いろはも西も東も何も分らぬ。○算勘―勘定、計算。○硯の海―讀み書といつたから硯とひ、それを海山の海につづけた。

【譯】清十郎は大聲をあげて「ヤイ勘十郎、おれは盗みをする男ではない。おれが内證商ひに、赤穂鹽を買つて、損をして、首をくゝらねばならぬ都合になつた。どうぞ助けてはくれぬかと相談した故、お夏様へ申し上げて、おのれに貸す爲めに預つたのがその金ぢや。戀をしてゐるものゝ因果で、友達の機嫌をとり、追従の爲めにそれをしたのであつたが、それが却つて 分の仇となつたが口惜しい。ところが、おれは自分の損はうめ合はせをして、その金はもういらぬといふが、思ふに此度の嫁入道具の代金を拂はずに、それを自分が着服して、私の親をだまして、證文をかゝせ、人をそこなはふ工夫であるといふことは、鏡にかけて見るが如く明かなことを知つてはをるが、今證人がなから是非もない。是を見よ、清十郎は破れ布子一枚になつて、まるで非人の様子にはなつたが、心の内は紗綾、縮緬、錦よりも高貴で清らかある。それをそのやうに扱ふとは辛い、恨めしい」といつて、齒嚙をして泣いたが、やがて又「且那には更に恨はない。十一歳の春に蕾の花として、まだいろはも西東も何も知らぬものを引とつて、是ほどまでに算盤勘定や商賣や讀み書きの道まで教へて下されて、その御高恩は海より深く山より高

く、おまけに拳一つあてられなかつた身が、今日といふ今日は、如何なる月日であるか、主従の縁を切られる身とはなつた。そも如何なる神の咎であるのか。今一度且那の顔を拜んでから出よう」といつて駈入るのを、男ども無情にも手を取り足をとりして、大道へ逐ひ出し、門口をばたりと閉めたのは、何とも致方のないことであつた。

未だ如月の朧夜や、涅槃の雪の名残の門、立留りつ立去りつ、凍へ狼狽へ佇めり。無慙やお夏は魂も、布子の袖に入る計り、身は脱がらの力も切れ、若しやと部屋を忍出て、門の戸明てそつと立出で、四邊を見れば人影の、清、お夏様か、夏、此處にか」と、いふより先に抱合ひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰付て、忍び音に泣く計なり。夏、今の間の物思ひ、ま一度逢はせ下されと、いくらの願を掛けたり。清十郎の清の字なれば、先此處の清水様、京の清水、室の明神、書寫山、伊勢の御神様、住吉様、金比羅様、不動、愛染、大師様、拜み頼みし印にて、顔を見て有難や。サア二人連にて立退きて、いか成遠國小借屋でも、二人使ふを一人使ひ、一人使ふを手鍋でも、暮されまいものでもなし。いざ立退かん」と有りければ、清、いやそれでは、情の親方の憎しみも増るべし。在所へ歸り、親共と勘十郎奴が善悪糺し、身の垢ぬいて詫言せば、御機嫌も直るべし。それまで辛抱遊せ」と、泣くゝ宥め慰むれば、夏、戀し床しは身の氣隨。男の爲には憂苦勞、厭はずながら只一人、突放して遣られふか。これ此小袖と脱換へて、其布子を逢ふまでの形身に著ん」と、涙ながら互に帯解さ身を合せ、片袖づ



つを脱交はなまがはす肌睦はなむましき心ざし、戀路ならずは何故に、生うれて知らぬ木綿物、服紗ふくさの衣きぬと引締ひきしめて、顔と顔を見合せてわつと泣入なみる心底しんていに、萬よろづの涙籠なみるべし。

【註】 ○涅槃の雪の名礎—涅槃會は陰曆二月十五日にて、その頃になれば雪も降らなくなる意の諺として、「雪の果は涅槃」の句がある。それから出て、門の雪も見納めであり。名残惜しい意。○布子の袖—清十郎が破れ布子を着てゐる故、その袖にかくれるといった。○肩の縫目につく—抱きて聲をたてぬための用意。○書寫山—圓教寺と云ひ、節磨郡にあり、一條帝の時性空上人の開山、丈八の如意輪觀音を祭り、西國三十三所第二十七番の愛敬。○愛染—愛染明王は愛敬、愛慾をつかさどる佛、「冥途の飛脚」「夏は水朔日」に詳し。○如何なる遠國—…どんな遠い處にゆき、小さい借家をして。○二人使ふ—召し使を二人おくところを○手鍋でも—召使をおかず、自ら炊煮をしても。○身の垢ぬいて—身を清めて。○身の氣隨—戀は自分の氣隨氣儘からのこと故男の爲には苦勞をばいとひはせぬが。○脱はなまがへて—…自分の小袖をぬぎ、布子ととりかへ、布子を形身に着てゐるのだ。○片袖かたそでづ、を脱はなまが交まがはす—各ぬぎて、互にとりかへて着るのである。○服紗ふくさの衣きぬと引締ひきしめて—服紗は和かきうすい絹、それと木綿と一緒に着て引締めて。○萬よろづの涙なみ—心の底には、悲とか無念とか様々の涙がこもつてゐる。

【譯】 まだ春も浅い二月の臘夜のことである。けれども雪の果は涅槃といふ諺にもある如く、もう二月の十五日の涅槃會も近く、従つて雪も終になるであらうが、さう思ふと此家の門にも名残が惜まれて、清十郎は立止まり立去りして、寒さに慄へつうろたへつして佇んでゐた。あはれなるかな、後に残されたお夏は魂はぬけ出して清十郎の布子の袖の中にはいつて身はもぬけの殻となり、力も無くなつてしまつて、若しや清十郎がゐはせぬかと部屋をぬけ出して門の戸をあけてそつと出て四邊を見ると、人影があつて、「お夏様か」といふ。お夏は「此處にゐるか」といふよりも先に互に抱き合つて、聲を立てぬやうにと、互に肩の縫目の丈に喰ひついて、細い聲で泣くばかりである。お夏は「今の間にどれ丈か物思ひをして、今一度お前に逢はせて下されと、どれほど願をかけたことであらう。お前の名の清十郎の清の字を縁にして、先づ此地の清水様に、それから京の清水に、室津の明神に、書寫山の觀音に、伊勢 太神宮に、住吉様に金比羅様に、不動様に、受敬の神の愛染明王に、大師様へと、拜み頼み願かけをした甲斐があつて、お前の顔を見て有り難いことである。さあ二人連れにて、此處を立退いて、どんと遠國へでも行つて、小さい借屋でもして、召使二人使ふを一人使ひ、一人使ふは手鍋をさげて自分から煮炊をしても、暮されぬでもなからう。さ、立退かう」といへ、清十郎は、「いや、それでは恩のある親方の憎しみを増すことに、らう。それよりか一旦在所へ歸つて、親とも相談し、勘十郎奴の善し悪しを問ひ正して、自分の身々清めてお詫をすれば親方の御機嫌もなほるであらう。まあそれまでは御辛抱遊ばせ」と、泣く／＼宥め慰めると、お夏は「つまりが、戀しい床しいといふのは身の氣隨氣儘から出たことであるからには、男の爲に憂き苦勞をするのは厭はぬことであるが、たつた一人突き放して、お前をやられるものか、お前のその着物をぬいで此小袖と着かへて行つておくれ、私はその布子を又逢ふまでの形見に着てゐるから」といつて、泣く／＼各々帯をといひ、身を寄り合つて、互に片袖づつぬぎかはして、とりかへて着て、肌まで、親しく睦み合つてゐる心を示した。お夏は戀故にこそかうした木綿物きぬものを着るのであるか、さなくばどうして、知りもせぬ木綿物などを始めて身につけよう。今それを、やはらかい薄い絹物と一緒に引締めてやがて顔を見合つて、わつと泣入る心の底には、さまざまの涙が籠つてゐることであらう。物にて顔を押包み、さらばや」といふ所へ、腰元下女共、「お夏様が御座らぬ、裏よ井戸よ」とひそめ

きしが、門口明かどぐちあけて、「こりや此處にじや。ア、申お夏様、お前は悪い合點な。どちらの爲にもならぬ事先づ御入」と、衣裳をしるしに清十郎を取巻き、連れて内に入りけるに、お夏續つづいて入らんとす。下女したむすめは清十郎殿、お夏様がいとしくば、先往まうんだが好いはいの。男の様にもない人じや」と、恥はぢしめ突出し押出し、大戸をはたと鎖さしければ、清十郎は詮方なく、部屋へ入體いりていにして、大釜明おほかまけて身を縮ちぢめ、そろり／＼と、忍しのび入り、中より蓋をぞしめにける。お夏は門かどに憧あこがれて、入るべき便たよりを待つ所に、水仕みづしの玉



はそろ／＼と、門口明けて、「なふ清十郎様清様」と、お夏が袖をしかと取り、玉ヲ、此方は戀知らず私が此方に絆されて、御主様は袖になし、朝晩に心を付け、しんど思ひを盡せども、お夏様に心中立て、一度も靡いて下されぬ。恨みの焔火吹竹、七や十四五すつとんとと打度いが、ア、いとしいが因果の種。人は落目の心ざし、コレ此餅は正月の、在所へ遣ふと思へ共、君に何が惜しからん。恥かしながら、此玉を喰ふと思ふて、賞翫して下さんせ」と、懐に押入る、お夏は色を知らせじと、じつと抱付締めければ、玉ヲ、ぞつとするほどお嬉しい。恨みの雲も晴渡り、是で千倍／＼。とてもこのことに盃せふ。酒取つて來ましょ」と入跡に、引續いてつゝと入り、部屋に駈込み夜著引被さ、身を慄はしてぞ臥居たる。清十郎は斯くとも知らず、「お夏は外に如何ぞ」と、釜の蓋あけ見廻せば、奥には人も寢入端、勘十郎は親方と、寢酒の相伴ひよる酔て、夜著蒲團引出し、常の所に臥しにけり。

【註】○ひそめきしが―密かに語つたが。○男の様にもない―めめしい人。○水仕の玉―炊事などするお玉。○お主様を袖になし―主人の云ひつけをきかぬ、粗略にする意。○しんぞ―神にかけて。○恨の焔火吹竹―恨の焔をふく火吹竹で。○七や十四五…若縁五に「快き夢二つ三つ七八十四五すつとんと」と、とんと打込む也里…といふ句をとりて、火吹竹で打つといふことを飾つていつたのだ。○人は落目の心ざし―人は落目が大事」とも云ひ、人は落ぶれた時に特に親切にしてやるべきものだの意。○あも―關西で、餅をあも又はあんもともいふ。餠師の略ならん。○これで千倍―千倍のうれしさ。○とてもこのことに―一層のことに。○ひよる酔うて―ひよる／＼する程酔ひて。

【譯】物で顔を包んで、「さらばや」といつて別れようとする處へ、腰元や下女どもが、「お夏様がおいでにならぬ裏へいつて見よう、井戸を見ようと、さゝやいてわたが、やがて門口をあけて見けて「これは此處においでぢや、あゝ、申し、お夏様お前様は悪いお考ぢや、そんなことをされても、御自分にも、清十郎様の爲にもならぬことぢやから、先づおはいりなされ」といつて、先程衣裳を着かへたと知らねば、着物を目じるしに、清十郎の方を取りまいて、連れて家の内へはいつたので、お夏も引續いて内へはいらうとすると、下女がお夏を清十郎だと思つて「これ清十郎殿、お夏様が可愛くば、先づ自分の家に歸つたがよいぞや、男のやうにもない未練がましい人ぢや」と、辱かして突き出し押し出して、大戸をはたと閉めると、本物の清十郎は仕方なく、自分の部屋にはい體にして、大釜の蓋をあけて、身を縮めてそろり／＼と中へ忍び込んで、中から蓋をしめた。

お夏は門にゐて、あこがれながら家に入るべきたよりをまつてゐると、水仕女の玉が、そろ／＼と門口をあけて「なう清十郎様、清様」といつて、お夏の袖をしつかりとつて、「よ、お前さんは戀知らずの無情な人ぢや、私がお前に心をほだされて、御主人を粗末にし、朝に晩にお前に氣をかけ、神かけて思ひ心を盡しても、お前はお夏様に丈け心中立てをして、一度も靡いて下されぬ。恨の焔をもやしたて、火吹竹でうんと打つてもやりたいが、戀しいが因果で、それも出來ぬ。それにつけても、人は落ぶれた時に、親切にしてやるべきものだといふことぢやから、此餅は正月の餅で、在所へやらうと思つてゐるものぢやが、お前にあげるとすれば惜しくはないからあげよう此私しを食ふと思ふて、賞味して下され」といつて懐中に押し入れてやる。

お夏は自分が清十郎でないといふとを色々知らせまいとして、反對にじつと抱いてしめてやると、玉は「お、ぞつと身ぶるひするほど嬉しい、それで今までの恨の雲も晴れて、千倍の喜ぢや、一層のことに、盃を交はさう、酒をもつて來ませう」といつて家の中にはいる後から、お夏はつゞいて、つと門をはいり、部屋にかけ込んで、夜着を引かづき、ぶる／＼と身をふるはしてゐた。清十郎の方ではまた、それとは知らず、お夏は外でどうしてゐるだらうと心配しながら、釜の蓋をあけて、廻すと、奥では人も寢入ばなでよく寢てをり、勘十郎は親方の寢酒の相伴をして、よろ／＼する程酔つて、夜著蒲團を出して常の所に寢たのであつた。



跡より又源十郎、これも微酔ひ來りしが、源「勘十郎もふ寝たか。少談合ある、目を覺せ」と、頬杖してぞ寝轉びける。勘「いや寝入はせぬサア話せ」と、夜著の内より煙草盆、寝ながら行燈引寄せて、顔を並べて語りける。源十郎小聲になり、「其方が頼んだ鹽商ひの損銀、彼の金子で濟して、請取手形も餘り金も、一所に上した届いたか」といへば、勘「ヲ、過分／＼、慥に届き請取つたが、其状も請取も大事にかけ、笠の頂に入れ置き、其笠を道頓堀の群集に、芝居の木戸に預けて、餘所の笠と變つて、詮議しても知れなんだ。それは失せても大事ない。お蔭で萬事忝いと、いへば源十郎「一段／＼」。それに付き、清十郎奴が諸道具、七拾兩の小判まで、旦那が身共に預けられた。お夏女郎と清十郎奴が、盗出した分にして、仕てやる様な工面がなと、分別すれど能はぬ智恵。其方が今度のおぞい仕様、魔法でも適ふまい、どふぞ思案はあるまいか」といへば、勘十郎「領て、嫁入道具の代銀を、此方へ遣ふて損を埋め、まんまと間には合せしが、一度は大坂へ上す銀、あれをと胸に當てて居る。工面を聞け」と叫き合うて吸付ける、烟管の先にて行燈は、消えて闇とぞ成りにける。

【註】 ○鹽商の損銀―勘十郎が密に鹽を賣買して損をした金のこと。○あの金子……横領した嫁入道具代。これは例の勘十郎が清十郎の父をごまかす前に起つたこと、見るべきだ。勘十郎は此事があつたので、清十郎の父を見つけるなり、悪計を遂行したのだ。だから穴うめの残金を上坂中の勘十郎の手許へ送つたと、源十郎はいふのだ。○過分―有りがたい。○笠の頂―笠の中へかくしておいたのだ。○道頓堀の群集に―混雑してゐる道頓堀で。○一段／＼―一段とよい。此上もないこと。○盗み出した分―

おれが預つてるものを知らぬ間に、清十郎等が盗み出したことにして。○仕てやるやうな工面―ごま化してしまふ工夫。○能はぬ智恵―うまく智恵がはたらかぬ。○おぞい―おそろしい、凄い。○大坂へ上す銀―姫路から送るべき金。○あれを―あの七十兩を。○胸にあてる―考へてゐる。

【譯】 あとから來た源十郎、これもほろ酔で來たが、「勘十郎もう寝たか、少し話しがある目をさませ」といつて、頬杖をついて寝ころんだ。と勘十郎は「いや寝入りはせぬ、さあ話せ」といつて、夜着の中から煙草盆に手をかけ、又寝ながら行燈を引寄せ、顔をならべて話し出した。源十郎は聲を細めて、「お前が頼んだ鹽商ひの損金は、あれは横領の金子で片をつけて、その受取證文と殘金を一緒にして、あとから大坂へ送つたが、受取つたかといふと勘十郎は「お、過分／＼、たしかに届いて受取つたが、實はあの手紙も請取も大事にして、笠の天邊の處へかくして、あの混雑の道頓堀の芝居を見に行つた時、木戸口に預けておいて、餘所の笠とかへられてしまつたのだ。そして詮議をしたが分なかつた。だがあれは失せても大したことはない。免に角お蔭で助かつた、忝い」といふと、源十郎は、「それは何より、此上もない、それについて、清十郎の道具と七十兩の小判まで、旦那がおれに預けられたのだが、それをお夏女郎と清十郎奴とが知らぬ間に盗み出したことにして、うまく誤魔化してやるやうな工夫があればと思つて考へてるが、どうもおれの智恵ではうまくゆかない。お前の今度の恐ろしいやり方は、とても魔法だつて適ひはせぬ。どうか思案はあるまいか」といふと、勘十郎はうなづいて「嫁入道具代をこちへ使つて、損の穴うめをしてうまく間に合せたが、一度は大時へ送るべき銀ぢや、あの七十兩をそれにと考へてゐる、工夫をきけよ」といつて、さゝやき合つて、煙草を吸ひつける煙管の先で、行燈の火がきえて眞闇になつてしまつた。

清十郎は幸と、笠の内よりはひ出る。酒に酔たる源十郎、とろ／＼寝入る體なれば、勘十郎揺り起し鼻に手を當て、仕濟したり、七十兩を盗み取り、預り手の此奴に負ほせん物と分別し、そつと起出で



源十郎を我寢處に押遣つて、夜著打被せさし足し、奥の納戸に入にけり、清十郎はそれとも知らず。「扱は彼奴等は寢入しな。エ、憎さも憎し、とても斯くなる憂身なり。身代の敵、此首尾に助けておめく、戻られず、勘十郎奴を刺殺し、有甲斐もなき我命、仕損ふたら浮世は闇」後前見へぬ出来心、内の勝手は覺えの庖丁、心の錆も荒砥の研立、尋ね寄れば高野、前後も知らず不思議の本望、夜著引退けて咽笛を、ぐつと抉れば源十郎、呟といふを引越し、膽先を一刀、又刺通して息を止め、耳に口を差寄せて、清「こりや勘十郎、未だ魂はよも去るまじい、よく聞け。傍輩に科を被せ、身の爲にせし報ひの劔、名乗合うて殺さぬは、近比残念仕極ながら、讒訴したる此顛骨」と、願かけて斬下げ、「此胸から工んだか」と、鳩尾先を背中まで、思ふ様に止めを刺し、死骸を夜著に押包み、立上れば血落ちて、滑つて仰向にどうと臥す。

【註】○仕渡ましたりうまく仕送げた。でかした、○負はせん—罪を負はせん。○我寢床—勘十郎自分の寢所に。○とても斯くなる憂身—いづれにしても、斯ういふ風になる悲し。身ぢや、○身代の敵—主人の家の身代の敵。○此首尾に—此場合に……奴等を助け生かしておいて、おれはおめく、と在所へは歸られぬ。○我命—我命の運だめしてもやらう意。○浮世は闇—眞闇で途方もたぬ、とあとにかゝる。○後先見えぬ出来心—出来心でやるのだから前後は見えぬと、浮世は闇故に後前見えぬと兩方にかゝる。○心の錆も荒砥の研立—心の中には錆もあらずと荒にかく、即ち清淨潔白な心で、荒砥で研きたてた庖丁の意。○不思議の本望—前後も知らず臥しにかく。○身の爲にせし—自分の爲を計つた。○名乗合つて—殺される人に對して、殺す人が名を云ひ、理由をいつて殺す風がある故いふ。○顛骨—みつおちといふ、胸部の下方少しへこんだところ。

【譯】清十郎は仕合せと釜の中からはい出した。酒に酔うた源十郎はとろ／＼と寢入る様子であるので、勘十郎はゆり起し、鼻に手をあて、見て、これはうまい、しめた、七十兩を盗んで、預り主である源十郎に罪を負はせてやらうと考へて、そつと起き上つて、反對に源十郎を自分の寢所の方に押しやつて寢かし、夜着をかぶせて、さし足で、七十兩をさがすべく納戸にはいつた。

清十郎はかくとは知らず「さては彼奴等は寢入つた、え、憎さも憎い奴ぢや、それにしても斯ういふ風になる憂い身であるからには、主家の身代の敵を、此好都合の場合に生かしておいて、自分はおめく、と在所へ歸られはせぬ。勘十郎の奴を刺殺し、生きてゐる價もない此命の運だめしをやらう。若しやり損つたら浮世は闇ぢや」と後前の見えぬ出来心を起し、内の勝手は覺えてゐるので、潔白な心をもつて、荒砥で研き立ての庖丁をとつて、さがして近よつて見ると、相手は高野をかいて前後も知らず臥してゐるので、不思議の本望だと、夜着を引のけて、咽笛をぐつとゑぐると源十郎がうんといふ。それを引越して、又肝先に刺通して息の根をとめ、やがて耳に口をよせて、「こりや勘十郎、死んでもまだ魂はよく逃げはすまい、よく聞け朋輩に罪を着せて、自分の身の爲に計つた報の劔ぢや、名乗をあげて殺さぬのは近頃残念至極のことぢやが、ありもせぬことを訴へた此口」といつて頭から斬り下けて「此胸の中で企らんだか」と附加へて、みづおち先を背中まで、氣のいくまで止めを刺して、死骸を夜着についで、立上ると、落ちた血をふみ滑つて、仰向にどうと倒れた。

はつと起さて蒲團にて、足摺拭ひ静々と、身仕舞して立たる處に、奥より夏は手燭の影、表へ出るを清「これくくく」夏「ム、其處にか」と走寄り、血に滑つて「ア、怖」と、聲を立てるを押鎮め、様子を呷き、「此上は一所に退かん」といふ處へ、行燈提げて勘十郎、納戸の方より來る體、「南無三寶人違へ、よしこれもうぬが身の火を吹消して車戸を、押明け飛んで出でにけり。遅れてお夏は詮方なく、



蚊帳打あげ身を潜め、生きたる心地はなかりけり。此音に勘十郎走寄つて手燭を上げ、夜著引捲つて、「ヤア源十郎が切られたは」と、呼はる聲に主下人、男女残らず起合せ、主疑ひもなき清十郎、門の戸明たは落ちつらん。引入れあるか吟味せよ」と、上を下へと返せしが、下人「なふお夏様が御座らぬわ。ヤア是ぞ曲物探して見よ」と、二階、内庫、縁の下、湯殿まで探せども、蚊帳の内は氣もつかず、表の口に錠下し、「裏を探さん」「尤」と、提灯燈して駆惑ふ。

【註】○身仕舞—仕度。○手燭の影—お夏は手燭をつけて、その火影が外へ出るのを。○よしこれもうぬが身の—まよ、これも汝が身の悪運の爲め、汝が身の火から出たのであると。○火を吹消す—此は最初お夏がもつて来た火を消すと見る方が穩當だ。まだ来る様子の勘十郎の行燈の火を消したのではあるまい。それではあまり大袈裟だ。○蚊帳打あげ—引あげて中にはいるのだ。○手燭をあげ—これは前に清十郎が消した手燭に、今勘十郎が火をつけ直したと見るべきで、てないと火の關係が無理になるやうだ。○落ちつらん—逃亡したてである。○引入れあるか—手引したものがあるか。○返せし—ごつたがへす。○曲者—怪しい意これが引入れたのかも知れぬ怪しいといふのだ。○内庫—家の内にある倉。

【譯】 仰向に倒れた清十郎は、はつと匆ね起きて、蒲團で足をのこひ、靜に身仕度して立去つた所へ、奥からお夏が手燭をもつた影が表へ出てゆくのを清十郎は「これ〜」といつて呼ぶ、お夏「むゝ其處においでか」と走り寄つて、血をふんですべり、「あゝ恐い」と聲を立てるのをしづめて、様子次第を話して、「かうなつては一所に立退くことにしよう」といつてる所へ、行燈をさげて、勘十郎が納戸の方から来る様子である、清十郎は「南無三寶人違をした、勘十郎を殺したのではなかつたか。まよよ、これも汝が身の火からだ」といつて、手燭の火を吹消して、車戸を押あけて飛んで出た。

お夏はをくれて仕方なく、蚊帳を引き上げて身をかくし、生きた心地はなかつた。此音に勘十郎は走りよつて手燭に火をつけ直してそれを持あげ、夜着を引きまくつて「やあ、源十郎が切られたわ」と呼びたてる聲に驚いて、主人や召使の男女共残らず起きて来る。主人は「それは疑もなく清十郎の仕業ぢや。門の戸があいてるのを見ると落ち延びたであらう。手引して入れたものがありはせぬか調べて見よ」と、上を下へとこつた返したが、召使の一人「なう、お夏様がをられぬ。これが曲者ぢや、探して見よ」と、二階や家内の倉や、縁の下や、湯殿まで探したが、蚊帳の中には氣もつかず、表の門口には錠を下ろして、「裏を探して見よう」「尤もぢや」といつて提灯をつけて駆け迷うてゐる。

お夏は我身の恐ろしさ、清十郎が氣遣ひさ、氣も逆立つて散亂し、「南無天照太神様、觀音様氏神様、死ぬとも二人一所に」と、胸を騒がす折からに、勘十郎が聲として、「蚊屋の内を見なんだ、探して見よ」といふ聲す。夏「南無三寶」と飛んで出で、表には錠下りたり、裏には大勢充滿たり、跡へも先へも因果の網の、かゝる憂身は佛神の、直ぐなる法も横町の、間の細路次蹴破れば、さつと開くも戀路の念力、かけし願ひの、神力の神變奇特毒蛇の口、通れ出たる如くにて、落ちんと契りにしの辻、東の辻に、夏「なふ我夫〜」と、聲を限りに往還り、「扱は俘となりけるか」と、はや狂亂となる鐘の響の末に、夏「あれお夏〜と呼ぶはいの。あふ〜其處にか。何處にぞ。いや〜いや待て暫し、あれは我屋に父の聲、我を尋ねて我を呼ぶ。親も床しや、妻も戀しや。父は子と呼ぶ夜の鶴、我は妻呼ぶ野邊の雉子、追かけ行かん、夜は何時ぞ。鐘はいくつ、八ツか、七ツか」曉風の、辻行燈を吹消



して、道も心も真くらく、くるくくく、狂ひ亂れ泣亂れ、亂れて歌ふ鶏の、卵を渡る危ふさ  
の、狂女となるこそ 三重哀れなれ

【註】 ○因果の網のかゝる憂身―因果の網が懸ると、かかる憂身とをかく。因果の網にかゝつてゐる、このやうな愛い身は。○佛神の直ぐなる法も……佛の命する正しき道にも法にも従はず。横道にそれるもので、即ちお夏が正面の正しい道を進まず横道にそれて清十郎の後を追ふをいふ。○横道の間の細路次―横道と横道とをかけ、正面や裏口の外の、横の路次の方を蹴やぶるのである。○神變奇特―かけた願の神力が不思議にも現はれて。○契りにしの辻―にしの助辭を西にかく。○狂亂となる鐘の―狂氣になると鐘の鳴るとをかく。○妻戀―妻は夫にて、良人をさす。○夜の鶴―焼野の雉子夜の鶴子に迷はぬものはなしといふ語がある。父は夜の鶴の如く我を愛し呼ぶ意。○曉風の―曉風が。○雉の卵を渡る危さ―累卵の危さといふ語に縁を求めて、卵の上を渡る如き危ふき。

【譯】 お夏は自分の身が恐ろしく、清十郎の身が氣遣はしく、その爲に氣も逆になつて、亂れ、南無天照大神様、觀音様、氏神様、死ぬにしても二人で 緒に死なして下され」と祈りながら胸を騒がしてゐる折しも、「蚊帳の中をまだ見なんだ、探して見よう」といふ勘十郎の聲がきこえる。お夏は「これはたまらぬ」と飛んで出たが、表には錠が下りてゐる。裏の方には大勢が一杯居る。後へも先へもゆかれず、因果の網にかゝつてゐる此の様な憂き苦の身は、眞直な神佛の導びく道には従はずして、横道にそれるものだが、お夏も即ち横道にそれて横町の細い路次を蹴やぶると、戀路の念方の爲か、願がけた神力が現はれて、神變不思議にも通り路がさつとあき、さも毒蛇の口を遁れ出た如くに、外へ出ることが出来た。即ち落ち逃げようと二人で契つてゐた西の辻へ行つたり、東の辻へ行つたりして「わが良人」と聲を限りに呼びながら、「さてはもう捕はれてしまつたのか」といひ、はや狂亂の身となり、やがて鐘の鳴りひびいた後に、「あれお夏」と呼ぶ聲がするわいの、おくそこにゐるか、何處にぢや、いやまて、あれは我家で父の呼ぶ聲ぢや、我を尋ねさがして、我名を呼ぶ父も床しくもあり、良人も戀しい、

父は子を愛する夜の鶴にもたとへれば、我はまたわが良人を呼ぶ野邊の雉子である。追かけて行かう、何時であるか、鐘は幾つなる、八つを打つか七つを打つのか」と呼ぶ折しも、曉の風は辻行燈を吹消して、道も暗く、お夏の心も眞暗で、くるくくと狂ひ亂れ、泣き亂れ、四方に歌ふ雉の聲が亂れてきこゆる頃、累卵の前をふみ渡る身にも比すべき、危き、狂女となつたお夏の身は哀れなものである。

お夏笠物狂

下の巻

夜さ來ひといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寝たところ、裾に清十郎と寝たところエ。少くは  
ん。歌念佛「觀ずれば夢の世や。寝て温めし懷子、何時の間にかは浮れ初、三界を只家として、袖笠  
雨の宿りにも、心とめぬ假枕、流れにあらぬ河竹の、笹の小笹のびんざら、花の手おほひち手を引  
かれた、是も熊野の修行かや。姉様のこれの、勸進柄杓の、笑顔好しとて柳が招く、柳の髪を何故に  
浮世恨みて尼が崎、尼が崎とは海近く何故に其方はしほが無い」節は哀れに身は伊達に、歌は念佛の  
歌比丘尼

【註】 ○夜さ來い……夜といふ大きな字を金の平糸で紗に縫はせて、それを裾にかけて清十郎と寝たところといふ意で、夜といふ字を縫ふことは、夜來といふ意に通用するのである。此歌は重井筒にも用ひられてゐる。詳しくは第一卷重井筒参照。此句は舞臺上の人物ではなくて、勿論義太夫が歌ひ出すのである。○少くはん―ちとくわんと讀む。少しく勸進を乞ふ意。これは歌念佛の比丘尼、即清十郎の妹と許嫁のおさんが、歌比丘尼となりて清十郎をさがしつゝ、熊野の修行者として、下の歌を歌



ふにあたり、その歌ひ出しに云ふ語である。○歌念佛—説教節に似て、寶永の頃京都に流行す。鉦をたゞきて語る。歌念佛の節にて、「観すれば」から、「しほがな」まで歌ふのだが、「修行かや」までは、少しは直してあるが、大體歌念佛の歌をとつてゐる然し、「姉様の」からは作者が歌念佛の歌らしく作つたのである。○寢て温めし懐子…寢て懐に入れて温めた子供が、大きくなるといつかは浮かれ出す意。懐子は誰と特にさしたのではない。○三界—色界欲界無色界、つまり現世又は世間の意。○袖笠雨—袖を笠の如くかさして、雨をよけるをいふ。○心とどめぬ假枕—一切のもの、何事にも心をとめぬ旅の意。假枕は旅の身の意。○流にあらぬ河竹の—流の河竹といへば遊女のことをいふのだが、此處は二人の女が遊女でなくて、流れ渡る比丘尼の身なる故にいつた。○笹の小笹のびんざら—さゝの小笹は竹といふから笹といひ、笹の語から、びんざらといひ、びんざらと鳴らしての意。びんざらといふは、薄い小さい板を深山集めて、一端を糸でつゞり、板と板とが打つて鳴るやうにしたもの。田樂から、後には説教節歌念佛にも用ひた一種の樂器。○花の手おほひ—花は那木の枝のこと。花はさいてゐなくも佛にあげる植物などは凡てお花といふからいふ。手ほひは手甲即ち籠手のこと、那木の枝を手にもつて、手甲をかけての意。○お手を引かれ—二人の女が互に手を引いてるといつたのだ。○熊野修行—歌比丘尼は熊野權現に關係したのが一番多く、それが熊野權現の縁起を語り、誓紙をかくによく用ひられた群鳥の紋のある牛玉の札といふをくばりなどした。○姉様のこれの—姉様のこのと、妹の比丘尼お後がおさんにいふのである。○勸進柄杓—順禮などが錢や米などの勸進即寄附を乞ひそれを貰ひ受くる時、手の代りに差し出す柄杓。この柄杓を出す時の笑顔がいとて道ばたの柳もまねくほどだ。柄は笑顔の笑にかく。○柳の髪を何故に…柳のやうな濃緑の髪を、浮世を恨んで、何故に剃りすて、尼となつたかと尼ヶ崎にかく。○尼ヶ崎とは…尼ヶ崎といふは海に近い、何故にしほがないか。しほは鹽と愛嬌とにかく。何故に愛嬌がないか、といふのは、所謂歌比丘尼は、普通に密かに色を賣つたに、此歌比丘尼は色を賣らぬからいつたのである。○歌は念佛—歌念佛のことと前に説く。○歌比丘尼—もと熊野權現を信じ、頭をつゞみ、地獄極樂の繪卷などを携へ、歌を歌ひ、佛教をすゝめたりしたものであつたが、後には一種の賣女に變つた。

【譯】 夜來といふ意を暗示して、夜といふ字を、金の平糸で紗に縫はせて、裾にかけて清十郎と寢たところ、  
歌比丘尼二人は歌ひながら「ちと勸進を乞ひ申す、思へば此世は夢の世である。懐に入れて寢て温めた子供が、いつの間にか大きくなつて浮れ出し、三界を家として、袖笠雨のやどりにも、何一つに心をとめず、あちこちと旅を

するのである。浮き河竹の流れの身でない流の身が、びんざらと鳴らして、那木の枝を携へ手甲をあてゝお手を引かれたのは、此も熊野の修行者であるか。姉様の此勸進柄杓を差出す時の笑顔が美しいとて柳が招くが、その柳の様な黒髪を、浮世を恨んで何故に尼にならしやつたか。尼が崎といふ處は海が近くであるに、何故にそなたは鹽(愛嬌)がないか」といつて歌ふ節はあはれで、身は伊達な振りをして、歌は歌比丘尼が歌ふ歌念佛である。

歌「向ひ通るは清十郎じやないか。笠がよく似た菅笠が、よく似た笠が、笠が能く似た菅笠がゑ」笠を知るべの物狂ひ、物に狂ふも我計りかは、鐘に待宵鳥には別れ、戀する人の夜なくを、氣違とな笑ひ給ひそ。

【註】 ○向ひ通るは—此からは同じく比丘尼姿のお夏が歌ふのである。○笠がよく似た—お夏が物狂ほしくなつて、似た笠さへ見れば、憧れたといふことから、此歌が流行し出したのである。○笠をきるべの物狂—お夏の態度をいつたのだ。○鐘に待宵鳥には別れ—平家物語小侍従の歌に「待宵にふけゆく鐘の聲きけば、飽かぬ別れの鳥は物かは」からとる。即ち鐘の音をきながら人を待つ戀をしている人もあり、又鳥の聲にあかぬ別れをするを戀している人もあらうが、その戀を氣狂とて笑ふなの意。

【譯】 歌比丘尼姿のお夏は歌ふ、「向ひを通るは清十郎ではないか、菅笠がよく似てゐるが」笠をきるべに私は物狂をしてるが、物に狂ふは私ばかりだろか、宵をまちつゝ鐘の音をきき戀をしてゐるものもあれば、鶏に飽かぬ別れをしてゐるものもあらうし、夜なく色々の戀をする人を氣狂とてお笑ひやるな。

諸傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易は又我子を先立て、枕に残る藥恨むは斷や。夫は子故の別れの涙、親より子より我身より、いとし殿御のいとしばや。夫より便宜音信の、聲も聞かねば顔も見ず、我は秋鹿夫を戀ひ、歌かいろと啼くと知らせたや。なふくあれなる御



僧我殿御返してたべ。何處へ連て行く事ぞ、男返してたべなふ。いや御僧とは空目かや、我も焦る、丸太船、浮世渡る一節を、謠へや謠へ泡沫の、二人「小舟作りてお夏を乗せて、花の清十郎に櫓を押さしよる、くはん」。

【註】 ○謠—お夏の心の表現は、謠の形式でまだ進むのである。○傳へ聞く—此語から、枕に残る薬恨むまで、謠曲「天鼓」より取る。こゝもお夏がやるのである。○鯉魚—孔子の長子、五十三歳にて孔子より先に死ぬ。○思ひの火……逝ける子を思ふ情の切なるを火にたとへた。○白居易—唐の詩人白樂天、彼 女の子金鬘子に先立たれて悲の詩をつくつた。○枕に礎る薬恨む—子の死んだ後に、枕元に残つた薬を恨めしく思つた。○斷り—理のあて字である。○いとしばや—いとほしやの轉。いたはしいことよ。○夫より—別れてから。○便宜音信……たよりもきかず訪ねても來ず。○我は秋鹿夫を戀ひ—鹿は牡が妻鹿を戀ふて泣くのみで、牝は鳴かぬが、夫も妻も共につまよむから、ごちや—に書いたのである。○かいろと泣くと……かいろは鹿の鳴聲。清十郎歸れにかけ又、偕老にかく。○空目—見誤り。○我も焦る、丸太船—私も良人に焦れてゐる比丘尼ぢやの意。丸太船は木の端のこと、それから即ち坊主の意にて、お夏が自分の歌比丘尼姿であることにかく。船といふから、こがる、漕がる、と云ひ、浮世渡るといふ。○泡沫の—うたかたの世やの意。○小舟—佛教の如渡得船、即ち誓の舟のこと、これに乗じて淨土に行かうの意をふくむ。○くはん—勸進を乞ふ、寄附を願ふ意を略していつたのだ。

【譯】 お夏の言葉は謠の形にてつゞく「傳へ聞く所によれば、孔子は自分の子鯉魚に先だゝれて胸に物思ひの火を焚き、白居易も自分の子を先に失つて、枕元に残つた薬を見て恨んだといふが、まことに道理である。それは皆子故に別れのつらい涙を流したのだが、親よりも子よりも、まして我身よりも、いとしい殿御のいたはしや、別れてから後たよりも音づれの聲もきかず顔も見ず、戀しく慕はしく、例へば我は秋の鹿で、良人を戀うて、かいろく、偕老く、と鳴くと知らせたいことよ。たうく、あれにゐる御僧我が殿を返して下され、何處へつれて行かれるのぢや我が男を返したまへや。いや御僧とは間違で、比丘尼であつたか、我も思ひに焦れ良人にこがる、歌比丘尼であるのぢや、いざ浮世を渡る一節を、謠へ謠へ、うたかたの世や」二人の比丘尼は謠ひながら答へる「誓の小舟をつくりてお夏をのせて、花のやうな清十郎に櫓を押させて淨土へやりたや」

夏「観音薩埵の誓には、枯たる木にも花笠、笠に挿いたは那木の葉、腰に挿いたも那木の葉、一枝二枝、三日に三枚七日に七枚、起請誓紙の牛王のうらなく、灰に焼つゝ互に飲んだる、水も漏さぬ中々に、引も合せぬ神心、熊野の神のお留守かや。足柄、箱根、玉津島、貴船や三輪の明神も、神共覺へぬ神ならば、尋る人に逢せて見や。それく逢せず逢れぬは、皆偽りの御神と、譏つても祈つても、神の力もかなはぬか」と、笠も髻もかなぐり棄て、狂ひ歎くぞ哀れなる。

【註】 ○薩埵の誓—薩埵は佛果を求めて精進する人、菩薩と同じ、その誓とは慈悲の雨をふらす誓。○枯れたる木にも花—観音力を念すれば、枯木に花が咲くといふ語、陀羅尼經に在り、之をすぐに花笠にかく。○笠に—腰に—熊野道者のうたひし投節の本歌といふのに、「此處を通る熊野道者、手に持つたる那木の葉、笠にさいいたは那木の葉」といふのがある。此處はこの投節の本歌を少しかへたもの。那木は一位科の常緑喬木、もちの木に似て、葉は笹の如く縦に筋あり、所謂竹柏と稱するもの即ちこれ。○起請誓紙—互に心の變らぬことを誓つた證文にて、牛王の裏にかくことにきまつてゐる。○牛王—神佛から出す一種の守札にて、牛王寶印又は牛王寶命と書かれ、熊野社、淺間社、高野山、那智山、祇園社などのが最名高い。中にも熊野牛王の符印即ち守札が最も知られ、すぐ次にも熊野と出るのはこれが爲だ。○うらなく—哀なく、隠し包むことなく。○灰に焼く……牛王を互に焼いて灰として飲んで誓つたものだ。○引も合せぬ……さうした誓つた仲なのに、清十郎に引合せてくれぬのは、熊野の神も留守な爲か。○足柄—權現。○箱根—權現。○玉津島—紀州和歌浦にあり、衣通姫をまつる。○貴船—大和にあり。○三輪—大和磯城郡にある明神。梅忠の遺跡を有するといふ茶屋竹田屋旅館といふが此地にあり。以上の諸神は皆夫婦の語らひを守ると謠曲「班女」にあり。○かなぐりする—擲きなげする。



【譯】 お夏は即ち「觀音菩薩の慈悲の誓によれば、枯木にも花が咲くといふ。即ち花笠かぶり、笠には那木の葉をさし、腰にも一枝二枝さして祈りをこらしたりし、また三日には三枚の起請を、七日には七枚の起請を、牛王の神符の裏に書いて、互に心の裏のないやうに心中をあかして、それを焼きて灰にして互に飲みまでして、變るな變るまいと誓つた程の、水も漏さぬ中であるに、戀人清十郎に引き合せてもくれぬ神の心はどうであらう。牛王の神符の主である熊野の神がお留守であるが爲なのか。夫婦の語らひを守るといふ、足柄、箱根、王津島、貴船、三輪の諸神も、それでは神であるとも思はれぬ。若し神であるならば私の尋ねてゐる清十郎に遇はせて見やれ。それに逢はせず逢はれぬからには皆偽の神ぢや、と譏つて見ても、祈をかけて見ても兎も角も神の力もかなはぬのか」と、いつて笠も篋もなげすてしまつて、狂人のやうに歎くのはあはれである。

共に濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を押へ、「我も尋る人故に、假に扮せし修行の道、思ひあたる事あらば、知らせ申さん國處、有様語り給へとよ」夏嬉しの人の問事や。國は播州姫路の者、尋る夫の容形、姿は詞に語る共、心は筆も及びなき、ぼんじやりとしてきつとして、花橋の袖の香に、昔男の業平作り、黒い羽織が好き梳油、鬢付髪付眞黒々、黒目がち成目の中に、鼻筋通つて櫻色、年ごろは甘あまり、せい高からず低からず。茶の湯、盤上、打囉し、男の藝に一つでも、疵なき玉の盃の、酒もよい酒、假名文書手の萩の露、轉寢し、説教夜の睦事は、おれとそなたが中ならで、岸の濱松根堀られても、漏すまいぞや顯はすな、變るまじきと末かけし、末の松山浦の波、上越す人もなかりしに、友傍輩の猜みにて、犯さぬ罪の仇名をかこち、世を憂きものに出給ふ。今は我名を包みても、何か其

甲斐夏果る、扇の女の物狂ひ、其人の名は清十郎、有し姿は變る共、未だ俛は残るべし。教へてたべの人々」とて、伏沈みてぞ泣居たる。二人の比丘尼絶付き「扱こそは餘所ならぬ、一ツ流れの和泉の國、其人の爲にこそ」しゅん「我は妹」さん「我は嫁」二人「親の歎きを宥めかね、共に亂る、我身ぞや。狂女といふも何故ぞ。そなたは妹脊の忍草、身は兄弟を思ひ草、同じ由縁の草葉ぞ」と、手に手を取つは泣叫ぶ、物の哀れをとめける。

【註】 ○共にぬらせる尼衣—お夏の歌をきいてゐて、共に袖をぬらした比丘尼がの意。○とよ—よと同じ。足利時代の語。○ぼんじやり—やさしく、愛らしく、大様な。○花橋の袖の香—古今集の「さつきまつ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」からとる。昔の人の床しさをもつてゐる意で、業平につづけた。○黒い羽織…好きからすき油、つき皆語呂で引かけた。○盤上—碁や雙六の類。○打囉し—太鼓や鼓などの音楽をさす。○疵なき玉の盃—徒然草に「色好まざらんをのこは…玉の盃底なき心地す」とあるからとる。即ち色を好む人にして始めて物のあはれを知るといつたのである。○よい酒…悪癖のない酒飲み男。○萩の露—假名文字筆蹟の目もあやなるに譬ふ。蓋し古今集卷四、秋歌上の部に「をりてみば落ちぞしぬべき萩の、枝もたわわにおける白露」と見え、また小野道風筆蹟の假名書帖に安幾破起帖といふがあるによつて、かくいふたのである。そして安幾破起帖の首に古今集の歌、「萩萩の下葉色づく今よりや獨りある人の寝ねがてにする」が載つてゐるにより、「寝ねがてにする」を「ころびねし夜」と改作したのだ。此萩の縁から寢轉びしといつた。萩の木がよくころぶからだ。○岸の濱松根堀れても—身を濱松根堀れて惚れて顯れずするといふ小唄からとつた。岸の濱松は波によく根を堀られるからで、根問ひ葉とひきされてもの意。○末の松山浦の波—「君をおきてあだし心をわれもたば、末の松山波もこえなん」の歌からとる。末の松山は奥州にあり、男女相契りて、此山と波が越すまでは互に心變るまいと誓つたといふ。即ち末の松山を浦波が越えることないごとく深い契りを結んでゐる意。○上越す人も…末の松山の歌のごとく、波もこえることなく、まして清十郎を右に出づる人はなかつたが。○かこち—思ひわびてなげく。○何か其甲斐夏果つる—其甲斐なしにかく。○夏果つる扇の女—扇の女といふのは謡曲「班女」にある狂女の



ことにて、吉田の少將と契り、とりかへられた扇をもつて、戀に物狂ほしくなつた花子のことをいふ。夏が終つて扇を手から放すのと、白露の置くのといづれが早いかといふ意味の新古今集の歌「夏果つる扇と秋の白露といづれが先におかんとすらん」にかゝる。全體は「いづれは夏が終つてすてらるゝ扇と同じき班女のやうな運命の爲に物狂ひをしてゐるお夏」の意、その戀人の名は清十郎……○一つ流れの和泉の國―同じ清十郎の爲に探しあるいてゐる意を、同じ一つの泉から出てる流れといつた。和泉の國は清十郎の生地なる故。○共に亂るゝ―共に心を亂す。

【譯】お夏の歌をきいてゐた二人の比丘尼は、共に衣をぬらしながら涙を押へて、「私達も尋ねる人があるの、かりに比丘姿に身をやつして、修行者の道をふむのであるからには、思ひあたることがあつたら、お知らせ申さう。國や處や、様子など語り給へ」お夏はそれに答へて、「嬉しい方のお尋かな、國は播州姫路のもので、尋ねる良人の容貌や姿は、詞にて語るとも、その心ばえは筆にも記すことの出来ぬ位に、やさしく愛らしくて而も威ありてきつとして、床ゆかしい昔の男の業平といつた風で、黒い羽織が好きで、すき油をつけて、鬢つき髪つきなど眞黒々と光り、黒眼がちな二つの目の中に鼻筋が通つて、櫻色の顔で年の頃二十歳あまり、丈け高からず低からず、茶の湯、双六、大鼓鼓など、男の藝には一つでも疵はなく、例へば玉の盃の如く、酒癖も悪くなくて、假名文は上手にかいて、萩の露の如くころび寝した夜の睦ましい物語は二人の仲ならでは、岸に生えた濱松の如く、根堀り葉堀り問はれても、互に漏すまい、浦波が末の松山を越ゆるやうなことがあるまで互に心も變るまいと、末かけて契ひまた自分の心を寄せる人は、此人に越す人もなかつたが、友人朋輩の猜みから、此人は犯しもせぬ罪をきせられて仇しい名を敷かねばならぬこととなり、世を憂いものとして出給ふたのである。かくなる上からは今は我が名を包み隠しても其申すもなく、夏が終つてすてられる扇をもつて狂女となつた班女さながらの物狂をしてゐるお夏の戀人はその名を清十郎といひ、昔の姿とは變つても、まだ昔の面影だけは残つてゐるだらう。教へて下されや人々」と、伏し沈みて泣いてゐた。二人の比丘尼は之をきくと絶りついて「さてそれでは餘所ごとではない、同じ和泉の國に生れ同じ泉から流れたもので、その人の爲にこそ私達も今修行者となつてゐるのぢや」お俊は「そして私はその人の

妹で、おさんは「私は嫁で」「私達は清十郎のなさない様をきいて歎いてゐる親の様子をなだめることか出來ず、等しく亂れ心地の私達である。お前が狂女になつたといふのも何故であるか、お前は夫婦の契を密かに忍ぶ忍ぶ草とれば、私達は兄を思ふ思ひ草であり、つまり同じく因縁のある仲ではある」と手に手を取りながら泣き叫ぶ姿はあはれなものであつた。

比丘「なふ淺ましや、今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は人を殺めし科によつて、方々へ追手かゝり長崎とやらんにて終に捕はれ、囚人と成、彼の松蔭の竹垣にて七日曝し、其後は但馬屋の門口に獄門にかけらるゝと語りし故、せめて餘所目の暇請に是迄は参りしが、御存じなきかいとほしや」夏「なに我夫は捕はれて、終に首を切らるゝとや、それは誠か。今迄は狂氣の中にも若もやと、頼む念力切れ果て、同じ刀に斬られん」と、駈出るを二人の尼、「歎きはかはらぬ我々なれど、最期に心亂れては、人の譏後世の爲、皆其人の仇ぞ」とて、泣く／＼制し止むれば、はや先拂ひの警固の者、山賊夜盜の其如く、嚴しく堅め引出す。生ての思ひ死する罪、もと一筋の縛めの、繩目に遭ひて清十郎、引かれ出るぞ無慚なる。矢拂の内に土壇を構へ高手を許し羽搔締、北向に引据ゆるは、目も當てられぬ風情なり。

【註】○語りしは―語つた所によれば。○暴し―罪狀を揭示し、罪人を市上に繋いで、普く一般人に見せしめること。○獄門―普通は重罪犯人の斬られた首を獄屋の門の近所の木や、板の上にかけて晒しものにする。○生きての思ひ死する罪―清十郎殺さばお夏も殺せ生きて思ひをさせよよりも―の唄から見ると、生きての思ひは、生きてお夏に對するつらい思。又死する罪は人を殺して殺さるゝ罪にて、此二つの罪、もと戀といふ一筋の縛から起り、來つたもので、それが今繩目に逢ひて―



繩で身を縛られて。○土壇―死刑に逢ふ者の坐する壇。○高手を許し―これは繩三寸といつて、兩手を脊にまはし、出来る丈け手を上につり上げ、首に巻いた繩との間が三寸になるまで、兩手を引あげて結へる残酷な刑である。それ丈けはせずに許したのだ。

○羽搔締―敵の後から兩手をその腋下にさし込み、自分の手先を敵の胸にてしめること。鵝の羽をつまんでしめる締め方。

【譯】 比丘は「なう呆れたことよ。今里の人の語る處によると、但馬屋の清十郎は、人を殺したに罪よりて、方々へ追手がかり、長崎とやらで遂に捕まつて、囚人となり、あの松の蔭の竹垣にて七日の間見世物にし、其後では但馬屋の門口にて、獄門にかけられるといふことであつたので、せめては餘所ながら見て暇乞をしようと思つて此まで來ましたのだが、お前はそれとは御存じないのか、お氣の毒や」お夏はそれを聞くと、「なに我が良人は捕まつて、とうと首を斬られるといやるのか、それは誠のことか。これまでのところでは、私は狂氣の中にも、若しか思ふ良人に出遇へばせぬかと頼んでゐたが、それがまこととなつては念力も盡き果てた、一層自分も同じ刀に切られよう」といつて、駈け出すのを、二人の尼は、「お前と同じやうに歎く私達ではあるが、最期に心が亂れたとあつては、人の譏も受け、後世の爲にも、思ふ人にとつては良くないことであらうぞ」といつて泣きながらお夏をとめると、そこにははや先拂ひの警めをする人が、さながら山賊や盗人を引出すやうな、厳しい固めで清十郎を引出して來る。生きてお夏を思ふ苦しき思ひも、人を殺して死する罪も、もと戀といふ一筋の縛めから起つたもので、その爲に清十郎が今しも繩にしばられて出て來るのはいたはしきことである。矢らいの中に死刑壇を構へて、高手の繩目は許し、羽搔締にして北向にさせて引据える様は、まるで眼もあてられぬ風である。

お夏は涙に目も明れず、聲も立たねど仰上り、夏なふ此處に居る。是此處に顔を向けて下され」と、呼はる聲も往來の群集の歎き念佛に、紛れ聞へぬ哀れやな。不便やな清十郎、額も容も瘦衰へ、最期極る心にも、後生菩提も思はれず、「お夏が歎き古郷の、親兄弟は如何ぞや。お夏に知らせ今一目、せめて面影計でも 姫路の方を」と見廻して、目と目をふつと見合せて、お夏は「わつ」と泣出す。清十郎は聲立てず、膽より出る憂涙、刀の刃より先さきに、思ひに命絶へぬ可し。涙を中の架け橋と、心通はす心の色、世に取沙汰の諺や。歌「清十郎殺さばお夏も殺せ。生て思ひをさしよよりも、思ひを生て、生て思ひをさしよよりもエ」なまみだく南無阿彌陀、南無阿彌陀佛なまみだく、南無阿彌陀佛と回向して、皆々袖をぞ紋りける。

【註】 ○明れず―あけられず。○歎き念佛―悲歎の念佛をとなへてるのだ。○最後極る心―せつばつまつた心、死ぬときまつた心。○後生菩提も―後世のことを思ひやる心も起らず、成佛し佛果を得ようとする考も起らず。○お夏が歎―姫路の方を……此間は清十郎の此時の思ひを描いたのである。○今一目―逢ひたや ○面影ばかり―面丈けても姫路の方に向けてからと。○思ひに命絶えぬべし……お夏の姿を一目見ると、さまざまの思ひに心亂れて、刃物で殺されぬ先に、命が絶える程の悲みを味はつたことであらう。○涙を中の架け橋……涙を二人の間の架け橋として、心の思ひ、心の色を通はす。○世に取沙汰の諺や―心の色を世の人が取沙汰しその諺に曰ふと、あとにかゝるのである。此やは俳句の切れ字のや、と同じだから、近松は俳句を知つてゐたのだといふ説が起るのであると。○思ひを生きて―悲の思ひをしながら生きながらへて。此は西鶴五人女にもいづ。○回向―念佛をとなへて冥福を祈ること。

【譯】 お夏は悲の涙に目をあけることも出来ず、聲も大きく立てることが出来ぬが「なう此處にお夏はを、これ此の方へ顔を向けて下され」と呼ぶが、その聲も往來にゐる群集が、歎き悲の念佛をとなへてゐる聲に紛れて、あはれ聞えぬのである。あはれや清十郎は顔も形も瘦せ衰へて、死ぬときまつた心にも、まだ後生を思ふことが出来ず、菩提を祈る者が起らず、現世執着の念はつきまとうて、「お夏の歎きはどんなであらう。故郷の親兄弟は如何してゐるであらう。今のわが身の有様をお夏に知らせて今一目逢ひたや。せめては面丈けでもお夏の里なる姫路の方を見よ



う」と思ひながら、その方を見廻して、ふとお夏を見つけると、二人は目と目とを見合せ、お夏はわつと泣き出した。清十郎は聲もたてず、膽から湧出づる悲の思ひの涙のために刀の刃で殺される先に命が絶えることであらう。二人は涙を間の架け橋として心を通はすのであるが、其心の色を見て世間に取沙汰する諺に曰く、「清十郎殺すならお夏も殺せ、生きてゐて悲の思をさせうよりも、つらひ思ひに生きて、悲しい思ひをさせうよりも、お夏を殺せ」と、人々はかう歌ひながら、南無阿彌陀佛とこの人の爲に唱へて回向して袖をしぼつた。

清十郎涙を押へ、「何れも有難き御回向、千金萬金より、一遍の回向に優る寶なしと承る。最期の悦び何事か是に如んさりながら、心にかゝるは此高札、主人の金七十兩、盗むとは身に取つて覺へなし。相手勘十郎を斬殺さんと思ひしに過つて人違へ、遁るゝも業悦びならず殺さるゝも業歎きにあらず、某生年廿五歳、十一歳の春より奉公し、主人の養育み情にて、商人の道一通り、藝能文字の本末迄人並に成つたるも、皆はお主の御高恩、明暮主の教へに任せ、親に孝行、主に忠、只正直を守つて一言も偽りをいふまじと、毎朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは、只今非業に死んと思ひも寄らず佛共法共一遍の念佛申せし事もなく、今の口惜しさ詮方なく、高き山の頂にて一杯の水をとむるが如しとは、此身の上知られたり。此群集の中にこそ、清十郎が一命にかはらんと歎く人も有べきぞ。必々僻事なり。存生へて追善し、菩提を弔ふ善根こそ、命を助け、不老不死の薬を與ふるよりも嬉しきぞや。人々の回向を受け、佛の御國に至らんと、思へば、此世の絆はふつつと思ひ

切つたぞや。ア、思ひ切つても切られぬは、いとし可愛の只一人、よしこれも夢の戯れ、頓生菩提南無阿彌陀佛」と潔くはいひけれ共、お夏が歎き妹の、變れる顔を尻目に向け、覺えずわつと泣出せば、お夏を始め二人の尼、警固の上下、縁もなき、貴賤群集に至る迄、皆々袖をぞ絞りける。

(註) ○遁るゝも業……業とは善惡の結果を生ずる吾等の善惡の所行をいふ。即ち遁れてもそれは業であつて喜ぶに足らず、殺されても自らの所行の應報にて歎くに足らず。○藝能文字の本末一字を書いたり、歌を詠んだりする藝能の習ひ始めから、今日に至るまでの意。○非業に死なん―常命にあらずして死ぬをいふ。○佛共法共……南無阿彌陀佛とも南無妙法蓮華經といつたこともなく。○只今の……今になつて口惜しく。○高き山の頂にて……及ばぬこと。その様に成佛は難い。○僻事なり―宜敷ないこと、心得ちがひ。○追善―死者の冥福を祈り善事を行ひて回向すること。○菩提を弔ふ―菩提は道又は覺、即ち成佛するやうに祈ること。○回向―冥福を祈ること。○此世の絆―親子夫婦などの縁に引かるゝこと。○只一人―お夏をさす。○よし―まよ。○頓證菩提―よき折に出遇つて忽然成佛することをいふ。

【譯】 清十郎は涙を押へ、「何れも様の御回向有り難く存じます。千金萬金よりも、一遍の回向に優る寶はないときいてをります。最期に及んでの悦び之に過ぎたことはありません。けれども氣になるのは此處に立てられた高札。此には私しが主人の金七十兩を盗んだと書いてあるが、それは自分には覺えないことである。相手の勘十郎を斬り殺さうと思つたに、過つて人違ひをしたのは残念なことで、今若し遁れたとしても、それは業で悦ばしいとも思はず、殺されてもまた業因の然らしむる處で歎くことではない。今の私は年は二十五歳で、十一歳の春から奉公し、主人の御養育とお情にて、商人の道も一通り覺え、藝能の道も、文字も其習ひ始めから今日に至るまで、凡て人並一人前になることが出来たのも、これ皆お主の御高恩の然らしむる所で、日夜主人の教へによりて、親には孝行を盡し、主には忠をはげみ、只正直を守つて一言たりとも偽りはいふまいと、毎朝天に祈り氏神に契つてゐたが、



若い者の悲しさには、只今常命にあらすして死なねばならぬことを仕出来したものの、これ全く思ひもよらぬことである。由來南無阿彌陀佛とも南無妙法蓮華經とも口にしたことなく、一遍の念佛もいつたこともなく、今になつて口惜しきの限りであるが詮方なく、高き山の頂にて一杯の水を求むるが如しといふことがあるか、それは丁度我が身の上のことをいつたので、成佛などはまことに及びもつかぬ難いことである。或は此群集の中には、清十郎の命に代つて死ななことを願ふやうな親切なものもあらうが、それは必ずせぬやうに、實に心得ちがひの悪いことである。それよりか生きながらへて、我が爲に冥福を祈り成佛を祈る善事を積まるゝこそ、わが命を助け、不老不死の薬を下さるよりも嬉しいことである。人々の回向を受け、浄土に至らんことを思ふて、此世に我身を縛らんとする親子夫婦の絆は、ふつりと思ひ切つてしまつたぞ。けれどもなほ思ひ切られぬのは、いとし可愛いのわが戀人お夏である。だがまゝよ、これも夢の戯れぢや、むしろ好機を得て成佛すること有り難や、南無阿彌陀佛と、いさぎよくはいつたが、お夏の歡きや、妹の變つた顔を見ると、尻目にかけて見ぬふりをしながら、覺えずわつと泣き出した。とお夏を始めとしてお俊おさんの二人の尼や、警固の上の人も下の人も、はた縁もなき貴賤群集に至るまで、皆袖をしぼつた。

やゝあつて清十郎、「如何に警固の方々口乾きて苦しきに、烟草一服所望したし。此群集の其中に、姫路の人も有るならば、吸付て給はれかし。情のお主の御手より、末期の水と觀念せん、如何あらん」といひければ、警「苦しからじ、それ／＼」と、烟管烟草を出しける。お夏悦び「なふ我こそ姫路の者一樹の蔭も他生の縁、況して一ツ國なれば、未來も一ツに生るゝ爲、約束の烟りぞ」と、餘所ながら暇請、烟草吸付け垣越に、警固の者取次で、清十郎にぞ渡しける。夫婦は物も云ひたげに、顔振上しが咽返る、涙を中の關の戸にて、とかふの詞も出ばこそ、泣より外の事はなし。

【註】 ○情のお主……九左衛門をさす。○垣越しに―矢拂の中へ。○關の戸―關所、關門、涙が二人の間の關所になつて、それから出入りも出來ず、詞も出ぬ。

【譯】 暫くして清十郎は「如何でござりませう、警固の方々、口が乾いて苦しいから、烟草を一服所望したい、そして此群集の中に姫路の方もあらば、烟草に火を吸つて下されい。情のある主人九左衛門殿から末期の水をもらったものと思ひませう。如何でせう」といふと、警固の人は「苦しくない、それ／＼吹ひつけてやれ」と、いつて煙管と煙草を出した。お夏は悦んで「なう我こそは姫路のもの。同じ一樹の蔭に立寄るのも他生の縁といふことがある。まして一ツ國のものであるからには、未來でも一ツに生れる爲の約束の烟りぢや」と、餘所ながら暇乞ひをし、煙草を吸ひつけて垣越しに出すと、警固の者が取次いで、清十郎に渡した。夫婦は物も云ひたげに顔を振り上げたが、咽せ返る涙が流れて、それが二人の間の關所になつて、とやかくの詞も出ればこそ、出はせず、泣くより外のことはなかつた。

漸涙を押止め、清人も多きに御身の手より、末期の服を受くる事の有難さよ、本望さよ。此烟草にて十惡五逆の睡を覺し、充満其願如清涼池と嘯きて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、此四惡種の苦患を解脱し、吹出す烟は沙羅林栴檀の霞と變じ、三寶供養の燒香となつて、三十三天に薫じ渡らば、日月は兩の眼に入代り給ひ、梵釋二天に手を引かれ奉り、佛の御前に此度は、立別るる共藻汐燒く、烟は同じ鷺の山、靈山淨土で待つべきぞや。南無阿彌陀佛といふより早く、烟管押取り雁首迄、咽の内へ押込んで、眞逆様にぞ伏したりける警固の上下ふためきて、「それ殺すな」と引起せば、色もかはつて目



眩めき、血は紅の瀧津瀬と口に流る、風情を見て、夏「口惜や後れたり。我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け給へ」と、立てたる抜身の槍押取、咽笛ぐつと突通す。二人の比丘尼抱付、「なふ皆様頼みます」と、泣けど叫べど囚人の、自害に各々仰天して、勞る人もなかりしは、是非にかなはぬ次第なり。

【註】○十惡―殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見、○五惡―害母、害父、害羅漢、破和合僧、出佛身血。○充滿其願如清涼池―孟蘭盆經の中の句にて、後世樂、涅槃樂等の願を充して、心が清涼池の如くなる即ちすがすがしくなる。○四惡種―六道の中から人間、天上の二道を除きたもの。○沙羅鉢梅檀の霞―釋迦沙羅林にて入滅の時、梅檀の香氣空に霞み渡つたと傳ふ。梅檀は夏涼しく、冬暖なる香樹だと。○三寶供養―佛、法、僧を三寶といふ、此三寶に回向すること。○三十三天―佛語にて、忉利天をいふ。須彌山の頂に四峯あり、各峯に八天あり、其中央に喜見城あり、帝釋天之に住み、四峯三十三天を流轉す。日月の二輪は須彌の半腹を廻りて晝夜を生ずと。○梵釋二天―梵天、帝釋天。○立別るとも藻汐焼く―佛の御前に參るので、此度は此世を別れて、身は焼かれても、その煙は鷲の山にたなびくことであらう意。増鏡「新島守」の「鹽焼く煙のなびく方も我ふるさとのしるべかと歎きたまふ」からとる。○鷲の山―靈鷲山又靈山ともいふ。○靈山淨土―靈鷲山と同じ、その略。釋迦此處に八ヶ年を費して法華經をとけり。一見平凡の山なれど佛より見れば百寶莊嚴の淨土なりと。○是非にかなはぬ―是とも非ともかなはぬ即ちせん方ない意。

【註】清十郎漸く涙を止め「人も澤山あるに、御身の手から末期の衣服と受けることの有りがたさよ、本望さよ。此煙草にて、十惡五逆 睡りから覺め、さまゝの願を充して、すがゝしい心になつたと大聲にいつて、地獄、餓鬼、畜生、修羅の四惡道の苦から逃れ、吹き出す煙は、釋迦沙羅林にて入滅の際の梅檀の霞と變り、又三寶を供養し回向する焼香となつて、三十三天に薫じ渡ることゝならば、日月は兩眼に入り、梵天と帝釋天とに手を引かれて、

此度は佛の前に參るので、此世を別れ身を焼かれても、その煙は同じ鷲の山にたなびくことであらう。靈鷲山淨土にて待ちますぞや、南無阿彌陀佛」といふよりも早く煙管をとつて雁首まで咽の中へ押込んで、眞逆様に伏した。警固の人々はあはて、「それ殺すな」といつて引起すと、顔色も變つて、目はまうて、眞赤な血が瀧の如く口から流れ出てゐる。それを見るとお夏は「口惜しや後れた。我こそ清十郎が二世の妻の但馬屋のお夏である。お情には同じ土に埋めてたもれ、南無大悲觀世音助けたまへ」と、たてゝある抜身の槍をとつて、咽笛にぐつと突通した。二人の比丘尼は抱きついて「なう、皆様のみます」と、泣き叫ぶが、人々は囚人の自害の方に仰天して、いたはる人もなかつたのは、せん方ないことであつた。

城下に斯と注進す。代官所の役人、馬を飛ばして駈來り、矢拂の内に飛んで入り、大聲上げて、「ヤア早まつたり清十郎、汝傍輩の源十郎を、人違にて殺めし段は、白狀紛れなしといへども、盜人の科未だ分明ならぬゆへ、さらし者となして成敗の日を延ばし、盜人の本人顯はれなば、汝が命を助けんとの評議なりしに、近比殘念千萬なり。只今但馬屋一家を召寄する。事の詮議濟むまでの命を生きんと思はぬか、狼狽者」と力を付け二人が口に氣付を入れ、様々看病なし給へば、お夏は少し息出る。清十郎は心肺の臟腑を破りし長煙管、頼む方なく見へにける。

【註】○成敗の日―打首の日。○しんばいの臟腑―心臓肺臓のことなり、心配の臟腑にあらずとは藤井博士説、○長煙管―の爲に。○頼む方なく―頼みとする方法もない。

【譯】事の次第をかくくと城下に注進すると、代官所の役人がすぐに馬を飛ばして來て、矢拂の中に飛入り、大聲



を打て、「やあ、早まつた清十郎、汝が朋輩の源十郎を人違をして殺したといふ事は、白状したのだから紛らほしいことはないが、盗人の方の科はまだ明白でないから、酒し者にして打首の日を延ばしておいて、盗人の本人が顯はれたらば、汝が命を助けようといふ評議であつたに、近頃残念なことぢや。只今但馬屋一家のものを召寄せて來るのぢや。萬事の詮議の終るまでの命を生きようとは思はぬか、狼狽者」といつて力をつけ、二人の口に氣付け薬を入れ、様々に看病すると、お夏は少し息を吹き返した。けれども清十郎は心臓肺腑を破つた長煙管の爲に、頼むに足る方法もないやうであつた。

程なく、警、但馬屋九左衛門、手代勘十郎、一家残らずお召によつて参りたり」とぞ訴ふる。斯る處へ老たる百姓、慌しく狼狽來て、一目見るより、「南無三寶しなしたり。待てむざ／＼と一人は殺さぬ、敵を取つてとらせふ」とせき來る涙を押拭ひ、謹んで「我らは清十郎が親、和泉の國水間の佐治右衛門年寄ながら面目なや、其勘十郎奴にたらされ、お主を大事、子が可愛さ、よしない手形、なんぼう後悔仕る。それに付其時分、娘子共が道頓堀にて取違へ歸りたる笠を、此比取出せば、頂の下に此文有り、御詮議なされ、清十郎が科を輕め下され」と、涙を流して訴ふる。

【註】○南無三寶—あゝ、しまつた。○しなしたり—しくじつた。失敗した。○せき來る、急ぎ出て來る。○たらされ—だまされ。○お主を大事—お主を大事にしながらも子の可愛さにひかれて、云はれもない手形即ち證文をかけた、甚だ後悔する。○なんぼう—どれほどか、どのやうにか、關西では今も幾何の意に此語を用ふ。○道頓堀—上巻に、娘子が道頓堀の芝居を見た。と伏線をおいてある。

【譯】程なく警固のものどもが、「但馬屋九左衛門、手代勘十郎及、同家のもの残らずお召によつて來ました」と訴

へる。そこへ老人の百姓があはたゞしく、狼狽來て其場の様子を一見するなり、「あゝ、しまつた。しくじつた。さて、清十郎一人をわざ／＼と殺しはせぬ。敵をとつて遣はす」といひながら、せき上げて來る涙を拭つて、謹んでいふ「私は清十郎の親、和泉國水間の佐治右衛門と申すもの、相當の年をとつた老人なるに係らず、面目ないことには、そこにゐる勘十郎の奴にだまされ、お主を大事と思ひながら、子が可愛さの念にひかされて、云はれもない證文をかけた、今ではどんなにか後悔してをります。それにつきその時分に、娘どもが、道頓堀で芝居を見ての歸るさ、取違へた笠を此頃取出して見ると、笠の天邊の下に此文がありました。御詮議をなされて、清十郎が罪を輕め下され」と涙を流して訴へた。

役人「それ／＼是へ」と取上げて披見ある。文「幸便に任せ一筆啓上せしめ候。此度お夏嫁入道具の代金百四拾兩の内百廿一兩、爰元にて鹽間屋へ相渡し、貴様の損銀残らず相濟し、則請取手形殘金十九兩上し申候。追付御下り待入候。但馬屋勘十郎殿參る。同源十郎」役人「何と此手蹟相違なしや」と仰せける。九左衛門一見して、「相果し源十郎が筆、判形ともに疑ひなし。サア返答あるか勘十郎、御前にて申せ／＼と」責付ければ、勘十郎少しも怯まず、「尤我ら私商、損金の立用に道具の代金、暫く取換置たれ共、追付右の金は才覺して、道具屋へ濟し置く。商の習ひ、廻り金の無き時は、氣轉を利せ、表裏をつかひ、主人の金を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し、間に合するは世間共に手代の習ひ、我等計に限るでなし。彼の清十郎は傍輩を切殺し金七十兩盜取、是も手代の習ひか。エ、殘多し。まそつと早ふ生れたら、熊坂の長範か、石川五衛門が手代にせば、よい給分を取らふ物を」と、



憎體にこそ申けれ。

【註】 ○披見ある―開いて見る。此文なんか出す處如何にもこしらへ事らしく、悪人どもの計略としては如何にも拙劣である。  
○立用―流用。○才覺―王面。○熊坂長範―嘉應承安頃の大盜。○給分―給料。

【譯】 役人はそれを見ると、「それ／＼此へ出せ」といつて受取つて開いて見る。手紙には「幸便にまかせ一筆申上る。此度お夏の嫁入道具の代金百四十兩の中、百二十一兩を、此方にて、鹽問屋へ渡し、お前の損金は全部拂つて、殘金十九兩と請取證とを御送りする、その内歸國を待つ、勘十郎殿、源十郎」とある。役人は「どうぢや此手蹟間違ないか」といふ。九左衛門は一見して、「死んだ源十郎の筆及び印形共に疑ひないが、勘十郎どうぢや返事があるなら御前にて申せ」と責めつけると、勘十郎はびくともせず「間違はござりませぬ。尤も私の内での商ひの損金には道具の代を流用して、暫く取かへ置いたが、やがてその金は工面して、道具屋へ濟しておきます。凡そ商ひの習ひとして、動かす金のない時は、氣轉をきかせて、裏表を巧につかひ、主人の金を自分の方へ加へたり、又自分の金を主人の金に廻したり、そして間に合せるのは、世間にも手代のやる習で、私しばかりに限つたことではないのぢや。だがあの清十郎は、朋輩を殺して、金七十兩をとつてをる、之も手代の習といふものか。殘念なことに、も少し早く生れたら、長範か五右衛門のやうな大盜の手代にでもしたら、さぞいゝ給料をとつたことだらう」と、憎しげにいつた。

今を最期の清十郎、眼をくはつとみひらき、「やい／＼勘十郎、廣い世界を己が口から、世間手代の習ひとは、顯が過て聞憎い。悪い事を習ひといはば、主殺し、親殺し、屋燒、強盜、世間の習ひと許そふか。人を殺せば我身も死ぬる、此清十郎が七十兩や八十兩の金に換る命でなし。旦那の御恩、お夏

様の情に捨ふと思ふ身を、己が口一ツにて勘當させた其恨み、をのををたつた一討に仕舞はふと思ふたに、仕損ふて口惜し。エ、／＼無念な口を利するなあ。ハツ／＼我ら故にお夏様の自害、御恩の旦那の憎しみも、嘸や増らん情なや。此年までの御面倒、御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事、是ぞ黄泉の障りと成。これ親仁様、妹共」と、呼び向け顔をじろ／＼と、云度き事の有りそうに、目は働らけど息切れに、任脈絶ゆる兩眼より、涙計を暇請ひ、親子他人の隔てなく、皆々哀れを催せり。

【註】 ○今を最期―息を引とらんとする。○世間手代の習―金の流用や誤魔化しをするのが、世間一般の手代の習とは何事だ。  
○顯―口。○惡いことを習…惡いことも習いだからといつて許すことになる。○屋燒―家燒、放火。○口を利かす―しゃべらせる。○呼び向け―呼んでその方に顔を向け。○任脈―漢法醫學上の脈の一つ。任脈、督脈、衝脈などに分ち、三才圖繪に詳し。任脈は腰より上は顔にめぐりて眼に入る、即ちあとに、任脈絶ゆる兩眼といつたのである。

【譯】 今息を引とらんとする清十郎眼をかつと開いて「おい／＼勘十郎、世間は廣い、己れの口から、流用誤魔化しをするのは世間一般の手代のする習ひとは、よくもぬかす、口が過ぎて聞いてはをれぬ。悪いことをしても習ひだからとて許すとすると、主殺し、親殺し、放火、強盜など世間にはよくあることだが、それを此の世間の習ひだからといつて、許されるか。人を殺せば自分も死ぬのが當然だ、それ故おれも殺されるのを當然と思つてゐるが、此清十郎の命は、七十兩や八十兩の金ではかへられるものではないのぢや。旦那の御恩に報ひ、お夏様の情に對してすてようと思ふ身であるのを、己れか口一ツでたらされて、勘當させられたが恨のしく、己れを二討にしてしまはうと思つてゐるに、仕損じて口惜しくてならぬ。思へば無念な口をしやべらせるなあ。ハツハツわし故にお夏様も自害をなさる。その爲に御恩の深い旦那のお憎しみが、さぞ増さることである、情ないことぢや」。此年までの長



い年月の御面倒に對して、御恩を報ずることもなくて、却つて、御苦勞をかけることが黄泉での成佛の障りぢや。これ親父様、妹ども……」と呼かけてその方に顔を向けて、何やら更に云ひたいことありさうにじろくど、目を動かすが、息がきれて、任脈のたえた兩眼から涙を流して、それによりて暇乞をした。その様を見ると、親子と他人の隔てなく皆哀を感じた。

佐治右衛門涙を流し、「申殿様、勘十郎がお主の銀を引負し我らを騙した慥な證據出るからは、七十兩も彼奴が盗みに極つた。御詮議なされ、清十郎を御助け下され」と、大聲あげてぞ申ける。代官職聞給ひ「尤々、不便なれども清十郎は、人を殺せし白狀紛れなき上は、斷罪遁るゝ所なし。又勘十郎が七十兩、盗みしといふには證據なし。然れ共勘十郎、をのれ一旦主人の金子をわだかまり、清十郎親子に無じつを云懸け、迷惑させし不届、もと皆をのれが悪心より事起つて、お夏も自害に及びたり。主殺しとも謂つ可し。急度仕置に行ふべきが、手を出して人も殺さず、盗人に極まる證據なければ、慈悲を以て助け置く。命の代りに髪を剃し出家して、彼等が菩提を弔ふべきか」と仰せける。「ハア、有難し」と勘十郎頭を地に付け三拜し、小刀抜いて髻より、ふツと切つて捨てければ、役人「ヲ、神妙く、佛弟子と成たれば、譬へ誠の科有りても、いよく命は取難し。此上は汝が行末、彼が後生の爲ぞかし、和睦して恨みを晴させ、往生させよ」と有ければ、勘十郎一念發起して、「是清十郎今は我も懺悔せん。彼の七十兩の小判は、此勘十郎坊主が盗んで、源十郎奴に塗らんと思ふ折節、切られしを幸に、其方

に負せたり。恨みを晴れて成佛あれ。跡弔はん」といふ所を、役人「扱こそ盗人顯はれたり。其奴縛れ」役人「承る」と踏付け腕捻上げ、はや切繩にぞかけてける。役人「直に國中引渡し、獄門に切りかけよ」と引立れば、妄執も晴れつ、清き清十郎、臨終顔も菩薩の數、廿五歳の命は消へて、浮名は今に残りける。お夏も共にと取付くを宥め伴ひ立歸り、其夏衣墨に染め、年忌くの手向草、花の帽子に修行の笠、笠がよく似た阿彌陀笠、彌陀の御國に生れける。

【註一】○殿様―役人を尊んでいつたのだ。○引負し―普通は他人の爲に賣買取引して損を蒙ることをいふが、此處は主人の金を流用ごまかすをいふ。○わだかまり―中にゐて横領し奪取るをいふ。○仕置―處刑。○塗らん―罪をぬりつける。○切繩―罪人をしぼる繩。○國中引渡し―國中あちこちと引廻し引渡し。○獄門に斬りかけよ―首を斬つて獄門にかけよ。獄門とは刑場等の前に、斬つた首を棚又は木にかけて晒すこと。○妄執も晴れ―死ぬにも安心して死ぬ恨の念も晴れて。○菩薩の數―顔も菩薩のやうな和らかな顔にて、二十五歳の清十郎は二十五菩薩の數の中に加はつたやうに。○お夏も共に―共に死なんとするのを、なだめてつれ歸つてと實説によつたものだ。○其夏衣墨に染め―お夏も衣を墨にそめ、尼になつて、清十郎の菩提を弔はん爲に年忌くには手向草をして、修行に出た。夏衣はお夏の縁でいつたので、西鶴によると四月十八日に清十郎は死んでゐる。○花の帽子―お夏がまだ若き故に、笠の下にかぶる帽子を飾つて花といつたのだ。○笠がよう似た―例の清十郎を歌つた歌にもぢつたのだ。○阿彌陀笠―笠を阿彌陀にかぶるといふことは今もいふ。即ち少しあふむけにかぶることをいふ。その恰好が阿彌陀の後光に似るからだ。○彌陀の國に生る―阿彌陀に笠をかぶつて、彌陀の國に生れた。お夏が今までとちがつた身に生れ變つたことをいふのであ。

【譯】 佐治右衛門は涙を流し、「申し、お役人様、勘十郎がお主の銀を、誤魔化し流用し、私をだました確な證據が出たからには、七十兩とて彼奴が盗んだにきまつた。御詮議なされて、清十郎をお助け下され」と大聲をあげてい



つた。代官職は之をきいて、「尤も」。それにしても可哀想だが、清十郎は人を殺したと白状し、其は紛れもない事實であるからには、討首は遁れることは出来ぬ。又勘十郎が七十兩を盗んだといふことは證據がない。けれども勘十郎已れは一旦主人の金を横領して、清十郎親子に無實の罪を云ひつけ、迷惑させたは不届至極だ、凡ての事は已れが悪心から起つて、その爲お夏も自害をした。云はゞ主殺しともいふべきだ。屹度處刑を行ふべきだが、實際手を出して人を殺しめず、盗人にきまつたといふ證據もないから、慈悲をもつて助けてつかはす。命をながらへる代りに、髪をそり出家して、彼等が菩提を弔ふかどうかと「いふと、勘十郎は「有りがたい」といつて、頭を地につけて三拜し、小刀をぬいて髻からぶつりと切つてすてた。役人はそれを見ると「神妙々々佛弟子となつたとすれば例へ眞の罪があつても、いよ／＼斬罪にはしにくい。此上は汝が行く末の爲、また彼が後生の爲ぢや、和睦して恨を晴させ立派に往生させてやれ」といふ。勘十郎は改心して「これ清十郎、今はおれも懺悔する。あの七十兩の小判は、このおれが盗んで、源十郎の奴に罪を塗りつけてやらうと思ふ折しも、汝に斬り殺されたを幸に、汝に罪を着せてしまつた。だが今は恨を晴して成佛してやれ、跡は弔ふから」といふと役人は「さてそれでこそ眞の盗人が現はれた。その奴縛れ」といふと他の役人は「承知しました」といつて、踏つけて腕をねぢ上げ、切繩にかけて縛ってしまった。役人はやがて「直ぐに國中引廻し引渡しして、首を斬つて獄門にかけよ。」といつて引立てると、始めて妄執の念も晴れて心の晴々しくなつた清十郎は、臨終の顔も二十五菩薩の如く和かにて、廿五歳を一期として死んで、命は消えたが浮名丈けは跡にのこつた。即ちお夏も一處に死にたいといつて取りつくのを、なだめすかして、つれて歸り、夏衣を墨色にそめて、年忌々々にはいろ／＼の手向をなし、花の様な若い帽子の上に、修行の笠をかぶつて修行に立つたが、そのかぶつた笠は阿彌陀の後光に似て、お夏は生れ變つて、彌陀の國に生れたのであつた。

## 夕霧阿波鳴渡



# 夕霧阿波鳴渡

## 解題

京の島原から大坂に引越して来た扇屋四郎兵衛方の夕霧といふ遊女は、京にゐる頃から非常な評判の美妓であつたが、大坂に移つてからも大變なものであつた。けれども延寶六年正月六日に人々の愛惜の中に歿すると、近松はやがて「夕霧名残の正月」といふ外題で、歌舞伎芝居に仕組んで、翌二月三日から道頓堀の荒木與次兵衛座で、時の名優坂田藤十郎にやらせた。

ところがそれが大當りで、藤十郎は其年四回も同じものをやり、その後彼の歿するまで三十二年の間に前後之を演ずること十八回に及んだといはれる。

近松はその後此作を土臺として、「夕霧阿波鳴渡」を操人形の爲にかいたといはれるが、中に仕組まれてゐる伊左工門の事蹟は事實とは餘りに縁がなく、可成りに架空的なものだといはれてゐる。然しそれは藝術の立場からはどうでもよいことで、吾等は只九軒町の楊屋吉田屋喜左衛門方で、藤屋伊左衛門が、兎に角さつした人物が、扇屋の夕霧に馴染んだといふことを骨子として、近松が、それにいろ／＼な肉や尾緒をつけてくれたものと思へば足るのである。

此作の荒筋は、大坂新町扇屋の夕霧が、藤屋の伊左衛門との間に出来た子を、もと伊左衛門と張合つた阿波の



平岡左近に育てさせてゐる中に、左近の妻が扇屋に出かけて夕霧身請の話をもとめ、子供の乳母として家に引取るに方りて、伊左衛門は夕霧の駕籠をかい入り込み、こつそりと親子の對面をする面白い場があり、之を見た左近は怒つて親子三人を逐拂ふのであるが、やがて夕霧の病篤いときいて、伊左の母が彼女を身請するといふのであつて、何となくしんみりした處のあるいゝ作である。

尙一二つけ加へておきたいことは、此作にも「夕霧筐の袂」とか「浪花文章夕霧塚」とか、「濠標浪花詠」などの改作があること、大坂下寺町淨國寺に於ける夕霧の石塔に、俳人鬼貫が詣で、

この墓は柳なくてもあはれなり

と詠んで、それがほりつけてあることと、名優藤十郎の妙技が操り人形の型の中に大にとり入れられたことだらうといはれてゐることである。

それから此作が寶永七年七月初上場であるといふこれまでの説は誤りで、本曲の終に「語り傳へて三十五年」とある事から、夕霧歿後の三十五年目をきかせて、正徳二年初春の作と見るべきだと黒木勘藏氏も藤井博士も主張されてゐることも附記したい。

# 夕霧阿波鳴渡

## 上之卷

年の内に春は來にけり。一日に、餅花開く餅搗の、賑々はしや九軒町、嘉例の日取吉田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵、昇夫の長兵衛が大汗で、「やあゑい」中々の萬が白取の「やッ、やあゑい、やッ、やあゑい、やッ」さッさ搗け〜「ハッア木やりで搗やれな」先惠方棚、神の棚、鏡取る〜遣手衆の、顔にとりこの面白いとて妓衆の笑ひ、禿が手折る柳の枝の、春も近づく年も近づく、やがて廊も谷の戸も、出でて初音の鶯の、羽子づくりの君も有り、正月買のセッキッロ「だい〜盡、太夫様より附届ケ、門を賣る聲山草や、ちよつと祝ひましょ。裏白、楪、鰯で御座んせの春永に、いよしも替らぬ御見まで、逢瀬を契る餅は杵、ついて離れぬお客を祝ひ、白へ入れます、ます〜全盛、座敷は善哉庭に節季候、こりや又目出度い揚屋の餅搗、紋日の長持、お客に太鼓持こりや又賑々女郎衆にやり持、お家は金持代々福々、松吹く吹く〜松風や、松賣る聲こそ



【註】○年の中に古今集巻頭の、在原元方の歌「年の中に春は来にけり」とせをこぞとやいはんことしとやいはん」の一とせを、一白にかけて、餅つきの叙景に入る。○餅花もちつきの時、餅を小さくきつて、柳の枝につけ、子供のおもちやにするをいふ。○餅つき一廓の年中行事の一つにて、例の紋日の一。○九軒町一大坂新町遊廓の町名。○日取吉田屋一その九軒町の揚屋にてその主人が喜左衛門「日取によし」をすぐ屋敷へきかせた。○庭のかまど一庭は見世の入口、土間の所にて、此處にかまどをおいて餅をついたもの。○難波津の歌一例の「なにはづに咲くや此花……」の歌でなくて、仁徳天皇の「高き屋にのぼりて見ればけむり立つ民のかまども賑ひにけり」の歌をさす。○大杵……大杵を多き意に、昇夫を下るすにかく。○おろせ一駕籠かき又は一寸した使をするもの。○長兵衛が大汗一大家の餅つきに出入の者がやとはるゝが例なれば、駕籠かき長兵衛が来て、大汗かきて手傳つたものと見ゆ。○やあえい一餅つくかけ聲である。○日取り一餅ついている間に、餅をかへす役を仲居の萬がやつたのだ。○木遣り……木遣り音頭で勇ましくやれといふ意。此木遣り音頭は建仁二年榮西上人が寺院建築の木材をひく爲につくつて、歌はせたが始めて、即ち自分の名の榮西から「あゝいさゝい」といはせたのが「えいさつさえいさつさ」といふに至つたと。○恵方棚一陰陽家の説によると、毎年塞つて凶の方角と、明きて吉の方とある。明きの方を恵方といひ、其方の歳徳神を祭る棚を恵方棚といふ。○鏡一鏡餅。○とる一「とる」からやりと云ひ、鏡餅をこしらへてみた遣手の顔に粉がついて白くつた。○遣一傾城についてゐて、客を見はからひて、揚屋へやり渡す女の意。○とり粉一餅を丸めなどする時、手につかぬ爲に、つける米の粉。○妓一遊女よねといふ女の名から出たとも、夜寝だともいふ。○柳の枝一餅花を著ける枝。○年も近づく……勤めの年期の終も近づく。○谷の戸……鶯が谷の戸をいづる爲に、羽づくろひするごとく、廓を出ようとして用意をするものもあれば、春になつて、禿から一人前の遊女になつて、全盛を誇らうとするものもある意。○正月買の大々盡一買ひと飼と鶯の縁語。正月は三ヶ日、松の内と、紋日の重なる時にて、此間に傾城を買ふと、いろゝの祝儀などに金がかかる、それをお大盡どもは揚づめにしておくのである。之を正月買といふ。正月の鏡餅の橙の「だいゝ」大々盡の大々とをかけ、この大々盡から松ふくゝまで、節季候の言葉である。○太夫のつけ届一太夫は遊女の最高の階級。その太夫から、揚屋に對して、餅つきに祝儀を出すことにて、此祝儀を、庭錢ともつけ届ともいふ。○山草一しだの異名。裏白と同じ。○裏白、ゆづりは一正月のかざりに用ふるしだと、ゆづり葉といふ木の葉。○まめ一鯛の子の如きを干したもので、おまめ（無事）でござれの意。○いよしも一「いよ」は「いよゝゝ」「しも」は助字で意味なし。○御見まで一いよゝゝ變らず御めにかゝるまで。○契る一約束の意と、もちをねぢちぎるとをかく。○ついで一揚くと、附きまとうとかく。○善哉一つぶしあんの汁粉。善哉の略。上の全盛から同音をかりたのだ。○節季候一十二月二十日頃より「節季にて候」の意にて、節季候々々といつて、鉢巻に裏白をはきみ鼻から下をあごにかけて赤布にて包み頭に結へて、來年の幸福を祝ふつもりにて、歳末をあてこみて歌舞する一種の乞食。○紋日一もの日の意。廓の年中行事の日。即ち祝ひ日式日など。○長持一衣裳を入れるゝ大きな櫃にて、紋日の長持といつたのは、此日遊女が揚屋入りをするに、太夫、天神、引舟等遊女の階級に従ひ、それゝ大中小の長持に夜具その他衣裳を入れて、運ばせたるをいふ。後には大風呂敷に包みて揚屋へ通つたと。以下もちゝゝと同音をかさねて文飾してゐる。○太鼓持一客につきそひ、酒の相手をして興をすゝむるもの。幫間。即遊興を助ける男藝者のこと。○やり持一こゝは遣手のことにて、槍持とかけた、時には只「やり」ともいふ。○吹く一福々にかけて祝ひ、松といつたから門松を賣る聲を出し、松風といつたから次の戀風にきかす。

【譯】まだ年の暮の内に春が来て、梅の花ではない餅花を咲かせる餅搗の賑はしい九軒町の、吉田屋でも、吉例の日取を選んで、入口の庭に竈をおいて、「民のかまども賑ひにけり」のお歌の心よろしく、蒸籠からは湯氣が多く立ち、昇夫おろせの長兵衛は大汗かいて大杵を「やあえい」と上げたり下ろしたりして、中居のお萬は白取をやつて、「さ、やあえい、さ、やあえい」と掛聲をなし「さつさ搗けゝ」「ハツア木遣節でつきやれな」と景氣よくやつてゐる。さて餅が一白つけると、先づ恵方棚への鏡餅、それから神の棚への餅と、お鏡餅を取つてのける遣手の顔について取り粉が、面白いといつて妓達が笑ひ、禿が餅花をつくといつて柳の枝を手折れば花のさく春も近くなつた。と同時に年期の明くのも近くなる。やがて谷の戸を出て初音をあげる鶯が羽づくろひする如くに、年があくのも間近。といつて、廓から出てゆく支度をする妓もあれば、春を迎へて禿が一人前の遊女。なつて全盛を誇らうとするものもある。そこへ節季候がやつて来て、踊りながらいふ「正月を買占めて遊ぶお太盡様や、太夫女郎から送る餅搗のお祝儀や、門を賣つて歩く正月の飾にかふ齒朶や、かうしたものは皆おめでたいことぢや。裏白や、ゆづりはや、ごまめで祝ひませう、どうぞ御無事で御いでなされ、春になつて、いよゝゝ替らお御目にかゝるまでと、また逢瀬をちかふ所のちぎり餅は、杵でつけばつくほど離れぬのであるが、そんなお客を祝ふて白へ入れます、ます



／＼全盛に、座敷では善哉が出来て祝はれ、庭には節季候が来て祝ふ、これやまためでたい盡しの揚屋の餅搗、そこへ絞日だからとて、女郎衆は長持をもちこむ、お客には大こもちがついて来る。これはまた賑はしいことで、女郎衆には遣手がつく、お家は金持で、代々福がつきまとい、松吹く風もふく／＼と福を吹き込み、松賣る聲もめでたいことである。

三重戀の、其扇屋の金山と、名は立のぼる夕霧や、秋の末よりぶら／＼と、寝たり起きたり面瘦て、薬も日敷ふる雪の、重らぬ先の養生と、勤めも心ま／＼なれど、深きよしみの吉田屋は、足元軽き道中や、暖簾くゞるも力なく、夕「今日は目出度ふ御座んす。ア、しんどや」と腰打懸け、我身を横に投入れの、水仙さよき姿なり。喜左衛門機嫌能く、「是は／＼太夫様、御氣色もよいかして、聞いた程瘦もなされず、お顔持もずんどよい。先今日は嘉例の餅搗、格子へお出でなされてより去年の今日まで伊左衛門様とお兩人、一度もお外れなされぬに、今年の餅搗ばつかり、伊左衛門様は流浪遊ばす、お前は御病氣、嘉例を外す處、此喜左衛門頭痛八百。ちよつと成共呼ましたいと願ふ折柄、今日のお客は四國のお侍、頭巾で頭は見へぬ共、角前髪のお小姓らしい。其器量の好さ、おぼこさ、道頓堀の若衆方女方、引渡へてもけも無い事。四國西國隠れない夕霧といふ太夫に、近付になりたいとて、態々大坂で御越年、お氣合に構ふとて、初対面はお勤めなされぬも存じながら、呼びに進ぜた。さすがお馴染の喜左衛門、否應なしのお出、身祝ひと申、どつといふた餅搗、嗚も尻餅搗いて悦びます。是杉

沖之丞、中の間へ往て善哉祝や。此處は冷えます太夫様先座敷へ」といひければ、夕「アア私氣色も良いが良には立たね共、伊左衛門様と二人連、一度もかゝさぬ今日の日なれば、命の内にもちよつと来て伊左衛門様に逢ふ心。此方様達の顔見たいと思ふ折節、呼びに来たを幸に此處迄は来ました。座敷は氣儘に勤める、左様思ふて下んせ」喜「何が扱御氣任せ、どう成共候べく候にやらしやんせ」と、座敷へこそは出しけれ。

【註】 ○金山—金を掘出す山即ち、本盛の夕霧が、扇屋にとりての金箱、福の神であるをいふ。○立のぼる—評判がとゞろく。○薬も日敷ふる雪の……ふるは、經ると降るの兩義。おもらぬは病と雪と兩方にかく。日敷がたつて薬もきかなくなるほど、病が重らぬ先に養生しようの意。○勤も心のま、—勤も夕霧の勝手にまかす。○よしみ—親しみのある。吉田屋と同聲の飾。深きよしみのある吉田屋へ押してゆくが。○足本輕き—足元がふら／＼して風にもたえぬ道中である。○しんどや—しんどにて、京坂地方では疲れた、退くつの意にて今も常に此語を用ふ。○投入の—生花の語にて、只自然の儘に投入れてさすをいふ。身をなげることにかく。○水仙清き姿—それほど手入れず身を投げた姿が、水仙の姿に似てる。○ずんと—今のずつとと同じ。よほどの意。○格子—大格子即大きな女郎屋の意にて、扇屋をさす。○頭痛八百—嘘八百などと同じく、八百は大頭痛など、只強めた意。○角前髪—元服前の男子十四五才までは額を丸くして女子の如くするが、十七八歳になると、額毛を長く抜き上げて、毛の生えぎはに角をたてた。即之を角前髪といふ。○小姓—貴人の側近つかへる少年。○道頓堀—こゝでは芝居町の意。○若衆方—少年に扮する役者。○女方—女形にて、こゝでは年若き女方に扮する役者の意。○引渡へてもけもないこと—残らず集めても、氣もない少しもない、一人もない意。○氣合に構ふ—氣分にさはる。○身祝と申し—身の祝事でもあるし。○どつといふた餅搗—どつと大勢が聲をあげる即ちめでたい餅搗。○尻餅ついて……驚き喜んで倒れる意。○杉、沖の丞—杉は夕霧について来たやり手の名で沖の丞は禿の名。○善哉祝ふ—雑煮を祝ふと同じく、正月の餅搗には、しるこをこしらへて食つたものと見ゆ。○氣色もよいがよいにはたゝぬとも—氣色はよいが、眞によいで通用せぬ、役にはたゝぬとも。よいがよいで通らぬ意。○候べく候……一本



には「まゐらせ候」にとある。ゆきなり次第にしておけ、なりゆき次第にしるの意。昔の手紙には此語が澤山あつて、ゆきなり次第に書いても讀めたから、それを書くやうにしておけといふ意である。

【譯】戀風の吹く扇屋の金箱であるといつて、名の高く知られた夕霧は、秋の暮からぶら／＼と寝たり起きたりでもやせ衰へて來たので、日数がたつて薬もきかなくなるほど病の重らぬ中に養生しようと、勤の方を全く氣まかせにしてはをれど、深いよしみのあるよし田屋へは足かろくやつてこれる道中であるので、押してやつて來はしたが、暖簾をくぐる力もないので、夕霧は家に入るなり、「今日はお目度うござんす、あゝ退痛や」と腰を掛けて、その身を投入花のやうに横に投げた姿は、さながら清き水仙の姿その儘である。吉田屋の主人喜左衛門は機嫌よく迎へて、これは／＼大夫様、御氣色も御よろしいが、話にきいた程やせもなさらず、お顔もすつとよろしい。先づ今日は吉例の餅搗で、此日にはお前が今の扇屋へ來れてから去年まで、伊左衛門様と二人で必ずおいでになり、一度も外されたことのない日であるに係らず、今年の餅搗ばかりは、伊左衛門様は流浪なされ、お前は御病氣といふありがたくなしたこと、これでは折角の吉例も外れるので、此私しは頭痛にやんでゐました。それさに一寸でもお呼び申したいと願つてゐた折柄、客があつた。その今日のお客は四國のお侍で、頭巾で頭の方はよく分らぬが、角前髪に結つたお小姓どもであるらしい。其容貌のよさ、おほこさ加減といつたら、とても道頓堀の若衆役者や女形を悉くさらへて見ても、一人もあんなのは見られぬやう方ぢや。それが四國西國に隠れない夕霧といふ大夫女郎に、近付になりといつて、わざ／＼大阪で御年越をなさるのぢやさうな。お氣分に障らうから、初對面の方に對してはお勤はなさらぬことも存じながら、呼びにやりました。それなのに、さすがお馴染の喜左衛門に對しては、否もおももなくお出で下された、ありがたいことぢや。何しろ私しは身祝をする目出度い餅搗ではあるし、女房も尻餅ついて、どんと尻をすえて喜ひませう。これ、お杉どん沖之丞、中の間へいつて、善哉でもおたべなされ。さ大夫様、こゝは冷えますからお座敷の方へ」といへば、「あゝ私が氣色も良いには良いが、そのよいのが本當に役に立つ良い状態ではなくとも、伊左様と二人で一度だつて欠かさずに來た餅搗のことであるから、命のある中にちよつと來て伊左さんに逢ふ

心でゐました。それにお前さんの顔も見たいと思つてゐた折も折、呼びに來れたのでこゝまでは來ました。だが座敷の方は勝手、氣儘にしますから、さう思つて下され」「どうして／＼その方は御氣まかせでござんすとも、どうなりともいゝ頃におやりなされ」といつて座敷へは出した。

冬編笠も垢張りて、紙衣の火打、膝の皿、風吹凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古の、花は嵐の願に今日の寒さを喰ひしぼる、はみだし鏝も神さびて、鑑詰りし師走の果、胡散らしく吉田屋の内を覗いて、伊「喜左衛門宿にか、ちよつと逢はふ。喜左衛門／＼」と鼻に扇の大柄なり。男共口々に、「ヤア彼奴は何者ぢや。風の神か、鳥威しの様などまで。何んじや、喜左衛門に逢はふ。百貫目も遣ふ大盡のいふ様な、棒まかれな」と云ひければ、「ヲ、百貫目がそれ程貴い物でもない。喜左衛門といふべき者でない程に逢はせてくれい」。男「どりや逢はせてくれふこんな目に遣はせてくれふ」と、竹箒持てかゝるを、喜左衛門飛下り、「強請者か知らぬ、粗相すな。誰方で御坐る」と笠を覗いて、喜「ヤア伊左衛門様か」伊「何んと喜左」喜「これは夢か七ツか、扱ち久しや懐しや。京大佛の馬町に御逼塞と受け給はる。霧様よりは數通の御狀、飛脚も二三度、奈良、大津迄尋ねさせ、たつた今もお噂。先お馴染の小座敷で二年積るお物語。いざお通り」と袖引けば、伊「ア、紙衣ざはりが荒い／＼。是引けば破れる」掴めはあとに師走坊主、師走浪人、昔は遣が迎ひに出る。今はやう／＼長刀の草履を脱いで編笠の、中の座







左、此紙衣の仕合、さら／＼無念と存せぬ。惣じて重たい俵物材木でも、牛馬が負ふは珍しからぬ。犬か猫が負ふたらば、是はと人が手を打たふ。我等も其通、紙子の裕一枚で、七百貫目の借錢負うてぎく共せぬは恐らく藤屋の伊左衛門、日本に一人の男。此身が金じや、それで冷て堪らぬ「喜」ヤアウ此身が金とは忝い。喜左衛門が餅搗に大きな金がお入りなされた。これ鼻、未だ蓬萊は飾らぬ共、先正月の心、三寶飾つて持つておじや」とて入りければ、内儀は「あつ」と櫓に、穂長折敷く橙、柑子密柑や何や榧、勝栗、妻「お床しや／＼。久振で御無事なお顔、お嬉様や」と出ければ、伊左衛門とかふの挨拶涙ぐみ、「夫婦の衆が念比に、蓬萊と迄氣が付け共、夕共霧共云出さぬ。仄に聞けば夕霧が、身が事を氣病にして、命あぶなしと聞及びしが、いかふ重いか、但無常の夕霧と消失してしまふたか、歎をかけまいとて云出さぬか、誓文で泣くまい語つて聞かしゃ。泣かぬ／＼」といふ聲も、氣遣涙に濁りけり。

【註】○いはれぬ—いらぬことぢや、よして呉れよばよいにの意。高野博士は此語を心もちのよき、何とも口にはいはれぬと「詳解」に述べてをれるが、それでは「苦しからねども」との釣合が悪い。やはり「まあよしておくれ、それには及ばぬ」といふ意に解すべきだ。○寒晒—寒い風にさらされつた男。○少しも苦しからねど—ちつとも寒くはないが。○浮世じや—世は變つたといふ意。○蜀江の錦—支那の蜀江にて産する錦。天下一品とされてゐる。○戴いて召ませうか—いたゞいてなど着てもらつてよいものか。○俵物—穀類など俵に入れたもの。○人が手を打たう—手を打つて驚かう。○七百貫目—之は銀目。これを金でいへば一万一千餘兩にあたる。金一兩は銀六十匁。○ぎくともせぬ—びくともせぬ。動かぬ。○蓬萊—正月の飾物にて、三方に米、のし

あはび、かちぐり、こぶ、かや、などをもつたもの。○穂長—齒菜。東京の裏白のこと。○柑子—みかん、金柑の類をいふ。○榧—何やかやにかく。○身がこ—わたしのこと。○誓文—誓詞、もと武士のやつたことがだん／＼一般に廣まつたので、始は此誓にそむいたら神罰云々とかいたが、後には口丈けいふやうになつた。誓つての意。

【譯】と伊左は「あゝこれはよしておくれ、それには及ばぬ、寒に晒されつた伊左ぢや、此位の寒さ、少しも苦しくはないが、お志ありがたく着ませう」といつて、戴いてから着る様子を喜左はつく／＼と見て感歎し、「ゑゝ變れば變る浮き世ぢやわい、藤屋の伊左さんに此吉田屋の喜左が着せる小袖、當り前のことぢや、よし蜀江産の錦であつても、戴きなどして召されてなるものか、ほんに涙がこぼれます」といつて目をこする。伊左「いやこれ喜左、此紙衣のありがたさ、仕合せとは思つても、さらに無念などとは思ひはせぬ。一体で重たい俵に入れた穀物や材木など、牛馬のやうな力の強いものが背にのせたらば當然のことぢや、それを若しか犬や猫が背負つたとなればそれこそ人が手を打ち驚いて何とかいふことであらう。私しとても丁度その通りぢや。紙衣の裕一枚で、七百貫目といふ大借金を背負つてびくともしないのは、藤屋の伊左だけで日本に一人しかない男であらう。つまりは身が即ち金なのぢや。だからこそ此上冷えてはたまらぬ、」や、お身が金と仰有るか、それは忝いお言葉ぢや、喜左の餅搗の日に大きな金がおはいりなされたことぢや。これか／＼や、まだ蓬萊のお飾りはこしらへぬが、先づお正月のつもりで、三寶を飾つてもつて來やれ」といつてはいると、おかみは「はい」といつて、裏白を打敷いて、だい／＼、かうじ、みかん、その他何やかや、かやのみや、かちぐりやを入れて、出て來て、「おゝなつかしや／＼、久し振りで御無事な顔を拜んでやれ嬉しや」、伊左はとやかくの挨拶をして涙ぐみながら「夫婦のお二人がねんごろにしてくれて、蓬萊で祝つてくれるまでは氣がつくが、夕霧のことは、夕とも霧とも口へは出さぬがどうしたのぢや。ほのかにきけば、夕霧は私しの事を氣にして病つて命も危いとやら、ひどく重病なのか、それとももう無常の風にさそはれて霧のやうに死にでもしたのか、それで泣かせまいと思ふて、口に言ひださぬのか、誓つて泣くまいからいふてきかしておくれ、泣かぬ／＼」といふ聲も心配の涙に濁つてゐた。



妻「いや〜是はお道理。霧様の御氣色、秋の比は散々で、勤もお引きなされしが、寒に入つて少御快氣。則ち阿波のお侍、正月もなさる、筈で、今日是に」と、云ひも果てぬに伊左衛門、「ヤア〜それは眞實か」妻「はてうそか誠か、隣座敷覗いて御覽なされませ」伊左衛門はつとせいたる顔色にて、しばし詞もなかりしが、「なふ内儀 天地開け始まりて、誠ある傾城と、迦陵頻の雄鳥は、繪に書いたも見た者ない。惣嫁の様な傾城奴に、微塵も心は残らね共、知つての通、彼奴が腹から出た身が悴、しかも男子で明れば七歳。元の遣手玉が才覺て里に遣つたとやら。今日來たは、其悴が事に付いて來たれ共、定めて里に遣つたも偽、捻殺してがな捨てつらん。阿波の侍と云は合點、此前我と張合うた阿波の大盡平と云者。つらく思へば、傾城買より紙屑買がましじや。金出して此方へ取物は狀文ばかり、七百貫目が紙屑では、富士の山の張拔も樂な事。仕合の悪い時は何で損をせふも知らぬ。無用の涙で紙衣の袖濡した。繼目が離れぬ先に罷歸る」と立んとす。妻「ア、あんまり御短氣。奥のお客は平様では御坐りませぬ」伊「いや〜平でも壺でも、此方仕度よふ御坐る」と立上る。妻「それはお前の慳貪と申もの。先夕霧様に逢せましょ」伊「いや迎もけんどんなら夕霧より蕎麥切に致そふ」とすね廻る。其中に奥座敷より手を叩く。

【註】 ○お正月もなさる—正月買もする。○せいたる—急ぎたる。○迦陵頻—迦陵頻伽の略。佛教によれば、極樂淨土にゐる不死

鳥にて、面は美女の如く、聲甚美しく、皆雌ばかりだといふ。従つて珍の珍だといふ意。○總嫁—關西にて、密淫賣婦をいふ。よたか、又十文で賣りしより十文色ともいふ。○身が悴—わしが子。○才覺—機轉、くめん。計劃。○張合つた—競争した。○紙屑買—誓紙ばかり取つてその功ないからいふ。○繼目がはなれぬ—のりばりの紙衣のつぎめが、涙ではなれぬ中に。○平でも壺でも—平様の平から、勝手道具の平碗の平や、深い皿の意の壺にかけていつたのである。○仕度—身仕度の意からはらごしらへ食事の仕度、平に縁をもたせた語である。○慳貪—邪見、むごい意に此處では用ふ。○けんどん—けんどんは餓餓、麥麥切りは今日東京のそばのことで、けんどんだといつたから、うどんのけんどんに引かけて、すぐに夕霧よりそば切りとしゃれたのである。又けんどんそばといふのは、すめもせず、甚だ邪見にとり扱つたから此名があつたとか、その頃箱に入れてもちははつたそば、又はうどんに此名がついてゐたといふ。即ち箱のことをけんどんといつたといふ説もある。

【譯】 主人の妻「いやこれはお尤もなことで、夕霧様のおきしよくは、秋頃はさんぐにわるくて、勤もやすんでおいでなされたが、寒に入つてから少しよろしく、それで阿波のお侍が、正月買つとけになさるといふので、今日これに來ておいでになります」と云ひ終らぬ中に、伊左衛門「やあそれは〜本當か」「はてうそか誠かは、隣の座敷をのぞいて御らんなされませ。」かういふと伊左は、はつと、急ぎ立つた顔色をして暫くだまつてゐたが、「なうおかみさん、天地の開け始めてから、誠心のある女郎と迦陵頻伽の雄鳥は繪にかいたのだから見て見ることがないといふ位珍らしいときいてゐる。だから密淫賣のやうな夕霧に對して、未練はちつとも残らないが、御承知の通りあれの腹から出たわしの子供、しかもそれが男の子で、明けると七歳になるが、以前の遣手のお玉の工夫で里子にやつたといふことぢやが、その悴のことで今日は來たのぢや。ところでその子を里子にやつたといふのも定めし偽りで、捻ぢころしでもして捨てたのかも知れぬ。阿波の侍といふのは承知してゐる、此以前私と競争した阿波の大盡平といふものだらう。つく〜思へば、傾城買をするよりか、まだ紙屑買の方がましぢや、何故だといふに、傾城買をしたとて、金をつかつて、手にはいるものは、誓文や書きつけばかりで、傾城の誠心を買ふなどいふことは思ひもよらぬことぢや。自分がつかつた七百貫目もの大金で紙屑をかへば、富士山を張りつぶすことだとて容易にな